
さんぶんのいち

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さんぶんのいち

【Nコード】

N08430

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

人口密度稀少域特例総合司法官。

その任務は、僻地においてのみ、

？捜査・逮捕、？立件・裁判・量刑確定、？刑執行の本来、別の三つの司法機関に委ねられるべき『人を裁く』権利を行使することが出来る職位である。

通称三分の一特例によって、保志は45歳の定年延長を確保した。長年煮え湯を飲まされてきた、今時恥ずかしい宇宙海賊、通称ジョリー・ロジャーの尾っぽを掴むまで、引退できるか馬鹿野郎。

そして、保志が選んだ三分の一ずつの二人は、現役裁判官の迫神平和と、SATの制圧一班レコンを務める相澤亜衣里。

三分の一の非日常を取り込んだせいで、東京と宇宙開拓最前線を行ったり来たりで……。

ルビ多めににつき、IEorchrom推奨です。

1. バッパーろくちゃんのお誕生日（前書き）

考え想像できる人工知能（TAI^{タイ}＝Thinkable art
ificial intelligence）である、大きなSE
LEN4444、愛すべきセレ、頑丈な飛閃^{ひせん}。
TAIを日本語で発語すると、音が何故か『他意』を連想させる
のは、あくまでも気のせいである。

単身赴任の夫。仕事命の妻。そして、親にもはや興味を失った子
ども。

離れていても、つながっていようとすれば家族だけど、愛なんか
無くしてしまったそのあとで、情性で一緒に住んでいるのは家族？
さて保志家のご面々。あなたたちはどちら？

過酷な職務に奔走した季節を終え行く老兵と、新たにそれに挑も
うとする二つの若い力で、一つの給与^{さいふ}をシェアする、でこぼこでけ
なげな三人組、ろくちゃん、あいあい、半六。

極端に少人数の職場で、大事なことを隠していたり、暢気に恋愛
なんかしていいんですか、あなたたち。

ということ……この物語はどうなりますやら、さてお立ち会い。

1. バッパーろくちゃんのお誕生日

正確に時を刻むことなどできない保志の、アテにはとはいけない体内時計によると既に八分ほど前から、一曲歌い終わる毎に、律儀に二十秒ほどのインターバルをおいて、セレの野郎が素っ頓狂なまでに軽い調子で、古典的定番であるハッピーバースデーソングを繰り返していた。

保志はそのうち飽きるだろうとあえて自分に言い聞かせて、今日の仕事の段取りを考えるべく壁一面どころか、三面になんなんとする巨大モニターのだ真ん中に位置するブース席に座って、正面モニターにTODORISTをでんと表示させた。

「老眼？」

「馬鹿言え」

そんな短い会話の間も、セレは進行途中の歌をやめなかった。

一見、全くの人間に見えるセレだが、彼を制御している知能はその頭の中にはいない。彼の中身はすべからくして、その行動を制御することに特化して作られている。

健康的な浅黒い肌は、文字通りの意味で日陰者の、宇宙暮らしにある東洋人には余りないけれど、きつとセレが形を借りているモトネタのやつが、紫外線禍が騒がれてる昨今も気にせずにお陽さまに当たっているに違いないのだ。

全く、機械の癖に妙なところにまで気を回しすぎだ。大体、セレンにあいつの現在近似値情報があるということは、最近も棺桶入りしてトリップしてるということだろうし、その旅行先が少なくともここではなかったということだけは確かだ。

官給品を目的外で使用することは厳密に言えば窃盗罪に当たる。

総合司法官の身内が、使用権なんて木っ端なものの泥棒をしてるなんて、勘弁してほしい。

それを平気で流用しているセレンもセレンだ。

あいつの形をしているセレは、今にもずり落ちそうなジーンズから、だらしなくシャツをはみ出させている。既に数える気も失せたピアスの穴が、前見たときよりも増えているのは、気のせいとばかりは言えないだろう。きつとまんまのやつだろう。全く、アレが甘やかすから、セレのモトネタ野郎はこうなるんだ。

そう思ったところで、保志は服装についてぶつくさ言うことはないと考え直す。これでも取りあえず、中年男と若造の趣味が一致を見ることは、性犯罪の円満解決と同じくらいレアなケースと承知している。

セレ自体は、本来シンクロイドとして機能するのがスジの身体ボデーを使っているのだから、肌の見てくれも触感も人そのままだ。つまり、生身の人間適度の太雑おおざっぱ把な感覚器官の感度では、彼を人外であると判断するのは無理だ。センサー内臓のゴーグルをつけなければ、保志には人間でないと判断することは難しい。

さて、そのセレである。やつは軽いノリながらも朗々と歌を歌いつづけ、同時に、全くの副音声で普通にしゃべるという、人間サマにはできない芸をやらかしている。つまりは、厭味なことに当分の間、あの気に障る歌を止める気はさらさらないということだ。

たった一人のセレが副音声を使って二、三人のようにしゃべるのは、慣れていたとしても、太い根性に裏打ちされた平常心に対して公的なお墨付きが与えられているような職にある保志だったとしても、たまらない。

普段からプリンス・ショートクじゃないんだから、基本一つの声で一つの文脈でしゃべるように言い聞かせてあるのだが、緊張が強

いられているミッション中でもなければ、セレはそんな人間保志のまっとうな文句など、こうやって無視しやがるのだ。

たかがAIの発展型といえども、TAIであるセレンレベルになれば準人權持ちだ。頭ごなしにこっちの理屈を押しつけても通るものではない。保志はため息をつく。

今日はジョルジオ保志^{ほし}が来てほしくないと願いつけた、めでたい現在拝命中の職位における定年退官日に当たる。

彼が所属する総合司法庁職員としての定年にはあと十五年ほどあるが、人口密度稀少域特例総合司法官としてのそれはまさに今日、四十五歳の誕生日だ。

たかが人造物であつても、普通なら長年の相棒と別れるのは感慨深く辛いもの……ではあるのだろうけど、まったく哀しみも寂しさもちらとも湧いてこない。

というもののセレの制御（つまり反応）が、どうにもどこか普通のTAIの範疇をはみ出しているとした保志には思えないからだ。

もつともセレに言わせると、他でもない保志の個性に合せて成長した結果なんだそうだ。そう言い張られても、保志としては釈然としないながらも納得するしかない。

保志自身の自己判断では、自身は面白みがない仕事実直一点張りの総合司法官^{かた}なのだ。胸に手を当てて来し方^{かた}をつらつらと振り返つても、想像力を内在した思考できるAIは必須だが、歌って踊れるAIを求めたことは一度だつてないはずだ。

* * *

法律的正式名称『人口密度稀少域』、一般呼称『フロンティア』
なんかで公職に就いている保志の相棒は、保志の職においてはごく
標準で、量子式演算で思考する人工知能である。長たらしいので忘
れたが、堅苦しい正式名称の頭文字を並べた型番はSELEN。そ
れにシリアル番号の4444 四の四並びとは験担ぎ的に最悪だ
と思う をくつつけて省略して、保志は「セレン4×4」と呼ん
でいる。そしてこうやって人型に収まってる子機の方は「セレ」だ。
保志の言い分によるなら縁起を担いだわけでもなんでもなく、「
よんよんよん」も「よんせんよんひやくよんじゅうよん」も普
通に呼ぶには舌が回りきらないからで、他意はないそうだ。
もつとも、あくまで便宜上、保志が勝手にそう呼び分けようと線
引きしただけなので、大元のSELEN4444も子機扱いのシン
クロイドも、セレで済ませることが多い。向こうは、どっちにしろ
自分のことなのだから気にもとめていない様子だ。

保志が人間である以上の、些細で多岐にわたる必要から（ぶつち
やけていえば利便性つてやつだ）、セレは普段使用頻度が低いシン
クロナイザー受信機（Receiver of synchronous device）をアバタロイド風に使用している。けれど、
本体は保志が住んでいる可動官舎のそのものを支配しているAIだ。
つまり、目の前にいるのもセレだけれど、宇宙空間なんぞという人
間の居住には到底向かない場所で、保志の生命維持を可能にしてい
るインフラのコントロール全てを担当しているのも、またセレンと
いうことになる。

いわゆるフロンティアで人間らしき形をした有質量物を見ても、
それが生身の人間である可能性は三分の一以下だ。同じ宇宙人が住

んでる地域とはいえ、もつと人間が犇ひしめいている入植済の宇宙植民施設ニール・テラフォームドシティだの、地球化済み都市なら、生身含有率はもうちよつと高いのだからうけれど、今まさに人類の持続居住の可能性を探っているこの地域ではそうではない。

保志の受け持ち管区であるここいらの宇宙で、人型の物体ヒトガタとして活動しているモノは三種類ある。

一つ目は、保志のような生身レアな人間。真空中に曝されても死ぬ、水分とエネルギーの補給がなければあっさりくたばってしまう、この宇宙という居住地においての圧倒的な弱者だ。もちろん、生存権優先順位は第一位。つまり何か悲劇が起こったときには、他の連中に守られて生き延びようと見苦しくしてオーライという立ち位置だ。

人類発生地太陽系から亜空間を通ってやってきた人間や家畜が、人工建造物やテラフォーミングされた大地で住んでいるのだが、当然、既にこの地で生まれ育っている人たちもいる。

お次は同期システムを利用して滞在している人間。彼らは遠い人間定住域、まあ天然モノでも人工モノでもというか星と名のつくそんなものに住んでいて便宜的にやってきている人間だ。彼らの本体は読取機スキヤナに直結された生体維持カプセル、通称棺桶カンオケの中で完全に動きを凍結されている。彼らの意識は当然、現在動いているシンクロナイザー子機の方に同調しているけれど、動いている方は高性能の人型ロボット、いわゆるアンドロイドに過ぎない。こいつらはシンクロイドと呼ばれていて、彼らを制御している遠隔地にいる生身の人間のことは旅行者とかあるいは単にライダーという。

シンクロイドが体験したこと全ては彼らライダーの脳味噌にリアルタイムでフィードバックされるけれど、行動している方が食べようが寝ようが生体維持の用はなさない。生命維持に支障をきたさぬよう、シンクロイドによるトリップ時間は推奨一日の三分の一であ

る八時間までに法によって規制されている。

もつとも、スキャナに付属する棺桶^{カンオケ}の生体維持装置は冷凍睡眠による長距離移送者が使うそれと機能的には同等なので、ぶっちゃけ、ちゃんとニア・コールドスリープ状態にして使うなら、何年入ってトリップしつ放^{はな}しでいたところで、乗り手が死ぬことはない。ただし、その場合は、脳味噌も思考を停止するために、肝心のシンクロイド操作ができない。つまりは、乗る意味がないということだ。

では生体機能を活動状態に保ったままで、植物状態の人を医療ケアするような形で栄養分や水分を補給して長時間使うのはどうだろう。彼らの生活圏や移動先が無重力で、本体のケアを十分に行うな^{イプロブレム}らという条件に限り、無問題ということになる。つまり、本体^{そいつ}の筋力低下というものが問題になってくる。

生活圏が有重力だった場合、同期終了後の筋力が直立歩行困難なほどに劣化してしまうと非常に都合が悪い。もつとも、トリッパーの健康的な具合については、ただの全身の機能劣化であって不健全^{リハビリ}じゃないのだから、理学療法で回復も可能だ。

ともあれ、健常な人間に高い医療保険を使ったり、理学療法などをされては、健康保健庁の予算が幾らあっても足りない。あれは血税でまかなわれているのだ。というわけで、普通のトリッパーは標準の一日八時間トリップを標準にする。

何か事情があつての連続トリップだとしても、シンクロイドの身体制御機能は完全にライダーに一致するから、三日も連続で乗っていれば、普通に歩いたり走ったりが露骨に難しくなってくる。

マトモな人間なら小さい段差で躓^{つまず}くまで徹底して本体の劣化に無頓着ではいられないので、一日のうちの三分の一に当たる八時間ほどをシンクロイドに乗って、何やら彼らが目的としていることをし

て、残りのうち、まあ八時間から十一時間までを本体で生活して、あとは睡眠というのがトリッパ^{トリッパ}たちの基本だろう。

シンクロイドは完全に肉体に同期するため、外見ももちろん本体と同じになる。保志がガキのころのように、ブサイクだから人間、美形だから機械と、そう世の中単純にいかなかったのは、もちろんこいつらの所為^{せい}だ。

それから三番目が外部制御知能によって操作されている人型ロボット、いわゆるアバタロイドだ。

古典SFではお馴染みの、今もマニアは研究し続けているらしいスーパーリアルタイプのアンドロイド、言うところのヒューマノイドは未だに実現されていない。人間をそのまま人間のように制御し、豊かな情感をも併せ持ち、人の友として十分堪えうるだけの知能を、その小さい筐体^{ボディ}に全部搭載するのは不可能という潮流が生まれて以降、いわゆる人型ロボットマニアは岐路に立たされた。

一つは、外部の知能で遠隔^{リモート}操作をして動かせばいいという道。こちでの問題は、距離が開くほどに大きくなるタイムラグをどう克服するかということにかかっている。そしてもう一つが、やっぱりヒューマノイドは一つの体の中で思考も完結するべきだという古典的こだわり派。

通信同期機能の洗練に走った派と、完結したヒューマノイドこだわった派のどちらに軍配が拵^拵ったかなんてのは、現状を見るにつけ疑問の余地もないだろう。

まあ、先駆者であるマニアに敬意を評してか、普通は外部制御知能によって動く人型ロボットをヒューマノイドとは呼ばない。あくまでも運転者のアバターであるということで、ついた名前がアバタロイド。こいつを制御している知能は、もちろん人間^{ヒューマン}の場合もあるし、当然人工知能（AI）の場合もある。

そしてやっかいなことに、こいつらの制御は子機であるアバターの能力準拠だということだ。露骨に目の前で犯罪が起きていたとき、前者の二つなら自分と大して変わらない身体制御能力しか持たないが、アバタロイドの場合反則的に強かつたりする。最悪、腕だの目だのから熱光線^{ビーム}が出てきても驚いちゃいけない。

そこまでは冗談にしても、相手が操作にモーションキャプチャ・システムを使っている、そいつがカラテ辺りの達人だった日には、その破壊力ときたら、とんでもないことになる。人間と擬人の区別はセンサー付きゴーグル（セレのネーミングは「教えて眼鏡」だ）で何とか付くけれど、連中がアバタロイドなのかシンクロイドなのかは、これはもう勘に頼るしかないという……。

こんな場合、アバタロイドを動かしている人間もしくはAIを直接確保するか、通信を遮断することで制圧できなければ、まあ、保志のような生身の司法官が直接立ち向かって敵うような相手ではないことは分かってもらえると思う。

幸いなことに、こいつらはあくまでも機械なので、アバタロイドをぶっ壊したところで操縦者^{ドライバー}はちらとも痛まない。こいつらが保志が対処すべき犯罪を行っていたところで、いきなり脳天をぶっ飛ばしても、その犯罪さえちゃんと立証できれば問題ではないというのぐらいが、連中の可愛らしさというならそうだろう。

シンクロイドが犯罪の現行犯だった場合はそう単純にはいかない。連中は完全に同調しているから、頭を物理的にぶち抜いたりすればトリッパーの脳味噌は、致死レベルの痛みを感じてしまう。心臓が弱かったりした日には、うっかり心停止になりかねないから、生身に準ずるぐらいの配慮は要る。

おつかないアバタロイドには遠慮はいらず、それほど恐れるに足りないシンクロイドには配慮が必要。人権順位第一位の人間サマが相手だった場合は、いろいろな意味でもっと気遣いが必要で、いつそのこと犯罪者からは人権というものを剥奪してもいいんじゃないかと、総合司法官たるものの口が裂けても言ってはならない思いが脳味噌を横切る今日この頃だ。

保志の人口密度稀少域特例総合司法官というのは、本来であれば権力の集中を避けるために分立させることが望ましい司法権をなんでも屋的にこなせるというものだ。多分一番近いのは、旧暦でいうところの十九世紀、とりわけ1860年代以降約三十年間を指す西部開拓時代の保安官に近いと思う。

犯罪があると思料されうる場合に、公訴の提起及び維持のために、被疑者（犯人）を確保し、証拠を発見・収集・保全する手続全般を行い、場合によっては簡易裁判および量刑確定まで、場合によっては刑執行までも何でもござれに対処する。

役柄的にはウェスタン保安官なものの、立場的にはいわゆる特別司法警察官に限りなく近いといえる。彼らの権限はあらゆる国の法律に縛られない。国際法で規定されるところの司法権利の殆どを付与されているが、活動する場所が人口密度稀少域に限定されているというだけだ。

人口密度稀少域という地域の特性上、旧来的な意味での保安官は区域ごとに一応いるし、彼らとの連携は欠かせない。むしろ問題は、保安官連中にパシリ的に利用されているということだろう。保安官には総合司法官に応援を要求する権利があるのだから仕方ない。

利が目されるから人は入植し、利が確かにあるから争いは発生し、みんなそこそこに平和な日常は欲しいから行政機能と司法機能を求める。機能的には必需だけれど、やりたがる人がいなければ公的機関のお出ましとなる。

宇宙時代に華やかに突入して以降、さまざまな各国法の言い分、大岡裁きのゴリ押しが必要とされて、国連のキモ入りで設立されたのがまさに総合司法庁だ。であるからして、身も蓋もない方をすれば保安官の切なる要望に答えるべく「ひねり出された」というのが、人口密度稀少域特例総合司法官というわけだ。

判断力、知識、体力、精神力、全てを良好に保たねばならない総合司法官は、一般の司法官とは違い、定年退官日が四十五歳の誕生日に設定されているのだ。

呪わしきかな四十五歳の誕生日。

「はっぴいばあすでー　でいあ・ろくちや〜ん」

何度目かの甘ったるい語尾伸ばしでの渾名あだなで呼ばわれて、保志はそろそろきちんと怒ろうと決心した。大体、ネイティブ発音方言対応可能ですモードで英語をしゃべれるはずのセレが、わざわざ子音をきっちり入れてカタカナ発音で歌っているのも気に入らない。サービスのつもりなら1962年のモノローボイスでやるくらいの根性は欲しいものだ。

「はっぴいばあすでい　つーゆ〜」

冷静沈着が真骨頂である保志は、意図的に堪忍袋の緒をプチ切った。

「ウルサイ〜イ」

セレが歌い終わった途端に、保志は絶叫した。こいつは絶対に故意に「to you」を「ツユ」してるに違いない。

「なんで？」

「ウルサイものは、ウルサイ〜っ」

「やだな、ろくちゃん、何をカリカリしてるのよ。オイラが耄碌^{モロク}しかけてるろくちゃんが、記念すべき今日の日を忘れたりなんかしないように頑張^{ひんぱん}って歌ってるのに」

セレは飄々^{ひょうひょう}とした語り口を崩さない。保志は横目でにらんだ。

「お前がどんだけ人を痴呆症扱いしようとも、俺はちゃんと覚えている」

セレの人工知能（AI）の演算方式は量子式。マツシブと呼ばれるほどの量のデータを経験として蓄積しながら（検索性もやたらいい）立体複合的な多重思考ができるってやつだ。まあ簡単に説明すれば、超高性能のひとつと言ですむはずだ。やつらがどういう制御によって、ここまでの擬人趣味^{マンライク}を演じられるのかについては、保志は興味を持ったことはない。とにかく、このクラスのAIは、特別に『考え想像できる人工知能』（TAI^{タイ}＝Thinkable artificial intelligence）と呼ばれる。

ただいろいろな意味で、セレが自分よりよほど上等にできているのは間違いない。それはまあ人間サマのなけなしの矜持^{きようじ}辺りを総動員しても覆^{くつがえ}しようがない事実なので、面白くないこともあるが我慢しなければという程度の分別は保志にもある。

唯一の救いらしい救いといえば、セレ本体は、保志クラスの人間をどれほどまとめて、どれほどの期間を雇用できるか分からないほど高価であるはずなのに、存在権（AIという準人権を含めた場合、生存権という言葉は使えない）優先順位が保志より劣ることぐらいだ。

「そーお？ だってさ、今日だよ。今日。ろくちゃんの退官日。普通の神経してたら、ここまで意思表示を保留にし続けないと思うな。オイラがどれだけ本庁^{オマル}の四角四面なメインにいじめられてるかなん

て、ろくちゃんは興味ないんだよねえ……」

セレの瞳が訴える様にうるむ。こんなのに一々騙されては、こいつの相棒は務まらない。保志は冷たく言い捨てた。

「いじめられて痛むような上等な神経持ってから、そういうセリフは吐くんだな」

保志の厭味をどう受け取ったのか、セレは両足をさつと交差させると、足の裏全体を器用に使ってくるりと水平方向に一周身体を回してから、今度はシンプルなピアノ音で、Happy Birthday songの一小節目を響かせ始めた。その気になればフルオケまで出せる癖に、いちいち厭味なやつだと思う。

それからセレは、ピアノの音に合っているのか若干ズレているのか、ちよつと判別できないような奇妙に感じられる間を持った動きを始める。多分人口通常密度の都市の若い連中の間で今まさに流行^{はや}ってるダンスなのだろう。

「セレ仕事中だろ」

「オイラはろくちゃんと違って、地球標準時にして二十四時間ちゃんと働いてますよ。なんだったら、仕事止めてみようか」

保志は肩を派手にすくめてみせた。

「お前に一級殺人罪をやらかす度胸があるかよ」

セレが仕事をやめるということは、中で生活している保志の生命維持活動ができなくなるということだ。一級殺人罪という等級は、生存権順位が低いモノが、上位のものを故意に殺した場合に適用される。自我のかたまりのようなSELEN4444がどれだけ上等であろうとも、生存権優先順位はこっちにある。損得勘定ができる思考能力があれば、たかが百年に満たない寿命しか持たない命を捻^{ひね}り潰^{つぶ}して永久廃棄処分の憂き目に遭おうとする度胸はなどあるわけがない。

「オイラ、ろくちゃんとなら心中できるぐらい惚れてんのに、アン

タいつつまでもつれないんだよね……」

寂しそうな演技にだって、^{ほど}絆されてなんかやるもんか。

「オレは女房持ちの中年男標準仕様として、当然に奥さんが怖いんだからな。誤解される様な言葉は^{つつし}慎むように」

保志の言葉に、セレはちよつと頬を緩めてみせた。セレの形をしているあれも、こんなふうには微笑んでくれるなら……、そう思いかけて保志は首を振る。全くなっちゃいねえ。職種退官日の四十五歳は、ちよつと今日は感傷的すぎるわな……。

セレが伴奏しながら、踊りながら、今日何度目かになる歌い出しとなる「はっぴ」とやったところで、保志はもう一度叫んだ。

「ウルサイつつってんだろがあっ！ そんなもん、楽しそうに歌うなっ。このクソタレがあ」

セレは途端にダンスをやめて、口の手前にこぶしにした両手をあてがうと、さも傷つきましたという目つきになった。相変わらず鳴りやまないピアノ伴奏が、メロドラマの濡れ場に流れているようなまったりせつない感じの^{ふしまわ}節回しのアレンジに変わった。まったく芸が細かいというべきか。

「あ、ヒドいなあ。ろくちゃん……。クソたれたくても、出来ないオイラを傷つけようっての？ 長年の相棒になんて酷い男性^{ヒト}」

コンソールパネルを弄っていた保志の手が凍りついた。クソなんかないほうがいろいろな意味で便利だとは思うが、自分の身体というものの実感が薄いだろうT A Iにとっては、それはしたいことなんでしょうか。

確かににいたしたブツは宇宙生活ではやっかいなゴミだけど、素晴らしい逸品を、どどんと致した直後の快感は……そりゃあ、機械には味わえまい。

セレがこの可動官舎のホストである以上、そういつときの自分が

どんな表情をしてるのかとか、そういうことまでセレには見えてい
るということだ。けれど、そこは暗黙の了解というか、不文律であ
っても線引きがしてあって、セレとして顔を出して来ることはない
まあ、そうであってくれなければ保志程度の繊細な神経の持ち主
にはたまったものではない。

それにしても肉体的快楽というものに 多分、セレがそれを理
解はできても感じることはないのだろう 非常に露骨な興味を向
けて止まないセレは、やはり人工知能の育っていく方向として随分
路線を誤っていると思う。

「まさかとは思うけど……てめえ…… ンコしてみてえのか？」
「もちろん」

即答するな即答。保志は十年來の相棒であるAIの、あまりにも
とんでもない希望に倒れなくなった。それを意に介するふうでもな
く、セレが続けた。

「オイラたちに、気持ちイイっていう感覚がナイのって絶対に設計
ミスだと思うな」

「身体がないんだから、気持ちいい必要はないだろうが」
呆れて保志がいう。

「その必要ないってのが問題なんじゃない。ズルいよ」
「冗談はその程度にしとけ。付き合いきれんわ」

保志がいうと、セレの瞳が輝いた。

「そうそう、それぞれ。第一、ろくちやんがオイラとあと10年つ
きあってくれるってんなら、そのつもりで、冗談をもーっと鍛えと
かないとなあ」

「なんで総合司法庁配下のT A Iがそこを鍛えるんだね。第一テメ
エは、軽口ならもう十分なレベルまで、鍛えぬいてるだろうが。」

保志がいやそうに言つと、セレがよくぞ言ってくれました的な微
笑みを浮かべた。

「オイラはろくちゃんと付き合ってたから、こんなになっちまったのに、つめたいんでないの？ そりゃあ、ろくちゃんが言ってくれたみたいに、オイラはもう既にスゴいけどさあ、実際、まだまだイける気がするんだよねえ。ほら、オイラ、ちょうど練^ねれてきたころじゃん」

「どの口が言つかねえ。それ」

語尾に音符が見えた気がして、保志は脱力した。

と、セレは真顔になった。

「で、どーすんのさ。ろくちゃん。今まで、先のばしにしてきたけど、今日がリミットだよ。いい加減に決めてよ。三分の一でも粘るか。潔く現職引退するかさあ……」

「うるせーっ。分かってるよ。あと24時間あらあつ。それまでに決めりゃいいんだろぅが」

保志の怒声など慣れているセレは、まったく口調を変えずに続けた。

「もう、23時間と49分35秒ぐらいしか残ってないよぉ」

あいつらに痛覚があるものなら、ぶんぐつて見せもしようが、所詮はアバタロイド擬^{モキ}で、感受器に数値入力があつてもフィードバックはない。こっちの手が痛いだけだと、保志は作っただけのこぶしを震わせた。

「だから、ちつと静かにしてろってんだよ、セレ。誕生日なんかちつともめでたくねえ。それ以上『は』から始まる歌、歌いやがったら覚悟しろよ」

「だって、いつまでも決めてくれないんだもん。正直、困ってるのよ。オルマのメインがウルサイってだけじゃなくてさ、オイラはろくちゃんが引退すれば新しい相棒の好みに変わらなきゃいけないじゃない？」

しゃあしゃあといじらしく吐かれた科白^{セリフ}に、保志は目を座らせた。

「ふーん、じゃあ、今のお前のその態度は、飽くまでも俺好みを体現した結果だと、そう言い張るわけだな」

「ああ、そうだ、忘れてた」

話題を変えるための方便が、実際今思い出したのは不明だが、セレが突然真顔になった。

「今日は誕生日だからかどうかは知らないけど、奥さんがやりたいって言ってたよ」

「げ……。あいつ来るって言ってたのか？……このややこしいときに」

セレがへへつとばかりに声を立てて笑った。

「ややこしくしてるのは、ろくちゃんじゃない。もちろん、家族の権利だから許可しといたよ。そろそろ来ると思うよ」

「あいつなら……グリニツジじゃなくて……明石タイムで動くよな。今あつちは……9時チョイ過ぎぐれえか？」

「さすが、ろくちゃん、慣れてるね。あはは、うん、その通り。実際、そろそろいつ来ても奇怪おかしくないよね」

そう言つてセレはにつこりと微笑んだ。保志は慌てて執務室の背後設置された棺桶モニターに視線をやった。恐ろしいことにトリッパスキヤナの走査器の読み取りが始まっていることを示すゲージの赤が、じわじわと上昇を始めている。

「……ああっ」

悲鳴ともつかない声が、保志の喉のどから絞り出された。

「決めるつてたつて、結局は二つに一つしかないんだからさ。三分の一の薄給に堪えて、あいつをもうちよつと追っかけるのか、尾っぽまいて逃げるのか……の、二択にたくじゃん」

赤ゲージがじわじわと上昇しているのを知っている癖に、おつとりとした口調のままでセレは話し続けたが、保志はそれどころでは

ない。

「セ……セレ」

言わでもがななことながら、保志はセレを呼んだ。

「ああ、随分スキャン進んじやったね。ほらあ、オイラたちの話終わってないのに、ろくちゃんが煮え切らねえから、奥さんきちゃったじゃん。しゃーないなあ。じゃあ、オイラちよっと、仕事ね」

セレが今使っている身体自体は、本来は単身赴任の保志が家族と交流するための官給品なのだ。シンクロイド受信器として使われていないことが多いので、便宜上セレが流用しているというだけの話で。保志の家族がトリップを望めば、セレは優先的にその身体をシンクロイド受信器に回さなければならない。シンクロナイザーが情報を送ってきたら、即時に同調を開始する必要がある。

「じゃあ……今日もちゃあんと、や、さ、し、く、し、て、ね」

凍りついて動けない保志の耳元で、ねっとり甘ったるくセレがささやいた。保志は背中に脂汗が伝うのを感じていた。

2・緊急家族会議

現場に出張することが多い保志は、どちらかというと棺桶に入ってスキャンされ、シンクロイドに乗るライドすことの方が多い。

棺桶入りしてスキャンされる。それから知覚が自分の本体からのものでなく、シンクロイドからの刺激の方にシフトするまでの瞬間。普通はそれが長ければ長いほど不快を感じるものだ。ペンディング状態は多分、オカルトファン層に聞くとところの、幽体離脱状態に似ているのだらうと保志は思っている。とにかく、あのどつちつかずの状態で長く置かれるほど腹が立つことはない。それは保志に限ったことではないらしく、シンクロ・スタンバイしてから受信器での精密再生が終了するまで待たしてしまうほど、妻の美耶子みやこの機嫌も露骨に悪くなる。

これは経験則として疑いようのない事実だ。

赤ゲージが一杯にふりきれるまでに、セレが棺桶入りしてなければ、美耶子が必要以上に待たせることになる。

それは四十五歳の誕生日である今日を限りに、人口密度稀少域特例総合司法官 フロンティアに限り万能者であること（*versatile person only in frontier*）を日本語的に短縮して、日系人はバツパーと呼んでいる。を退任するのか、はたまた単身赴任を継続するのかの答えを保留してきたことで、こここのところ美耶子はそうでなくても十分に不機嫌なのだ。

一粒種のドラ息子ドラごが、奇矯なナリをしてシブヤ通り辺りに繰り出して、踊りまくっていたころ、それに心を痛めていた美耶子は、非常に日常的に、精神不安定感全開だった。金持ち、有名人御用達ごようたし、テレビでもお馴染み、稼げる美人有名弁護士である美耶子は、保志と一緒に仕事中は冷静沈着であることを外せない。だからやっかいなことにストレスは全部家庭内に持ち込まれる。一時期は毎日のよ

うに、明石標準時の真夜中十時ごろにいきなりトリップしてきては、延々と愚痴を言う。それを聞かされていた方の保志としては、美耶子の来襲には覚悟が**いる**のだ。

あれでも親の機嫌を取ったものか、それともあんなふうでも堅実だったということか、外見は全然改める気配は見えないものの、息子の穰太は両親の生息域である法曹界へと続く道を選んで法科大学に進学した。

現在は法科大学院で学んでいて、無事に二種試験もとっている。多分美耶子や保志のように在学中に第一種司法試験チャレンジを始めるのではないかという目処が立って、最近では美耶子は専らご機嫌だ。それはいい。それはいいんだが、どうもご機嫌が行き過ぎて最近不自然に色気付いているのには困ったものだ。

保志としては、若い男に入れ込んで身の一つも持ち崩してくれるなら言うことないのだが、極めて遺憾なことというか、第一次定年を迎えようとしている枯れつつある自覚がある男には恐ろしいことに、美耶子はあの年で穰太の弟ないし妹を作ろうと算段しているらしい。

三人しかいない家族がそれぞれバラバラにすごしたのが、自分が寄り道をしたそもその原因なので、素晴らしい家族として保志家を建て直すには、まず鋹かすがいとなるベイビーが要るんじゃないかということでもないことを、穰太のやつがどうやら美耶子に吹き込んだらしいのだ。

パパが帰って来るなら、やっぱり弟か妹が欲しいって、穰太が言うのよ。

一月ほど前に美耶子が来たとき、ベッドでの夫の義務というやつを果たした直後、あの出会ったころを彷彿とさせる、獲物をこれと

定めた目で見つめられ、そうささやかれた保志は、うつかり心臓が止まりそうになった。美耶子がシンクロイドにモードでいることから忘れ、コンドームを付けなかった自分を、そうと思い出すまでの一瞬とはいえ、確かに呪った。このことはもちろん美耶子に悟^{さと}られてはならない重大秘事だ。^{トップシークレット}

穰太の魂胆は分かっている。保志が帰ったところで今更ファミリ―ごっこをしたくないから、ついでに鬱陶しいママの注意を逸らすと、その程度の浅い魂胆に決まっている。だったら大人として家でもなんでも出て行けばいいものを、法曹試験の一種を狙うとなると日常生活の起きている時間のうち、生命維持活動をさっ引いた時間の全てを注ぎ込んでなお、時間がたりないというほどの勉強漬けの日々を送らないと基本無理だというのは、同じ道を通ってきた保志ならば分かる。つまりは穰太は気晴らしにたまに踊りにいったり歌ったりという楽しみも手放す気はなく、バイトなど考えてもいないということだろう。

保志はいつの間にか自分の首に巻きついていてるセレの腕を断固として解くと、睨^{にら}み付けた。

「美耶子にはいつもやさしいだろーが？。ごたくぬかしてねえで、さっさと、棺桶入ってこい。シンクロ・スタンバイしてから待たせると、またあいつが不機嫌になる」

棺桶の中での人工身体表層が融^とけて再融合されるさまが、視覚的に見られないのはいいことだと思う。妻の美耶子でいるときと、セレでいるとき、本質的には同じものだということを考えると、どうにも落ち着かない。

データ一切を制御しているのも、もちろんSELEN4444なのだから、感覚器官の出力先が地球にいる美耶子に直結したとしても、あいつが感じたすべてのものを数値に置き換えて転送している

のはヤツなのだ。夫婦の会話に口を出して来るほどのヤボは（多分ルールで禁止されているのだと思うけれど）されたことがないけれど、秘め事として隠されているとはいえ、知っていることは疑えない。ということだ。実際美耶子がどれだけ感じたのかとか、そういうデータもヤツに把握されていることになる。

ぶっちゃけ、実際は何回いったかとか（実は全部演技で一回もイッてないとか……）、どれぐらいの量の体液が出たとか、そういうのもろもろの全てだ。

「あのさ、美耶子さんが不機嫌なのは、ろくちゃんが、帰って来るのか来ないのか、はつきりしないからじゃないの？」

そりゃあそうだろう。俺抜きへきえきの生活をあいつはエンジョイしている。だけど、意外なことに、というか単に仕事からそのテの修羅場を見慣れすぎていて辟易へきえきしているからなのか、あれでいて美耶子は保志一本主義らしいのだ。

かつて二十と数年前。保志と美耶子は、国連法準拠法科大学の同窓生だった。大体のパターンとして、二種試験止まりで終わらせるつもりであれば、国連法科に合格して放校されないだけの實力があれば大学院まで進む必要はほばない。二種であれば大学在学中に、あるいは長いやつでも四、五年の国家資格浪人で獲るものだ。今どきは、法曹人の過去歴などネットで一発検索可能だから、それ以上ねばってウツカリ合格しても、お金に困っていない上客を捕まえるのは難しいだろう。

裁判官はなかなか空かない上に、在学中に資格持ちになった連中からほとんど青田刈りしていくから、そもそもそこにはねばってウツカリ組に用意された席はない。

弁護士ならば、幼児への性犯罪や、大量快樂殺人犯や、年寄りの財産を組織的に食い物にしたなど、一般の人間受けすることは決してない被疑者の、法廷弁護士案件ばかり引き受けざるを得ない立場に

陥り、精神的にも収入的にも悲惨な日常を送ることになるのが精々だろう。

法曹界の三大職種で忘れてはいけない検事も、当然裁判官同様、上級公務員としての少ない椅子に挑戦しなければいけないわけだから、昔のように資格を獲ただけで道が豁然と開けるといいうほど甘い世界ではない。

青田刈りはロースクールの校風というべきか。大学在学中に二種を獲ったときはそうでもなかったが、ロースクール最終学年現役で一種に合格したとたん、保志は女どもからの強烈な捕獲行動に曝された。それはもう、特定の恋人を作る間もなかった勉強漬けの青春を過ごしてきた二十歳そここの男にはとんでもない天国だった。

とは言うものの、一種試験現役組みにしても、別に保志一人というほどまでに希少価値ではない。彼の同期にもそこそこ人数がいたし、現に美耶子もその一人だった。そうなれば、見栄えと気性のよさげなものから売れ筋になるのは自由競争社会の原則というものだ。あのころ、武人を気取っていた筋トレマニアの保志などは、どちらかというと下手物に属すらしく、本人は突然の春にうはうは浮かれていたが、その実、それほど競争率が高いブツでもなかったというのが真相だ。

けれどどういう趣味だか、保志をターゲットにしてきた女性のうち、一番積極的だったのは紛れもなく美耶子で、確かに自分は狩られたのだという自覚がある。ガンガンと美女に迫られれば、ウツカリ男はとりあえず立ってしまうのだよの法則に従って、行くところまで行ってしまったのだった。けれどそんな保志の男を責めるのは酷というものだろう。

能天気にも今時の自立した女が避妊の手だてを講じていない可能性など思いもせずについて、ある朝ベッドの中で「できちゃったから責任取ってよね」と凄まれた日のことを思い出す。あんな思いは二

度とごめんだ。あれは、絶対に保志の将来を確保するために、故意に妊娠したに決まっている。

保志が美耶子に対して貞操を保っているのは、別に勤務先に妙齡の女性が少ないということだけが理由ではあるまい。東京にいたとしても、美耶子怖さに浮気などでできていたはずもない。

「そうそう、美耶子さんから『古女房とは離婚でもなんでもして、ジヨリー・ロジャーにプロポーズでもしやがれ』って、伝言たのまれてたんだっけ、オイラ」

保志はありったけのトゲを視線に込めて、セレをにらんだ。

「いつ？」

「1分ぐらい前」

ということは、美耶子はどうにでも白黒付けるつもりで乗り込んでくるということだ。確かにその日伸ばしにしてきたのは自分だけ
れど、バツパーつつうのは、傍目はためでそう思われるほど閑職じゃないのだ。保志は覚悟を決めた。とにかく出来る男の秘訣は円満な家庭からだ。

ちらと正面の画面を眺めて、TODORISTの中での優先順位付プライオリティ・セッティングを素早く微修正する。

対美耶子は、まず一戦してガス抜きをさせたところで、穏やかな話し合いに何とか持ち込む。方法はこれっきゃない。最短時間で済ませるとご機嫌が悪くなることは必須だから、最低どのぐらい頑張れば、ご満足いただけるか経験値から弾く。三十分……、美耶子満足度的に少ないだろうか？ 保志が今日の時間配分を始めたのをにやにやと確認しつつ、セレが棺桶入りするのが、モニター画面に映り込んでいてばっちりと見えた。

保志は右手にあるモニターをシンクロナイザー監視画面に切り換える。モニターに映し出された裸の青年の輪郭がぐずぐずに融けて、

ゆるゆると顫れて来るのは女の曲線だ。しかも、ほどほどに崩れかかっている。顔や手足と曝される部分のアンチエイジングには気合いが入りまくっている古女房だが、引き締まりというものが無縁になりかけているのは疑えない。どうやら腹周りのラインの維持にはそれほど手間をかけてないと見える。ボディースーツで腰の括れを作ったところで、機械相手に誤魔化しは効かない。

シンクロナイザーの厳密走査は容赦なくその人の今を読み取っていく。

保志は何に対してもなく、ただなんとなくため息をついた。

真つ赤に振り切れて、スキャナが100%走査完了に行く前に、動き始めていた転送監視用のゲージが青い棒を延ばしていた。セレが棺桶入りすると、黄色い受信データ適用ゲージがとたんに伸び始めている。

以前からなんとなくぐいものだという確信があって見たいと思わない様にしてきたが、最近では、保志はシンクロイドの可変表層がどんなふうに動いているのかを、一遍リアルで見たいという気もしている。

並んでいる監視のゲージのうち、赤が一杯になり、青が一杯になり、黄色が一杯になると、シンクロイド・システムの転送が完了したということだ。あの棺桶の蓋が開けばさっきまでセレだったシンクロイドの可変筐体は、チエンジャブルボディ保志の妻である美耶子へんげに変化してのご登場という次第となる。

監視モニターを睨み付ける様にしていた保志が、黄色ゲージが振り切れる瞬間を目撃したとき「チーン」という、初期型電磁調理器の加熱終了音に限りなくよく似た音が、小さいながらも断固とした主張を持って部屋に響いた。

この音をことさらに選んでいるのは、彼^{セシ}としては冗談のつもりに
違いない。ヤツの笑いのセンスは、やはり相当に高級な基本性能を
持つにしては情けないぐらい低レベルである。そのことを今日が終
わった段階で定年延長を自分が選ばなかった場合、新しいバッパー
と信頼関係を築かなければならない4444には、きっちり指摘し
てやる方が親切なのだろうか、保志は半ば真剣に思ったりした。

棺桶^{こくわく}の蓋^{ふた}が重々しい印象を受ける程度にまったりした速度で開い
ていく。

* * *

省スペースであることを設計上の最優先事項とされているのかも
しれない保志の可動官舎では、何かといろいろなものが壁に収納さ
れている。受信器^{カンオケ}すらも、その名称が普通に想起させるような箱型
ではない。

走査器^{スキャナ}、転送機^{トランスミッター}、受信器^{レシーバー}の三つの機能でシンクロイド・システム
は作られるが、実際問題としてスキャナとレシーバーは別個のもの
ではなく、双方向性、つまり送受信が可能なものだ。センサーが生
身の人間であると認識すればスキャナ・モードになり、シンクロイ
ド可変筐体^{チャンシヤフル・ボディ}を認識すればレシーバーとなる。

つまり保志の住まいに棺桶^{カンオケ}が備えつけてあるということは、いつ
でもシンクロイド・システム経由で遠隔地（地球までほどに遠距離
でも可能）に旅行^{トリップ}することができるのだ。

条件は、同じ亜空間^{サブ・スペース}ネットワーク・チャンネルで、共有登録し

である端末のどれかに、受信可能な状態にあるシンクロイドが収まっていることぐらいだ。普通棺桶カンオケ入りするときは、手違いでシンクロイドがスタンバってない場合に備えて、転送不良の場合、ライド・オンを中止する指令を出すまでの時間を設定　基本設定は確か十分ぐらい　するが、意識が受信機の情報入力器官へ切り替わるまでの間、トリッパーの意識は、暗くて狭くて、まさに棺桶の中にいる生身の身体にある。

死体気分を長時間味わいたい欲求がある人間でもなければ、スタンバイからシンクロ完了までの待ち時間が短い方が好まれるのは当然だろう。閉所恐怖症がある人間はシンクロイドに乗れないに違いない。

保志の官舎附帯設備である棺桶は、そこから搬出する必要がないこともあって、壁面に立てて収納してある。普通の棺桶は、本当に棺桶のような形で床に置かれているものなので、人は仰臥位でダイブして、その同じ体勢でシンクロイドに意識が合致して覚醒する。けれど、官舎の立てかけてあるやつは、当然寝ていたはずが、突然起きている状態に移行するのだから、三半規管を混乱させる。一種の慣れが必要だ。

扉が開いて、そこから美耶子がヒールの音を響かせて何事もなかったかのように歩いて出てきた。

官舎の縦型収納棺桶に慣れている人間でなければ、寝ていたはずの身体を起こそうとして、上体を起立させるべく腰を曲げ、当然の勢いで頭から床向かってこける者が殆どだ。が、当然と言うか、さすがと言うか、これに美耶子は慣れている。たしかな足どりだ。

壁に埋まっているはずのスピーカーが、フルオケの『お誕生日の歌』イントロを奏で始めた。4444のやつは、何がどうあっても今日のテーマ・ソングをそれで統一する気らしい。バッパーの息子

らしくもなく、ラッパとかいう人種らしい息子なら、司法試験に受かったあかつきには、歌って踊れる法曹人になれるのかもしれないが、美耶子にそういうノリはない。

美耶子は節を完全に無視した。けれど歌詞はそのままに引用して、凶悪なまでの満面の笑みをたたえて保志を見た。

「ハッピーバースデー あ・な・た」

瞬間保志の背中に悪寒が走った。

「こつちから押しかけないと呼ばないって、手抜きじゃない？ 家族の権利を主張するには、コミュニケーションに対して積極的に、かつ継続的に配慮していたかを立証すりゃあいいんであって、こんなじゃ、離婚裁判に持ち込んだって、そつちが悪いって慰謝料ガチとる自信あるわよ。ワ・タ・シ」

語尾に絶対音符が付加されている口調で美耶子が微笑む。金持ち御用達辣腕弁護士ごようたし らつわんの美耶子なら、当然同業者のフトコロを肥やすような太っ腹と無縁で代理人など立てずに自ら原告本人として、被告人尋問を相当のクオリティーでやってのけるに違いない。大体、地味に被疑者の権利を守るべく奔走するようなタイプの弁護士の演技力、美耶子のように売れて何ぼというのを徹底している弁護士の演技力、というのは大したものだ。容姿的にも、演技力的にも、彼女は女優でも食って行ける筈だと保志などは常日頃思っている。

見せ方、間の取り方。糾弾者に添っているのかと思う様な誘導をかませながら、土壇場で奈落の底に突き落として、傍聴人の同情をクライアントにぐぐつと引き寄せるその巧妙さ。

金がうなっている筈の元政治家が、女子高生と援助交際ほごうしやうしていた事件では、狒々ひびオヤジを、若年ではあるが侮れないほどに悪意に満ちた少女の誘惑に抗しきれなかった哀れな中年男に仕立て上げて和解に持ち込ませ、有名歌手のストーカー行為疑惑事件では、ストレ

スから精神を病む寸前にいたのだというでっち上げを平然とやらかす。

美耶子は事件の弁護を受託する前に、腕っこきでかつ美耶子の信奉者ですらあるスタッフを使い、受けた場合と同等のリサーチを徹底的にやる。金が取れて、勝てる戦にしか乗り出さない。常勝女神という渾名は、別にネタを知れば何程のこともない。あだな

「み、美耶子……さん」

クリーム色のスーツに淡い桜色のスカーフ。時間は明石時間の九時丁度。保志がどのように身を振るのか、十時にオフィス入りする計算で、四十五分ほどみっちり話し合おうという魂胆だろう。アカシタイム

このシンクロイドの衣装についても、現代の機械が裏で何をやらかしているのか保志にはさっぱり見当もつかないシステムの一つだ。ぶつちやけ、今現在、向こうの棺桶に収まっている人間の服装が正確に再現されるのだけれど、どう考えても可変筐体とちがって擬似生体細胞を使っているわけではないし、被服品に使われる素材など恐ろしい種類と質量的差があるはずなので、こちらの棺桶で便宜合
成するには労多くして穴だらけになりそうなものだ。なのに、ちゃんとボタンからアクセサリーに至るまで再現されている。いつも同じストレッチ素材の黒服辺りで出て来るなら納得いくのだけれど、不思議なことに自分の服装が再現されている。

保志自身がトリッパーになったときに、着ている服装が同じこと、同じ位置に同じ備品があることで自分との連続性の把握の一助には確かになっている自覚があるので、これを無駄とは呼ばないが、やはりどうなっているのかよく分からない。

ただし、実用可能な道具類は、技術的に不可能なのか、それとも危険廃除のためにできないことになっているのか不明だが転送されることはない。トリッパーがシンクロ先で人殺しをしようと思っ
て銃火器や刀剣類を持って棺桶入りしても、そういうものは形として

再現されるのみだ。胸に差してボールペンは筆記できないし、拳銃は火を噴かないし、包丁の切れなさときたら、なまじっかに金属質な見掛けの刃があるだけに芸術的だとさえ言える。美耶子の耳たぶで光っているダイヤのピアスが、多分そう見えるだけでダイヤでないのと同じということだろう。

「俺と離婚なんて、ホンキでするのか？」

保志は歩いて来る美耶子に自分からも歩み寄って抱擁すると、その勢いで掌を太股にたどらせた。

「あなた……真面目な話に來たのよ、私は」

美耶子の手が保志の手を、虫でも払うように弾いたが、保志はめげずに美耶子の腰辺りに着地させた。

憎まれ口でそういう夫婦の行為を拒絶しているような勢いの割りに、美耶子の顎は当然の権利というように口づけを要求する角度になっている。年齢の出ていない喉のラインが綺麗だ。フェイントというわけではないけれど、アンチエイジングに命をかけているに決まっているその喉の方に、保志は唇を吸いつかせた。

「あ……、ちよつと、そこは駄目だって。私、仕事前……」

「俺も仕事前。だけど美耶子さんが、いつまでもあんまり綺麗だから……」

「おだてて、誤魔化して……ズルいわ」

「……今日、出勤何時？」

「昼から……」

（げ……っ）

一時間ほどをやりすごすのと、ランチタイムは除いたとして三時間をたっぷり話し合いする覚悟で来た美耶子の相手をするのでは全く必要な心構えが違う。

保志は今度は美耶子の唇をキスで塞ぎながら正面モニターのTODDをもう一度ちらつと見る。美耶子の趣味なのか、女というもの

が全体的にそうなのか、彼女はいつまでたっても、キスをしているときは目を閉じる。

だから眼球だけで確認すれば美耶子には保志がそういうことをしているのが分からないはずなのに、美耶子の指が思いつきり保志の尻の肉をつねった。保志は小さく悲鳴を上げた。

「いて……。酷いな美耶子さん……」

「退官日なのに、仕事続けるふり？ 冗談は止して。もうそんなモニター切っちゃいなさいよ……」

断定的な美耶子の物言いが面白くない。

「……だから、まだ決めてないんだって」

「あなたいつも三分の一は嫌だって、ずっと言ってたじゃない。悩む必要はないわよ。私の収入と蓄えと退職金だけで十分遊んで食べていけるし、ね。仕事がなくて腐っちゃうなら、オマル勤務を続けでもいいし、潔くオマルと決別して、民事専用弁護士で独立してもいいじゃない。なんだったら私のところで居候^{イソベン}弁護士してもいいのよ」

くつと保志は笑った。

「^{よわい}齡四十五のイソベンなんて、全然かわいくないぞ。美耶子先生……。それからオマルって言うな、オマルって……」

保志が所属している国連国際総合司法庁というところは、司法というものの公平享受権利を保障するために限り、何でもできる権限があるということで、俗称でオールマイティーと呼ばれている。日本語を母語とする人間がそこをオマルと呼ぶのは当然のなりゆきだ。しかし実情ときたら国連総合司法庁の各国支部に回される事案というものは、実利主義がはびこる民間から自然と洩れてしまうものであることが多い。

経済破綻国や地域における犯罪被害者の救済だったり、被疑者が、裁かれて初めて罰されるための権利の保障であったり。つまり、どちらかというオールマイティーというより、巡らされてあるべき

法の編み目一番底辺の、一番詰まった目であることが要求され、大きく美味しいのどぶさらいた的な役割を要求されることも多い。そんなだから法曹界の住人の中では、幼児用排便練習器であるところのオマルという蔑称で、おおっぴらな陰口として通用している。

床に押し倒すというのもちょっと最近マンネリ化していて芸がないので、モニター画面に美耶子の背中を押しつけて、立ったまま致そうと保志が頑張っているのを身体は協力しつつ、会話の方では完全に無視して、美耶子は定年延長を仄めかした保志を翻意させようと言葉を続ける。

「ね、私たち、そろそろ夫婦でいつづけるつもりなら、この距離を何とかしなきゃと思うわけよ。あなたってば……うちのシンクロイドにだって滅多にトリップしてこないじゃない……」

「緊急呼出しに対処するには、美耶子さんが来てくれる方が助かるの……」

まずは場保^{ばも}たせに、指を滑り込ませるとその気合い十分だったのか、それとも単純に反応がいいのか、十分に潤っていた。その気十分ではなかったとはいえ、一応男としてはそれはそれで楽しかったので、調子をこいて指を増やして弄んでみたら、美耶子は眉間に皺を寄せて仰け反り、そのついでに膝がちよつとばかりガクンとなった。

保志はそのまま転ばない様に抱えて尚も行為を続行すると、さすがの口先女的美耶子も観念したようで、だまってそちらの方に集中することにしたようだった。

作戦成功というべきか……。

抱え上げたといっても、それはここが多少低重力仕様になっっているから可能なのであって、シンクロイドの芯は人間の骨よりは相当に太い金属の棒で作られているために、実は見掛けよりは相当に重い。可変筐体といっても赤ちゃんから二メートルの巨体までを一つ

チャンジャブル・ボディ

の受信器で対応できるわけではない。一応可変筐体の量を変えて体型の違いをカバーしているとはいえ、その幅には当然限界がある。

保志のところにあるそれは、いわゆるMサイズというやつで、身長百五十五センチ以上、百七十五センチ以下に対応している。体重は恐らく地球基準重量で九十キロ近いのではないかと思われる。

「ここでもいい……？ ベッド行く？」

一応聞いてみた保志は、今度は美耶子に逆に押し倒された。

「時間の無駄。その気になっちゃったから、責任取ってもらわよ。話し合いは、こつちをさつさと済ませて、それからね」

言い終えるや否や、美耶子は保志のズボンの隙間から手を滑り込ませて、その股間にあるべきものを問答無用で握り込んだ。

「……さつさとって……美耶子さん……ひど……」

「どうせ、あなたもそういう魂胆だったくせに……。一発やって誤魔化して、お引き取りさせようって、そうでしょ？」

保志の抗議を美耶子がばつさり切って捨てた。その通り算段していた保志は反論もできない。保志という男のツボを知り抜いている美耶子に、積極攻勢に転じられては、どちらかという刺激反射型にできている男というやつの性は無力なものだった。

それからのきっちり四十五分を、保志が美耶子が言うところの積極的に、かつ継続的に濃密なコミュニケーションに充てたのは、成り行きというやつだったとはいえ、その日のうちに、明日以降の身の振り方を決定して、それに伴う明確な意思表示を、オルマ総合司法庁のメインコンピュータ宛に済ませなければならない保志にとっては、ロスタイム非常に大きい誤算であった。

3・ 退(ひ)けない理由

立て続けにいかされて、時間が時間故に、保志はうつかり眠っていたらしい。覚醒の自覚で、己がどうやら眠っていたことに気付く。どれだけの時間をロスしたのか、慌てて相変わらずTODORISTを表示しているメインモニターの右上角に示された時間を見る。

GMT01:27

JST09:27

とすると、不覚にも眠ってしまったのは二十分強ぐらいということか。とりあえず、ホッと一息ついて辺りを見回す。

オルマ

国際総合司法庁の本部は、公正の原則を貫くために、国連の主要機関が本部を置く独立したスペースコロニーに所在する。コロニーの名前は、特別に捻らずに、公用六カ国語のうち、一番強い米語でThe United Nations Colonyと名付けられている。ただ、国連公用語でない日本語を母語にする者にとつて困ったことに、略称が些か発音に忌避感を禁じ得ないモノなのは、日本人として残念だと保志は常々思っている。正確にはアンコに近い発音なのだが、そう、まさにそのものズバリ、UNCうんこである。保志の仕事場であり、生活の場である可動式派出所兼官舎は、その親玉であるUNCと同じく、一応GMT(グリニッジ標準時)で運営されている。幾ら真夜中で執務時間外 プライベートタイム だったとはいえ、仕事部屋で一戦やらかしたバツの悪さに、保志は剥き出しのままの尻を搔いた。

「ろくちゃん、お目覚め？」

聞き慣れた軽い声質がモニター付属のスピーカーから聞こえて、

保志の気分はげっそりとなる。

「阿呆、そつからセレの声を出すな」

「美耶子は帰ったのか？」

「いんや、美耶子さんは退職祝いに、ろくちゃんの好きなもの何か作るってキッチンだよ。もう、やさしくしてって言ったのに、ベツトぐらい使つてよ……。結構、美耶子さん痛かったと思うよ」

たしかに執務室の床は硬い。だけど……。保志は断言したい。乱暴されたのは自分の方だ。あのむちゃくちゃなテクニクは何だというのだ。奥様御用達のいけない雑誌で仕入れた知識を、自分の快樂のために試してみることためらに全く躊躇いがない美耶子は、たまにとんでもないことをしたがるから油断ならないのだ。若造じゃないんだから、アクロバット要素を取り入れるべきではないと、それだけは切に訴えたい。

「馬鹿いえ、俺に抵抗なんてできたと思うのかよ」

いやそうに保志が呟くと、セレの声が「きやはは」というように陽気に笑った。

「いつも言ってるだろ。壁から場合は4444よんしで一つ頼みたいんだけどな。とにかく、顔がないときにセレモードはやめてくれ」

言ったとたんにTODORISTがかき消えて、見慣れたあの顔が大写しになった。

「顔がついてりゃいいってもんじゃねえ」

「文脈を文字通り解釈すれば、顔があればいいってもんだと思うのよ。ろくちゃんがどうするで見ているのか分かるまで、オイラは長年連れ添った相棒として、箱野郎の4444はほつといて直接アンタと話したいわけよ。分つかるかなあ」

AIというものは、普通は仕えているご主人様が、違法なことをしない限り、オール・イエスでいいものだと思う。けれど、こうい

うところで頑固に存在を主張するから、セレは変わっていると判断せざるを得ないのだ。そう保志はつくづく思う。自我が強すぎるというのはパートナーとしてなら、そう悪くもないのだろうけど……何というか。

「長年連れ添ったってそういう年かよ。そっぴゃ、何年になる……っけ？」

「オイラとの付き合いは多分五年くらいじゃないかな。4444時代を考慮に入れば丁度十五年だよ。耄碌しないでよ、もう」

保志はちよつと天井に目をやって考える。そういえばセレが必要以上に個性的になったのは、官舎のホストである本筋からはみ出して、普段使われることが少なかったシンクロナイザー受信器をアバタロイドとして使い始めてからだ。

経験すること、それが自分への反応として帰って来て、交流した人たちからセレとして扱いを受ける事で、あんなにも劇的に変わるのかと思うと、不思議な気もする。

ともあれ、セレがあの子の身体を取るようになったところから、五年も経つのかと思うべきなのか、まだ五年にしかないのかと不思議に思ふべきなのか、しばし保志は考えた。すでに彼の中ではセレはセレでしかなく、官舎のホストと同じと言われてもどこか座りが悪い。

「あのさあ、オイラは機械だからいいけど、乙女だったら絶対にその格好、直視できないね。猥褻物^{ワイセツブツ}はしまったら？」

画面の中のセレの目が、いやそうに保志の下半身に向けられている。視線までコミュニケーションの道具にできるとは、今更ながらあなどれないAI^{やっ}だ。保志はとりあえず服装を整えることにする。

保志下着捜索隊員は困難にも遭わず目的物を発見したので、さつさとブツを回収完了し、身繕いを始めた。その保志に向かって、画

面の中にいるセレがよしよしというように頷いていた。別にパンツを穿いたぐらいで褒めてもらいたくなんかない。

どうにも、4444の擬似人格というより、遠隔地にいる誰かとビデオチャットをしているような、そういう手応えがある。

「十五年のうちの五年って、丁度三分の一だね。ろくちゃん」

三分の一という言葉に、保志の眉間が引きつった。

「……セレ君……。ちよつとの間、三分の一という言葉を言わないでくれるかい？」

気難しげに宣言した保志をからかうように、セレは、指令と同等に扱われるべきはずの意思決定上位者である保志の命令を、さらりと無視して続けた。

「だって、オイラはろくちゃんのこと愛しちゃってるっていつも言ってるでしょ。美耶子さんにはぶん殴られそうだけど、オイラはろくちゃんが給料三分の一でねばってくれることを祈ってるのよ。オイラAIだから、どの方角の神様にお祈りしたら効果があるのか、今一つ自信ないんだけどさ」

セレを無視して執務室を出て行こうとする保志を認識して、自身の存在をアピールするつもりなのか、またしてもスピーカーから、音量も曲調も、どこかほんのりやさしいピアノのメロディーにアレンジして、お誕生日の歌が流れ始めた。

ふん。勝手にやっておけ。

保志は思う。単調な繰り返しに飽きないのは、AIらしいと評するべきなのだろう。

官舎の廊下にも、あらゆるところに4444が監視の目を光らせているし、適度な間隔を維持してスピーカーも壁面に埋設する形で置かれている。美耶子がいるとかいうキッチンへ向いながら、優しいメロディーにしばし保志は浸される。

三分の一。そう、全く忌ま忌ましいのは、三分の一特例だ。あんなものがあるから、やりのこしを作ってしまった人間は、深く深く悩むのだ。まったく、選択の余地もなく現役から蹴りだしてもらえれば、多分それでよかったのだ。

第一、特殊技能が要るような仕事じゃないよな。

保志はつくづくと思う。要るのはちよつとした忍耐力と、法の正義が正義のスタンダードで構わないと信じられる単純さと、それからフットワークの軽さ。それだけだ。

保志がやってる仕事などは、だれかがやればいいことで、それが保志でなければならぬ理由などは、クリエイティブ系でないすべての仕事に共通するように、ないのだ。

なのに、なぜか技術の継続および従事者の育成に特別な配慮がいる専門職に指定され、つまりは、いわゆる「三分の一特例」に該当する職業ということになっているのだ。

本来、三分の一特例対象業種は、そのまま保護されなければ後継者が育つことがなく絶滅していくだろう技術を保全する目的で作られた。漆職人とか、柳行李職人とか、桐箆箆職人とか、現代の必要からは既になくてもいいものでありながら、一度廃れると二度と復活できないだろう職人技を人類の無形遺産として保護していくために作られた。

基本、三分の一リストに載っている業種の従事者は、全額国庫負担による安定収入が保障されている。ただし国庫負担を無限増大させるわけにはいかないから、一般の定年よりは相当早めに、業種ごとの基本定年が定められている。もちろん定収入がなくても、生産物を売ることが当然できるから、普通のモノ作り関係の第一種リストに載っている手に職があれば定年なんぞは怖くない。

大体がそういう手仕事関係の職人さんは、闇雲に従事者を増やしたところで、厳然として適正という壁がある。後継者育成が困難な理由には、とにかくその道に入ってみなければ適不適が判断できないことと、その道に入ってはみたものの、決定的に素質がなかった場合に軌道修正が難しいということにある。始めてしまったらドロップアウトしたくても、なかなか難しいのが現実だ。

それで、その両者の妥協点を探ってきたのがこの制度なのだ。他に職業を持ったままで、もちろんどっぷりつつこまるのが、一番歓迎されるのだが、全労働時間のうち、最低三分の一以上を職業訓練に充て、ある程度の期間（最低五年）を職業訓練に従事することができるとする制度だ。もちろん、やってみたものの即バックという場合は、違約金を払えば三分の一プログラムから逃亡することも可能だ。

端的に言えば、国家主導型、超長期徒弟制度というわけだ。

しかし問題は、その財源である。どこの天才が考えたのか、財源はとんでもない方法で確保された。技術を授ける方の現役労働者が、定年退職時に支給されているそこその年収を三分割し、後継候補二名にも三分の一ずつ支給するというものだ。

国は新しく職業訓練を受けようとする者に、現年収の三分の一か、退職者の年収の三分の一のうち、どちらか多い方の収入が保障される。

国は制度の維持のための人件費と、僅かな差額の負担のみで、文

化遺産級技術の消滅を防ぐことができ、技術者にとっては持てる技を伝える相手が確保でき、挑戦者にとっては現職での収入を落すことなく、時間を大幅に犠牲にすることもなく、人生を元のレールに戻せるという保険をかけた状態で、一風変わった絶滅危惧職業に携わってみることができる。

企業は、この三分の一の特例に基づく職業訓練に従事している者が、法定労働時間の三分の一までの労働力減少を理由に解雇することは、出産・育児休暇の取得を理由に解雇した場合に課せられるのと同等の罰金を、国と雇用者に対して支払うよう義務づけられている。

さて、この現代版三方一両損もどきの制度は、みんながみんな、少しの不具合を義務として引き受けるという、負担の分散という考えが微妙に世論に受けて、非常にうまく機能した。

自然特殊技能に限定されていたものが、特別に特殊でなくても、放っておいては従事者に事欠くような職種へと適用範囲が広がっていった。

内戦後の荒廃した国土に付き物の地雷処理技術者とか、内乱国の政情安定のための治安維持に携わる者、有毒廃棄物処理技術者、宇宙空間建造物における有機廃棄物処理技術者などなど、などなど。それがいわゆる、三分の一の特例、第二種リスト業種だ。

けれど、危険、退屈、大変が当たり前の、万年従事者不足の第二種リスト業種においては、決定的な問題があった。

つまり、成果物をオークションで売れる様なモノ作り関係者とは違って、その種の仕事の現行従事者にとっては、三分の一に減額された薄給が、雀の涙の年金に加算されるだけという、非常に情けない状態になるということだ。

しかし、何でもそうなのかもしれないけれど、ある仕事に長々携わっていると、愛着というものが普通に湧くのか、第一種リストの

連中とは違って、第二種の場合、三分の一特例の適用を拒否して引退していくものが多い中、自分のノウハウを手弁当に等しくても伝えたいという人間が、どんな業種であつても必ず何年かに一人はいるらしい。

さて、そしていよいよ第三種リストの登場になる。国は、三分の一の成功に気をよくして、自らの中にも三分の一特例を敷衍させたのだ。いわゆる公職と呼ばれる職業の中にもニッチに位置するような、余り人数が必要でないわりに、特殊なノウハウが必要であり、かつ、その従事者育成にある程度の期間が必要とされる職種について、そのやり方を踏襲したのだ。

バッパー保志の職業の正式名称は、人口密度稀少域特例総合司法官である。しつこく整理すれば総合というのは、本来であれば分業されるべき司法の仕事フロンティアを、人口密度稀少域においてのみ、くまなくこなす何でも司法屋だ。

警察がすべき犯罪があつたと目される場合の捜査・逮捕。そして裁判というシステムが担当すべき、立件から裁判、量刑確定までをこなし、最後には刑務官が行うべき刑執行まで（死刑すら含む）までをこなさなければならない。

日本が管区とする人口密度稀少域自体がそもそも少ない。それからついでに、人間が少なければ犯罪の発生も少ない。そして犯罪が起きたところでそもその目撃者に足るものも少ないために、告発者も少ない。殺人事件がおきたところで、だれかが訴えなければ、まあそういうことが起こったこと自体が特急で藪の中に入ってしまう。よって立証も極端に困難。現行犯逮捕でなければ、犯人逮捕は非常に難しく、だだっぴろい管区の所為で、訴えがあつたところで、場所によって直行、シンクロライド（シンクロイドに乗ること）、アバコン（アバタロイドを操縦すること）を使い分けてさえ、ほぼ犯罪現場に到着したときには、後の祭りが基本という、ストレスフ

ルな立ち位置だ。

当然、職種特性上、司法の専門家であることが要求されるから、第一種か二種の司法試験合格者であることが最低条件なのだが、普通、この資格所持者は文系に分類される人間が多いのだ。けれど犯罪者とガチ対決があることも想定される以上、銃火器に対応できる程度の戦闘能力は要求される。ついでに、シンクロライド中に知死レベルのダメージをくらっても、（痛みの感知レベルは死亡と同等だから）精神的に「あー、今日もよく死んだなあ」程度の暴言を吐ける程度にタフであることが望まれる。

この暇な激務を、三分の一の薄給プラス雀の年金程度でこなせというのは、やはり、親方日の丸にしても、如何せん阿漕あこぎに過ぎると保志などと思うのだけれど、読者諸兄におかれましてはいかがなものだろうか。

とにかく、報われることが碌にないこんな仕事でも、それをやると思った自分が過去のどこかにいて、そして、命令系統の上位に保志ならばできると判断してくれた誰かがいて、毎日のように目の前にやってくる対応しなければならぬことに駆けずり回っていたら、あら不思議十五年もたっていました……ということだ。

ただこれだけは言える。仕事に取り組んでいる中で、具体的に誰かを助けることができた。だれかの命をうばったことがあった。誰かの人生を剥奪する決定をくだしたことがあった。そして、必ずいつも誰かの役に立っていたとは断言できないけれど、誰かのためになったことが一回や二回ではなく確かにあった。

そついうバツパーという仕事が、自分にとって多分、楽しかったのだ。

仕事にやりがいを感じることができて、老化による劣化というものを自分のこととして、静かに受け入れていく季節に自分は静かにいかなければならないのだ。多分それは間違いない。

大変で楽しかった。やり甲斐が確かに有って、そして間違いなく充実していた。けれど、それは三分の一の薄給でペイするようなものとは思えない。

保志は自分が三分の一特例の適用を受けて、最初に経験した裁判官という職業に、判事と呼ばれる十年以上いることなく、家族からも離れて超遠距離単身赴任。ちよつと世間相場より早いけれど、退職金をがっぽり手に、人間がいつぱいいる場所に帰るのも悪くない。ずつとそう思っていた。

なのに……。

「大体さ、ジョリー・ロジャーの野郎をのうのうとのさばらせたまんまでさあ、ろくちゃん^ねが引退するって言うとは思えないんだよなあ……」

それだつ。全部、あれが悪いつ。あの……髑髏野郎……。

ジョリー・ロジャーという言葉が、執務室を出て廊下を歩く保志の脳天目掛けて降って来る。保志は視線に最大級の力を込めて、ぎりりとばかりに虚空を睨めつけた。

ジョリー・ロジャーという言葉を知らない人間だつて、アレは知ってる。現物^{ゲンブツ}を見せて、これがそうだと言えば、殆どの人間は「ああそつなんだ」と納得もするだろうが、八割がたの人間は、1週間後にジョリー・ロジャーと言ったところで、それがアレのことだと

いうのをすばつと思い出したりはしないだろうというぐらい、殊^{こと}日本語圏において、名称の知名度と実物の知名度が乖離しているマークだ。

ジョリー・ロジャーを日本語で一番分かりやすく表現するなら、^{かいぞくき}「海賊旗」か「毒薬マーク」というところだろうか。あるいはもつと端的に^{スケルプ・アンド・ボーンズ}髑髏と骨といえいいか。

もつとも、義賊だか愉快犯だか知らないが、保志の管区を跋扈^{はつこ}しつつ、ジョリー・ロジャー名^な告る者（組織？）は、犯罪者の癖に正義をなしていると自信タップリの姿勢を崩すことがない。

保志の受け持ち管区に人が移植している大きな理由の一つが、希^{レア}アース土類元素類の豊かな鉱床である。その採掘によって生まれる巨利は遠距離輸送の手間をかけてなお釣りが来る。

レアアースは、^{ミッシュメタル}混合希土状態であつても、高価なことに一向に変わりはない。やはり現代においても変わらぬ人口密集域である地球からの距離のせいで当然かかる輸送費用をさっ引いてまだ、利が大きく残るのがレアアースの採掘だ。

需要が減らないことによって、それは変わらず高価であり続けている。

保志の管区^{テリトリー}に出没するジョリー・ロジャーなる者は、高速軽快艇でフットワーク軽く高額貨物専用の輸送船を狙い、根こそぎ奪うのではなく、積荷の中でも殊更に高額なものを抜いていく。

輸送船強奪の海賊行為といえはカッコいいが、超遠距離輸送船は生体にはいろいろな意味で負担が大きいために無人であることを考えると、限りなく『抜き荷』に近いセコさがある。

つまりコソドロに限りなく近い生態系でいるくせに、頭蓋骨の下

か背後にくるはずのバツテンが、交差した大腿骨という基本スタイルではなく、反り^そを持った剣、カトラスを交差させたジョン・ラカム・スタイルというやつなのだ。その通^{つう}を気取った選択^{チョイス}も気に入らない。

警察仕事も担わなければならないバツパーとして、一応保志は戦闘も可能な快速移動手段を持っている。何度か駆けつけたものの、荷は抜かれた後という煮え湯を飲まされた挙げ句に、ただ一度だけ保志は現状に滑り込みセーフで間に合ったことがある。

セキュリティ警告が発動したということで通報を受けたとき、たまたまアレに乗って近場に出張っていたのだ。現場に急行し、何とかあれがまだ居る間に、うまく遭遇することができたのだ。保志が普段使う高速移動手段であるアレは、超遠距離輸送船に生物が乗り組んでいないのと同じような理由で生身で堪えられる様なものではない。当然保志はシンクロライド中だった。

あのジョリー・ロジャーを染め抜いた高速軽快艇に果敢にも挑んだとき、向こうは保志がシンクロライドだと知ってか、それとも普段抜き荷をしてるほどには平和的な犯罪者だろうとも、本来は殺人にさえ禁忌を持たない狂人なのか、思い切り知死レベルの攻撃を受けた。当然シンクロイドはお釈迦になったし、そのせいで何十枚目になるか分からない始末書を書いたのは、ごく記憶に新しい。

普通は、胸を撃ち抜いたり、腹を刺したり、頭を吹き飛ばされたりする程度だ。その程度なら、胸を張るようなこっちゃんいが、保志は慣れている。

二度とは忘れられないほどに別嬪のアバタロイドに、四つ裂きにされたのだ。手足が、メリメリともバリバリともつかない、非常に耳障りな音を立てて、引き裂かれちぎれていく。あの感覚を思い出すと、今でも柄にもなく神経を病みそうな可愛い自分に気付く。

人口密度稀少域では人間誰しも「だれも見えてないし」状態になるらしく、保志のところにもまで持ち込まれる事件は、殺人が圧倒的に多い。

刑事さんの世界では、地球が唯一の人類居住圏だったところから使われている伝統的用語で死体のことを「お六」という。保志が三分の一挑戦者として、日常生活の片手間にフロンティアまでシンクロライドしていたところ、教官であり、上司であり、ここの管区の前任者が「保志がきてから死体率が増えた」とか難癖をつけてきた。そしてついた渾名が「ろくちゃん」なのだ。

もちろん単身赴任が原則のバッパーには、軽口を叩き合う様な同僚はいない。「ろくちゃん」なる差別感がたつぷり感じられる渾名は、前任者の退官と共に墓場に納められたと思っていたのだが、何を考えたかAIのくせにアバタロイドを操作するという趣味にはしつたせれが、4444の古い記憶バンクの中にあつた「ろくちゃん」という渾名を蔵から出してきたのだ。

殺されたまんまで、抜き荷^{ネコバ}というにはでかすぎる金額を持ち逃げされたままで、引退なんかできるのか、俺は。

保志は廊下で途方にくれる。

身体には、痛み^{あか}の記憶は残らないが、どんだけ痛かったかという感情的な記憶は焼きついて^{ナイスバ}いる。あの驚くほど朱い唇をした、肉感的なアバタロイドのドライバーは、きつと男に違いない。アバカマなんかにこけにされて、リングを降りるのか？

美耶子がいるはずのキッチンまでの道程の途中で、見事保志は遭難した。一步も足が進まない。温かい微笑みを持った、愛し（？）の奥さんが待ち構えているはずの　ここは腕を振るってくれたと

言つべきだろうか　豪華退職記念ディナーのテーブルにつくことを、拒否することでおきるだろう、嵐をやり過ぎより、果敢に立ち向かう自分しか想像したくないのはなぜだろう。

こんな仕事、薄給に唇をかみしめてまでやるこつちやない思いながらも、敗北の痛みを抱えたままで、ジョリー・ロジャーと対決する機会を永遠に放棄するのを、自分は本当に望んでいるのだろうか。もちろん、薄給に堪えてまで、あいつに果敢に挑む自分を想像するのも、それはそれで困難だったのだが……。

三分の一の薄給。

殺されたまんまの敗北感を背負つての引退。

間違いなく美味しい美耶子の手料理。

すべてが保志にとって不条理そのものだ。

「はっぴば〜すでい　でいあ、ろくちや〜ん」

もちろんセレの歌は、その筆頭に決まっていた。

4・美耶子さんのオーソライズ

保志が住んでいるいわゆる可動官舎というやつは、可動というのは大嘘つきで、常に移動してる。中型輸送船というのが一番近い。一応、普段そこにいる人間は保志ぐらいなのだが、珍しく被疑者を現行犯逮捕できたときには、留置場フタバコになる場所もある。民事訴訟が提訴された場合は、いわゆる簡易裁判案件程度なら、オマル……間違った、本庁のホストオルマにリンクしている4444にしこたま溜まっている判例を参考に、さつさと判決を言い渡す。和解であれば立会人として、賠償額としてなら責任を持って金の取り立てをし、懲役なら服役させる。

大体がまばらながらもある保安官事務所にある拘置施設にお引き取りいただいで、そこでキタナイ、キツイ、キケンを網羅した3K仕事案件があれば保安官監督のもと、それに従事していただくが、たまたまそういうのがなければ、保安官事務所にあるシンクロイド・システムを使つて、仕事のある刑務所へ出勤してもらうことになる。

刑事裁判が必要な場合もある。もつとも、ただでさえ稀少な事案発生頻度と、情けないほど低い検挙率の関係で滅多にないのだが。警察官の果たすべき役割として現場検証を行い、立証に足ると保志が信じられるだけの証拠をかき集めて、総合司法庁オルマの刑事部に検察官送致をかける。

不起訴の判定がくだされば、そこで一件落着にするしかないが、有罪の可能性が濃いとして裁判になった場合がややこしい。

簡易裁判事案であれば、保志自身が裁判官として判決を下すのだが、捜査・立証・逮捕・拘留しているわけだから、当世の主流である当事者主義でいくとすると、検察官・被告人・弁護人のうち、自動的に検察官としての働きが強く要求されることになる。これには疑問の余地もないだろう。

総合司法庁のデータベースに登録されている、国連準拠訴訟法に通じている、つまり第一種司法試験有資格者からランダム抽選で割り当てられた裁判官と弁護士を同じ時間に官舎に付属している法廷に来てもらって、長い裁判に突入する。もちろん、可動官舎には大人数を恒常的に養うだけの食料や水など常備されているわけではないので、これまた近場の保安官さんをお願いして、期日には出廷してもらうのだ。

裁判官サマが面倒がりで、バーチャルだけで構わないといえば、GMT（グリニッジ標準時）で定められた公判期日に、最寄りの三面モニターが完備された法廷室^{ルーム}入りしてもらってバーチャル裁判で行われる。なぜに三面モニターかといえば、検察官、被疑者、裁判官、弁護士という四者のうち、自分を除く三者を大写しにするためだ。

直接一堂に会して裁判をしたいと、担当裁判官サマがおっしゃれば、しかも弁護士、裁判官ともに複数体勢でいどまれている事案だったりすれば、備品のシンクロイドをかき集めて対応することになる。

幾ら公費で賄われているとはいえ、シンクロイドの値段を考える、たかが犯罪者の人権保護にかけるにしては、非常に贅沢にできている。

なんでまた、人間が殆どいないところでさえ、無法をまかり通らせようとする人間がなくならないのだろうか。

いや、もしかすると、人が少ないからこそ、禁忌を犯す誘惑に抗するのが難しいのかもしれない。

とにかく、全くの人類生息圏外ならば法は無力だが、一応、人口^{ロンドニア}密度稀少域とされている場所は、少なくとも辺境であっても法の力のおよぶ範囲、つまり人間社会がある場所としておきたいという要

求が民意としてあるのだから総合司法官という、飛び回る六法全書が求められたのだ。

もっとも、人口過密域とがいに生息する人間においては、そんなところが存在していること自体が無意味なのだろうけれど。

ともあれ、進むも引くも主に精神的事由によりままならず、官舎の廊下で遭難していた保志。だが彼は突然に、雷で打たれたのではないかと思うぐらいの間違いのようなさで、ゆるぎない思いに気持ちの全てが占領された。

ただっぴろいというわけではないが、各種設備がもれなく詰まった官舎内での移動に、保志は大体いつもは自転車を使っているのだが、思い定めて走り出した。行き先はキッチンである。

美耶子にとって、今回退職して帰宅しないことが、離婚の事由に足るものなら、いいじゃないか。どうせここで暮らす限り、衣食住全ては官給品だ。あいつが気が済む金額にたどり着くまで、今の給料からみて三分の一に目減りした取り分の全部を渡せばいい。

もし、美耶子が結婚を継続したいし、一緒に過ごす時間が欲しいというなら、とりあえず第一期延長五年でゲットした二人の猫の手を、ちやかちやか人手に育てて、今度は自分がシンクロライドして東京に帰ればいいのだ。明石タイムとグリニッジタイムの9時間差は、知恵の絞りようでどうにかなる。

自分は絶対に、四つ裂きにされたままで、あのド阿呆を野放しにして引退なんてできない。引退しても、毎日くさくさと鬱屈をため込んで、飲んだくれる余生なんて、まだ早すぎる。収入より、生きがい。

廊下を疾駆しながら、保志の頭の中には、あの交差した大腿骨の位置に反り刃のカットラスを交差させたいけ好かないジョン・ラカム・スタイルの海賊印が、確かに殲滅せんめつさせるべき敵の象徴として、燦然さんぜんと輝いていたのだった。

走って、走って、走って、走った。

勢いでキッチンの扉を開けて、そこに自分の好物のゆで卵と鶏手羽の酢醬油煮を見つけたとたん、保志の心の奥底から、俄か仕立てで滾々（こんこん）と湧き出していた勢いはみるみるとしぼんだ。
あんなやつかいな女でも、連れ添ったというには些いさかならず語弊があっても、古女房はまぎれもなく恋女房で……。レトルト基本の自分のために、ちゃんとメシを作ってくれる。

「……はは、その顔……。やっぱりなんだ。ホント、つまないやつ」

美耶子がキッチンの入り口で凍りついた保志を見て、にやつと笑った。

「どうせ……そんなことだろうと思ったわ……」

保志はまだ何も美耶子に言っていない。けれど、美耶子はくるりと保志に背中を向けると、なにやらやかしている。超絶貴重品のフレッシュ野菜を使ったマリネだ。いつそんな食材を調達したんだろつか、こいつは。

「その顔じゃあ、ジョリー・ロジャートツ捕まえるまで、延長……ですか。第三リストの三分の一なんてボランティア以下、自分で好んで奴隷の身分に甘んじるほど善人じゃないって言ってたのは、どの口かしらね」

美耶子がくつすりと笑った。

肩すかしを喰らったようで保志は、恐る恐る口にする。

「美耶子さん……なんで…そう？」

「何年付き合ってると思ってるのよ。一応退職のセンも見込んでたんだけど、あなたって結構、根に持つタイプだから」

「根に持つって、何よそれ」

美耶子は保志の悩んだ末の選択を、とうに見越していたような言い方をする。理解が得られるのは、嬉しいような、けれど彼女の手玉になったようで、やっぱりそれはそれで面白くないような……。保志に、どうせどうせといじけモードが入る。

「あなたに致死レベルダメージ与えたやつを、身柄確保すらできずにのさばらせてる状態で、素直に引退なんて、まあ、基本無理だろうとは思ってたのよ」

「お……怒りますか？」

もう一度美耶子がクルリと半回転した。

「第一の条件、第一期定年延長の五年間。それだけだからね。第二の条件、ややこしい細かい案件は、全部候補生に押しつけて、あなたはジョリー・ロジャーのやつをちゃんとトツ捕まえることに邁進すること。第三の条件、ほかの事件にこのこ首突っ込んで、別の野郎に殺された挙げ句に取り逃がしたりして、引退したくてもできないジレンマ事案を新たに抱え込まない。以上三点、それだけ約束してくれるなら……今回だけは許す」

それだけ言っ、美耶子は再度調理台に身体の正面を向けた。

「美耶子さん……。愛してる」

保志は、そそくさと料理のフィニッシュであるところの盛りつけに取りかかるうとした美耶子を、背後から抱きすくめる。持ってい

た菜箸が飛び、がちゃんと音を立ててボウルが調理台の上に落ちる。
「あー、はいはい、分かった分かった。愛されるのには飽きてますから、もういいって。いい？ あ・な・た。ちゃんと覚えておいてね、二度目はありませんから」

「うん、うん。ありがとう。美耶子さん、大好き」

調子のいい言葉を並べて、首といわず、肩といわず、キスの雨を降らせている保志を、ふふんという目で見て、美耶子はいった。

「4444、仕事だから帰るわ、よろしく。デイスマウント」

保志がその腕に抱きしめていた身体から、だらんというか、ガクンというか、ガツンというか、確かに一度、何かが抜けた。直後にビシッ何かが入る。

「ふふ〜ん、ろくちゃん、愛してるっ。きつとそう言ってくれると思ったよ」

美耶子がいなくなった脱け殻シンクロイド・ボディを、さっさとセレのやつが乗っ取ったのだろう。幾ら美耶子の容姿をしていても、こいつがセレである以上、キスしたり抱きしめたりする対象では断固有り得ない。

危険物から飛びのく様な勢いで保志はセレから距離をとった。

シンクロイドの可変筐体の表層を变形させるには、棺桶入りが当然必須だが、美耶子の形状のままでも、セレがこれをアバタロイドコントロールとして操作するのにはなんの不都合もない。あるとしたら、保志が感じる心理的抵抗感のみだ。

「オマルのホストに、三分の一適用申請送ったよ。今ちゃんと受理されたって戻ってきたから。向こうも、きつとろくちゃんがやめるもんかって思ってただろうね」

「こ、こらっ。なんで勝手に進める」

「いやだなあ、気が利くと言ってよ」

美耶子の顔で、息子の声で、たたかれる軽口は、保志の神経を思いきり逆撫でした。

「あ、今、美耶子さんから伝言」

いきなりセレがいった。

「何？」

美耶子の声になったセレが、美耶子の顔で微笑んだ。

「冷めないうちに、召し上がれ」

保志はどつと疲れて、椅子に尻を落とした。

5・セレのお遣い

保志にとって真夜中、GMT2時ちょうど。

執務室では当然ないキッチン兼ダイニングにも、モニターぐらいは当然ある。美耶子が盛りつけてくれたゆで卵と鶏手羽の酢醤油煮に舌鼓を打ちながら、バリっという食感が非常に楽しい生野菜のサラダを食う。こんな幸せな食卓は久しぶりだ。目の前に座っているセレが古女房の姿をしているのも、まあ、写真立てに飾った家族のポートレイトの贗沢版だと思えば、我慢できる。

「これ、どうしたの？」

「オイラ美耶子さんの指令で、昨日のろくちゃんおやすみタイムに、ちよこつと買物に行ったんだよ。料理時間短縮したいから、ちゃんと卵茹でて剥いとけて言われてたし。鶏も多分サバきたってたと思うよ。鶏と野菜だけじゃなくて、卵もちゃんと耐Gケースに入れたら大丈夫だったし」

「……ちよつと待て。セレ」

下品にも手掴みでかぶりついていた鶏手羽の、骨に付いていた肉片を舐めていた保志の口が止まった。

「何」

「一番近くのマトモなマーケットにちよつとつて、まさかあれを……お買物に使ったのか？」

「うん、使った」

セレがあっさり言うのに、保志は眉間に皺を寄せた。

「警邏車両を私用に使っていいのか？ 法の番人じゃないのかよ、4444は」

セレは聞きとがめた保志に取り合わず話を続ける。

「じゃないと、ろくちゃんが起きてくる前に帰って来られないじゃない。それだとサプライズにはならないし」

「こら、管理者のくせに、率先してルールを無視するな。あれは、官給品で、職務上の出勤以外に使っちゃならないことになってるだろうが」

「それを言うなら、この身体だってそうじゃん。固いこといわないの、どうせバレやしないし」

「セレ……。バッパーで飯食ってる人間サマを監督してるAIが、それいっちゃオシマイすぎると思わないわけ？」

「人間サマを監督してるだなんて、誤解を招くような言い方しなくてくれる？ オイラは至って誠実に、ろくちゃんの召使^{サバント}してるんだし」

どの口がそれを言うかと、保志は惘然とした表情になる。セレの軽口の勢いは尚も快調そのものだ。

「だって、いつてみれば4444と一緒にアレもぶっちゃけオイラだし。お買物いくのに車乗るのと一緒っーより、ここでろくちゃんがチャリころがして移動するっーより、遥かに敷居が低くて、オイラが走っていくのと同じだし」

「お買物に戦闘機でいくのは、絶対に異常だと思う」

飛閃^{ひせん}はその気になれば、小規模な後進国の二、三小隊程度なら蹴散らせるだけの性能があるし、その気がなくても人工建造物に十分な減速なしで近寄れば、それだけで壊滅的なダメージを与えられる。

歩く いや、飛閃^{やっ}の行動範囲からいって 飛ぶ凶器そのものなのだ。

「やだな、ただの缶詰だって使いようによっては凶器になるんだから、戦闘機だって置いとく分にはただのモノじゃん」

「……お前、ここんとこファジー運用過ぎるんじゃないか？ 妙な

ウイルスにハックられてないか？」

「いやだな、ろくちゃんならともかく、敬信^{けいしん}さんは優秀な技師だつてば。あの人のメンテに遺漏^{いろう}なんてあるわけないじゃん」

保志にしてみれば「ろくちゃんならともかく」という一文をはさまれるのは心外だ。どうしても力仕事が必要になったときに、一緒に宇宙を疾駆する、可愛い愛機を物理的にお世話しようとする、いつも全身全霊をかけて阻止しているのはセレであって、自分が整備業務に未熟なままなのは、怠惰^{たいと}なのではなく、経験する機会を奪われているからにほかならない。

それは、もちろんずーっと以前に、手入れしようと思ってスタビライザーをちよつと壊しそうになったことが最初だった記憶はある。けれど、飛閃^{ひせん}は基本的に重力圏につれていくつもりはないのだから（人型はとにかくこけやすい。ハメートル、四トン超過のブツを町中で転^こかさせるなんてことがあった日には、その後の対応が恐ろしすぎて想像もしたくない。直立している必要がないところにいる限り、あんなもなくなつていいじゃないか。因みに敬信^{けいしん}というのはオルマの職員で、宇宙建造物及び可動物メンテナンスのスペシヤリストの石動^{いすのぎ}の名前だ。調子が悪いときはもちろん駆けつけてもらうが、何もなくても定期点検にやってくる。

多分、4444もセレも、実際にマッシブな量の情報を並行分散同時処理できる賢いAIサマなのだから、現実の人間はアホすぎて見えるに決まつている。その中で石動は、例外的に彼らから頼りにされている数少ない人間で間違いない。

「あ、言わせてもらうけどね、ろくちゃん。食材の調達はれっきとしたオイラの職掌範囲なわけ。レトルトばつかで欠乏する微量元素類をサプリメントで足すのが俺^{わび}の単身赴任^{ソロフレイ}がスタンダードだけどさ、生鮮市場が近隣にある場合、そこに調達にいくことは、ろくちゃんの権利としてあるんだぜ……」

「あそこのどこが近場なんだよ」

「乗り物使って六時間で往復できるんだから、近いでしょ」

保志は絶句する。一番近くのマーケットといえば、イットリウム・ガーネットの産地、ニュー・イットルビーに違いない。あそこでは衛星イットルビアがテラフォーミング可能だったため、保志の受け持ち管区では、最も人口が密集している地域だ。

保志にとっては最強の味方である保安官事務所もちろんある。人口密度だけが田舎町なものの、イットルビアは洗練された都市計画がうまく機能している住みやすい町だ。

惑星ニュー・イッテルビーで採掘されるイットリウムというのは、液体窒素温度を超過する転移温度を持っている。もともと、高温といっても液体窒素の超低温に比べて高温というだけで、熱いわけではないのだが。

たまたま、それほど輸送コストの掛からない場所で銅とバリウムが採取できるため、人間の可住衛星イットルビアにそれらを集合させて加工するようになったのは、当然の成り行きであった。

イットリウム系銅酸化物高温超伝導体の生産は、もちろん边境の小さな地球もどきを、十分に潤っていて、なかなか文化華やかといった雰囲気の小洒落た町だ。

あそこまでの距離を考えると、ワープなんぞするほどでもないが、その時間で往復すると、中に生物がいたらひしゃげてぺちゃんこ確実。骨は碎けるだろうし、肉は引き剥がされ、数分もあれば立派にミンチ間違いないし。

可動官舎周りは、今のところなーんにもない空間にあるから、まあいいとして、減速せずに着地したら、はつきりいつてハメートルの隕石が、直撃するのと同じことだ。買物というより、宣戦布告な

しで核弾頭ぶち込むのと変わりない。総合司法庁オルマの管轄下にあるバツパーの移動艇で、植民地の街を壊滅させては始末書で済む問題じゃあない。

一応イットルビアに近付き過ぎる前にちゃんと減速するだろうか、それを勘定に入れば、道中をアレの推進能力のいっぱいいっぱいであつ飛ばしたことになるだろう。

「飛閃ひせんのエンジン焼き切れてねえか。だいいち、空にしちまったらエネチャージに時間掛かるだろう。エマーゼンシーコールあつたらどうする気だ？」

「オイラそんなにやわじゃないし、ちゃんとその辺の計算ぐらいできるもん」

「どーだか……。しゃーないな、一丁飛閃診てやるか……」

酢でさっぱり目に仕上がっていたとはいえ、手掴みにしていたチキンのせいで、ねとねと光っている指を下品に舐めながら席を立った。

セレは盛大に抗議をする。

「やめてよ。ろくちゃん、メカニクスの才能ゼロ以下なんだから。オイラに悪戯するなんて、やめてっ。酷いことしたらダメエ……っ」
言い方が微妙にエロいなあと保志はあきれて脱力しそうになった。

「お前は勝手に湧いて出た相棒だけど、飛閃はオレがオーダーした俺のマシンだ。幾らメインAIだからって、俺がいじるのにいちやもんつける資格はねえぞ」

「ろくちゃんが変なことしたら、それことエマーゼンシーコールに対応できなくなるってば。あんたは素直に、アバタロイドごっこしてるだけにしてよ」

セレが必死に口説こうとする。

飛閃^{ひせん}というのは、現場に出動要請が出たとき、保志が利用するための高速軽快艇である。当然保志は出動するときにそれに乗ることになるのだが、高速移動能力を重視して特注したため、アレが能力限界までの加速をすると、中身の人間は前述の通りミンチになってしまふという、致命的欠陥^{バトリール}を持っている。

散歩程度の速度で、警邏^{バトリール}しているときには、生身のまま乗ったりしないでもないが、あまり気密性にも信頼がおけない作りもしているし、突然の出撃……もとい、出動要請がきてフル加速が必要になった場合にフットワークが鈍る。そんなこんなで、生身で乗ることを想定してチョイスした飛閃を、結局保志は、基本的には乗らないでアレ自身をアバタロイドとして使うことが多い。

アバタロイドとして動くことが可能な飛閃。ということは、そう、飛閃は船型ではなく、人型なのだ。スリーサイズは残念ながら保志は把握していないが、身長^{タツバ}だけでいうなら約八メートルの巨体だ。子供のころの保志は、戦闘ロボットモノのアニメや3D実写映画が、男の子にありがちなことに大好きだった。

バッパーに着任したとき、利用可能な高速移動のための備品カタログの中に、ハメートルの巨体を持つロボットというか、パワードスーツというかといった、アレを見たとき、まったく迷わなかった。自分が乗るのはアレしかないと思った。

しかし、そういうものが好きなのに、実際保志はその中身にまで全く興味を持たなかった。

それに乗った自分が、どう颯爽とかっこよく行動するのか。悪人を退治し、あるいはとっつかまえ、ついでに自分も危機一髪で危ういところを逃れたりする。というようなのは妄想できても、そいつが飛ぶ原理そのものを知りたいとこれっぽっちも思わなかったという、ジェンダー的男女性差論は、やはり紋切り型に過ぎないよね、とでもいうような種類の機械オンチ。全高8・82メートル、重量、

4・14トンというものが持つ意味を、意思決定の段階で認知しきれていなかったのは、やはり、うっかり保志の落ち度といって過言でない。

型式番号：RZM-001F

メーカー：REISHIKI

ジェネレーター出力：2850kW（本体）

フライトユニット
1380kW＝4230kW

スラスター推力：52800kg

総スラスター数：47基

総ハードポイント数：12基

戦闘継続時間：最大出力時150分

通常稼働時600分

固定武装：頭部バルカン砲

オプション：

マシンガン／ハンドガン／ミサイルランチャー／フライトユニット（サブジェネレーター兼用、ミサイルポッド付）／バズーカ／ガトリング／ナイフ／ブレード／シールド／レーザーカービン／ヴァリアブルビームサーベル（カッター、トマホーク、ハチエット、ピック、サイズ兼用）

飛閃^{ひせん}の『スタート・ガイド・マニュアル』の製品仕様抜粋一覧に、もののしく並ぶ、それらの言葉や数値の意味を、なぜちゃんと想像しなかったのか。スペース・ワープ宇宙空間歪曲航法へ、通常高速飛行から移行^{シフト}するときの一瞬だけ達する光速。その速度に至るまでの加速に、やわな人間の体は耐えられない。

保志が任地^{にんち}にやってきたとき、その移動は人体には多大な損傷を与えるので当然、耐Gカプセルにつつまされて準冬眠状態^{ニア・コールド・スリープ}させられて、ただの荷物同然になって運ばれてきた。超高速飛行そのものはいまだに実現されていないが、もしそんなものが開発されていたら、任地^{こゝ}で覚醒したときには、家族はみんな数世紀も前に死滅しているという笑えない事態になる。

光速に限りなく近い通常高速飛行速度まで加速するのに場所を選ぶというだけで、亜空間利用が、実用化されたことで、そういう意味での超高速移動手段を用いる物語は、ロマンとして燦然^{さんぜん}と輝きつつも現実問題として陳腐化した。

もつとも、生きている人間で亜空間を目の当たりにした者は未だに誰もいない。亜空間へつながる速度まで生身のまま加速することは不可能だからだ。限りなく死体に近づくまで細胞を固めて、耐Gカプセルにぶっこんで、初めて亜空間移動航法による乗客^{パッセンジャー}に人はなれるのだ。

チンパンジーで成功していたとはいえ、初めて亜空間利用方式の宇宙空間歪曲航法での人類発生地太陽系（HRB）外への旅人となった、ロシアのルバノフ大佐は偉大だったといえよう。

まあ、一説によると、かのルバノフ大佐は、実質として狂気の時代を演出した独裁者だったらしいチュグーエフ大統領の暗殺に失敗して、その詰め腹を切らされたというのが本当らしい。人類初の有人亜空間トリップに成功したから英雄だが、失敗していれば闇に葬られていただろうと。

そして、ルバノフ大佐の覚醒に成功させ、再冬眠させて地球へと帰還させるという、あの宇宙開拓史上でも一際輝^{ひときわ}いている、栄光の旅行^{トリップ}のその時から、一貫して、考え想像できる人工知能（TAI^{タイ} II Thinkable artificial intelligence）は人類発生地^{トラペラー}外太陽系旅行者 実際に生まれたときに持

つた肉体のままその地に立つもの　の、使用人であり、支配者で
あり、友であつた。フレンド

理論的には可能だつたものの、受信者がいないために検証ができず、開発者が宣伝していた成功が疑問視されていた、亜空間通信（SSC=Sub-space communication）は、その亜空間をトンネルにして超遠距離にある発信機と受信機間のタイムラグを打ち消してしまうものだ。

未だに大気が邪魔をして、なかなか絶滅することができない、地球上ですら起こる通信のタイムラグを無くすSSCなしに、シンクロイド・システムはもちろん、アバタロイド・システムすら絵空事だつたはずだ。

話が飛閃から激しく脱線した。つまり、端的に言えば、人口過密域である人類発生宙域（HRB=Human race's birth place）を抜けるまでは使われる、宇宙空間歪曲航法搭載船の加速に耐えられないヤワな肉体の持ち主ごときに、飛閃の加速に付き合いきれるだけの丈夫さはないということだ。

仕様書の数値を見て、星は飛閃の力をフルに活用しようと思えば、生身では扱いきれないということに、なぜ気付かなかつたのだらう。

なんでアレがカタログに載っていたのか、保志はどうにも不思議でならない。とにかく、戦闘いつでも可能な凶悪装備。どう考えても司法の持ち物ではなく、軍など戦争屋がもつに相応しいラインナップ。あそこまでゴツく複雑な機械は、絶妙にどころか普通に制御するのさえ普通の人間にはまず無理に近いと思う。

現実的な転倒回避策として、運転者は運動制御AIに何度の方向にどれぐらいの速度で進みたいかなどを大雑把に口頭で指示して、細かいところは思い通りに動かなくても気にしないことにして任せ

てしまうという方法がある。

それからもう一つは、モーキャプ（モーション・キャプチャ）・システムを利用するやり方だ。モーキャプというのは、もともとはゲームに出てくるキャラクターの動きを人間っぽく見せるために開発された技術らしい。具体的にはモーキャプのステージで実際に動くことによつて、アバタロイドを実際に動かしているAIに再現してもらふという方法をとるわけだ。

実際はそんな形をしていることはあり得ないわけだが、モーキャプ・ステージの中央に立つと、球体の内側の全面がモニターになっているため、もし自分が飛閃だったならば見えているはずの風景の中心点に浮いているような不思議な感覚になる。モーキャプ・ステージの壁面は全方向ドレッドミルみたいになっているので、走ろうが飛ばうが自分に実感はあるものの、周りが動くだけで本人の位置は厳密に静止しているというほどではないにしろ、まったく移動しない。飛閃の目^{ひせん}でみた世界を見て、飛閃^{ひせん}が感じる風圧を宇宙空間にはそんなものはないのだが 感じるができる。

それは操作者が我に返つて己がしていることの虚しさに絶望しないようにするためという親切心からではなく、アバタロイド・システム自体がゲームとして発展してきた技術だから、そもそも持っている機能なのだ。標準で搭載されている、動いている人間が、実際に運動した時に得られる快感に近い数値を、感覚器官にフィードバックさせるシステム。それを人型警邏車両に転用するときに、わざわざ金銭を余分にかけてまで、その機能を削ることに必要を見いだす様な者がいなかったと……そういうことだろう。

それにしても飛閃をお買い物に使うというのは、4444は何を考えているんだろうか。データを引っ張ってきたり、高速で計算し

たりが専業のAIならともかく、多分妄想すら可能なTAIは、人間サマなみに狂うということもありなのだろうか。

現状として、我が命の生殺与奪『権』はなくても、『力』は持っている。宇宙で生き物としてはソロ・プレイをしている保志には、文字通り神様に等しい。ちょっとばかり天真爛漫すぎるガキんちよのようなセレの笑顔に、保志はどうしても背中に寒けを禁じ得なかつたりするのだ。

そんな保志に頓着せず、セレが楽しそくに言葉を続けた。

「さてと、ろくちゃん、はやく三分の一を、三分の三にするための二つを選んじゃおうよ」

腕組みをして、難しげに眉間にシワを寄せて、保志はセレに釘をさした。

「人間サマをカウントするときに使う数助詞は、『人』^ニをチョイスするように」

「ニンって、それって、やっぱり忍耐のニンだよねえ……？」

相変わらず美耶子のままで、息子の声でからりと笑うセレを見ながら、本当に総合^{オムル}司法庁のTAIは真つ当なんだろうかと、日に日に濃厚になっていく疑問に、またしても保志は囚われるのであった。

6・いい加減な選択

「時間ないんだから。今日中に二人の人選しなきゃならないんだから、どう考えても他の予定キャンセルだよな」

見なくても分かっている癖に、美耶子ごっこ中のセレが、プライベート・スペースのキッチンにあるモニターを見る。どうせ映しているのは自分だろうが……そんな動作に保志はついっかかり茶々入れしてみたくなる。

歌って、踊れるだけでなく、コミュニケーションのためのおしゃべりぐらいできなければT A Iの名が廃ると考えている節があるセレに、厭味をぶつけるということは、少なく見積もっても、その十倍のごたくを聞かされることを意味する。

「そんなに時間はかかなくていいさ。ドタキャンなんかしたら、あの難物の宮崎保安官なんか、また留置所の空きがないとか抜かして被疑者拘留受け入れ拒否されるぞ。あれは時間どおり行かねーと」

T O D Oリストの筆頭に、『宮崎ペット姦淫事案』がある。起こったばかりの殺人事件で現場検証が必要などという、たまにお祭りのように（こういう言い方は不謹慎なのだけれど）起こる重大事件があるときは別として、普段、保志を悩ませる、膨大な数の少額訴訟事件については、どうにも人がいい保安官区で起こっている事件より、へそを曲げさせてはならない保安管区事件を優先してしまう。まったく宮崎のところの町は小さくて平和で基本暇なんだから、提訴するまえに「なあなあ解決」に持ち込んでもらいたいものだ。

テラフォーミングに成功したイトルビアで、もちろん金を持っているのはレアアースがらみの連中だけれど、基本的にフレッシュ

な食材に飢えている入植者にとっては、現地で飼育されている乳牛から搾られる牛乳や、屠^{ほふ}られただけで冷凍などされていない肉、朝まで畑で育っていたバリバリ新鮮な野菜など、それこそぼったくろうと思えば、いくら吹っ掛けても、需要はあるのだ。基本、レアアース産業などといった大企業の子飼いで、こんなところまでやってくる連中の給料は、びっくりするぐらいのレベルだ。

そんなことで畜産業従事者や野菜農家の連中は、採掘屋連中と同じく、金銭的には豊かな連中がそろっている。金があつて、娯楽が少ない。仕事は順調ときたら、ご近所さまでチマチマ争うのが、ほぼ娯楽のレベルでまかり通っている。

やっていることは地球でありふれているのと同じようなのに（むしろ天候がコントロールされている分、地球よりロースキルでもやっていけるに違いない）伝統的な分類でいうところの第一次産業従事者は、困ったことに全然牧歌的でない。

基本的にこんな仕事を選ぶぐらいだから、元々の保志は静寂を好む。かつてイメージだけで特例総合司法官をとらえていたとき、^{フロンティア}保志にはそれが宇宙時代の開拓最前線で、黙々と少ない住民相手に司法という概念そのものを統^すべる者であることを自らに課していく、ストイックな職業に見えた。

ところがなつてみたとなつてみたで、バッパーは意外なまでに忙しい。三分の一の給料で、前任者にパラサイトしていたころ、そんな事案を保志は見せられた記憶があまりない。絶対に、自分のこういう嗜好を把握した上で、レアアース採掘権の争いだとか、そういう案件を中心にお試した。

が、前任者が引退したとたん、こういう少額訴訟事件に追いかけて回され始めたのだ。こういう事案があるのは知っていたけれど、どうにも騙されたという被害者意識が保志から抜けていかない。

人口密度稀少域にある少しまとまった規模の街があれば、必ずいる保安官は手が足りないからかなんだかしらないけれど、こっちが一人なのに遠慮もせずに、すぐ出動要請をかましてくる。

今日のTODORIST筆頭の事件なんか、ちゃっちゃと仲裁してしまえばいいような、下らない『争いごと』なのに、ここでどつちかの恨みを買ったら、季節ごとのフレッシュ肉フレスコミートなどの付け届けが半分減るから、八方美人でいようと、そういう魂胆に違いない。

それは保志だって、ペットは家族だという気持ちは認める。辺境なんだから温かいナマモノレアは誰だって好きだ。けれど強姦がそもそも成り立たない犬がレイプされたと訴えるのも訳分らないが、お前のところのアバズレが誘惑したんだという反訴原告の理論飛躍にも付いていけない。本人がいくら溺愛している息子ちゃんだろうが、ペットはしょせんペットだ。第一、犬にしたって出逢う機会の少ないところに暮らしてるんだから、自由恋愛ぐらいで目くじら立ててなくなつていいじゃないか。ましてや訴訟にするのはどうかと思う。……まさかバター塗ってるってわけでもあるまいし。

定年延長を決めて、薄給取りに降格する決意をしたからには、絶対、付け届けシーズンには、宮崎のところに夕飯時に出掛けようと心の底から保志は思った。フレッシュミートを山盛りサラダでがつつり食べれば、元氣は沸いて来る。無菌パックではなく、おばさん（宮崎夫人）に手で握ってもらった握りたてのおにぎりにありつければ、もう言うことはない。いつ仕事で死んでも成仏してやる。

「保志司法官。今日のリスト筆頭の、宮崎保安官のは、ではどうします？　行くまでのこともないですよね」

壁面に埋まっているスピーカーからは、落ち着いた言葉づかいの4444の声が聞こえて来る。まあ、仕事の話にセレの調子でしゃべられてはたまらないから、これはこれでいいのだけれど、横にい

る軽口三昧のセレと、本当は一緒のものだと思つと、なんとなく馬鹿にされている気がして来る。

4444が聞いて来るのは、実際に行くのか、モニターで裁判するか、どちらかということだ。しつこいが、保志は飛閃と違つ。移動に三時間もかけたところで、ミンチまちがいなし。宮崎保安官事務所の備品には高価なシンクロイド端末はないから、シンクロイドではなくアバタドライブにするかどうかということだろう。

両者の違いは簡単。モニター裁判なら、宮崎を呼びつけるのと気分的に等しいが、アバタドライブでいくなら、保志が出向いたと受け取ってもらえるということだ。

「どーせ、いつもの趣味の訴訟だろう？ モニター裁判なんかにしたら、じいさまたち、絶対どっちかへソ曲げちまうに決まつてる。アバタドライブでいくよ。身体用意しといてももらえるように宮崎保安官に連絡してくれ」

「了解しました」

4444は無駄口をきかないから、まあ、話は簡単に済む。

真面目にじいさまたちの元気な裁判ごっこに付き合おうという、感心な心の動きからではさらさらなく、ここいらでマメなところを宮崎保安官にアピールして、付け届けシーズンの夕飯パラサイト計画を保志が練っていることなど、想像もしてないだろう。それに、4444ならば、たとえ知ったとしても、セレと違つてつつこみなどを入れたりしてこない。

「ろくちやゝん。だからさあ、早く、犠牲者二人選ぼうよつ。本当に、宮崎さんとこの事件なんかの方が、新人さんに任せるには丁度なのに」

「バツパー志願者なんて、どーせ、どっか変わってるんだから、そんなんばかり押しつけたら、違約金払ってでも逃げるって言われちまうよ」

孤独と静寂を愛していたはずの保志には、来し方を振り返ってみて矯めつ眇めつしてみても、セレの賑やかさが、こんな仕事をやってみようという変わり者に受けるとはとても思えない。

「セレ……、お前、最初のうちは絶対に顔出すなよ」

「……なんでさ？」

「獲物が逃げちまうだろ？ 二人の新人がいなきゃ、三分の一は適用されないんだからさ、ここはジョリー・ロジャーがお出ましになるまでは慎重にいかねーと」

「あつ、ひつどーい。オイラが出ると、新人さんが逃げるって、そういう意味？」

くるりとセレ 美耶子のままだ が、背を向ける。そのしぐさに、つい保志は笑った。

「まあ、すねるなって。セレ。いつまでになるか分からないけど、もうちよつとだけ、付き合えや……相棒。延長戦開始だ」

くるつとセレが体をもう一度半回転させた。

「ありがとう。だーいすき、ろくちゃん」

保志の首にだきつきてキスをしてくる。冗談ではない。確かに先程その体と濃厚なスキンシップを楽しんだが、中身がセレでは話が違う。うへえとばかりに逃げようとする、馬鹿力がかつとりと保志を確保した。そう、あのときは美耶子本体と同等レベルの力しかないが、セレのアバタロイドなら、戦闘特化型ぐらいの基本性能がある。この上なく頑丈で、パワーもある。見掛けがこんなんでも、これはあくまでも美耶子じゃなくて、どこまでもSELEN4444なのだから。

「ああ、なんで逃げるのさ。可愛い美耶子さんなのに」

割れ鍋、閉じ蓋。本当に、あんな強烈なお人柄なのに、かつての保志はあれを迂闊^{うかつ}にも可愛いと思ってしまったのだ。壁のシミだとか、そんなものが例えば一度顔に見えてしまったら、その後、何度見ても顔に見えるように、可愛いと思ってしまった呪いは、執拗に保志を支配している。けれど、中年男としては、こういうしかあるまい。

「美耶子のどこが可愛いんだ」

「……いつけるよ」

今、美耶子の機嫌を損ねるようなことはしたくない保志は即座に言った。

「冗談じゃない、勘弁してくれ」

本当に、セレがどこまで笑える冗談と、怒らせる冗談の違いを理解しているのか分からない以上、止めておくのが良策というものだ。

美耶子に変なことを伝えられて、折角得られた許可が白紙撤回されてはたまらない。保志は話題を変えるべくセレに命令した。

「三分の一リストに登録されている人間のデータを、見せてくれ」

「アイサー」

セレの返事は早かった。

* * *

「これでいい」

「へ……？」

セレがT A Iのくせに間抜けた声を出す。執務室のメインモニターに一番先にリストの一番が示されようとする刹那ほど前、保志が画面も見ずに決定したからだ。

直後、画面から立体映像が飛び出してきて、保志の目の前に立った。

デカい……。

それが保志が、「あいあい」こと相澤亜衣里の等身映像を、目の当たりにしたときの、一番最初の感想だった。

混血がそこそこ進んでいるとはいえ、日本人はモンゴロイドの割合がそうは言っても高い。ごく平均的なところに位置する保志は百七十センチ台のだいたい真ん中辺り。そんなわけで外人ならともかく、同国籍の女の子を見上げることは滅多にない。精々同じぐらいで、だいたいが低い。けれど、この第三種三分の一リストの「あいうえお順」の一番前、イロハで言うなら「イの一番」に相当する場所にデータがあつた相澤は、保志より多分十センチは確実に高い。幅もなよとした細いところが全く感じられない。浅黒いのは、人種的なものというより、日照時間の関係だろうと思われる。

「ろくちゃん……。女の子……だよ？」

「我が職場にも潤いを……、リストに入ってるってことは、直属上司のお墨付きだ。能力的には問題ないんじゃないかな」

「……特殊急襲部隊、S A T（「Special Assault Team」）、の制圧班だつて。へえあ、女の子なのに」

「T A Iの癖に、ジェンダー抵触発言していいのか？」

「今はろくちゃんしかいないじゃん。あんたがチクらなきゃ、問題

ないって。うわっ、すげーっ、この子、よく死んでるなあ、二十四回も死んでるよ……。すんげえタフ」

当然、三面画面びつちりに表示された、相澤のプロフィールを保志が読むスピードは、表示した本人であるところのセレの速度に追いつくものではない。老眼が進みつつある自覚がある保志は、そもそも読もうとすらしていない。

名前は太古（？）の昔、つまり人類の活動範囲がHRRB限定だったところから、変わっていないSAT。言わずと知れた、警察の中でも特別凶悪な犯罪に対抗するべく存在する部隊だ。

凶悪というのは、ハイジャックや、重要施設への立て籠もり、要人誘拐など、相手が銃火器を大量に所持していることが見込まれる場合であり、当然、命は常に危険にさらされ、死と隣り合わせにある部隊だ。

もちろん、そんな凶悪犯も、問答無用で撃ち殺すなんていうのは日本人としてありえない。そんなこんなで採用されたのが、シンクロイド・システムである。たとえ相手が凶悪犯であろうとも、その人権を人質の命同様守ることを優先するのが、日本気質というやつである。

保志は阿呆らしいと思うけれど、武装した相手をできるだけ殺さない様にといいのは、それは現場を知らないやつたわごとの戯言であり、下手をすると「死ね」と言っているのに等しい。けれど、日本という国は、「一人の命は地球より重いという建前を、蔑ろにしてはいけない」という無茶がまかり通る国なのだ。ショットガンだのマシンガンだの、火炎放射器を振り回している人間すらも、問答無用で射殺してはいけない。できるだけ生かしたまま制圧しろというのが、SATの制圧班に与えられている任務である。一方で、隊員をそう簡単に殺されてはならないのも、また当然のことである。

そういう必要から、活動現場と遠距離というわけではないが、S

A Tでは、シンクロイド・システムが割と早い段階で採用された。

四つ裂きに一度されただけで、その痛みと恨みを忘れることができない保志にとって、現場で殺された回数が二十回を越えているというのは、信じられない。そこまでいくとタフというより無神経だ。シンクロイドの感覚器は、シンクロイドの感覚器が受けた刺激は全て脳味噌に本体が経験したことからフィードバックされるのだ。

もちろん、シンクロイドは、実際の衝撃を本体に加えるわけではないから、保志のように四つ裂きされようが、脳漿をぶちまけながら、首から上を失くそうが、死にはしない。死にはしないけれど

何というのだろう　とにかく、不快。

何せ、脳味噌は感じてしまった痛みを、そう簡単には忘れてくれないのだ。もちろん、痛みは原因さえ快癒すれば、感覚として再現し辛いものだというのは、当然なのだけれど、知死レベルの痛みを受けたら、心の方のダメージが大きく、保志の経験では三週間は心が動けない　そんなイメージがある。

「いくつ？」

「二十八。だいたい、女の子じゃなくても、そろそろ制圧班卒業していく年齢だね」

何を聞いても、セレの場合、ひと言、ふた言余分に情報が返ってくる。なるほど、セレの過剰なおしゃべりは、情報収集にことさらマメでない、保志に特化した仕様と言えるかもしれない。

「……現場で飛び回りたいというのが、バッパーへの志望動機か？」

保志は腕組みをする。とにかく、余程ずば抜けて適正が認められたいとしても、新卒でS A T配備はありえない。だいたいが機動隊、それも銃器対策部隊辺りで何年かやっていたものが、志願して、適正を認められたものが入隊するのが普通だ。

とすると、まあ、少なく見積もって、この相澤亜衣里は、二十三、四でS A T入りして約四年で二十四回死んでいることになる。単純計算で見積もって、一年に六回、つまり二カ月に一度は必ず死んでいることになり、これはタフというより懲りないからこそできているということだろう。

現実問題として、凶悪犯でも、やはり殺人に対する禁忌みたいなものは、それでも一応あったのだろう。その証拠に、シンクロイド導入を境に、捕縛対象者の銃火器使用率は、跳ね上がったという。もっとも、突入する方も、どうせ本体は死なないのだからと、自分の安全確保より人質の救出などを優先する風潮が強くなっているに違いない。そうでなければ、このS A Tの突撃担当者アタッカーの、シンクロイド・ライディング中の死亡回数は普通でない。

「あ……」

セレが突然素っ頓狂な声をあげた。

「どうした？」

一応、T A Iだろうが何だろうが同僚だ。

「……二十五回目。本当によく死ぬみたいよ、このおねえさん。オイラ、いちおうこのボディ愛着あるからさ、そんなに簡単に壊されちゃうといやだなあ」

一応というか、なんというか。職務上の必要から、4 4 4 4はオマルのメインと亜空間通信でリアルタイムに同期している。いつてみれば、オマルのメインは積極的に自分から動いたりしないし、無口に徹しているが、事実上、4 4 4 4はオマル・メインのシンクロイドみたいなものかもしれない。その4 4 4 4のぶっちゃけ派出所みたいなセレは、その気になればオマル・メインに思考させることが可能なのだ。

多分今4444は、相澤亜衣里に関してのオマル・メインの検索機能をフル活用してるのだろう。

相澤が所属している日本の東京にあるSATのメイン・コンピュータも亜空間通信機能を使って、リアルタイムでオマル・メインに同期している。ということは、今相澤亜衣里は今この瞬間、知死レベルダメージを受け、ミッションに参加しているものとしては、行動不能になったということだ。

単身任務が当然の保志にしてみれば、自分が死ぬということは、要救助者を救援できる能力が奪われたということで、決定的な敗北だ。SATはチームプレイだから、一人や二人、盾になって死んだところでミッションはその瞬間にFailureというわけじゃないんだろうけど、バツパー修行するなら、死にやすい体質をどうにかして改善せねばなるまい。

「愛着って」

何げなくスルーしそびれて、ひと言セレに言い返してしまった。

「……なんども、なんども……ろくちゃんに抱かれて、いかされたあ、この身体あ」

保志の身体から力が抜けそうになる。セレが突然に腰をくねらせて踊り始めたので、保志は心底、倒れなくなった。

「ド阿呆がつ。踊ってる場合か！」

俺が抱いたのは美耶子であって 断じておめーなんかじゃねえつ と、そういう叫びが保志の頭骨内にこだましていた。だいたい、あのどら息子ならともかく、美耶子は断じてそんな下品なダンスはしない。

「あ、でも、この子の質量だと、オイラの身体と共有は無理か。ちよつと素材の量、足りないや」

「サイズ？ うちの備品にあっ たっけ」

「ない。なんでか知らないけど、ろくちゃんがこの子がいいなら、

身体特注しなきゃねえ。今日日、^{きょうじつ}予算を使い切るのは趣味じゃないんだけどな。メインに頭悪いって言われちゃうし」

上は湯水のように使っても、官僚以下公務員には、血税の一滴を大切にするように指導が徹底される。予算は必要に応じて割り振られるが、それを使い切るのは能力的にどうよと言われるのが、世知辛い今日日^{きょうじつ}のこととて、4444も予算投入にはいちいちウルサイ。

計算機片手に家計簿をつけている、一般的なイメージの女房みたいな（美耶子は高額収入の自営業者だから、申告は税理士任せだ）4444が、^{ラージ}Lサイズのシンクロイド・ボディの新規購入に積極的になれないでいるのを見ると、保志はむらむらと逆らってみたくなってきた。保志も、趣味の訴訟オヤジどもと、実のところそう変わりはない。

「今まで、随分さやかに生活してて、累計余剰予算は随分溜まってるだろ？ 天下の三分の一のためなら却下なんて、ありえないだろう」

「あ、オイラのかっこいいろくちゃんが、予算使い切れ型のださい中年公務員になりさがっちゃってるよ。本当に、定年ぐらいで、社会から追い出される方がいいのかもね」

「ぬかしてるよ」

セレが伸びをした。

「少ない予算でやってるんだから、そんなに簡単にボディ壊されても困るけど、まあ、SATじゃないんだから、そもそもそんなに死なないか。ろくちゃんだって、まだ三回しか死んでないし。まあ、相澤さんが辞退してくれるように祈ってよう」

「ったく、おまえらって、本当に……。まあ、考えてみる。毎日ライドするってことは、慣れてる方が新しい環境にいくのに負担は少ないだろ」

「新しい環境でびびるようなヤツにバッパーがでいいのかよ、ろく

ちゃん」

保志は思う。只でさえ、こいつらの方がストック型の思考能力も演算処理系の思考も断然上なのだ。その上、考え、思い、想像させようと思ったところが、もしかしたら人類史上、決定的な歴史的ミステイクだったんじゃない？

「とにかく、俺は一人選んだ。もう人は、セレおまえがきめろよ」

「えーっ、オイラが？」

「俺が予算使ったから、おまえは自分と身体共有できるサイズの人間にしとけよ。4444は二台もシンクロイド受信器調達する気はないだろ？」

「……うん」

セレが自分が人間を選ぶということに戸惑ってる様な、複雑な表情になる。保志は心の底から思った。それを美耶子の顔でやられると、うっかり抱きそうになるから、さっさといつものものに戻ってほしいと。

保志は本人が希望していて、直属の上司が推薦している人間だけが第三種三分の一希望者リストに載ってきているのを知っているの、正直、そんなのだれでも同じだと思っている。データをどれほど吟味しても、直接会ったときの直感が一番人間にとって分かりやすい。ぱつとみて、「ああ駄目だ」と思った人間とは、何とかうまくやっていくのが精いっぱい、いいな」と思った人間とは付き合いやすい。もちろん、付き合っていくうちに印象がガラッと変わるというパターンもあるけれど、まあ、そっちは例外だ。

会ってみる前に、どれほどデータとにらめっこしても、それは時間の無駄というものだ。面接してから決定できるから、会ってみて駄目だったら、次を試してみればいい。とにかく、三分の一条例の適用を申請した以上、今日が終わるまでにオマルに申告しなければ

いけないのは、とりあえずの候補者二名を選ぶだけでいいのだ。

「とにかく、適当に選んで決めて、後は会って駄目だったら対処してくしかねーだろ。とにかく二人のうちどっちかが、バッパーとして一人立ちすることになったら、多分どっちかとは、おまえが付き合っていくことになるんだから」

セレが小さくため息をついた。

「……オイラは……ろくちゃんがいいのにな……」

それを保志は聞こえないふりをした。年をとっていくのは生き物の逃れられない運命だ。出会った人を見送っていくのがT A Iとして生まれたしまった以上、セレの運命だ。忘れっぱさと無縁のやつらにはつらいだろうが、やつはやつらの運命を生きる義務がある。胸の内で保志は一人嘔^{うぶ}いた。

だあれが甘やかしてなんかやるもんか。

7・棺桶は宅配便で

まぶしい……。

棺桶の蓋が開けられるとゆっくりと覚醒感がやってくる。体中が痛いのは、脳味噌が痛がっているだけで、自分が痛いわけではない。

相澤亜衣里は、吹き飛ばされてなくなったはずの手を、拳を握り込み、掌を開くことで無理矢理、脳味噌に思い出させてやる。動く以上はあるのだという、強烈なメッセージ。

そもそも、脳味噌にそこにあることを思い出してもらわなければならぬ。今日は、至近距離から頭に被弾した。感覚としては多分即死。じわじわと死んだときが、やっぱり起きたときに最低の最低で、今日のような即死の場合、強烈な痛みや死んだ自覚が脳味噌にない方が、自分に帰りやすいことに気が付いて以降、痛いのキライでナマゴロシが大嫌いな彼女は、積極的に「弾除け」ポジションを買って出ている。

頭の悪い男どもは、亜衣里の蛮勇を信じられないと笑うが、半分吹っ飛ばされて、生還してくる連中の方が、絶対脳味噌が傷ついてるはずだと確信がある。

その証拠に、今日だって、即死前に吹っ飛ばされた右手の方が、有ることを思い出すのに苦労するではないか。

棺桶を覗き込んできているミッシェン・サポーターの金城のあきれ顔がぼんやりと見えた。これって、ドラキュラが覚醒するところみたいで厭だよねア　というのが、彼女のホンネである。

* * *

どちらかというと、棺桶からは、ナイス・ボディのイケメンの王子様のキスで、白雪姫モードが希望なのだが、小学校のときから群を抜いて体格に恵まれていた彼女は、学芸会でお姫様をやったことは一度もない。

亜衣里とて、生まれた直後から象だった訳ではない。健康に恵まれたぶくぶくと可愛らしく太った幼女時代は、ママが絵本を読んでもくれるのが大好きだった。当然のようにお話に出でくるキャラクタ―で自分をかぶらせるのはお姫様だった。そう、これでも、ずーっとちっちゃい頃から、お姫様にあこがれているのだ。

けれど、心外なことに健康優良が行き過ぎて、幼稚園のころは既に同学年の一番大きな子より頭一つ大きかった。いわゆる相撲取りの小学校時代の集合写真のようなアレだ。

小学校の修学旅行の集合写真では、隣に立っていた担任の女教師よりでかかった。

そのころのママは「女の子は成長が早いから、そのうちみんなに追いつかれて同じぐらいになるわよ」と、言っていた。それを無邪気に信じていたけれど、その期待はずーっと裏切られ続けた。高校で百八十五を越えた辺りで成長はようやく止まってくれたが、やや遅きに失した感はある。

高校時代に所属していた演劇部では、足りない男手を補うための男役がいつもで、お姫様だっこされるどころか、軟弱な男より亜衣里に抱かれないという我が儘な友人の願いをかなえて、カーテンコールのときには、彼女をお姫様抱っこしてやった記憶である。

あの年頃の女の子には、ナマモノの男はちよつと濃すぎるのか、

女子校でもなかったのに、フアンクラブまで作られてしまったのは残念すぎる青春だった。

大道具の男の子に、高い場所に据えつけるモノを押さえる係として指名されつづけ、女の子らしさを宣伝するために身長を聞かれたときには五センチ以上さばを読んで、百八十三センチと答えることにしているが、まあ、みんな百八十超過という情報までで亜衣里の大きさに納得してしまうのか、その端数のこだわりにもだれも気付いてくれない。

自分で言うのもなんだけれど、運動神経も抜群だった。軟弱な文化部に所属していながら、運動会で走っては、陸上の短距離のランナーを蹴散らして悔しがらせ、球技大会ではバスケット部の女子でできるやつはだれもいなかったダンクシュートを叩き込んで格の違いを見せつけた。もちろんバレーボールなど、甘いブロックの上からスパイクを叩き込むなど、さして難しいことではなかった。

けれど三つ子の魂百まで。笑われるのが厭さに大きな声で言ったことはないが、お姫様になりたいという要求は、現実に遠ければ遠いゆえにか、とてつもなく強くなっている。亜衣里は思う。なんてことだろう……と。

忘れもしない高校のとき。乙女ゴコロをいつもやさしくすぐつてくれる、あこがれの先輩が、亜衣里にもいた。どうせお姫様役がまわってくるはずもないのに、彼女が演劇部なんかに入っただけには、その先輩が演劇部の部長だったからだ。

彼が卒業していくとき、思い切ってデートを申し込んだ。

彼のひと言がこうだった。

「友達としても、男役の後輩としても、亜衣里のことは好きだけど、

お姫様だっ　こができるサイズの女の子以外と付き合う気はないんだ。

ー

亜衣里は悔しくて、一晚中枕を濡らして泣きつづけ、乙女ゴコロに決心したのだ。自分は絶対に、自分をお姫様だっこしてバージンロードを歩く様な男を捕まえてみせると。

非力自慢をするようなタラな男は絶滅してしまえ……。だがしかし、世の中、タラばかりだった。亜衣里を抱き上げようなんていう、酔狂に挑戦しようとする男がまずいない。

そこで、だれもが行くからというほどの理由で行った大学を追い出される年頃、つまり就職適齢期に差しかかったとき、亜衣里は、体育会系の男がわんさか生息していそうなところにしようと、至極単純に考えた。警察とかガードマン系と、自衛隊系しか思いつかなかったのは、ファンタジー読みの彼女の偏った読書遍歴の帰結だったといって過言でない。

自衛隊と警察を天秤にかけて警察を選んだのは、土砂崩れ災害が多い亜衣里の故郷では、自衛官は正義の闘うヒーローというより、土砂崩れ災害のたのもしい助っ人というイメージが一番濃かったからだ。北海道の友達も言っていた。「自衛隊って雪祭のためにいるんじゃないの？」と。どうせなら悪漢を蹴散らす様な種類の男がいではないか。

しかし亜衣里は知らなかった。警察というところは、結局男尊女卑の考えがいつまでもベースにある男職場であって、亜衣里のような数字的や出す結果が、男に有無をいわさぬレベルの女には、とことん冷たい職場だった。

婦人警官仲間には、いつものように亜衣里のシンパともいうべきファンクラブを結成され、男からはさっさと嫁にいかせたいが、あれを片づけるのは至難の技だと、そこまで厭味を露骨に言われる。

おとり捜査でも、そこまでデカイと犯人を警戒させてしまうからとバックアップに回された。

ただ、押し出しがよく、頭もそこそこ切れ、身体操作能力が抜群の女というのが貴重だと、国賓のファーストレディの身辺警護など、女でありつつ、ゴリラであることを要求されるポジションに、いつの間にか押しやられてしまっていた。

そう、亜衣里はセキュリティ・ポリス出なのだ。機動隊出身者が多い特殊急襲部隊（SAT）の中で、SP出の亜衣里は異色といえるだろう。SP時代の亜衣里は、少数精鋭の貴重な女性戦力として、先着警護部隊（SAP）ではなく、ばりばりの近接保護部隊だった。もちろん、SPに選出されるということは、柔道は三段以上、射撃上級以上は最低レベルである。基本真面目な彼女は、要警護者と普通に意思疎通ができるようにと、激務にあつたにも関わらず、英語、フランス語、スペイン語、アラビア語、中国語の日常会話をマスターしている。

SPというのは、不文律だが容姿端麗であることも確かに条件の一つとされている。そういうわけで、亜衣里の同僚には、マッチョなイケメンは掃いて捨てるほどいた。ただし、そのだれもがだれも、亜衣里を恋愛対象とみなしてくれなかったという……。

どうやら男というものには、プライドとやらいふものがあるらしい。格闘訓練でも滅多な覚悟では制することができず、射撃の腕もオリンピック級、勉強熱心でつねに上昇志向の亜衣里のような女はそもそも恋愛の対象外だったらしいのだ。また、激務である彼らは現実に配偶者選びをする年頃になると、官舎で夫の帰りを待つ様な、専業の奥さんを選ぶやつが多すぎた。

激務は激務だったが、労働者の権利が過剰に保障されている現代において、二十四時間仕事に拘束されるわけではない。恋人もいず、結婚も遠い。就職してからの仕事の関係で、大学までの友人たちとは距離があいてしまったし、亜衣里は、暇なついでに勉強を熱心に

するぐらいしか暇つぶしがなく、二種司法試験まで取ってしまった。亜衣里は、ステキな王子様に愛を告白される夢をずーっと持っているにもかかわらず、ステキでない野郎すらもてたことがない、人生イコール彼氏居ない歴鋭意更新中であつた。

亜衣里は、鏡の中の自分を見る。別に特別に人間の範疇からはみ出した造作とも思えない。デカイだけなのに、人生は不公平だと、ボヤきの一つもため息と共に吐き出したくなる。

そんな亜衣里が上司の残留依頼を蹴つてSATに志願したのは、男漁りが目的ではない。SPというものは警護対象が男性ばかりとは限らないから、女性も少ないがそれなりにいる。身長百八十前後で、格闘技の達人であり、銃火器の扱いに長け、法律や政治、国際情勢について存分に語れる、能力的に対等な友人というものを、彼女はSPになって初めて得た。

その一番の親友だつた八木透子やぎとうこが、三年前、自爆テロを阻止しようとして爆死した。そのとき、彼女は心からテロリストというものを根絶したいと思つた。

要人というものは、本当に社会を守ってくれるのだろうか？

そんな疑問に捕らわれたら、SPなんてやってられるものではない。SPは自分から攻撃することはない。悪さをしているやつを叩きのめすこともしない。飽くまでも要人の命を守るためにしか働けない。そんな立場に我慢ができなかった。我慢ができなければ、我慢しないというのが亜衣里の基本的性格で、だから彼女はSAT勤務を勝ち取るべく、猛然と上に働きかけた。飽くまでも彼女は行動する人なのだった。

＊ ＊ ＊

「金城さん、人質は？」

言葉がすんなり出て来るということは、相澤の脳味噌が生きていることをちゃんと把握しているということだ。並の隊員なら、死んだ直後にこうはいかない。金城は苦笑する。

「あいあいがルート確保してくれたから、何とかね……大丈夫？
気分は？」

金城の役所であるSSS、SATサポート・スタッフというのは、SAT自体の効果的な運用を目的とするだけでなく、隊員の受傷事故防止にも厳しく目配りをするというものだ。シンクロライドしてのこととはいえ、よく死ぬことで有名なあいあいは、金城にとって常に監視の対象だ。

ちなみに「あいあい」というのは、今の部署で採用された彼女の愛称ではない。アイザワでアイリであいあい。その単純な呼び名でずっと呼ばれてきた。

「アイアイ」という童謡がある。サルのアイアイを歌ったもので、幼いころ彼女は自分のことのように、その歌が大好きだった。

ある日、アイアイを凶鑑で見、ショックを受けた。みごとにぐらい可愛くなかったのだ。お目目が丸くて、尻尾がながいのは歌の通りだったけれど、そういうば「可愛い」などとはあの歌はひと言も言っていないかった。

あいあいというのは、自分に合っている渾名だと亜衣里は思う。
齧齒類だと思えば可愛いけれど、サルだと思つとびっくりするよう
な外見。あいあいも闘う人間だと分類すればみられるはずだが、可

愛い女の子になろうとすれば、周りをビックリさせる。

ちなみに、SATの忘年会で、「この際だからはじめて、好きな格好をしてこい」といわれたとき、ハイヒールを履いて、パニエを仕込んだ膨らませたスカートをはいて、ひらひらのビスクドールの格好をしていた。一人ぐらい「可愛い」と言ってくれることを密かに期待して。けれど、「おしやれ」と分かってくれた男は一人もいなかった。それどころか「仮装にしても、頑張ったなあ」と言われてしまった。

酔っぱらった勢いで涙がとまらなくなった亜衣里をなぐさめたのもまた、金城だった。それ以前から、彼女は金城に頭があがらなかったのだけれど、あれ以来、彼女の前では素直に心を吐露できる気がしている。泣いているところを優しい胸で抱かれた記憶はやっぱり照れ臭いけれど、とても気持ち良い記憶だ。この際、男は諦めてレズビアンに転向してみようかと、酔った頭で真面目に考えたぐら이다。

金城は、数少ないSATの女性隊員のOBであるから、今も少ない女性隊員の精神支柱として、指令車にいてくれるだけで有り難い存在だ。

多分データ上は彼女より名簿が前にくる人間もいるのだろうけれど、今までのところ「あいうえお順」の名簿では、常にトップにいつづけた。

人間好むと好まざるとに関わらず、そこにいるとクソ度胸がつく。だいたい、自己紹介にしろ、当番にしろ、指名にしろ、真っ先に回って来ることが多い。じっくり考える暇などあればこそだ。

「全く。透子ちゃんの仇討ちにしたらって、死にすぎだよ。あいあい」

金城がため息混じりに言う。あいあいにはSATを志願した理由を、胸に秘めてなんかいないからみんな知っているのだが、別に透子の

仇打ち目当てに死んでいるわけではない。けれどそう誤解してくれているなら、敢えて死んだ後が楽な場所を狙っているだけとは、言わない方がいいというぐらいのズルさも亜衣里にはあった。

中途半端な笑顔を見せて、亜衣里は身体を起こした。やっぱり脳味噌は吹き飛ばされた直前を記憶しているらしく、ちょっと有ることが把握できずに立ちくらみがしそうだった。

「あわてて起きなさんな。あいあいが倒れたら、だれも運べないし」
「金城さんまで、ひどいなあ」

金城が失言だったと思い出してちよつと舌を唇から覗かせた。

「ごめーん、悪い、悪い」

金城は思う。もしかしたらあいあいには酔っぱらっていて言ったことすら忘れているかもしれないが、「お姫様だっこしてバージンロードを歩けるような男じゃないと、我慢できないんですっ」という理想の男性像を聞いて、ちよつと余りにもの幼さに苦笑した。恋なんて、そういうものとは関係ないところにあるものなのに……。

自分だって、切れ者でスマートな男と結婚する予定が、ハゲかけたメタボ体型のおっさんと結婚したのだ。別に打算の産物でそうしたのではなく、ほれちゃったのだから仕方ない。本当に恋愛感情というものは全く不条理で、理想などとは全く関係ないところに、ある日突然に転がっていることに気付く。

SPだったことでも証明されているように、あいあいには目鼻だちも整っているし、頭もいいし、ちよつとぶっ飛んだところもあるけれど、十分に可愛い女の子だ。ただ、問題はその大きさだ。あれであと十センチも低かったら、彼女に猛攻する男に事欠かないだろう。実際、鈍いあいあいは気付いてないが、女神様を拝むような熱い視線を彼女に向けている若い隊員は少なくない。

男どもが素直な恋心を告白できないのと一緒に、あいあいは、普通サイズの男をそれだけで恋愛対象から除外してかかっているから、

問題はややこしくなる。一緒に生きていくには、価値観が近いことが大事なのに、自分の外見に捕らわれているのは、あいあいの方だ。あいあいの下らない夢を粉碎するぐらいの出会いが、あいあいの未来にあってほしいと、金城はそう思うのだが、如何せん、二月と開けずに死ぬような激務を嬉々としてこなしているあいあいに、普通の男は堪えられるのだろうかという疑問もある。だれだって、自分の奥さんには、命をかけた仕事なんてして欲しくないはずだ。

「あら……あいあい、オマル呼出しだつて……」

司令室の壁面モニターと同じ画面が、女性隊員の出撃待機基地でもあるSSSの金城のオフィスにも映し出されている。オマル

「……へ？」

総合司法局呼出しというのはただごとではない。壁の端末の色が黄色に点滅することなど、年に数えるほどだ。

あいあいは慌てて服を着始めた。シンクロイド・システムの受信器は、着ているものを忠実に形だけ再現してくれるが、飽くまでも見掛けに限定される。機能の再現性はないために、突撃服を着て出るときに、脱ぐ手間をかけるのは阿呆らしい。当然、下着姿になる。そんな必要性から女性の棺桶は、普通に女性専用の部屋に置かれている。シンクロライドしてから、初めて突入服を着用する。

総合司法局、人口密度稀少域特例総合司法官管理課の雑賀^{さいが}だ。

相澤亜衣里さんでいいかね？

慌てて服を着込んで受信モードにすると、亜衣里の目の前のモニターには、白髪まじりの眉毛を裏切つて、つやつやと異常に黒い頭髪が違和感たつぷりの男がいて、そいつは前置きもなくしゃべりだした。

「はい。相澤は自分です」

つい敬礼をしながらしゃべってしまふ。習い性と言われればそれまでだ。

まず、確認しておきたいが、特殊技能保持のための後継者育成に掛かる特別定年延長措置法令のリストに名前があるが、それは確かに相澤さん本人の意志によるものということで間違いないかね。

「さ、三分の一特例？ あいあい、あなた、どうということよ」
初耳だった金城の声が裏返った。

「あ……、忘れてた」

亜衣里も、すっかりその存在を忘れていた。

……。

画面の向こうにいる、黒髪ふさふさ男の眉間がひくついた。彼女がそれに応募したのは、頑張って勉強した第二種司法試験に受かった直後のことで、合格後にもらったパンフレットの中に、人口密度稀少域特例総合司法官という、聞いたこともない職種の案内があったのだ。絶対数が少ない。応募が掛かる機会も少ない。何をやってんだか分からない。けれど、宇宙の果てで仕事をするという、余りにもズバ抜けた非日常に、なんとなく心が惹かれた。警察官という日常と、宇宙開拓の最前線という日常が、二種司法試験に受かったことで、突如として垣間見得た。

だれだって、もし宇宙飛行士になれるとしたら、なりますか？、ときかれたら「ハイ」と答えると思う。

けれど、じゃあ明日から宇宙に行ってくださいというようなんでもない方法でオフアールが入ってくるというのは想像もしていなかったことだ。

あいあいの呪い。日本にいる限り名簿の常にトップにいることの

呪いが、このたびも堂々と発動したということすら、彼女には分かっていない。

「あ……の。宇宙に……行け……るんですか？ 私」

亜衣里にしても、我ながら素っ頓狂だと思える様な声が、頭のとっぺんから出た。

まあ、三分の一が発動することが少ないですからね。えっと、まあ拒否権はありますけど、一応概要を読ませていただきます。

この度、貴殿は総合司法局管轄下にある、人口密度稀少域特例総合司法官として職業訓練を受ける対象として選ばれました。まず、応募してから一年以上を経過しているもの……相澤さんのようにです。ね……については、無条件で拒否する権利があります。一年に満たないものについては、環境が変わるなど特別な理由の申し出があり、そこに妥当性があれば違約金は発生しませんが、理由に正当性がない場合は、一万円の違約金の支払いをお願いします。……あの、相澤さんの場合、費用なしで拒否することができませんが、とりあえず参加の意志はありますか？

亜衣里は呆然としていた。宇宙に……それもフロンティアに行く？ 自分が？

「ちょっと待ってください、雑賀さんでしたかしら？ 横から失礼します。SSSの金城きんじょうです。三分の一は、残る三分の二は現職に従事することが条件でしたよね。どうやってフロンティアで仕事をしながら、現職もやっていけるのですか？」

亜衣里もそれが気になる。黒髪の雑賀が微笑んだ。

普通の方には、このシステムの説明をして納得いただけるのに

も時間が掛かるのですが、シンクロライドしていただきます。十分可能でしょうか？

「あつ！」

亜衣里はとたんに胸が高鳴った。シンクロライドは日常茶飯事でやっている。シンクロライドに乗ったら突撃服をきて、重装備を身につけて出勤だが、その先に、何千光年（多分）離れた遠い宇宙の職場があるのだ。

くらくらくるぐらい、すごいことじゃないか。しかも三分の一でいいなら、残りの三分の二は、今の仕事を続けられる。

だいたい、宇宙が合わなかったら、確か違約金なんかを払えばいつでも辞退できるのではなかっただろうか。

「いつ、いきます、いきまー！ーっす。宇宙飛行士になりたかったんです、私っ」

何を隠そう相澤亜衣里の本棚には、王子様が出て来るファンタジーと負けないぐらいの量のSFがあるのだ。

「あいあいつ、マジ？」

金城がビクリして亜衣里を見る。

「だって、宇宙開拓最前線ですよ。フロンティア。観光でだったらアバタロイド・ドライブでだって年収の五倍は取られます」

妙なところで、細かい数字を把握しているなあと思いつつ、オマールの雑賀は続けた。

受諾の意志があるようですので、続きを読ませてもらいます。

契約期間は一期を五年として、二期まで検討が可能です。ただし、二期終了の五年後に三十五歳を超過するものに関しては、二期目はなく、後継者として現地に赴任することになるか、現職へ戻るかを選択していただくことになります。……相澤さんは二十八歳でいら

つしゃいますから、五年のみ三分の一特例として総合司法官見習いとして働いていただくことになります。御質問は？

「ありませんっ」

「ちよつとあいあい、ちゃんと聞いた方がいいわよ」

「だって、金城さん、たった三分の一ですよ」

金城と亜衣里の会話が聞こえないのか、敢えて無視しているのか雑賀が続けた。

特例措置により、現職での身分は貴殿が希望する限りにおいて保証されます。……これはご存じのようですね。説明が少なくて助かります。……ただし、事故・病気以外の理由で契約期間中に職務を放棄した場合、規定により料^{かりよう}料の対象となります。

「最初の一日目で合わないと思っただけの場合も料料の対象ですか？」

亜衣里が質問した。

いえ、行ってみれば徒弟制度みたいなものですからね、個人と合わないという場合は基本的に無理がありますから、一月のお試し期間があります。当然、相澤さんにも拒否権がありますが、当然現職司法官の方にも、相澤さんを不採用とする権限があります。一カ月といっても、三分の一なので実質十日です。司法官に会っていただいて、司法官の仕事を手伝っていただきながら、決めていただければいいです。

もちろん、その十日で拒否する場合、不採用の場合、費用は一切いただきません。相澤さんは現在の職場に在籍して現職を続けながら、毎月十日を目安に、シンクロイドしていただきます。が、これもご存じでしょうが、身体的な問題から一日の限度は八時間です。

まあ、何か重大事件が発生して向こうで手が離せないときも、連続ライドしての搭乗は原則禁止、二日を限度とします。また、現職の仕事の関係において十日以上を三分の一プログラムに参加できない場合、十日までを限度として翌月に持ち越すことも可能です。……御質問は？

十日、フロンティアに行く。しかも一日八時間。総合司法官がどんな人かは知らないけれど、こんな美味しい話は滅多にない。

五年間、毎月十日を宇宙で過ごして、残りはここでの日常に帰れる。金城さんとしやべったり、現場に出動したりするのも自由で、五年後に断るなら違約金も発生しない。取りあえず行ってみて、受け入れ先の担当官が気に入らなかつたら即バックも可能。こんなに美味しい話が世の中にあつていいのだろうか。

「是非、是非参加します。よろしくお願いいたします」

亜衣里がしたのが、お辞儀ではなく敬礼だったので、雑賀も見事になった敬礼をかえしてきた。総合司法局の人間はあまり敬礼はなれていないと思うのだが。雑賀は警察畑の出身なのかもしれない。

「ご快諾ありがとうございます。三日以内にシンクロイドスキャナ走査器をご自宅に宅配便で送らせてもらいます。」

「宅配便？」

宅配便が宇宙へつながる棺桶を運んで来る。まるでSFそのものだ。不覚にも亜衣里はちよつと感動してしまった。

亜衣里の傍らでは、金城がまるで西洋人のように大袈裟な、オーノーポーズを取っていた。

8・飛び込む前には心の準備

保志美耶子は、自分の都合だけをまくしたてる芸能人の言いぐさを、終始にこやかな笑顔と、ときには同情あふれた表情と合いの手を入れながら聞きながら、それが帰ったと勝手に肩がどんと重くなった。

毛は出さないからとヌード写真集に同意したのに、バツチリ写っていた。キャッチコピーが、『四十の熟れたカラダ』とされてしまつて、年齢を出されて精神的打撃を受けたと、そういう趣旨なのだが、だいたい、幾らアンチエイジングのお世話になつていないからといつても、四十面さげて脱ぐという感覚がいま一つ分らないし、好きでもない相手に見せて金を取ろうという、根性そのものが気に入らない。自分と同じ年の四十五なんだから、五つもサバを読んでもらつて「ありがとう」だろうがと思うと、馬鹿馬鹿しくなつてくる。

大体話の流れでエピソードがころころ変わつて終始一貫していないところが、地雷持ちだ。半分以上は自分で作つた話を語るうちにホンキでそう思っている、事実捏造型、思い込み度強烈なあげく、記憶力が悪いから同じ話を繰り返すだけのこともできない。ついでに加齢現象の弊害ではなく、もともと聞く耳持たない型だろう。聞いている相槌ならご機嫌だけれど、疑問を挟むとこめかみがひきつるのだから処置無しだ。

ついでにヒステリー持ちということは、仕事でなければ付き合いたくもない人種の筆頭だ。綿密な事前打ち合わせをしても、公判で裏切られる覚悟をしとかなきゃいけない。大体が、訴訟自体がやらせなのだ。昼間の主婦向け芸能ネタ情報番組で、訴訟になつていることを取り上げられて、法廷前で直撃インタビューでも受ければ、

四十五のハダカ写真集だつて、二、三十部は余分に売れるだろうと、そういうことだ。

馬鹿馬鹿しい。勝ちにも負けにも結局は興味がないのだ。基本的に訴訟にすることが目的なんだから、これはもうかかった費用の申告は、広告宣伝費にするべきなんだろう。

まあ、負けたところで売り上げが伸びれば価値なんだから、こういう事案は逆に気楽だ。これがこれから売ろうとしている女の子とか、清純派で売ってきたのにかいうような、何がなんでも勝たせない^{ます}と拙いものとは難しさが違う。

「先生、強烈でしたねえ。お受けになるんですか？」

「まあね。楽にやらせてもらえるからね。どう？ お金は多分ばっちりいただけるから、桐谷くんが弁護してみる？」

「えーっ、あのおばさんですか？」

軽口を叩きながら、長身の桐谷がずっと美耶子の目の前にマグカップを置いた。熱々の香り立つコーヒーに、半分以上冷たい牛乳をぶち込んで、なまぬるいのを超絶でかいそいつで^{あお}呷るのが、猫舌の美耶子の好みなのだ。

もちろん、聴き取りという芸能人のおもてなしをしている間は、ちんまりとソーサー付きデミカップで我慢している。がぶ飲みがおしやれに映らないことぐらい承知している。

自分は芸能人ではないが、実績以上にクライアントの口コミが何よりものコマーシャルだと承知しているからこそ、こういう演出は必要なのだ。オフィスのインテリアにだって、めちやくちゃ気づかっている。

事務で専用に雇っている女の子よりマメに気が利く桐谷良は、^{キラリョウ}長身の美青年でホストのような見てくれだ。実際の年齢も息子ほどの年ごろだし、夫が不在な美耶子がツバメちゃんとして彼を利用していると噂があるのも知っている。まあ、桐谷に迫られたら、考えな

いでもないが、若者にはどうせ女からの攻撃をうまく捌いて、ついでとばかりに倍返しにして来るほどのテクはないだろう。自分は保志で十分満足している。

桐谷は、ガッツリ一種司法試験持ちで、自分のような「売れてる弁護士」志望という、アグレッシブな青年だ。気が利いて使い勝手がいいから侍らせているだけで、残念ながら夜の一戦はしたことがない。

がつつりと自分にくつついて来れば、ノウハウだけでなく、後々のクライアント開拓につながるという確信から、自分のご機嫌取りにまずスキルを磨くところなんか、なかなか割り切っていて、逆に下手な正義感をかざすボケ茄子より気持ちがいい。イソ弁（いそうるう弁護士）は流行遅れと言う人もいるが、なんだかんだいって直接によい徒弟関係を築くのは最終的に強い。

芸能人御用達、守銭奴弁護士が顔で選んだと陰口を叩かれているのは知っているが、本当の正義をかざすことも知っている。それはしゃべっている中でわかる。真つ当な正義感と、建前の正義を上手に使い分けることも、損益勘定で動くことも普通にできるベストミックスぶりが、気に入っている。

事務の女の子は時間がきたらさっさと帰るが、桐谷は絶対にそんなことはしない。美耶子が荷物をまとめるまでどころか、二十四時間、いつ何とき呼ばれても同行できる様に構えている。

電話が鳴ってきつちり三コール待ってから桐谷が受話器を上げた。向こうは三呼吸あれば切れることもできるし、少しは逸っている気持ちも落ちつけられる。これがメーカーのクレーム窓口やら、通販のコールセンターなら、一コール半までには取らないと話にならないだろうが、うちは弁護士事務所なのだ。

もっとも、四コール以上だと、上客を逃すかもしれない。そう、

最初に美耶子が言ったあと、他に手が取られていなければ、三コー
ルを忠実に守る。人の話を聞ける上に、記憶力もあって、実行する
だけのマメさもあるということだ。

「はい、少々お待ちいただけますか。先生にご都合を聞いてみます」
保留音が流れると、ちよつと途方にくれた様な声で桐谷が言った。
「半六判事はんろくはんじからなんですが……。その、拙いんじゃないですかね？
その向こうが。……取り次ぎますか？」

「へ？ 半六判事はんろくはんじって、迫神裁判官さくしんがみよね？ なんで弁護士にコンタ
クト取って来るのよ……。不祥事でもやらかしたって、聞きたいけ
ど、あの半六判事にはそれはないわよねえ。……今はたしかに半六
判事と関わってる事案はないけど、何考えてるの」

と、そこまでいって、美耶子はトンと左掌に右拳をガッテンさせ
た。

「はは、なあ……。多分、アレだわ。出るわ」

美耶子が手を伸ばすと、桐谷が保留音が流れる子機を持ってやつ
てきた。

「お電話変わりました。保志美耶子でございます。弁護士に御用で
すか、保志の家内としての私に御用ですか？」

電話の向こうで、迫神が息をのむのが分かった。あの常に冷静沈
着な男がと思うと、美耶子はなんだかおかしい。つつい、くくく
つと笑い声がもれた。

「どうやら、図星だったようですわね。迫神裁判官。それにしても
あなたほどの人が、何を好きこのんで、三分の一に志願なんかなさ
ってましたの？」

保志先生には敵いませんね。どうして、お分かりになるんです
か？

いつものにこりもしない迫神裁判官のイメージが強い美耶子は、その思いがけない柔らかい口調にすっかり「知りたいお化け」に取りつかれてしまった。

「迫神裁判官、弁護士の保志先生としてならお話することは何もありませんけど、バッパー保志のリサーチがご希望なら、ディナー・デート一回で買収されてあげてもよろしくてよ」

電話の向こうで、迫神が笑い声を立てるのか分かった。基本的に同じ法曹界に生きているものではあるが、弁護士は弁護士同士の横繋がりが少なく、裁判官という人種や、検事という人種とは余り交流がない。同期会などで顔を合せても挨拶程度で、不思議と同じ職種を選び取ったものどうして固まってしまう。

法服を着て、鹿爪しかづめらしい顔をして、失言もほぼなく、時間に厳しく、時代錯誤な勤勉実直を絵で書いた様な印象の男。けれど判決はというと、ろろろとした通る美声でその判断に至った経緯を、過不足なく説明し、若手の癖に突っ込みようもない貫禄でまとめて来るのだ。説諭をはさみこむときの文脈など、人生経験が豊かなはずの自分でさえへえとひれ伏したくなるほどの、いい味を出す。東京地裁の若手のエースと、多分弁護士仲間も、傍聴マニアも認めているはずだ。

きつとゆくゆくは最高裁にいくんではないかという噂も高い迫神裁判官だ。迫神は、裁判官に任官して今年で十年丁度。判事補時代も単独審の裁判官を務めていたほどの切れ者だから、順当な出世で「補」が取れたところだ。

半六という渾名あだなは、六法全書の半分ぐらいは諳そらじているに違いなところからついたものだ。それぐらい六法に明るいと思われている。

その半六判事と、背中に松が生えてきたような俗な事案ばかりを

やっている美耶子が、一緒に食事などをしていると、弁護士である自分はそんなにキツイ世界にはいけないけれど、迫神判事は有り難くない立場に立たされるだろう。向こうから断つて来ると思いきや、迫神は美耶子が思ってもいなかった返事をした。

「仮装するにしても、行き先は重要ですね。カジュアル・デートが良いですか？ それとも、豪勢なものがいいですか？」

美耶子は面白くなってきた。もともと保志なんかに惚れる様な粗忽者だ。危ない橋をわたるのは、実は三度のメシより大好きだ。

「迫神裁判官、それをおっしゃるなら、変装でなくて？」

美耶子はそう揚げ足取りをしてからちよつと考えた。美耶子はどっちかというと井にマグカップの女なのだ。スーツを着て、表情皺に気遣いながら、ン万円のディナーを取るのは本来趣味でない。

「思いつきりカジュアルにしましょう。そっちの方が安全ですもの」

少しだけ逡巡するような間が空いて 向こうも多分、美耶子のそんな提案は、迫神をからかっただけの、ただの言葉の綾で、本当にデートをしようと言い出すなんて思ってもいなかったのだろう、それからこんな言葉が受話器の向こうから聞こえてきた。

「分かりました。新橋の高架下で引つ掛けましょうか。旨い串焼き屋知ってるんですよ。保志先生の事務所からなら三十分で行けると思いますけど、私はすぐには出られませんので、時間は一時間後以降にしてください。それからしたら何時でもご都合に合わせますよ」

意外とフットワークいいじゃない。この子。

美耶子はちよつと、法服姿の迫神を思い出してみたが、全然合致してこない。なんだかとても可笑しかった。あの迫神がどこをどう間違えて、何を勘違いしてバツパーなんかを志願したのか分からないけれど、フットワークが軽い青年は好みだ。だるだるしているヤ

ツが一番きらいな美耶子は受話器をもったままニヤリと笑った。

「本当に判事が一時間後にこられるか、試してあげるわ。今からきつちり一時間後、新橋駅の烏森口で……」

美耶子は迫神の返事を聞かずに電話を切った。なんとなくウキウキしているのが分かる。桐谷が、また美耶子先生の悪のりが始まったという顔ですこし天井の方を見ていたが、突然につこり笑った。

「先生、俺、ボディーガードごっこしていいですか？ 探偵みたい
に尾行しますから」

「アフターファイブは好きにきなさい。桐谷君。ただし、半六ちゃんにバレたら来月給与カットだからね。じゃあ、今日はここまで」

美耶子にはつこりと笑って、立ち上がった。そして、事務所にしている部屋の隣にある仮眠もできる私物置き部屋へといそいそと撤収していった。

おデートの前はウキウキする。それが冗談でもなんでもだ。美耶子はきつちりとまとめ上げた髪を洗面台で流してガチガチに固める。整髪料を落としてさっぱりさせると、櫛を入れながら少し考える。あの迫神が「仮装」と言うぐらいだから、息子の穰太のような素っ頓狂な格好をしてくるかもしれない。ラッパロースクール野郎というと、「MCと呼んでくれないかな」というような息子だが、法科大学院在学中に司法試験持ちになるとは、見どころがある。

ただの馬鹿ならつける薬もないけれど、やることをやってる馬鹿は好みのタイプだ。自分が惚れる様な男を育てるのが、育児の成功なら、まあ、自分はそこそ頑張ったといえるだろう。

何を着ようかささん迷って、ただのジーンズと、ちょっと明るいオレンジの風合いが気に入って、穰太から奪い取ったチエックの

コットンシャツを下着の上にざっくり羽織る。長い髪をまとめなければ、多分三つはサバを読めるはずだ。

いくら迫神が若くても、息子まではいかない。迫神判事補から「補」が取れたのがこの春だから、本人に聞いたことはないけれど、あれがストレートでないことなどありえないし、日本は他の先進諸国のように、相変わらずスキップを認めていないから、まあ三十二歳、それと誤差、プラスマイナス一歳以内でまず間違いないだろう。

つるつるに塗りたくってもそれだけでババア臭くみえてしまう、いつもの濃い目に作り上げるメイクをやめて、保志好みのナチュラルモードの化粧にとどめる。

小降りのエナメルバッグを大きいヘンプのバッグにそのまま突っ込んで斜めにかけると、多分あと二つはサバを読めるに違いない。まちがいに年より老けて見^ふえる迫神と並ぶのに、別に違和感はない筈だ。

ただそれだけだとおしゃれゴコロが足りない気がして、ウッドリングの腕輪を重ねづけしてしゃらしゃら言わせてみた。鏡の中の自分は、多分、いつもの自分より本当の自分に近い。金儲けは、傍で思われるほど楽じゃないのだ。

「美耶子センサー、かつこいいですねえ。僕はそういう先生も好きだな」

さらつと厭味のない桐谷の軽口に気がよくなって、多分あと一つは見掛けが若やいだはずだ。その桐谷は、ジャケットを脱いで、タイを外して第三ボタンまで外しただけなのに、ぐっとカジュアルな印象になっている。新橋烏森口で、絶対に目立たないこと間違いない。

美耶子は合格のサインを親指と人指し指で輪っかを作って桐谷に示すと、裸足にパンプスをつっかけた事務所を後にした。桐谷は、

きつと全部戸締りをして、マグカップを洗って、明日の段取りまでしてから、新橋に来るだろう。スタート時間と場所が分かっているなら、尾行対象者にべたべた距離を取らないところも、ちゃんと押さえている。

新橋駅烏森口、午後七時半。きよろきよろというのはダサいから、なんとなくを装って周囲を見回すが、迫神のような姿は見えない。改札を出てきてちよつと誰かを捜しているふうなふりを見せてから、文庫本を読みだした桐谷が見つかったぐらいだ。まったく、あの子もよくやる。

と、五分ほど前から、ちよつと距離を開けた並びで、美耶子のうに人待ち風にしていた青年が、ちらちらと美耶子を見ている。青年は夫の保志より少し背が高いぐらいだけれど、百八十に近い桐谷ほどの長身ではない。その代わり、しっかり鍛え込んでいる分厚い胸板がＴシャツのイラスト越しにでもよく分かる。それから、筋肉の形がきつちり浮き出た美味しそうな二の腕が、肩までたくし上げたから袖口からすつきりと伸びている。

日本人にはちよつとないほどの鍛え方が見える割に、いわゆるボディビルダーのようなムキムキ感はなく、非常に実的に作られているイメージだ。

ざっくりと手櫛で乱した様な前髪がちよつと目に悪いのではないかと思われるぐらいが、美耶子の好みに合わないだけで、採点としては九十点を楽に越える感じだ。オバサンとしては、あのウルサイ前髪を櫛でなで上げてみたくなる。

その、青年と目が合ったとき、意外なことに青年の唇がやつぱりというような形に動いた。そうして破顔する。その笑顔のかわいさ

に美耶子は年甲斐もなく胸がきゅつとなる。

「保志先生……ですよね？」

その声は、何度も聞いたことがある迫神判事の、滑舌かつぜつのきっちりとした低めの美声だった。

「さ、迫神……さ……？」

美耶子は驚きすぎて声を飲み込んだ。脱ぐといい女というのは聞いたことがあるが、脱ぐといい男というのも存在するのだ。

裁判官と言おうとして、仮面デートだったのだとそれを飲み込んだ。そんな美耶子に気付いて、もう一度迫神が笑った。

不味い、年甲斐もなく惚れた。

美耶子は冗談事でなく、胸がドキドキしてくるのを感じていた。

さてと、運命の悪戯とは恐ろしいもので、ちょうどそのとき、バツパー、ジョルジオ保志の実績として一粒種である保志穰太が新橋駅改札を通りがかったところだった。普段は生息する若者が少ないここいらは、彼の行動半径外なのだが、その日はたまたま母親、美耶子の事務所に向かうところだったのだ。

いつもそれぞれ勝手に暮らしているけれど、オヤジが帰って来るのかどうかによって、今後の穰太の身の振り方が変わって来る。

オヤジが帰って来るつもりなら、独り暮らししている友達のところにも転がり込む算段をつけ始めないとならない。オヤジの誕生日の今日、定年延長するのか、それとも退職して帰って来るのか、仕事前にきちんと話し合って来ると、朝方母親が言っていた。

その、話し合いの結論だけ聞かために、飲み会に出掛ける前に母親と話しをしたいと思い立ったのだ。

この時間ならまだどうせいるはずの母親の事務所に寄る方が、仕事中はプライベートの携帯の画面なんか見もしない母親にメールを打つより断然確実だ。そして、話の勢いによつては、今後のことを真面目に検討しなければならぬ。

滅多にこないが、母親が事務所を置いているせいで、迷うほど知らない街でもない新橋駅改札を抜けて、勝手知ったる方向に、いつものようにふらふらと、背骨がないような姿勢で歩き始めようとしたとき、目の端に見覚えがある柄のシャツが飛び込んできた。

それは、冷房よけにいいからと、ちよつとまえに美耶子に取り上げられたシャツで、穰太自身、とてもお気に入りだったコットンシャツだ。それを着た母親は、オバサン厚塗りでもなく、オバサン結い髪でもなく、とびきりの若作りをばつちり決め込んでいる。しかも、どうやら誰か搜しているといった雰囲気。

常日頃、家庭を一度も顧みてこなかったオヤジに対する厭味を込めて、浮気の一つもしろ発言を繰り返してきた穰太だったが、そんなのは父親べた惚れの母親だからこそいえる軽口だ。とつさに物陰に隠れててしまったてから、どうして隠れる必要があつたのか自問してみる。

と、目の前で、穰太の目から見ても、ちよつといけるカラダをした兄ちゃんと、話し出したではないか。

嘘だろ？

穰太は自分の目は何を見ているのか、ちよつと理解が覚束ない。

こそこそ柱の陰になって、おたついてる穰太がいることなど、当然全く気にしていない美耶子が、ちよつとそいつと親しげにしゃべ

っているだけでも驚きなのに、並んで歩きだした　　どころか……。美耶子は青年の逞しげな腕に、その腕を絡めた。

今度こそ穰太の心臓がバクバクいいだした。自分は何を見てしまっているのだろう。美耶子は昨日まで、亭主元気で留守がいいモードで長年やってきた。

宇宙の彼方で元気にバッパーをしていたはずのオヤジが、帰ってくるかもしれないと言っていた。煮え切らないことに、定年延長するのか、退職するのか、決めていないオヤジをシメてくると、朝言っていたのではなかったか？

オヤジが現職のみ引退して、地球から近いUN^{ウン}の総合司法局^{オマル}勤めに変えるのか、ちゃんと話し合って来ると言っていたのではなかったか。

それが、新橋駅で若いにーちゃんと、若作りにしてデートって、どういふことなのだろうか。ゲンブツの父親にも懐いていない自信があるのに、その上になさぬ仲の義理の父親が、あんなガキだなんて、どういふこっちゃ。あれなら、オヤジの方が数倍我慢できる気がして来るから不思議だ。

あろうことか、歩き始めた二人の後を、上手い具合に尾行し始めたのは、母親のところにいるイソ弁の桐谷だ。ということは、あの若いのに血道をあげて業務に支障をきたしていて、真相究明に桐谷が乗り出したということなんだろうか。

もしかして、クライアント？

穰太は一瞬思っ、即座に首を振った。だったら、こんなところで、普段メイクでいるわけではない。あの人は美耶子ブランドを安売りはしないだろう。じゃあ、いよいよ本格的な男遊び？　というこ

とは、弁護士・保志ではなく、女・美耶子として、新しい男を作ったということだろうか。

母親は、一笑に付して取りあつていなかったが、桐谷は噂通り美耶子のツバメちゃんそのもので、美耶子が新しいツバメを作ろうとしていることで、嫉妬に駆られた桐谷が尾行しているとも言っただろうか。

ストーリーとしてなら、後者の方が無理がない。

パパが三分の一延長するなんて言ったら、今度こそ若い子と浮気するんだからっ。

母親は確かにそう言うてはいた。じゃあ、オヤジは帰って来ない気か？ それはそれでめでたいけれど、だからといって、浮気候補もちゃんと物色済とは、オカンやるな……いやいや、納得してどうする？

一人、脳内ジタバタしている穰太を残して、二人と尾行者一人は雑踏に消えた。追いかけようと思ったのだが、何だか穰太は足に力が入らなかった。

柱に背をもたせて、それからズルズルと地面に向かって落ちていった。

「驚いたわ。なんで、そんなに良い身体してるのかしらね」

普段は法服に隠されている、迫神の生の腕。初めて見たその腕の、あまりの素晴らしさに、つい絡めて指先で撫でてみる。とにかく、夫も、息子もこういう彼女好みの腕はしてないのだから、これは触らずにいられようか。拒否されたら、一応デートということになっ

ているのではなかったかとリマインダーを入れてやろうと待ち構えていたのだが、迫神は拒否するでもなく、照れるでもなく飄然としている。

「おばさんは、対象外だからスカしてるの？ それとも、女に慣れてるの？」

つい厭味モードになった美耶子に、少し迫神が照れた表情になった。可愛い。

「慣れてないですよ。ただ、僕が通ってる空手道場は女性も多いので、その……女性に触られるのには、あんまり抵抗ないかも」

「迫神さんって空手マンなんだ。意外だわあ。で、そういうカジュアルな格好もサマになってるけど、プライベートではいつもそうなの？」

「稽古に行つてるときはこんな感じかな。山に行くときは違いますけど」

「山？」

「ええ、裁判官なんてやってると、人の毒に当てられちゃうこともあるんですけどね、それで、いちいちマイナス思考になってると、仕事からやってられないんで、自然に助けてもらってます」

ああ、それで半六判事は、いつも揺るがないのだ。

人にふりまわされてないのは、そういう距離のとり方が上手いかなのだ。そう思うと、ますますいい男に見えてくる。

「山ってどんなところに？」

「先月はキリマンジャロに……」

ぶつと、美耶子は噴き出した。冗談だろう。

「あ、嘘じゃないですよ。シンクロライドで行くんです。その……命を危険にさらしたくないとか、そんなんじゃないくて、単にまとも

って休暇取れないんで」

ああ。と美耶子は再び納得した。保志のことだから、絶対にそういうところの効率率は重視するだろう。シンクロライドに慣れていることが後継候補の重要な条件だったなら、行き先は地球から一步も出ていなくても、ライディングの回数が多い人間に普通に焦点が当たる。バツパーのリストは、司法試験二種以上であれば登録はできたはずだが、五年のうちに一種を取らないといけないはずだ。三分の一はうまくできている仕組みだとは思うが、人間にはやはりキヤパシテイというものがある。

仕事を二つ掛け持ちしながら司法試験一種の勉強をするのは基本無謀というやつだろう。

「テントの中で眠って、目を覚ますと棺桶で眠ってるでしょう。なんか、凄く変な気分ですけど。日常の隙間に非日常が挟まるのって……、凄く好きなんです」

すこし美耶子は、迫神が何を言っているのか分からなかった。

暫く考えて唐突に理解した。

あなたほどの人が、何を好きこのんで、三分の一に志願なんかなさってましたの？

一番最初に電話で話したときの、美耶子の最初の質問に対する、これはその答えなのだ。バツパー候補に応募したとき、迫神は多分宝くじより当たらないと思っていたはずだ。そして、現実問題になった。だから、ここにくるまでの間、フロンティアに自分が行きたいのか、そしてなぜそもそも自分が応募したのかを、迫神は自分に考えていたのかもしれない。

もしかしたら彼の中で一番の関心事は宇宙の彼方、ちっぴけな人

類が宇宙相手に格闘している現場で、普通に生活をしている人たちの、ささやかな安全を守るということと、あの異常に広い管区を一人や二人でどーにかできるものなのかどうかも悩んでいるに違いない。

それはまさに三分の一に選ばれたけれどもどうするか打診が来たときの、若き日の保志の悩みと同じもので、あ那时的自分は、それにこう答えたのだった。

「実際に行つて、自分の目で確かめたらいいわ」

今度は迫神がきよとんとなった。

「応募したんだから、興味があつたんでしょ？ バッパーという仕事になのか、フロンティアそのものになのか、それは別として。だから、チャンスが来たなら、安全とか安心とか、保志がどんな男なのか。そんな安心できる材料をかき集めて、背中を押してもらおうとする前に、やってみようと思った自分を信頼したらどう？ 人伝てに千の情報を入れて一杯になるより、行ってみればいいじゃない。三分の一は、まずそういう理念でできてるんだから」

「保志先生……」

迫神が目が覚めたといったような、不思議な表情になる。これは、そう、自分がそういつたときに保志がしたのと同じ目。男って、本当に度胸がない。

「今日はデートごっこ中でしょう。美耶子って呼んでくれなきゃ、だめ」

そう笑った美耶子を初めてよく知りもしない女性なのだと認識し

たのだろう。最初に腕を組んだときには、ちらりとも揺るがなかった表情が崩れて、迫神の頬に朱がはしった。

迫神は小さな声で、こう言った。

「はい、美耶子……先生」

可愛いつ。

美耶子が全身でそう思ったのは、もちろん言うまでもない。

9・最悪なスタート

「それにしても、すごいですねえ。個人のお宅にコレ据え付けしたの、初めてですよ」

耳の奥に、スキヤナ棺桶の設置をしていった技術者の言葉がふいに甦って、一人部屋の中で亜衣里は頬が弛んだ。

毎日のようにとは言わないけれど、出勤と訓練を入れたら週に少なくとも三回は乗っているシンクロイドとはいえ、当然隊員の数だけ用意されているわけではない。女性隊員でLサイズを使用している者は亜衣里だけだから、他の人たちがほぼ亜衣里専用と化していたけれど、それは単にそうなっているだけで、やはりあの棺桶は亜衣里のものではない。

けれど目の前にでんとある箱は、完全に亜衣里の専用なのだ。しかも完全な新品。清潔という観点から綺麗なものを使うのは、嬉しいものだ。

例えば長期旅行を思い立って、連続して十日も超過するようなシンクロライドをするつもりなら、生命維持に必要な水分と栄養分の補給システムを起動させるそうだ。緩やかであっても生命維持活動は続いているので、酸素濃度の調節や、こればかりは生き物である以上避けられない排泄物対策をきちんとしてから乗るらしい。筋肉の衰えの方はどうにもまだ解決策がないらしいのだけれど、そうすればとりあえず衰弱死は避けられる。

けれど普段の亜衣里の乗り方では、連続して何時間も使うものではない。ただ、死んだ直後は脳味噌が死んだ反応をしたがるのか、どうしても粗相しがちになるので、宇宙飛行士がそうしているように、亜衣里もパンツ型の紙おむつを着用することになっている。けれど、人間の身体から排出されるのは、それだけではないのだ。汗も

出れば、涎よだれだって、涙だって普通に出る。

一回使用する毎に、オートクリーニングと光殺菌で細菌カウント上は問題がないレベルまで綺麗になっているはずではあるけれど、はつきりいつて他人と共用するのが嬉しいものではない。

消耗品であるシンクロイド・ボディの一体当たりの値段は知っているが、シンクロイド・システムそのものの値段など考えたこともない。こんなものを部屋に置くということ自体が非日常以外の何者でもない。

棺桶の蓋を開けて、珍しく服のまま乗り込んで横たわる。新品の機械の独特のにおいがする。シンクロライドしたことがない人間には分からないだろうけれど、シンクロライドはアバロイド・ドレイブよりは自身の感覚に非常に近い実感を得られるが、触覚、視覚、聴覚に限定したもののしか身体にフィードバックされてこない。嗅覚と味覚は再現してくれない。

実際に生身のままでSPとして現場に入っていたときは感覚として、第六感としかいえないような研ぎ澄まされた危険察知能力が、確かにあった。シンクロライドで死にやすいのは、亜衣里が「ナマゴロシ」より「ひと思い」を選んでいるということにも確かによるだろう。けれど、この嗅覚と味覚がないことで、人間が本来持っている自前のセンサーが鈍ってしまうのも原因の一つだと思う。

危険察知には嗅覚と味覚は、シロウトが考える以上に役立つものだ。

設置が終われば、取りあえず一度トリップしてくるようになると言われている。向こうは明石標準時ではないから、それさえ気をつけてくれればいいと、保志総合司法官は言っていた。落ち着いた声と、四十五という年とは思えないほど、モニターに映った表情が若々しかった。三人という少人数でやっていく訓練期間は五年だ。亜衣里

は、保志の第一印象が悪かったらその場で断ろうと思っていた。総合司法官というものが、どういうものなのか、はつきりとイメージでつかめているわけではない。第一、一番最初の印象が合うとか、合わないとかいう、そういうものは、理論的に説明できない。

けれどこの感覚には従っておく方が賢いというのは、危険な職場にいる亜衣里にとって常識以前の基本だった。今までずっと。

もちろんチームメイトを自分で選べる立場にはないから、ただ、「あ、いやだな」と思った相手と組んで、予想通り痛い目に遭うことも当然ある。そんなとき亜衣里は、自分の直感を蔑ろにした自分が悪いと思うことにしている。もっと注意深くしていればよかったと。

新しい洋服があれば着なくなる。新しい拳銃があればぶっ放してみなくなる。買ったばかりの靴は履いて足踏みしたなくなる。

亜衣里は棺桶スキャナの上に横たわっていると、どうしても乗ってみたくなった。なんでも、向こうの受信器もサイズの関係で新品なのだという。デカイのは呪いでもあるけれど、悪いことばかりではない。三分の一は、当然、一人の専門家プロに対して二人がつくものだ。だから、亜衣里と同じ立場で総合司法官修行をしようという人間がもう一人居ることになる。もう一人は男性で、一種司法試験持ちだそうだ。亜衣里は二種しか持っていないから、五年の間に一種をとらなければ、どのみち総合司法官として独立はできない。

最初から、水を開けられている様なものだけれど、気にするほどのものでもない。

亜衣里は上半身を起こして座ってから、棺桶から這い出して時計を見た。GMT（グリニッジ標準時）は大体単純に九時間引けばいい。

「何時ごろにトリップすればいいのかな……」

口に出してつぶやく。JST（日本標準時）の十一時は向こうで言うところと真夜中の二時。行きますという様な時間ではない。五時間後の七時だと、まだ早すぎるだろうか。こんなとき便利なのがメールだ。

シンクロナイザーの走査器の設置及び設定は完了しました。何時ごろにテストライドすればいいのか、というような問い合わせの短いメールを書いた。

送って二、三分もしないうちに返信が帰って来たことを知らせる着信音が響き、亜衣里は少しビククリした。

『人口密度稀少域特例総合司法官補佐T A I、S E L E N 4 4 4 4より返信いたします。二十四時間体制で全てをの受付をしておりますので、お時間に余裕がありましたら、今からでも構いませんのでお越しく下さい。保志総合司法官は、現在執務中^{ひとかた}で対応可能です。三十分後にもう一方もいらっしゃる予定です。』

きょんととして、亜衣里は文面を二、三回読み直す。一番最初の疑問はT A Iって何だろうということだった。名前の雰囲気から言って、A Iの一種だろうか。調べるためにパーソナル・コンピュータを起動させる。調べて分からなかったら、保志総合司法官に聞けばいいし、分かったと思えたとしても、確認しておいた方がいいだろう。

亜衣里は就職して以降、警視庁ですっと生きているのだけれど、これだけ移動の度に新人気分を満喫してきている。受け入れ側はで

できれば即戦力を望んでいることは分かっている。そして自分が即戦力たり得ないのも分かる。ならば、少なくともかけさせる手間を目減りさせる様努力はすべきだと思っっているし、逆に、シロウトが机上で調べただけのこと、間違って解釈していないかは、押さえておくべきだという常識もある。

チャンスはいつだって、一番最初に来たものを手つとり早くつかむべきだ。実際の保志に会えるのも、もしかしたら、向こう五年間を同僚になるかもしれない人と会える機会が三十分後に転がっているなら、それをトツ捕まえるべきだろう。そして、直感が近寄るべからずを選んだら、さっさと無かったことにする。

亜衣里は、三十分後に必ずライドすると宣言すると、身だしなみを整えるべく風呂場に飛び込んだ。

* * *

「二人ともフットワーク、めっちゃ軽い子みたいじゃん。大当たり？」

セレが言うのに、保志はニヤリと笑ってみせた。こういう運のよさには実は保志は自信がある。走査器スキャナの設置を向こうの昼間、こっちの夜中にわざと手配したのも、設置完了次第くる様という指示を出しておいたのも、常識があるかどうかを見るためだ。二人とも、設置報告がシンクロイド・システム業者の設置担当から来て即、ちゃんとメールで設置完了を報告してきた。

それから、何時ごろが都合がいいのかを保志に聞いてきている。

ここまでのところで、時差の一つも考えられないボケでないことが証明できたということになる。

もちろん及第点だ。まずまず、幸先いいスタートということ間違いなさだろう。

「だな」

セレには短くぶつきらばうに答えたが、その実、上機嫌なことは間違いなさそうだ。

「それにしても、おまえマトモな敬語、ちゃんと忘れてなかったんだなあ。感動した」

保志がにやつく。

「だって、オイラはステルス・モードでいけて、ろくちゃんの希望だし」

「ステルスって、大げさな。アホをさらすのにもタイミングがあるって言うてるだけだ」

ステルスとは、ぶっちゃけ様々なセンサ類からの探知されにくいということだ。一応、官舎を宇宙居住可能に維持したり、UNの膨大な過去判例データベースと同期していたり、指名手配犯情報をリアルタイムで更新していたりと、普通のメイン・コンピュータ仕事をしている4444と信頼関係を築いてもらうことが先決だ。

ちよつと行き過ぎた感はあるものの、そいつのお茶目さが、単独任務の精神的負担を軽くしてくれていることは、まあ、間違いないのだが、そういうSELEN4444の三分の一の側面を、最初からネタバレする必要も感じない。

このTAIの三つの側面。一番分かりやすい官舎のメインという側面。助手であり、パートナーであり、簡単な自律型コンピュータであるという側面。それから、残りの一面である犯罪者と直接対決するために、武器であり防具であり移動手段でもある飛閃。や

つの存在を知らせるのは、何事もなければ、もつとずっと後のお楽しみでいい。一度に何もかも知っても、混乱するだけだ。

保志の前任者は、普通の戦闘機のような高速移動艇を使っていた。保志の趣味には合わないというだけで、あれはあれで町まで行こうと思えば使い勝手がいいことは間違いない。

日本語の名簿なら、高確率で一番のはずの相澤が、無事司法試験一種持ちになって、多分この管区では初の女性総合司法官になるのか。こういう理由で選んだのか聞いてないが、セレが決めた迫神という青年がなるのか。

それとも、二人ともこの職業に魅力を感じてくれずに、また違う志願者と付き合うことになるのか。

若しくは他の区域で三分の一プログラムで二名以上後継者が育っていたならば、その人にイットルビアの特性を簡単に引き継ぎすることになるのか。

未来はまだ全く見えてこないけれど、次に着任する総合司法官が、飛閃ひせんやセレを要らないといえば、4444には、自分の分身を使い続ける権利はない。幾ら彼らに自主自尊の魂があつたとしても、人権尊重順位は4444でさえ低い。できるだけ、セレや飛閃ひせんが居てくれて、心の底から「助かった」と思える局面で、伝家の宝刀よろしくひっぱり出して、サプライズをかませたいのだ。

一応、長年の付き合いなのだ。セレや飛閃は本体と違って耐久消費財扱いだけど、人間の寿命なんかより遥かに長持ちするはずだ。自分が退官するからといって、スクラップにするには、まだ早すぎる。

でも、そんなことをセレにいったら、またアイツが調子をこくからな。

保志は毛髪の分け目をちょいちょいと掻いて、中央モニターに表示されている時間をちらりと見た。連中が来るまで、あと15分。

＊ ＊ ＊

スキャナ

走査器に入るのは初めてではないけれど、行き先が地球より外というのは経験がない。迫神^{さがみひらかす}平和は、少しだけ緊張しているのを感じていた。服装も少し考えたが、無難にグレーのスーツを選んだ。普段は上に法服を羽織ってしまうので、色や柄の出方を気にしたりしないのだが、もう一人の三分の一トライヤーが二十代の女性だというので、ちょっとだけ柄にもなく迫神は悩もうと思つてやめた。

総合司法官は単独任務だ。そもそも人口自体が稀少なのだから、事案が少ないのかもしれないが、万が一凶悪事件が発生したとき、その初動捜査に当たるのも職掌範囲と聞いている。希望するということだけで普通の女の子のはずがない。

迫神が様々な国の高い山に登るのにシンクロライドするのは、別に彼の特別な嗜好というわけでもない。飲んだり、食ったり、排泄したりしない登山者で、遭難したとしても別に救助の必要がないシンクロ・クライマーは、登山客を受け入れる側としては有り難い。登山者が下山しきれずに途中でシンクロイドから降りてしまつてもトランスミッター転送機とリンクさえ切れなければ、AIでコントロールするように切り換えれば、自力で下山してきてくれる。

もちろん、そんなもので最高峰を極めたとしても偽者にすぎないかもしれないが、山という偉大な自然環境を美しいままに保持していくために、シンクロ・クライマーはありがたい資金源になる。だ

から世界じゅうの自然保護区にある高山は、生身の登山家の受け入れは、厳しく入山人数を制限しつつ、シンクロ・クライマーの枠は多めに設定してあるところか殆どだ。

基本、高山というのは僻地にあるから、普通の登山愛好家が週末に行けるようなロケーションにはない。が、ベース・キャンプにあるシンクロイドに乗るところからスタートすれば、もっと身近なものになる。そんなこんなで、著名な山のシンクロイド・クライムは、マニアレベルにある登山愛好家には、宇宙の彼方にある町に観光にいく人間が普通にシンクロライドしたり、アバタロイド・ドライブするほどには、一般的な方法だ。

ベースから歩いて登り、頂点を極めて、ベースに戻って来る。途中で栄養分補給と休養のためにシンクロイドの安全を確保してから自分の身体に戻るのだから、食料や水を持って登らないとはいえ、テントやシュラフといった装備、ザイルやピッケルといった道具、当然に自前の体力と、なかなかそう簡単なものではない。逆に死なないからと無理なアタックをすれば、前にも後にも進めない状況に簡単に陥る。金が掛かる割に、安直だとか、普通の登山よりは味気ないと傍目には思われるかもしれないが、なかなかどうして、あれでいて奥が深いものだ。

独身の迫神は独身者用のそこそこにコンパクトな官舎に住んでいる。彼が今まで寝室にあてていた部屋のだ真ん中に、インパクトたつぷりな外観の箱が陣取っている。普段、ベッドではなく布団を使っていたのだが、まあ独身男の不精さで敷きっぱなしなことも多く、プチ万年床と化していた煎餅蒲団の代りに、四畳半のすり切れた畳の間に、棺桶が鎮座している。なかなかシュールな光景だ。

シンクロイド走査器スキヤナを棺桶かんおけと呼ぶのは、非常に的まとを射た表現だと迫神はつくづく思った。形といい、色といい、まさにそのもの。

蓋に十字架でも描けば、ドラキュラが寝てたってだれも驚かない

だろう。シンクロイドが壊れるようなことをしても、本当の意味で死ぬことはないのだが、入っているときはこっちの身体は死んでいるようなものだ。死んでるような人間を納めるから棺桶。捻りがないと言ってしまうばそれまでだが。

シンクロライドしたときに、こちらで着用していたものが形状だけコピーされるのは、だれもない場所に転送されるわけではないので、向こうで活動開始するときに裸で始めるわけにはいかないという、社会的必要から発想された御座成りの対策にすぎない。迫神が山に登るときは、保温などの必要から、登山装備一式を現地でレンタルして着込むことになる。スーツ姿で、これに横たわるのは、何だか妙な気分だった。

シンクロ・トリップをコーディネートしている会社が経営するいわゆる「トリップ・ポート」は、棺桶というよりカプセルホテルか、カタコンベ地下墓所のように、壁一面に埋め込まれるような形で設置されている。一日旅行にいくような手荷物を持って出掛けていき、大体が下着の上下か、上はTシャツ程度の軽装で走査器に乗り込むのだ。今スキャナ迫神が横たわったばかりの、蓋があつて床置きされているという形のものが、多分一番最初にこのシステムができた時の形状に近いのだろう。棺桶というニッケームになるほどと改めて領けた。

スキャン
走査を開始する場合は、蓋を閉めてください。

耳元でロボット・ボイスがささやく。普段は「扉をしめろ」と言われるのに、と、どうでもいいところに引っ掛かりながら、迫神は持っていたリモコンのスタートスイッチを押し込んだ。蓋が機械動作音を立てながら本体に覆い被さつて来るのを感じながら、迫神は目を閉じた。闇がやってきて、それからスキャナが動き始めるのが分かる。ふと、意識が分解されるような、あの妙な気分がやってき

て、それから例の無味無臭の感覚がやってくる。

においや味というのに、常に人間がさらされているのだと気付くのは、それが奪われた瞬間からだ。

人間というものは、においや味を感じた瞬間はそれを認識するのに、同じにおいの中にあるにも関わらず、それをすぐ意識しなくなる。だから、においがないことにも、すぐに慣れる。けれどその無臭の世界に來た瞬間は、自分がおいというものを一切感じない状態になったことが分かる。人間一人分の情報を全部走査して、それを転送して、転送先でシンクロイドの可変筐体チエンジャブル・ボディが自分の形を再現するのに、それ相応の時間がかかっているはずなのに、感覚としては授業中などに、ちよつとウトウトしてしまったという、あれに一番近い。覚醒を認識することで、寝ていたのだと気が付く、僅かな時間の、認識の喪失。

扉が開きます。御注意ください。

耳元でロボット・ボイスが再び囁いた時、迫神はもうちよつと注意深くしているべきであつた。声が「蓋」ではなく、「扉」と表現したことに。

迫神が認識するところの「蓋」が開いたとき、迫神の意識としては彼自身は横たわっている状態であつた。しかし、保志の総合官舎にある棺桶ルームは縦置き状態で壁に収納されている。きつちり九十度、迫神の脳味噌は認識を誤つたまま、身を起こしたことになる。ということは、立っている状態のまま、迫神は扉が開いたとたん、思いきりよくお辞儀をしたことになる。運動エネルギーが持つ慣性の法則と、当然設けられている人工重力の床方面にモノを引き寄せ、る力の作用の相乗効果で、迫神は顔から地面に向かって倒れていた。

その倒れていくまさに目の前で、迫神が独身寮の寝室で潜り込んだ、棺桶そのものの形状をした受信器の蓋が開いたところだった。

それはもちろん、規格サイズ外の亜衣里用に、急遽搬入されたばかりの棺桶である。そしてそれは、取りあえず受信器同士で並べておこつかという、深く考えたわけでもない保志の判断で、迫神が到着した受信器の扉の前に置かれていたのだった。

迫神が到着するのが、もう少し早ければ、彼の頭は亜衣里の棺桶の蓋に激突していたに違いない。そして、もうちょっと遅ければ、空になった棺桶に頭から突っ込んだだけで済んだだろう。

何という偶然か。もしかしたら、こういうタイミングのことを人間は運命と呼ぶのかもしれないが、迫神の頭は、全く本人の意志とかわりなく、到着したばかりの亜衣里の、形よく膨らんだ胸目掛けて落下した。

あの日の相澤亜衣里は、宇宙の彼方に行けるといいう高揚感で、まっとうな判断が落ちていたに違いない。いつものように、当然、シンクロイド受信器は、出勤服を着込むための更衣室に直結しているという確信に露ほどの疑問も挟まる余地はなかった。

訓練やミッションでイヤというほどやっているように、シャワーを浴びてござっぱりして　もちろん、突入のときにはシャワーを浴びる暇などないが　上にはブラジャー着けて、下には使い捨てのおむつを履いて、そういう格好で化粧だけして棺桶入りしている彼女にとって、棺桶に入ることは、迫神がそうするよりも、はるかに行動のルーティーンが確立されている日常の行為だ。

亜衣里は棺桶の蓋が開いていくのを認識していた。中途半端に立つと頭をぶつけるので、完全に開いてから上体を起こすように、フルオープンになる瞬間を待っていた。そうして動作音が止まったの

を認識して、さて、服を着ようと思ったとき、上から何かが降ってきた。胸が一瞬詰まるほどの衝撃を受けたときも、だから亜衣里には何事が起こったのかを把握できるものではなかった。

が、その直後、見知らぬ男の頭が、下着しか着けていない自分の胸の上にあることを認識して……。

彼女自身、かつて覚えがない種類の実に女の子らしい可愛い悲鳴　S A Tのアタッカー、怖いもの知らずのあいあいの同僚が、いまだかつて聞いたことがない　が、彼女の口からけたたましく発せられたのだった。

10・新しい日常

保志が可動官舎の廊下をすたすたと歩いていると、いつの間にか隣に湧いて出て、セレが一緒に歩いていった。この保志が住んでいて、ついでに主な仕事場でもある宇宙建造物は、言ってみれば小型宇宙植民地とも言うべき造りになっている。

正式名称は、国連総合司法局イットルビア地区派出所。一番外から見て分かりやすい業務は、いわゆる警察の仕事である交番業務ということになると思う。やはり犯罪は人がいる場所で起こるというか、そこで行わなかった犯罪を暴き出すほどの人員は配置されていないというべきか。まあ、必要とされたとき法らしきものを、そこに届けることができるというだけの話で、大体が、保安官がいるような町で何かしでかして逃亡したやつがいた場合、そいつを捕まえるというパターンが多い。残念ながら凶悪犯罪なるものは、数年に一度起こるか起こらないかだ。それに負けずに多いのが、少額訴訟のようなちいさな訴えに、簡易裁判を開いてやること。

保志がつつら考えるに、日本の歴史上、一番近かったのが、江戸の町奉行所だ。もちろん、あつちの人口過密ぶりと比べると大風呂敷なのだが、あの規模に二つしかない町奉行所が月当番で民事受付を、刑事事件の受付と当番月に関わらず、ずっと絶えることなく行っていたのだ。しかも、町奉行の定員は二。冗談でしょうというほどの少なさだ。全ての事件が拾いきれるはずも裁ききれるはずもない。自治組織が治安維持や、小さな争いを仲裁できるという機能を持っていなければ、即日破綻するような人員の些少さだ。

町奉行は午前中は江戸城に登城して、老中への報告と打ち合わせを行い、午後は所轄内のこれまた数が少ない与力よりきたちと、受け持ち区内の行政・司法・警察業務に当たる。夜は果てし無く続く書類仕事。

総合司法官の保志は、午前中とは言わないが現状の報告や進行中の全ての事案について、UN^{ワン}の総合司法庁に設置された、人口密度稀少域課の担当官に報告及び相談義務がある。そして、それが終われば、与力に相当するはずの、これまた数が少ない保安官と連携して諸般の業務を行い、計画を立ててお白州^{しろす}に相当する裁判を行う。それから、当然、総合司法庁のメインコンピュータにその事案ごとの逐次報告をあげなければならない。

相澤亜衣里が本業としてやっているように、人質をとつての立て籠もり事件だとか、銃乱射事件などを力仕事で解決していくような凶悪事件は、まず日常ではない。それに、民事の訴えに対応するといつても、事実が深いところに隠されていて、巻き込まれた人間を不幸にしないために、慎重審議が要求されるものは少ない。

裁判に持ち込むのだから、両者ともが自分は悪くないと思つている。だから、ちゃんと双方の言い分を聞く機会を設置した上で、しかるべき判断を、膨大な過去判例データベースを照会しながら言い渡し、片づけていくだけだ。

そういうことを総合的に考えると、保志がとにかく三分の一リストに名前が乗っている人間の、一番最初に出てきた人間を選んだという行き当たりばったりと違って、セレが選んだ迫神平和という男は、非常に適任といえる。とにかく、少額訴訟の取り扱いは、まるで手慣れている。（本職だから当たり前だ）

保志は大体、裁判のときはスーツにしているが、迫神はそれだとなんとなく気分が出ないと、法服を着る。過去に経験がない業務について、即任務に当たらせることは禁じられているが、本職の職掌範囲については、特別に訓練期間を設けず、申し渡しだけで現場に送っていいことになっている。

取りあえず保志は、シンクロライドに慣れきっている相澤には、

保安官事務所回りをさせて、どんどんたまる民事裁判を迫神に丸投げした。

これで、ジョリー・ロジャーの出現が確認できたら、いつでも現場に急行できるように、イットリウム輸送船の出航スケジュールごとくに、飛閃を監視に張りつかせている。亜空間輸送可能な速度まで加速するためには、十分な空間が当然必要で、イットリウム輸送船は、ニユー・イッテルビーから加速可能域に至るまで通常航宙する。

宇宙義賊などと自称する、あの不屈き者は、その隙間に海賊行為を働く。けれど、荷捌き先との関係なのか、それとも、イットリウムの取り引き価格を下げたくないのか、丸ごと持っていくこともなく、抜いていく。

抜き荷はちゃんと監視していないと、荷受地で重量計測するまで行われたのかどうかすら分からない。

「よかったじゃん、二人とも、ドサ回りはイヤだって言わないで」
セレに保志が気付いたのを把握したとたん、セレが言った。

「まあ、あんな最低なスタートだったけど、何とか収まってメダタシ、メダタシだ」

保志がそう言うのとセレがぶくくと笑った。

「オイラに任せときゃ、ちゃんと事前に知らせといたのに。縦置き
の埋め込み型棺桶なんて、全然一般的じゃないんだからね。あいあ
いの棺桶が開くのが遅かったら、迫神さんのデコ、絶対にガチ割れ
てたね。いきなり事故じゃ幸先悪すぎるし……。あいあいのオッパ
イに、迫神さんだけじゃなくてろくちゃんもみんなそろって、ちゃ
んと感謝しないと」

「セレ……、おまえ下品に拍車がかかってねえか？」

保志が呆れてそう言うのと、セレが真面目な表情をしてから文句を言った。

「だって、いつまでもオイラ、ステルス・セレちゃんなんだもん。ストレスたまる。ろくちゃんのソロならともかく、三分の一チーム結成ってことじゃん。だったら、オイラも混ざりたい。4444じやなくて、オイラとして、あいあいたちと仕事したい」

仲間外れだなんだのと、これでは子供と一緒にじゃないか。保志は呆れる。

「まあまあ、慌てるなって。ものごとには順序つつうのがあるからさ」

保志は我が儘をいう子供をなだめる様に、いかにも御座成りというところが見え見えの対応をする。セレが面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「ねえ、ろくちゃん。一つなんか理由でつち上げてさ、身体頂戴よ。カラダ

オイラ、アバタロイドで我慢できるし」

「残念だな、セレ。今年はいあいあいの身体買ボデーったから、予算オーバーだ」

「今までの持ち越し予算があるでしょうが」

そつけない保志に尚も食い下がる。

「血税の無駄遣いは許されてねえし……」

「無駄遣いじゃないよ。大体さ、あいあいと迫神さんが来るの、一カ月のうち十日でいいんだからさ、どうしてズラさせないわけ？　オイラ別に本体ないんだから、あいあいの身体にもちゃんと乗れるぜ。試用期間のお断りはなかったんだから、少なくとも向こう五年間のチームってわけじゃん。直接会いたって思うのは、人情ってやつじゃないの？　それとも、やっぱりオイラはただのT A Iだから、でしゃばるなって、そういうつれないこと言うの？」

マジに泣きが入ってきかねないので、保志は呆れた。本当にセレについてだけは、どこまでホンキで、どこまでが冗談で、どこから演技なのかよく分からない。

「腐るな。あいあいが半六に慰謝料だつて一種試験の個人教授させてんだから、同じ時間じゃないと……そうだろ？」

「だけど、バラバラの任務に当たつてもらっちゃつてて、どっちかつつーと、二人の時間つて取れてないと思うけどな」

保志が迫神を半六と呼ぶのは、もちろん、美耶子情報に受けたからだ。もちろん、本人の前では、「迫神君」と呼ぶようにしている。六法全書のほぼ半分を諳^{そら}じてるんじゃないかということから、弁護士先生がたからそう呼ばれているだけあつて、確かに、彼は判事として鍛えられているという感じがする。

大体、あの判決の読み上げの板に付き方は、見ているものを唸らせるし、その説諭の入れ方がさすがプロには適わないと思わせるだけのものがある。

もちろん、ネット裁判で済ませる様な公判は、保安官事務所の端末からであれば、その気になればいつでも傍聴できるものだ。次期バツパー候補、保志の後任の可能性がある迫神のデビュー戦ということで、第一回目の公判のアクセス数は近年見たことがないほどの数だった。

保志のスーツ姿を見慣れたものには、迫神のいかにも裁判官といった法服姿は、頼もしく映ったに違いない。低めの落ち着いた声で、分かりやすく判決理由を説明する姿は、保安官連中にはどうやら非常に受けがたい。宮崎保安官の横繋がりに情報によれば、早くも迫神ファンなるものができつつあるようだ。もちろん、宮崎保安官も含めて……だそうだ。

「でもさあ、今まで人が一杯なところに住んでたくせに、ここまで他に選択肢がなさそうなこんな職場で、職場内恋愛つて……人間つて変だよねえ」

「はあ？」

いきなりセレが言ったので、保志は鳩が豆鉄砲喰らったモードになる。

「迫神さんの心拍数、あいあいが半径三メートル以内に近付くと、確実にアップするんだけど、ろくちゃんはどう思う？」

「あの、あいあいに……あの、半六判事がか？」

保志が自然と素っ頓狂な声になる。

「あのさ、ろくちゃんだって、古女房の美耶子さんにエキサイトするんだから、健康体で若い迫神さんが、二十代の女の子に欲情したって、そりゃあ、無理ないと思わない？」

家族サービスに真面目に務めているだけで、特別にエキサイトした覚えはない。保志は憮然と腕組みをする。

「そんなに簡単に欲情するなら、向こうで過ごす三分の二で、いくらでも可愛い女の子がゲットできそうなもんだろуг？」

「……ろくちゃん……。あいあいもかわいいと思うけど」

可愛いというのは、語源的にいつても、基本的には小さいものにかぶせる言葉だ。統計的にあいあいが小さい方に分類できないのは、箱ものの方であるセレのメイン、4444だって異論はないはずだ。「可愛いっつーのは、問答無用に男をその気にさせちゃうようなものをだな」

「だったら可愛いで間違いないじゃん」

いいかけた保志をセレが遮った。保志はその確信的な物言いが不思議だった。男がその気になるという意味を、セレが分からないとも思えないし、自分があいあいの下着姿にその気になった記憶はない。

「クソもできねーやつに、人間の男の下半身事情が分かるかよ」
保志が切って捨てる。

「だから……、あんどとき、迫神さんの勃つてたし……」

ぶつと保志は息を噴き出した。お茶でも飲んでるときでなくて、心からよかったと思った。

「マジ……?」

恐る恐る確認する。

「間違いなく」

セレがVサインを作って突き出してきた。果たしてこいつは、意味が分かってこのマークを使っているのだろうか。保志はどっと疲れた。

それが本当の話なら、可哀相だが迫神は事故に遭ったようなものだ。いつもそうだというわけではないが、男というものは理不尽なことに、いきなり理性が暴走するような状態に、勝手にシフトすることがある。そんなとき、手持ちの理性の分量が足りないと、あっさりと犯罪者コースに乗ってしまいかねないほど、どうしようもなく強いアレだ。大体が、そんなことをしてはいけな、ということが明白な局面にいるときに限ってやってくる。

そういうときの下半身さまは、本体の都合を完全に無視して元気になるから、やっかいなのだ。男には男の不便さがあるということ、女は分かっていない。

そしてデータでしか物事を結局は捉えきれていないセレも分かってない。若い雌の感触に、突然男が突然暴走するのは、好き嫌いか、可愛い可愛くないとは別次元。単純に溜まってたところを刺激されたというのが、身も蓋もない正解だ。

あのととき、普通に棺桶から起き上がったただけなのに、初対面の女性の、それも下着姿の胸元に、顔から落下するという不幸な展開が待っていたことさえ不本意だろうに。挙げ句に、亜衣里はけたたましく悲鳴をあげたのだから、たまらない。凡人保志のシヨボい思考

回路は完全にフリーズした。

けれど迫神の野郎は不自然なほどに冷静だった。少なくとも保志にはそう見えた。

迫神判事が開いた扉からきっちり九十度の角度でいきなり最敬礼をかましたとき、保志は非常に遅ればせながら、自分のところにある壁面埋め込み型棺桶が、一般的でないことを思い出した。あ、新しい棺桶の蓋に、迫神判事の頭が激突すると思った瞬間に、あいあいの棺桶の蓋がすいっとスライドした。あれの蓋がはね上げ式だったら、多分迫神は顎を持っていかれて壁目掛けて飛ばされた筈で……当然、額直撃よりも大きいダメージを受けたに違いない。

あのととき、迫神が相澤の棺桶に激突するのは避けられないと、思わず保志が目を閉じた直後に、女の子の甲高い悲鳴が耳をつんざいた。ぎよつとして目を開けると、相澤の棺桶の蓋があいていて、あろうことか、現職S A Tの相澤隊員は下着姿で横たわっておられたのだ。そこに、見事に迫神はつつこんでいた……。どうやって、だれをフォローしたらいいのか、全く分からなかった。あそこに口先T A Iのセレがいなかったのは、むしろ救いだと思うのは自分だけだろうか。指摘しないことが武士の情けということも、間違いないのだ。

シンクロイドが被服品や服飾小物をコピーするときに、一番表面の見てくれだけを再現するだけで、機能性は一切無視されることは、シンクロライドしたことがある者にとっては完全な常識だ。銃弾が飛び交う戦地に突っ込んでいくのが仕事のS A T隊員は、シンクロライドするときにそんなコピー装備で望める訳はない。普段のルーティーンとして、彼女はそういう格好で棺桶りつつこまり、S A Tでは、シンクロ受信器はロッカールームに設置してあるものらしい。緊急出動時に脱ぐ時間的手間を省くのは、多分当然のことな

のだ。

あとあと事情を聞くと非常に納得できたのだが、まさか保志にしてみれば、相澤がそんな格好で来るとは思ってもいない。お互いの常識の食い違いが、とんでもないシチュエーションの種になるというのは、往々としてあることだ。

とはいえた。意図せざることとはいえ、いきなり裸同然の女の胸に顔から突っ込むという無体むたいをやらかした迫神判事は、状況を把握するやいなや、見事な反射神経で棺桶から飛びのいた。百八十度身体を回転させ、上着を脱ぎ、見事なコントロールで背後の棺桶目掛けて放り投げる。まったくフリーズしてしまって、ノーアクションだった自分とはえらい違いだ。

迫神のやつ、おっ勃つてた状態で、あの行動を取ったなら、それはそれで、別の意味で大したものだ。

相澤の方は、ガタイに似合わず、女の子らしい可愛い悲鳴を上げていたくせに、迫神が上着を投げて寄越したのを見るや、動きは素早かった。

やおら身を起こして、微妙な弧を描いて飛んだそれを引っ掴む。普段そういう勢いで出撃服を着込んでいるんだろというそのままに、ばつしり遠慮なく着込む。と、保志に向かって噛みつく勢いで聞いた。

「ここ女性用更衣室には出ないんですか？」

「出ません」

「更衣室そのものはありますか」

「……な、ないです」

その言葉を聞くと、彼女は言った。

「すみません、出直してきます」

それから棺桶に迫神の上着を着たままさつさと横たわり、蓋を閉

じる。多分、そこからライド・オフして速攻で着替え、再度ライディングしてくるのに、驚いたことに相澤は十分かからなかった。普通は、ライド・オフした直後は自分の肉体を自分であるということ把握するまで動けないものだ。立て続けに二度目のライドでは、チェンジャブル・ボデトランスフォームもちろん可変筐体の変形の過程は省けるにしても、二度目にやってくるのにその時間は早すぎる。

そんなささいなことで妙なのだが「プロだ」と保志は思った。あの美耶子に対してもそれは常々思っているのだが、何かにおいて専門家であることは信頼できる。すべてにおいて、助っ人根性しかないやつは、信頼してはいけない。それが傍目にみてとんでもないような種類の職業であっても、自分の仕事に精通している人間というのは、そうなるまでに継続して真摯に取り組んできているということだ。だから、他の人間の仕事というものにも、自然と敬意を払って動くものだ。

名簿に載って来るのだから、最低ラインはクリアしているだろうということ、熟考せずに決めてセレの手前引くに引けなくなった保志だが、見れば相澤は一種試験持ちですらなかった。一瞬、もうちょっと考えればよかったと思ったことは間違いない。

けれど、相澤の経歴をじっくり見てうなづいた。SPもSATもちらでも評価は一級だ。それどころか二種試験さえ、法学部出でもないのに、就職してから独学で取っている。デカイクて丈夫というのは、彼女の価値の半分も占めていないのではないかと、そういう気がしていたところだった。

再びやってきたときに、さっき起こった出来事は、まるでなかったかのように、蒸し返すことを許さないというように、いわゆる普通の挨拶をしてきた。迫神がジャケットを着てないことが、形式張っているはずの初対面に、カジュアルな印象なのが若干の違和感と

いえばそつだというような程度の普通さだった。

つまり、相澤は気持ちの切り替えも速いし、良くも悪くもポジティブ志向で出来上がっているのだろう。バッパーのような、地味な仕事は、鬱性分では続かない。相澤は、この仕事に対する性状的適正は、かなり高いのではないかと保志はそのときに思った。

彼女はSATの制圧班で、一番最初に突入して、後続のための道を確保するというポジションにいるらしい。それで彼女の死亡率の高さに納得がいったのだが、あの高い機材をお釈迦にする常習犯なら、周囲の評判は悪いと思いきや、そうではなかった。

* * *

「あいあい、ちょっと相談があるんだけど」

亜衣里とて、いつも死んで終わっているわけではない。殆どの場合は無傷で生還している。平和なニッポンで、そうそう毎日のように立て籠もり事件だの、誘拐事件だのが発生しているわけではないから、基本的に訓練としてシンクロライドすることが多い。今日も、攻め役になっている別チームの連中を、ペイントだらけにして無事人質を確保して、成功裏にミッションを終えることができた。

SSS（SATサポート・スタッフ）の金城は、亜衣里がシンクロライドすることでストレスを感じたり、自分との整合性をつけられずに途方に暮れたりすることが殆どないのを知っているので、亜衣里が自分であることを把握するのと殆ど同時のタイミングで切り

出した。

「なんですか？ 金城さん」

「あなた、三分の一、テストランしてみて、修行先の師匠にも文句もなく、結局、本格的に参加するんでしょう？」

「ええ……。その、一種試験で苦勞しそうですけど、頑張ってみようと思ってます」

正直、亜衣里には、保志総合司法官という人となり、まだまるで見えてこない。とりあえず慣れてこいと、保安官事務所回りを言いつけられて以降、アポイントメントを取って、受け持ち管区に十五ある保安官事務所のアバタロイドに乗りまくっている。シンクロライドした状態でアバタロイドに乗るというのは、どうにも不思議な気持ちになるものだったが、彼女のサイズが普及品のシンクロイドに合わないのだから、慣れるしかない。

「もし迫神君の薫陶よろしく、無事一種持ちになって、最終的にバツパーを希望するなら、君はフランス辺りの管区の方が乗れるシンクロイドが多くて便利かもしれないな」

冗談のつもりなのか、半分笑ったような顔で、保志総合司法官はそう言った。たしかに東洋人としたらかなり規格外だけれど、あの辺なら自分程度のガタイは珍しくも何ともないだろう。もちろん、^{ウン}UNにフランスも加盟しているし、言葉の問題がクリアできるなら、それも一つの選択肢としてありかなと亜衣里思った。

宇宙開拓最前線の都市というものは、本当に町並みそのものがSF小説の挿絵を地で行く様なもので、その景色は地上のどんなものとも異なっている。保安官事務所から一步出た外の景色に圧巻されて、その町並みを歩けるだけで、役得気分満載なのだ。カメラで見

ていることを意識しないですむ、シンクロライドだったら、もつとステキだろうにと、亜衣里にもそういう思いはある。

フランス語も日常会話程度ならどうにでもする自信はあるが、裁判を取り仕切る立場でフランス語を駆使できるほどの語彙力も応用力も今のところはない。一種試験を無事に取れたら、平均身長が高そうな国の国語をブラッシュアップしようと、亜衣里は密かに決意しているのだった。

金城が勿体ないとうようにため息をついた。

「人の希望にケチはつけられないものねえ」

と、それから毅然と顔を上げて亜衣里を見た。

「ねえ、あいあい。あなた、向こうでは育ててもらってる子供だけど、こつちではそろそろ若手育成にシフトして親仕事する気ない？」

「私が……ですか？」

「兵藤班長がボヤいてたわよ。あいあいぐらい見えるやつが育たねえと、シンクロイドはぶっ壊れるわ、ミッションは失敗するわ、精神病院送りは増えるわ、たまったもんじゃないって」

「死に方が下手なのがアタッカーだったら、そりゃ、ヘーさんは困りますねえ」

制圧一班の班長である兵藤を愛称で呼んで、亜衣里は爽やかに笑い声を立てた。

あいあいした後先見ずに突っ込んで、玉砕しているわけではない。ちゃんと後続の通路を確保するために、ゴーグルモニターという、視界の上方に仮想として浮いた形で映し出すことができるモニターを使って、チームメイトの位置上方と、熱センサーで感知できている人の位置（確保対象か保護対象かは、勘で決める）を正確に把握し、どれとどれを潰せばルートが開けるかいつも考えて、まさに相

手の次の手を潰せる場所で相手の駒を道連れにして死んでいる。

制圧の現場というのは、攻守の順番がいま一つぞんざいなだけの詰め将棋みたいなもので、捨て駒だって、捨て駒として有効に働かなければならない。つまり勝負と関係ないところで、勝手に行ったりに来たりしても、「無駄合」にしかならず、手数に数えてもらえないのだ。

制圧に「飾り駒」 あってもなくても影響がない駒 は必要ないし、「余詰」 最短手順でない攻め方 は不格好だ。

攻方の脳味噌である班長へーさんの描いているルートを、ちゃんとイメージできないで闇雲に突っ込んで、捨て駒になるべき局面までもたないと、後続がちゃんと攻められない。

「兵藤班長は、一番いいのがあいあいに続けてもらうことだけど、そろそろ世代交代も視野に入れようと思ってたところだっておっしゃってたわ。丁度いいから、是非ちゃんと動けるアタッカーを二、三人育ててくれないかですって。私も賛成よ。あいあいもいつまでも若手じゃないんだから、アタッカー現役でいられるのなんて、多分あと三年がいいところでしょう？」

「金城さん、若手じゃないんだから発言、地雷ですっ」
妙なところにあいあいがつっこむのに、金城はころころと笑った。

「そりゃあ私だって現役おいだされるときは不満だったわよ。だけど、仕方ないじゃない。人間、年をとれば衰えていくんだから。自然の摂理に文句はいえないでしょ」

「それはそうですけど……」
セックスどころか、たかがキスまで、ガキンちよのころの両親とものしか記憶にない亜衣里は、それでもめげずに、棺桶の蓋が開くたびに、白雪姫のように「いつか王子様が」を夢想している。そんなあいあにとつて、「若くない」というひと言はハンマーで脳天を叩かれたように、効いたのだった。

11・イチゴの件

官舎スペースの方の一室を、保志は亜衣里の取りあえずの部屋にしてくれた。うっかり亜衣里が普段モードでトリップしてきても、回りが困らない様に、亜衣里専用の棺桶も、この部屋に運び込んでくれた。

あれからも、迫神は何度かトリップ直後に身体が九十度自動的に置き換わっていることをうまく脳味噌に刷り込むことができないらしく、迫神が思い切りよくこけるのを、亜衣里は幾度となく目撃している。

あれを見るたびに、医者と保健監督官と、突入服のファイター以外に障らせたことがない亜衣里の胸に、迫神の顔が埋まっていた瞬間を思い出してしまう。彼女はそれだけで赤面してきそうになる。

女の子であるという主張を大いに持っている亜衣里だが、成り行きの実際問題として、女の子としての経験が圧倒的に足りない。だから、あのシーンを思い出すとき、「気持ち悪い」だの「ぶち殺してやりたい」ではなく、「恥ずかしい」と心が動いていく段階で、脳味噌が勝手に迫神を好ましい異性に分類していることに気付いてもいいわけなのだが、全くその可能性に意識がいかないのが、いかんせんズレている。

もっとも、思い込み的亜衣里仕様異性等級基準においては、自分をお姫様抱っこしてバージンロードを歩けるほどにマッチョであることが最低ラインなので、迫神をそういう対象に思うことはありえないのだ。

だからこそ、迫神が傍にいるとき、妙に居心地が悪いのは、初顔

合せのときの最低な成り行きの、副産物というか後遺症のようなものだと思っている。

大体、迫神自体がまるで亜衣里のことを意識しているふうでないのが気に入らない。どうせデカイ女の中身が乙女なんて、しかも三十も間近に迫って家族チューの味かしらない女なんて、存在してるなんて思ってもいないのだろう。

「迫神さん」

亜衣里が呼びかけると、迫神がゆつくりと端末から顔をあげた。

「次の問題できちゃいましたか？ すみません、まだ、ちゃんと添削できてなくて」

迫神はいつも丁寧な言葉づかいをする。裁判官というのはそういうもので当たり前なのかもしれないけれども、どうにも調子が狂う。迫神が、亜衣里の一種試験の個人教授を引き受けることになったのだって、いわゆる空気が読めない典型の要領の悪さに、間違いく起因する。

* * *

挨拶を終えて、自己紹介も終えて、これで解散という段取りになったとき、一番最初のアレを、亜衣里はきれいさっぱりなかったモードで行動していたのに、よりによって、あやつは蒸し返してきたのだ。

「先程は、その……。……すみませんでした」

と。謝られたら……。なかったことにしたかった亜衣里にしてみれば、思い出すしかないではないか。こいつは、ド阿呆か？

「……何をですか？」

無理矢理、しらばっくれようとしたのに、言うに事欠いて、こう言ったのだ。

「その……イチゴ……」

イチゴというのは、あの日亜衣里が着けていた買ったばかりの上下揃いの下着の模様だった。気分だけは女の子仕様の亜衣里だから、可愛いそういうものはもちろん欲しい。欲しいのだけれど、店に行ってもだいたいサイズがなくて涙を飲むことになっている。だからもっぱらネットの通販サイトが御用達のショッピングモールだ。

亜衣里が収まるサイズのそれらは、日本のサイトだと、どこのばあさんが着るのだというような、人生終わったようなものが多いが、ヨーロッパやアメリカなどのサイトは、十分に可愛いものが売っている。

特に、ビスクドール仮装事件以来、見えるところの服から可愛い要素を思い切って捨てて以降、逆に下着は可愛いもの志向に歯止めが利かなくなっている。

最初は呆れていた金城も、もはや何も言わなくなっている。

もちろん、棺桶に入るときは見えてくれより実だから、普段はおむつを着けるのだが、あのときは突入服を着るための更衣室ではなく、自分の部屋だった。当然、まだまだ下が緩いわけでないから、個人持ちのおむつのストックなど家にあるはずもない。ついでにライド時間も長くなる予定はなかったし、ここが一番肝心なのだが、何よりも死ぬ予定がなかった。ので、まあそこまで用心する必要はないかなと、下着だけで飛び込んだ。死ぬ予定がないというところで、一歩思考を進めて、転送先で突入服を着なくていいというところに

到達できなかったのは、やはり自分のミスだと亜衣里は思う。

でもあのとき、服を着て棺桶入りするということに、ちらりとも考えがいかなかったのだから、仕方ないじゃないか。

亜衣里の目の端に映っていた、大人な保志総合司法官は、迫神の態度が間違はなく間抜けだということを了解しているという感じで、額に手を当てて天を仰いでいた。保志総合司法官も、絶対にイチゴを確認しているに違いない。亜衣里は拳を握りしめた。二人まとめて、なぐりたい……、いや、ここは我慢だ。私は大人だ。

「……見たんですね」

亜衣里の声が自然と低くなった。若干赤面した拳げ句、穴があったら入りたいとでも言う様な気弱な感じで迫神が俯く。そんなに見たくなかったんですかと思うと腹が立つ。

いみじくも古人は、こんな間抜けな行動を嘲笑^{あざわら}ってこう言った。

雉も泣かずに射たれまいに……。

亜衣里は迫神の脳天をぶん殴る代わりに、自分が作りうる限り最大限に可愛らしい笑顔を作って微笑んだ。乙女の下着姿を堪能した責任はとってもらおうじゃないか。

「貰い事故でも、事故は事故。加害者にはきっちり責任取っていたできます」

「……え？」

人が折角スルーしたものを、態々蒸し返してきて、「いえいえ、気になさらないで」などという言葉を貰えると思ったたら大間違いだ、このタコ。亜衣里は、もう一段階、笑顔の強度レベルを上げた。

「視界に入ってなかったと言いつても、車で歩行者に突っ込んだら、運転者に注意義務違反があったと……それで間違いありませんよね。迫神裁判官」

「あ……はあ、まあ」

それとこれとは話が違ふだろうと、その目つきが語っていたが、知るもんか。ごめんといえなんでも許されると思ったたら大間違いだ。「ごめん」とうっかり言ったがために、裁判で言質を取られてえらい目に遭つてゐる人間なんて、厭というほど見てゐるだろうに、応用の利かないやつ。

「でも……責任とれつて、何もしてないし……」

「何も？」

亜衣里は視線に力を込める。伊達^{だて}に日常茶飯事で凶悪犯と銃弾で会話しているわけではないのだ。彼女の視線の力は、はつきりいつて強かった。

「え……いや、まあ……すみません」

視線に押し出されてしまったのか、多分自分が悪かったとは露ほども思つてもいないはずなのに、もう一度迫神は謝罪文句を口にしてしまった。亜衣里は思った。人生に挫折もなく、きつちりお勉強はできて来たのかもしれないが、間違いなくこいつは阿呆だ。

「『無料』で、司法試験一種対策に協力してください。それで『イチゴの件』は、なかったことにしてさしあげます」

「あ……はい、ありがとうございます」

やっぱりアホだ、こいつは、と思つたのは、亜衣里だけではなかった。そして、その会話で保志は確信した。三分の一チームの職業訓練生二人の、訓練期間における力関係が決まってしまったのを。人間の社会的上下関係つてもんは、出会い頭のカマシ合ひの結果がホントに重要だよなあと、保志はつくづく思つたのだった。

* * *

「いえ、そうじゃなくて、根本的なところを教えていただきたくてあの……、一種ってUN準拠ウンじゃないですか」

「うん、そうだね」

国連の愛称が、日本語の相槌とほぼ同じ発音というのは困ったものだ。うっかり亜衣里は笑いたくなる。けれど、迫神は至って真面目な顔をしているので、笑うのも憚はばられる。

「結局、国内法の考え方と、UNの考え方が乖離する場合って、日本人の場合、UNの解釈って納得できないというか、なんかしっくりこないんですね」

「……まあ、そうだね」

「日本人同士の訴訟の場合、総合司法庁の親方がUNだからって、一種の解釈をねじ込むのって、なんかしっくりこない気がするんですけど。迫神判事も実際、ずっと東京地裁で二種準拠でやってらっしゃるでしょ？」

迫神が、ふむ……、というような微妙な間を置いてから、亜衣里に向き直った。

「結局、一種と二種の違いっていうのは、便宜的なものだと思って間違いないと思うよ。つまり私たち裁判所は」

亜衣里はまた笑いたくなる。なんで、裁判官という人種は、自分のことを『裁判所』と呼ぶのだろう。自分がする判断には私見は交えていませんというアピールのつもりなのか、それとも単に慣習がそうであるから、何も考えずに使っているだけなのか。

亜衣里が笑いそうになっているのに気付かず迫神は続ける。

「一人ひとりが、厳密に、だれの判断を仰ぐことなく、自分の判断で法律と向き合って判断を下さなければならぬだろう。それは近代以降の裁判は、自由心証主義を基本にするから、事実認定に関しても、証拠評価に関しても、寄り掛かる先は法のみになるというか、そうしなければならぬ。裁判はそれに関わった人間の人生を正すもすれば、狂わせもするからね。それによっても何も変わらないっていう、最低のケースもあるけど」

つい、中身を考えずに、その声にうつとりしそうになって、亜衣里はこれはまずいと気を引き締めた。この低めの落ち着いたトーンで、澱みなく出て来る言葉は何とも耳に心地よく、うつかりしていると音に酔ってしまっていて、肝心の話の内容が理解できていなかったりする。

亜衣里が出掛けていく先の保安官事務所でも、滑り出しの迫神判事の評判は上々だ。いい判事さんが来てくれて有り難いと、そんな感じだ。

パトロールと称した、観光のようなものばかりしている亜衣里には、顔見知りもだんだん増えてきているが、迫神は東京地裁に出勤していたのを、国連総合司法局イットルビア地区派出所小法廷（司法局派出所に大法廷はおけない）に出勤しているようなものだ。

ここに慣れるまでは、現職での経験を大いに活かせるような仕事を割り振るから。

という保志の方針は分からないでもないけれど、保志はどうにもうつかりため込んでしまった訴訟・事件を、迫神にほいほい押しつけているようにしか思えない。総合司法官という響きはともかく、現状は小さい裁判に追いかけられるのだろうか。だとしたら、気が

重いことだ。

自分も無事に一種持ちになって、保志や迫神がやっているような裁判官としての仕事ができるようにならなければとは思っけれど、正直、どうにも気合いが入らない。

「相澤さん……、聞いてる？」

まじまじと見つめられて、亜衣里は焦った。声に聞きほれていたなどと返したら、どういう反応が返ってくるか知りたいわけではないのだ。

「ええ、もちろん」

保志は亜衣里のことを、どこで調べたのか「あいあい」と呼んでくるが、迫神は仕事でなくても、苗字にさん付けという無難モードだ。どうやら亜衣里とは、必要以上に親しくなるつもりはないらしい。

仕事仲間には命を預けるのが基本でやってきた亜衣里には、どうにも迫神の距離のとり方が他人行儀な気がしてならない。それはもちろん、実際のところ他人なのだけだ。

亜衣里は必死に迫神が何を言っていたのかを思い出す。

「自由心証主義を採る以上、裁判官が頼れるのは法のみということころまでは納得しました」

耳に残っていた断片を切り貼りして、無難だろうと思われる答えを紡ぎだす。迫神がにっこりとしたので、それで答えがちぐはぐではなかったのだと、ホッとする。

「まあ、あとは増えていくばかりの判例データベースですけどね。それで今までは建前の話です。ここからが、相澤さんの疑問になっている箇所なんですけどね……」

私の疑問って何だっけ、と亜衣里は情けないことを考えながら、迫神ではなく、迫神の説明に意識を集中させる。

「ああそう、刑事事件は別ですけどね……、人間の記憶って、本当にその人のために、すごく簡単に書き換えられてしまうものなんだと……私は思うんですよ」

「……え？」

迫神が言い出したことが、余りにも亜衣里の予想と違う方向だったので、彼女はとまどった。亜衣里が聞いたのは、日本という国の地方の法がよしとすることと、国連司法庁準拠（UNJAC¹ The United Nations judicial agency conforming）の法の正義に矛盾があるとき、どうするのかという素朴な疑問だったはずだ。それが記憶？

「今現在の記憶に従って、嘘を言わない宣誓をしてもらいますけどね、あれが結構曲者くせものなんですよ。意外と人間って、すごく簡単に、日常的に記憶を自分の都合のいいように捏造してしまうものなんだって思いますよ、私は。両者の証言が全く違うととまどいますけど、だからといって彼らにとっては、嘘じゃあない場合が殆どなんです。もちろん、恣意的にも、故意でも、つこうと思つてつかれる嘘もありますけど、例えば離婚の裁判とか、敷地の境界の争いとかね……、双方嘘を言っているつもりはないんですよ。相手が嘘をついていると思つてもね」

亜衣里は、迫神が何を言おうとしているのか分からない。

「だからね、証拠となるものが確かに出てきて、自分の間違いを指摘されると、すごく戸惑います。相手の言い分を聞いて、自分を主張して、頑なになったり、怒ったり、女性だと泣いたりするでしょう……。だけど、当事者でない中立の立場にある人間が聞いて、冷静に公正に判断してくれば、自分が正しいと言つてもらえるはずという確信があるものが訴えを起こしてるんですね」

「迫神さん……私の質問、分かってらっしゃいます？」

たまらず、亜衣里が言くと、迫神はもう一段階深くみえる笑顔に

なった。

「まあ、我慢して聞いて。ちゃんと質問のところに帰るから。裁判官は本筋としては、法にしか相談できないんですけど、個人の主張と、その個人が帰属する社会の通念との間に、余りにも齟齬^{そご}がある場合、世界がみんな敵になっちゃうんですよ。だから、正義と思われるものを味方に欲しいんですね……結局のところ。お金が欲しい人も多いですけど、お前が正しいって、それを証明したいという人も意外という」

亜衣里は一生懸命聞いていた。その一生懸命は、亜衣里としたら、どちらかというと、ともすれば、迫神の声に聞き惚れそうになるのを、必死に文脈に集中力を合せようと頑張っている一生懸命さだったのだが、そんな区別が迫神につくはずもない。

職業柄、正義であると信じなければならぬことを、控えめに主張ばかりして、自己主張そのものを表立ってすることは、迫神にはあまりないし、裁判の現場というのは、どちらかというと、これでもかという自己主張を聞き続ける方にウェイトがある。

亜衣里の気持ち真っ直ぐに向かって来るのが、迫神には何ともいえず心地よかった。そして心地いいと思うと、イチゴの一件がどうしても思い出される。

迫神も思う。冷静に考えれば、相澤さんは、どうしても残るバツの悪さを流そうと最初してくれたのだ。だから、態々謝ることはなかったのだ、きっと。だけど、バカ正直に謝ってしまったから、なかったことにできなかった。

法を他人の人生に押しつけるプロのくせに、どうして自分はこう、日常生活におけるとっさの判断スキルが低いのだろう。

相澤さんは、きっと普段も真面目で、機転も利いて、視野も広いに違いない。だからSATなどというどう考えても危険な部隊で、

自分の役割を見誤らず、仕事をきっちりと果たせるのだろう。

それにしても見事に豪勢な大きさだ。実際に手合わせしたことはないが、実践知らずのスポーツカラテなど、やってみても太刀打ちできないかもしれない。じっさいにやってみたら、どうなんだろうかと、うっかり考えたとき、別の文脈のやってみるがつい脳味噌を過つて、ついでに、シミュレートしそうになって、自分の下衆さ^{げす}にうんざりする。真面目な法解釈に対する自説をぶち上げているというのに、どういうことだ。

これも、絶対にイチゴの一件のせいに違いない。迫神はつい勢いで半分までいってしまった妄想を何とか食いとめた。ステディな相手に不自由してる男なんてのは、本当に情けない。

あのとき……、何だか分からないうちに、顔が柔らかくてめっちゃくちや氣持ちいい感触の中にいることに気付いたとき、イチゴ模様が目の前で踊っていたのだ。イチゴは好きだから、うっかり「ああ、久しぶりにイチゴ食いたいな……」と思ったのが、いけなかったのだ。この先も食べることはないだろう相澤さんまで、食ってみたいと、脳味噌が勝手に思い込んでしまったようなのが、まったく我ながら始末におえない。

向こうにしてみても、冴えない男に、美味しそうと分類されるのは心外だろう。

けれど、迫神の冷静な部分は、真面目な話を続けていたが、そうでない部分で、顔や手は焼けてるのに、胸はイチゴが似合うほど白かったよなあ　とか、この子、睫毛が長いなあ　などというような、亜衣里に向かう、どうにもサカリがついてるといった色彩が濃い思いが湧いて来るのを止めようがなかった。

「その人が所属している社会の一般的価値観は……」

真面目でない亜衣里と、真面目でない迫神の中央で、真面目な迫神だけが、一人頑張ってお勉強を続けていた。

12・餅は餅屋に

亜衣里の棺桶置き場になっている部屋で、法解釈うんぬんという色気とは遠いところにあるような話をしていた二人の、それでも続いている会話を遮って、壁面モニターが数回点滅した。いやでもそちらに目が行く。

と、保志総合司法官の姿が大写しになった。

迫神君、あいあい、お勉強タイムにじゃましてすまん。今日はまだ時間あるか？

保志の態度は、別に普段と変わったところがまるでなかったが、格好がどう見ても亜衣里が現場に行くときの突入服のようなものになっている。しかも何事も起こっていないようにのんびりみえる表情ながら、武装を整えつつあるのは明白だ。

「事件ですか？ 保志総司官」

亜衣里は即座に、まったく勉強モードから現場出勤モードに自分が移行したのを実感した。何だかんだ言っても、シンクロイドで死ぬことは、ゲームで死ぬのと同じで深刻さがないのだろう。生きてミッションを完^{まっ}了するのは気持ちいいし、シンクロイドが致命的な損傷を被って戦線を離脱すれば悔しいが、実際の生死とか^{セキユリテイ・ボリス}け離れていることで、ミッションに臨むに当たって、SP^{セキユリテイ・ボリス}だったころは、いつも何がしか背負っていた覚えがある悲壮感というものが、今の仕事では全くない。

人質が射殺されてしまったり、救護に向かったものの一般人の死体がごろごろしてたり、シンクロイドでもアバタロイドでもない生身の実行犯を、行動の自由を奪うだけで十分なのに、うっかり死亡

させてしまった場合とか、いろいろ落ち込むこともあるが、それに捕らわれていたら、いい状態で行動できない。

この切り換えをばさばさできないと、ありがちなことに、心療内科のお世話になることになる。自分でも思っけれど、亜衣里はそういう意味でどこか鈍いのだろう。人の命そのものというものに。でなければ、説明がつかない。

うん。ルテチウム鉱山で、どうやらコソドロが出たらしい。上手いこと、坑道の入り口を封鎖できたんで、確保してくれっっちゃう要請が出る。普段ならソロなんだが、一応向こう五年間はチームなわけだから、いっちょチーム戦デビューと洒落こみたいんだが、付き合うか？

待ってました。とばかりに、亜衣里は椅子から跳ね上がった。

「了解です、装備します」

悪い。あいあい、反応が鈍くなるのは分かるが、向こうに君が乗れる大きさのボディがないから、シンクロイドは迫神に譲ってくれ。君はアバタロイドで頼む。

「えーっ」

思わず不満を表明する声が洩れると、隣で小さく迫神が噴き出していた。失礼なやつ。

そうそう、それから、私は前から言ってるが『餅は餅屋に主義』なんだ。あいあい、突入の指揮頼むぞ。

「……よろしいんですか？」

亜衣里が一瞬戸惑う。突入の現場で指揮を委ねられるということ、命そのものを預けるに等しい。こういう現場に保志が十分に慣れていることは、画面に映っている装備を整えているやり方を見れ

ば疑う余地はない。彼にとってみれば自分はヒヨコぐらいだろうし、普通の男は女なんかに指揮を任せたがらない。これだけは間違いく確かだ。

現役のアタッカーの勘の方がロートルよりや頼りになる。

保志があっさり言ったので、亜衣里はむしろ狐につままれた感じがする。

それから、どつちかつつーと私の気分はこうだ。『お手並み拝見』。あいあい、受けて立つたろ？ 君なら。

保志も多分、生身で行く気はないのだろう。知死レベルのダメーシを喰らう覚悟も、まあ、当然あるに違いない。それで病院送りにならないだけの自信も。

「ありがとうございます」

亜衣里は迷う必要がなかった。

「では、現時点での全ての情報開示を求めます」

了解した。4444。この件に関して、あいあいのアクセスレベルは私と同列に。

短く保志が言うと、壁面モニターが了解したというように、短く二、三度点滅した。さっき、自分の注意を引きつけたときも「あれ？」と思ったのだが、どうも、保志は音声制御がキライなのだろうか。

とにかく、あいあいは、彼女が見慣れた指令車とモニター前と違

って、コンソールパネルっぽいものが全然見当たらないので、音声指示にすることにした。

「SELEN4444。相澤speaking。認識してますか？」

はい。standby完了してます。

迫神よりもっと平坦に聞こえるが、いわゆる世間一般でいうことのT A Iボイスだ。保志の印象からいって、なんとなく女声を使っているような気がしていたので、意外だった。

「時間短縮で、ミッション中の呼び名を使いたいのだけけど、なんて呼べばいいかしら？」

セレでいいですよ。

画面に映っていた保志が、何故だか軽くずっこけた様な気がするのは、何かの間違いだろうか。

「了解。セレ。保志総司官は保志さんでいいかしら」

保志総合司法官のコードネームはろくちゃんですよ。相澤さん。

「ろくちゃん？　そういうふうにお呼びして、失礼でないのかしら。

ぜー、はい、差し支えないと思います。オイ……えっと、私も相澤さんを、あいあいとお呼びしていいですか？

「もちろん」

一人と一台の会話を聞きながら、セレの現場好きには困ったもんだと、保志はつくづく思っていた。「ぜー」は絶対「ぜーんぜん才

ツケー」で「オイ」は「オイラ」と言いたかったに違いない。どう
いう制御をしくさってるのか分からないが、4444はどうやらイ
ンターフェース的に知らぬ半兵衛を決め込むつもりらしい。444
4もこのテの現場には、セレを出すことに異存はないのだろう。

迫神に身体をとられているから、いつものヤツになるのは無理と
して、多分、飛閃を出せと言って来るに違いない。確かに坑道につ
っこむには飛閃ではデカすぎるが、中で片づかずに延長戦になり、
外でのドンパチになってしまったら、飛閃は役に立つ。大体が、こ
こいらの者の中には全体として保志の愛機のファンは多い。たかが
ジャパニーズ・アニメの影響だとしても、侮ってはいけない。応援
要請してきたLu-8坑の連中も、飛閃の勇姿を期待しているよう
な気もする。

「セレ」

保志は声をかけた。

「なーに、ろくちゃん」

心なしかウキウキしているように聞こえるのは、気のせいに違
ない。TAIだって結局のところAIにすぎない。嬉しいとか、楽
しいとか、そんなんはない筈だ。うん、絶対でない。あつてたまる
か。　そう思いつつも、気心した仲間として、保志はセレを親
指を立てた。

「路線変更。飛閃……出すぞ。耐Gカプセルにあいあい突っ込める
か？」

「窮屈だろうけど、何とかなると思うよ」

「4444、あいあいと半六が武装完了したら、飛閃の格納庫まで
案内して。セレ、飛閃出動準備始めるように。お二人さん、耳は動
くだろう。行動しながら聞いてくれ」

亜衣里は隣で鳩豆状態の迫神に視線をやった。

「保志さんが言ってる半六って……迫神さんのこと？」

迫神は苦く笑って軽く頷く。幾ら自分でも、六法全書を半分も諳そらんじてなどいるわけがない。あの渾名は、完全に若造のくせに爺むさくも説諭好きな自分を、揶揄やゆしているものに違いないのだ。

何で、保志総司官は、自分のその渾名を知っているのだろうか。そう迫神は訝いぶかった。やっぱりルートは、美耶子先生だろうか……。

この渾名の由来を聞かれたら何と答えればいいのだろう。けれど、亜衣里はそこに全く興味はいかず、ただ迫神が半六ということで納得したらしい。四音同士で短縮はなされてない気がするが、「さん」を省略できるだけマシなのだろうか。それならば普通に苗字から「さん」を抜き取っていただいて構わないのだが、それはそれで呼びにくいかもしれない。

4444の音声案内に導かれて進んできた廊下で、完全武装の保志が立っていた。亜衣里も似た様なものだ。ただ一人、迫神だけがどうにも音声ガイドどおりに着付けてみたけど、全くサマになっていないという雰囲気である。

ここに来る様になってから暫くたつが、基本、法廷とそれにかかわる書類仕事に追いかけている迫神には、全くこういう格好をして、そういう現場に出るといふことの覚悟すら付いていなかったのだから仕方がないだろう。

「ルテチウムを知ってるか？ あいあい」

保志が迫神を無視したので、迫神は若干面白くなかった。そんなもん、自分だって知らない自信がある。ちよつとばかり法律を知ってるからって、何もかも知ってるという前提で、説明をハチにされてはたまらない。大体、セレの説明でなんとか、装備を整えたものの、着付けが果たしてこれでいいのかも分らないし、使い方に至ってはさっぱり不明だ。シンクロイドで死んだところで実害はないけれど、なまじつか端末の高価さを知っていると、そんなにあっさり壊して構わないものとも思えない。

「知りません」

噛みついて来る様に即答したのが迫神だったので、保志はちよつとだけ思考が止まって、それから徐に愉快になった。お前は知らないという前提で話されると怒る男は多いが、迫神は自分の知らないことを知っているという前提で話がされるのは不本意らしい。男にしては珍しい。

「イットルビア名物、イットリウムと同じレアアースの一種だ。科学的性質もイットリウムに近いそうだ。我等がHRB^{ハーブ}でも、金・銀よりも採れるぐらいだから、希少性には若干欠けるんだが、ランタノイドの中では少ない。でも、それより何より、希土類元素からの分離に手間が掛かる」

亜衣里には、何がなんだかさっぱり分らない。

「分離に手間……つまりは、高価だってことですか？」

迫神が言くと、保志が頷いた。

「半六、正解。何が言いたいか分かるか？」

高価なレアメタルを掘り出している坑道……。

「坑道は壊すなって……ことですか？」

「あいあいも正解。優秀な三分の二に恵まれて私は幸せだよ」

「ろくちゃん、オイラは人数に入らないのね……」

軽い声が壁のあちこちに埋められているスピーカーから聞こえて、亜衣里はちよつとギョっとなった。

「紹介が遅れたが、セレは4444が便宜的に使う擬似人格の名前だ。彼はちよつとばかり、TAEインターフェースとしてはナンパなんだが、まあ、こういうもんだと思って諦めてくれ。君たちのどちらかが、このバツパーになった後は、いくらでも好きに弄つて、落ち着いた人間仕様というものを教えてやってくれ」

セレが不満を表明してか、廊下全体の照明が点滅した。

「そうだ、ミッションマスター、あいあい。さっき半六さんの支度手伝つてただけど、この人、多分、銃火器バージンだよ」

「え？」

処女^{バージン}というのが迫神に相応しい表現かどうかは別として、非常にちゃんと理解できた亜衣里は、確かに板に付いていない迫神の武装姿をマジマジと見た。

「全然？ 実践だけ未体験？ 訓練自体がないの？」

「訓練自体、ない」

「……保志総司官……」

自然と亜衣里の口調が冷える。幾らシンクロイドでも、死ぬということのあの最低の気分は、好きこのんで味わうようなものではない。

「素人一人つれて、いきなり実践つて、どういうおつもりですか？」「いや……おいおい訓練していくつもりだったんだけど、現場が先にきちゃったから。この際OJTでと」

「そついうのはOJTとは言いません。ミッションマスターとして、迫神さんを連れていくのは却下します」

「……でも、人数多いよ。向こう」

「死体の数が増えるだけです」

亜衣里は迷わなかった。ちゃんと訓練して使えろと判断してからでなければ、猫の手にもなりはしない。

「じゃあ、オイラ行きたいっつ」

壁から、セレのウキウキとした声がふつて来る。

「……保志総司官……」

亜衣里の直感が動いた。

「何？」

「セレは普段あなたのバックを守ってるんですね……」

「……うん」

「迫神さんが使ってる身体ボディに乗る形で」

「……うん」

否定はできない。セレはこんなやつだが、実際問題として現場では非常に頼りになるのだ。

「迫神さん、すみません。今日は帰ってください。セレに代わって」

「……それは、保志総司官の判断でも……それでいいなら」

迫神にしても、一応、そういう現場がある覚悟はしていたし、右も左も分からないなりに、防具を身につけ、武器をホルスターに装着しながら、一応、その気にはなり始めてたところなのだ。

「この現場は私が仕切ります。保志総司官より今は私の判断が優先です。そうですね、ろくちゃん」

亜衣里の目が座っている。宇宙の坑道の現場なんて、まず、九割方、地球化テラフォーミングされていない。つまりは、どうせ攻めるも受けるも生身レアマンなんかいやしないのだ。つまりはゲーム感覚での対応もあながち間違ではないのだが、地球の生肉ばかり相手にシビアな闘いに日

々勤^{いそ}しんでいる、場数踏みまくりの亜衣里には、そういうおちゃらけたノリは考えられないようだ。

「も……もちろん。この現場は、あいあい^{いそ}に渡した」

睨み付けていた保志が、半分引きがちにそう請け合ったので、亜衣里は漸く迫神に向かって微笑んだ。

「では、迫神さん、今日はお疲れさまでした。シンクロライドで闘うのだから、ゲーム並みの感覚でいいのかもしれませんが、少なくとも捨て駒ぐらいできるレベルでないと邪魔なんです、ごめんなさい」

捨て駒すらできないレベルと言われたらそれまでだ。

「……条件があります」

「……条件？」

「今やつてる司法試験勉強の時間の半分、相澤さんの得意分野の方の、私の訓練に充ててください」

亜衣里は迫神を見た。悔しそうな色がなんとなくある瞳に、強い意志が見える気がする。迫神は熱いところがなさそうな、説教臭いのが似合う、まさに裁判官そのものといったふうでいながら、バツパーなんぞに登録しているだけあって、未知の領域にずかずか進む、つまり前向きに自分を鍛えていくことを苦にしないタイプの男らしい。

「ええ、もちろん。どうやら、私たちの指導者であるはずの三分の一教官は、余り私たちを育てる気はなさそうですから」

思い切り厭味になった口調に、亜衣里自身がちょっとビクリした。どうやら自分は、保志が迫神に裁判仕事を全部押しつけているように見えるのと、亜衣里にろくに仕事を割り振って来ていない、御座成りが見え見えの態度に、相当鬱屈^{うっくつ}が溜まっていたらしい。

保志がぼりぼりと鼻の横つちよを搔くのが見えた。辛辣な自分の言葉に別に怒る風でもないのは、面倒仕事を迫神におつかぶせている自覚が十分あって、それを多少後ろめたくも思っているのだろう。亜衣里は、いやなおっさんだとも思うものの、なんとなく憎めない感じもしてきて複雑だった。

「4444、帰ります。デイスマウント」

迫神が言う。と、一瞬だけ、立ったまま迫神が奇妙に揺れた。そして次の瞬間、そこには迫神の身体をして、迫神そのものでありながら、奇妙なほど別人の雰囲気をもった人物として、迫神が立っていた。亜衣里はビックリして、その見知らぬ迫神を見つめる。

視線がぶつかると、迫神がにつこりと満面の微笑みを浮かべた。

そんな笑顔の迫神など見たことがない。不覚なことに亜衣里の胸が、思わず知らず、どきんと高鳴った。

「はろー、あいあい。オイラずーっと、おしゃべりしてみたかったんだ。ろくちゃんつてば、ズルいんだもん。これからはちゃんとオイラもヨロシクね」

迫神の声が、迫神とは似ても似付かぬしゃべり方をたので、亜衣里はずっこけそうになった。迫神の身体が、二歩、三歩と近付いてきて、亜衣里の目の前で止まる。そして、彼女がセレに全く慣れていないのにつけ込んで、亜衣里の頬に馴れ馴れしく手を添えた。と、ちよいと背伸びをして、それから顔を寄せ……。

外国人が頬に挨拶のキスをするのは知っている。けれど、迫神がそんなことをするのは見たことがない。きっと……これがセレ？ 挨拶と分かってもちよっとドキドキするのは、何故だろう。迫神が使っていた身体だからだろうか。

亜衣里の予測を完全に裏切って、セレは彼女の頬などきれいさっぱり無視すると、その唇に思いつきり深々と迫神のそいつを重ねてきた。暫く、亜衣里は何が起こっているのか分からぬまま、断じて挨拶なんかではない濃厚な接吻をされるがままになっていた。が、状況を把握するや……。

「何をするっ」

亜衣里は、迫神の身体をした物体を腕の力で突き放し、そいつの襟元をとっさにむんとつかむと、体をうまく流し込む様にして入れ込んで、女性とも思えぬ、見事すぎる一本背負いを決めた。

「あ……、あいあい、すごい　さすが柔道五段」

嬉しそうに投げ飛ばされるな……こいつ。

保志は天井を仰いだ。気のせいではなく頭が痛かった。美耶子の身体でセレに迫られると、非常に脱力するしかないのは、経験として実感がある。セレにも悪気はないのだろうが、どうにも最近おふざけが過ぎる。しかしなんだろうな、と保志は思った。亜衣里が迫神の身体のままのセレに唇を奪われて、一本勝ちを納めるまで、微妙に時間が長かった気がする。とすると彼女の的には、迫神という存在と肉体的接触を持つことに、忌避感は全くないということなのだろうか。

以前セレが職場内恋愛うんぬんと抜かしていたときに、男の生理は恋情とは一致してないの原則に基づき、一笑に付してやったのだが女は違う。直感的に厭だったものはとにかく厭。指一本どころか同じ部屋の空気を共有するのも拒否りやがるのが連中だ。

直感とか、そういう空気を読むとかいう感覚まで、セレの野郎が上とは、保志は断固思いたくない。思いたくないが……やつの直感

勝ちか？ それとも、やつ自身が擬似人格が男であることの証明に、単純に現状手駒の中にいる紅一点ということで、亜衣里に惚れてみたとかいうつもりなんだろうか。基本肉体がないんだから、魂の所在証明として肉持ちに惚れる必要はないはずなんだが……。とにかく、セレが初対面からT A Iのくせに、ただの召使サーバントという立場から随分はみ出していることをアピールしてしまったことだけは確かだ。

お試し期間に犠牲者に逃げられない様に、直接接触を邪魔してきたのが、どうやら裏目に出てしまったようだ。もっとも。

歌って踊れて、受け身もできる。……褒めてやろうじゃないか
っ。

13・初出勤はコロマに乗って

「あいあい、それ、使えないよ」

亜衣里に投げ飛ばされて、床の感覚をじつくりと楽しんでいるのかと思いきや、ひょいと跳ね起きるなりセレは、亜衣里が手にしているマイクロ波加熱方式の熱線銃ヒートガンを指さしていった。

「多分……生身レアもんじゃないってこと？」

さすがに亜衣里は勘がいいと、保志は思った。マイクロ波加熱方式熱線銃というのは、警察の基本銃器で、あれは人の体温をジャスト42度まで、ほぼ五秒の連続照射で加熱する。43度で人間の身体を構成しているタンパク質は変成してしまい確実に死亡するが、41度であれば動けるやつもいる。それでギリギリで選ばれているのが42度だ。

人の死を嫌う日本の民族性によって、死なせないで行動力を奪い、ついには後遺症が残らないということで、警察でごく一般採用されているが、はつきりいつて現場泣かせの銃に間違いない。戦闘の現場で、障害物なしで五秒照射させることはまず無理だ。武器として致命的と言っても過言でない。真つ当な銃火器を持っている相手にこんなものを持って距離を詰めるのだから、相打ち持ち込むだけでも技術がいる。

シンクロイド亜衣里が死ぬ原因は、基本これだ。

「当たり前」

「万が一、レアがいたら？」

「どっちにしるマイクロ波は宇宙服で反射されちゃうから、使えない」
スベジャケ

ああ、レトルトパウチ食品が電子レンジで加熱できないってアレ

か。亜衣里は納得する。

「じゃあ、なんで装備の一番取り易いところに置いてあるのよ」

「そりゃあ、人口密度稀少域でも人間が密集してるのは、テラフォームド・シティだからだよん」

「採掘現場では意味がないってだけで、普段は使つのね」

「Oui、Oui」

亜衣里はヘルメットに頭を突っ込む。定番通り、仮想モニターがリンクしているらしく、何も映っていないながらも、表示空間が薄く広がっている。

「セレ、4444じゃなくてあなたが、突入もするけど監視兼用ってことでいいね」

「うん、いいよ」

「問題の坑道の図面データある？」

言い終わるやいなや、セレの返事より先にモニターに透過立体図が映し出された。点滅しつつ移動する点が色分けされている。

「どっち？」

「青がその従業員。赤が侵入者」

亜衣里が腕を組む。CQB（Close Quarter Battle）建物の中に侵入して犯人を取り押さえるこそが今の彼女の専門職なのだが、花形というかなんというか、突入班ばかりで支援はもとより監視も狙撃も交渉も、間近かに見てはいるが経験はない。

突入と狙撃ばかりが部外者からは目立つSATだけれど、一番重要なのは交渉人の技量だ。突入班は交渉人が犯人にちゃんと投降を促してもらい、断固交戦ではなくてやる気が失せた人間を保護に行くというパターンに落ち着く様に祈りながら待っているのが普通だ。そこまで人員に恵まれない極小編成のチームを率いるということ、は、まさか、犯人への一番最初の呼びかけを自分がするということだろうか。だめだ、怒らせる自信しかない……。

「セレ、あなたレコンの経験は？」

「ろくちゃんとのペアだと常にポイントマンだよ」

レコンもポイントマンも言葉は違いが意味そのものは変わらない。チームのために一番最初に進む者のことを指す言葉だ。それは人間と非人間でチームを組むなら、まず人間が先導ということはないかと、亜衣里は納得した。特殊環境で研ぎ澄まされた場合、人間の第六感が多分、機械の各種センサーを凌駕するだろうけれど、基本としてはばけてる人間とセンサー持ちの機械を比べれば、彼らの状況察知能力の方が高いに決まっている。

レコンは死にやすいポジションだ。しかし、簡単に死んでしまうのでは居る意味がない。死への恐怖で平常心が乱されがちな平均的人間と比べれば、多分あらゆる意味で優秀に違いない。

「入り口は施錠されてると思う？ マスターキー使った方がいいかな」

「……ご自由に。オイラなら蹴り開けられるけど」

「馬鹿いつてないの。純正のアバタロイドじゃないんだから、シンクロイド・ボディの皮の強度はそこまでないはずよ」

亜衣里が呆れた様な口調になった。

「だって、これ半六ちゃんの身体だもん。なんとかなるよ」

「え？」

セレが右手でガッツポーズをこれ見よがしに作って、左手で二の腕当たりを指さした。「彼氏鍛え方半端ないからね、なかなかよ」

亜衣里は冗談に過ぎると肩をすくめる。

「セレ、マスターキー使って。人数少ないんだから、そんなところで怪我されちゃ適わないわ。筋肉自慢できるなら、重いから厭だなんて言わせないからね」

「……まったく、信用ないんだから。半六ちゃんの身体、ホントにすごいなあ」

言葉ではそういつつ、亜衣里の指令を守って、セレがマスターキーを移動艇格納庫のハッチ前の壁に物々しく並んでいる武器収納棚から取り出した。

マスターキーというのは鍵のことではなく、銃身を切り詰め、銃床を短く、あるいはなくした、いわゆるソウドオフショットガン^{ソウドオフ}を、アサルトライフルの下部に寄せ込^{マウント}いたものことだ。

普通、建物など建造物に侵入するときの先頭に立つ、ポイントマンは施錠されたドアを破るためにショットガンを持つことが多いが、一人で道を封鎖できるとまで言われる威力のあるショットガンは、殺傷能力を低めたゴム弾を利用してさえ至近距離で散弾が拡散しきる前に当たると、その破壊力は凄まじい。

ショットガンの銃身を短くすると、至近距離での破壊力を増大するものの、射程が極端に短くなり、命中を期待できないという欠点が出てしまう。距離をとれないという難点があるため、突入後はアサルトライフルに持ち替えたりするのだが、持ち替える時間もあるし、そうでなくても重量がある銃を二丁持つていくのも取り回しが悪い。

重い上に次弾を装填するのに時間がかかるという欠点はあっても、取りあえず、建造物内を制圧するときのレコンが持つ武器としては悪くない選択だろう。

「ろくちゃんの得意なポジションは？」

「CVの運用者……かな」

「一戦闘車両（Combat Vehicle）？ そんなのまであるの？ 管轄は司法^{オマル}庁なの？」

「総司官の制圧班が、マスターキー使われるご時世だもの」
亜衣里の質問に、セレはそらつとばけたような返事をした。

「だけど、ACV（Armored Combat Vehicle）

e)でしょうね、もちろん」

「当然」

「じゃあ、現場までの搬送の運転手もろくちゃんなのね」

「ああ、それは無理。生身^{レブ}にオイラの最高速度は耐えられないよ。オイラ自体だって、このボディは生身^{レブ}なあいあたちと変わらないから、耐Gカプセルに入るよ。現場までは、4444がACVコントロールする。けど、現場到着後はACVコントロールはろくちゃん担当」

「じゃあ、基本的にずっと、セレのソロプレイしかしてないってこと？」

亜衣里の疑問に、セレが笑った。

「ろくちゃんのACV見れば、違うって分かるよ。オイラたちは二人ぼつちでもチームだったよ、ずっと」

ACVのAはArmoredのAであり、すなわち、武装しているということだ。セレの説明を素直に文字通り受け取れば、装甲の分厚い高速移動艇だろう。それで運ばれて、そのあと、現場での戦闘に参加できるとなると、宇宙船の癖に、タイヤとかが出て来るのだろうか？ テラフォームド・シティの中で、自由に移動できる宇宙船というのが、亜衣里の想像からは非常に遠かった。

「突入班の分担は決まったみたいだな。いくぞ」

保志が亜衣里とセレの会話を遮った。

「オイラうずうずしちゃう。あいあいと初デート」

「お前、今日からTAIって名前返上してYAIってのにしたらどうだ？」

言い捨てて、保志がハッチにむかって歩きだす。

その背中を追いかけて歩きながら、セレが保志に言う。

「タイをワイにするって、TをYに変えるんだよね。Yって何の頭文字？」

亜衣里も取りあえず二人の背中を追った。距離が近いから、保志とやっぱり見掛け迫神の会話は聞きたくなくても耳に入る。

「やりたい……の頭文字」

「やりたいって……何をさ」

不満そうなセレの言葉が終わらないうちに、保志が立ち止まってクルリと振り返る。

「気持ちいいことやりてえんだろ？ ウンコしたがるし、女とはやりたいみてえだし、お前ここんとこ最低にヘンタイ路線突っ走ってるだろう。AIの自覚低すぎらあ。それ以上ヘンタイ化が進行したら、オマルに言いつけて4444ごと廃棄処分にしてやるからな」
ぶっと、亜衣里が噴き出す。AIのくせにウンコしたいって、それという欲求がまったく分からない。

それに、武器を持つている侵入者との直接接触が確実に予測される気持ちとして昂り易い状況はバケの皮を剥がすのか、どことなく保志の物言いは、いつもきちんとした言葉使いで、しゃべり方に乱れたところの気配もないものとは似ても似付かない。そう、保志総司官ともいえない下品さだ。

もつとも、こういう種類の男たちの方が、亜衣里は慣れているといつて過言でない。眉間に不満そうな縦皺が寄っているけれど、いつもの能面みたいな保志よりずっといい。

「ろくちゃん……。ウンコしてみたいてのは、認めるけどさ、女とやりたいって、そりゃ、誤解。オイラやさしいろくちゃんに抱かれるだけで、十分満足してるのに……」

今度は保志ががつくり脱力した。

「あいあいに誤解されるだろうが。俺はおまえを抱いたことなんか一度もねーからな」

そういつて保志がにらんだのにも、セレはまったくめげなかった。

「つれないこと言っただって、オイラはろくちゃんをちゃんと知ってるもんね」

「……そ、そういう仲なの？」

亜衣里がごくごく真面目に聞いてしまう。セレがふいつと亜衣里を見つめて、につこりと笑った。ああ、迫神の笑顔だと、つい亜衣里は思ってしまった。あいつにクソが付く真面目な顔つきの代わりに、こんな笑顔がいつも張りついてたら、ちょっと惚れてしまいそうだ。自分がそう思ってしまうことに気付くと、思考回路が沸騰しそうだ。

「ただの冗談……。ほら、現場突入前は緊張感をほぐさないと」

亜衣里はセレの横を通り抜けて保志に並んだ。そしてセレに聞こえるように言った。

「保志総司官、私はあなたのT A Iの運用には、問題があると判断したくなりますが」

保志が言い難そうに口を開いた。

「……うん、まあ、そうなんだけど。一応こんなでも、頼りになるよ」

セレが普通の声で言った。

「あいあいがオイラのマスターになったら、ちゃんと、あいあい好みのT A Iになるよ。だから、司法試験頑張つて、バッパーになってね。オイラ、あいあいの一本背負い気に入っちゃった」

長い廊下には亜衣里がまだ把握しきれない扉が延々と並んでいる。少し保志が進んだところで、一つのハッチが勝手に開いた。多分、そこが移動艇格納庫への入り口だろう。些細なことだけれど、こういう動きをこの官舎がするのは、保志の動きを正確に把握して制御をしているのだ。セレがいったように、4444はきつとこの

派出所をコントロールしていながら、基本姿勢はバツパー保志のサ
ーバントなのだ。

多分、保志が何といおうと、セレの言葉通り、彼は保志^{TAI}好みを把握して動いているのだろ。だとすると、取りつく島のない感じの保志こそが、よそ行きに作られた偽りの保志で、このごく少数人数での構造物制圧戦を前に、うきうきと弛んでいる方の保志こそが地なのかもしれない。

保志に続いて格納庫に足を踏み入れて、亜衣里は思わず息をのんだ。

白い巨体。ところどころに置かれた赤いペイントがおしゃれ感たっぷりにエレガントを演出し、肩に置かれた黄色のラインも涼やかな……。巨像^{コロッサス}が横たわり、静かな眠りについていた。

「コロマ……？ ……宇宙仕様なの……これ？」

亜衣里の横にセレが立った。

「さすがあいあい。コロマって、さらつと出て来るところがいいねえ。ろくちゃんなんて、カタログで飛閃^{これ}見たとき、モビル・アーマーって言いやがったんだよ」

くつと亜衣里は噴き出した。巨像^{コロッサス}型の車^{クルマ}でコロマなどという名称は、確かに一般的ではないだろう。一般常識範囲での略称なら、マニピュレーター（手で操縦する機械）^{コロッサス}巨像から採ったマニコロが普通だ。

人型のロボットといえば分かりいいのだろうが、余りにも守備範囲が広すぎて、漠然としすぎている。日本人は羊を羊としか呼ばないが、モンゴルの遊牧民は羊を種類や成長の過程、オスカメスカで事細かに呼び分ける。陶器に興味がない人には、陶器は陶器で終わ

るが、そのマニアには産地や窯、作家や時代で事細かに呼び分ける。自走しない、人型の巨大ロボットで、移動に特化したものならコロマ、戦闘メインならアムコロなど、メーカーや使役されるスタイルによって様々な呼称があるのは、それが身近であればあるほど、当然のことだ。

「あいあい、乗ったことは？」

「特車は配属なったことないのよねえ。大体、東京都下だと、土木目的に特化したところで、コロマで公道走るのがって届け出いるし、届け出があっても全長四メートル以上のコロマは規制で走れないし。違法コロマ対策の特車三課にでもいかなきゃ、普通は乗れないよ。こんなに至近距離で見たのも初めて」

亜衣里は横たわる巨人に歩み寄りながら、惚れ惚れと美しいコロマの身体を眺めた。ボディそれはもはや伝説の古典ですらある某アニメーションの中の、ビジュアル系棺桶に横たわる白雪姫のように、見るものを誘惑する。

「うん、マニピュレーターが基本だから、テラフォームド環境（いわゆる1G世界）では体勢制御が難しいもんね。ちよつとスタビライザーの調整があまいつていうのもあるけど、ろくちゃんだってオイラが補佐しなきゃ、ただの傍迷惑人形だよ。だから、ろくちゃんニシバオリの操作通りに動ける様に、オイラが頑張るの。これもまた一つの二人羽織ニシバオリってやつで」

「二人羽織って、じゃあ、操作はモーキャプ？」

「またしても大当たり。あいあいすごいなあ」

「……すご……い。これ、そんなに動かせるんだ。モーキャプ・フィールドは中？ 外？」

「どっちもできるよ。基本インナー・モーキャプ。まあ、外、ここ
のモーキャプ・ルームからでも全然大丈夫。それにオイラは優秀だ

からさ、口頭指示だけでもそこそこ働くよ。まあ、あいあいに乗られてもいいけど、ほらあいあいはジュードレーディじゃん。相手柔道着も来てないし、帯もしてないじゃん。ドライバーさん候補がいあいか半六ちゃんなら、彼氏の方が向いてるかなあって、オイラ密かに思ってるんだけど」

「……迫神さん、鍛えてるって、さつきも言ってたけど、あの人、なにやる人なの？」

迫神の外見をした物体と、迫神の噂話をするのも変な気分だと思いながら亜衣里は聞いた。

「カラテマンだよ。彼。ついでにソロプレイが好きな山男だから、普段から重装備担いで山登ってるんだよねえ。だから下半身もバツチリよ。鍛え方がろくちゃんとは全然違う」

「……え？」

カラテマンに山男って、法服を着て「私わたくしという感情はありません」というような顔をしている迫神のイメージと、全然そぐわない。亜衣里の戸惑いをどう捉えたのか、セレが続けた。

「それに、正義感たっぷりのいわゆる古風な判事さんだし。生涯賃金にも不足はないと思うよな。つまり、恋人候補としては優良物件だと思っただけだな。一応、参考にしてね。半六ちゃんも、あいあいに欲……」

突然、距離を詰めてきた保志が、軽口発言を、話半ばでなんとか間に合って、セレの後頭部を拳骨でぶん殴ることで阻止した。

「よく？」

亜衣里はどうにも会話の勢いがつかめない。

「なにするのさあ」

「何じゃねえ。それ以降は、おめえが言っていることじゃない。だまっとなれ」

「どーして怒るのさ。ろくちゃん」

「てめーには分らん。説明する時間が勿体ない。さつさと棺桶……じゃなかった、耐Gカプセル入るぞ」

保志が言う。亜衣里はもう一度つくづく眠れる巨人をながめるが、どこから入るのかさっぱり見当もつかない。普通の操作なら、多分一番厚みがあつてスペースを確保できる胸部に部屋が確保されているはずだけど、耐Gカプセルがそんなところにあるとは思えない。モーキャブ・フィールドには、少なくとも操作する人間の身長の一・三倍は要る。

「保志総司官、耐Gカプセルはどこに？」

ろくちゃんなどという呼び慣れない言葉は、意識しなければそう簡単に口からは出てこない。

「腹のどこ。入り方は教える」

「どうやって登るんですか？ 全然取っかかりとか、見えないんですけど」

セレが口を挟んだ。

「ちょっと待ってね。すぐやるから」

とたん、亜衣里の身体がふうわりと浮いた。とつさにもがいてしまつて、うまく体勢が制御できない。と、その亜衣里の目の横で、慣れきつた動作で保志が床を蹴るのが見えた。取っかかりを蹴りながら、うまく保志は飛んでいる。なるほど、人工重力を切ればハシゴなどをかけるより余程簡単にいける。もちろん、中の人間が無重力での移動になれているならばだ、ハシゴなどをかけるより数倍効率のたろう。

亜衣里は一番最初にグルグル回り始めてしまったせいで、どうにも姿勢を建て直せない。そこに、迫神の手がのびて、亜衣里の突入服の腰辺り、ガンベルトをトツ捕まえた。視線が合うと迫神はセレの人が悪げな笑顔になった。

「可愛いあいあいだから、助けてあげる」

情けなくもセレのサポートで、やっと亜衣里はコロマの腹の上に先に到着していた保志の横に到達した。下ろしてもらうと亜衣里は保志にならって、巨人の腹部に設置されていた小さい取っ手を握りしめて少し深呼吸をする。落ち着け自分。そして、呼吸がましに落ち着いてから文句を言った。

「セレ、お願いだから、迫神さんの声でしゃべるのやめてくれない？」

「了解、あいあい」

その声は、深く低めに落ち着いた迫神の声ではなく、雰囲気として少年のそれになった。そしてそれは、ちょっと男の子にしては高めの透き通った　なかなかそれはそれで美声には違いない　歌でも歌わせてみたくなる様なものだった。

「ちょっと狭いけど、固めるほど遠くないから我慢してね」

つかまっていた取っ手の丁度脇に、ぽっかりと穴があいた。ちょうど三つだ。

「この耐Gカプセルって、三つだけってことは定員三なの？」

亜衣里が言うと、セレは何を野暮なことを聞いているんだという声になった。

「バツパーは普段ソロ。世代交代のときの三分の一だけ特別だけど、マックス三、それ以上乗せる必要がある？」

それもそうだと思いつつ、でも、やっぱり納得しきれなかったあいあい聞き重ねた。

「逮捕した犯人とかの移動とかには？」

「基本、最寄りの保安官事務所に預かってもらうから、遠距離のお持ち帰りはしないよ」

「ああ、それで、保安官さんたちとは、繋がりが深いのね？」

「そういうこと」

「お前ら、べらべらおしゃべりしてる間があつたら、移動するぞ」
保志がそういつて、一つの穴に滑り込むや否や、出入り口の穴が完全に見えなくなった。時間差でもう一つ音がしたところを見ると、エアロックのように、安全面の考慮から扉が二重になっているようだ。

保志が耐Gカプセルに消えた。

セレは保志本人が聞いてる、聞いてないのに興味なくしゃべるつもりだったのが、たまたま保志が聞こえない場所に移動したからなのか、しみじみという雰囲気になって言ったのだった。

「あいあいは、もしかしたらろくちゃんのやり方に不満があるかもしれないけど、ろくちゃんは、意味がないことはしない人だよ。最終的にはあいあいや、半六ちゃんが自身で判断することだけど、信頼していい人だと思う」

この子は完璧に、あらゆる意味で……保志総司官の武器なんだ。

とびきり優秀な、オールマイティ国連総合司法庁と直リンクしているT A Iでありながら、やんちゃな子供のように時間と場所をわきまえない悪ふざけをする。それでいて、常に行動の全ては保志を中心に展開されているようだ。なんとまあ、アンバランスな存在だろう。

考え計算するのが基本のA Iに思考がないとは言わないけれど、人間的な意味で考えて次にすべきことを選択するという種類のものではない。だから、こういうものに、「考えられる」という当たり前の単語を、しつこく冠してある理由が、この種のものに初めて触れる亜衣里には、やっと見え始めた気がしていた。

T（考えられる）A I（人工知能）というのは、本当にその辺に転がっているあらゆる種類のA Iとどこか決定的に違う。

亜衣里は自分も狭いハッチ目掛けて足から無理矢理ねじ込んだ。本当に狭い。膝を少しばかり曲げて姿勢を低くし、目を閉じて扉が閉まるその瞬間を待つ。

と、機械的に扉が閉まる音がして、どこからともなく湧いて出た扉に、あいあいとは脳天を激しくぶっ叩かれた。

「痛ったいっ」

ぎちぎちのスペースで頭を押さえることもできず、亜衣里は、一人、不格好に大きい己を嘆くかのように毒づくのだった。

あいあい、大丈夫？

耳元辺りにスピーカーがあるのか、セレの声がした。

「だめ……頭ぶつけた」

ごめん。次から、閉めるとき、閉めるってちゃんと言うね。

申し訳なさそうなセレの声が、なんだか無性に可笑しい亜衣里だった。

14・シンバシ・シュラバース

いみじくも古人はこう言っただけ。

人生至る所修羅場あり……。 (違っただけ?)

* * *

あの日、迫神は面白くなかった。

「ぴんぷん。どうして、そんなに荒れてんのさ」

カラテ・ジムで爽やかならぬ冷や汗を回りにかかせまくって、それでも不完全燃焼感に苛まれ、遠慮を斟酌しなくていい唯一無二とは言わないまでも数少ない悪友である、小学生のときからのカラテ仲間の啓介けいすけに、防具を態々つけさせてからボロカスにぶん殴ってもスッキリしなかった。フェイスをはぎ取って、暢気な口調で啓介が言う。妙なところが律儀なんだ。やつは。

「荒れてない」

迫神の名前の平和を、麻雀のショボイ役の読み方であるピンフと読むのは、啓介ぐらいなものだ。そういえば迫神に麻雀を教えてくれたのは啓介で、雀頭待ちで平和ピンフあがりしようとする、自分の名前の役ぐらい、きつちり落とせとよく分からない言いがかりをつけて来るようなヤツだった。言いたくないが頭が悪いやつの要領を得ない教え方のせいで、迷惑をしたのはこっちの方だ。

「荒れてる。大体、防具つけろって言われたときに、警戒しとくん

だったよ。俺は馬鹿だよなあ。悪いけど仕事で鬱憤たまってるんなら、カワラで遊んでたら？」

「自分の馬鹿さに今頃気付いたなんて、すごく遅いよ。三十年超過で生きてる癖に粗忽者そこものだな」

迫神が取りつく島なく言うと、啓介は迫神が面白い冗談を言ったとでもいうように大げさにぎやはたと笑った。啓介の馬鹿さについては確信がある迫神は、そこにうける啓介のめでたさに、逆に毒気が抜ける。

「俺は、お前をボコリたかったんだ」

迫神がカラテじゃないのをやっつけばよかったと心から思うのは、むしろくしゃがたまったときで、自分がフルパワーで素人さんをぶんぐつたらどうなるか予測が付けば、その辺にたむろしているチンピラ程度にすら元気に喧嘩を売れないのだから、鍛えたことの意味があつたのか正直悩む。もつとも、職業柄、喧嘩沙汰で御用になれば失職が待っているのは想像に難くかたない。結果として、ブレーキを利かさなければいけないのを選んで正解だったのかもしれない。

「ひでー、ピンフ最低」

「仕方ないだろう。遠慮せずにぶん殴れるのが、お前ぐらいなんだから」

「そりゃそうだ。師匠相手じゃボツコられる方だもんなあ」

もう一つ啓介は元気に笑ってそれから、突然真面目な顔つきになった。迫神が見ても啓介はビジュアル的な意味合いでいい男だ。こいつにとつて顔が商売ネタだつて知らなかったら、頭もなぐつてやるのに……と、やはりこれが相手でも不完全燃焼感が残るのだ。

「上手くいつてないのか？ 例の三分の一……」

シンクロライドで世界に冠たる名山に入るのも悪くないが、啓介と一緒に週末に丹沢辺りまで出掛けるのも迫神は好きだ。友達付き合いの幅が狭いといわれればそれまでだが、カラテにしろ、山登り

にしる、一人だけの趣味なら続いていたかよく分からない。

男は強くなくちゃという啓介に倣^{なら}ってカラテを始めて、山男だった啓介の父親と三人で、週末登山を楽しんだ。

啓介は小学校の単元テストで十点台を採れるような筋金入りの頭脳不自由児だったくせに、顔と性格とスタイルの抜群さで、トップモデルを皮切りに、大根の癖に俳優業に乗り入れ、オンチの癖にアルバムはオリコンチャートの上位に乗って来る様などんでもないやつだ。念の為に繰り返すが、百点満点で十点台だ。

多分、あのマッチョな相澤だつて地味な自分と、派手な啓介を並べたら、向こうを選ぶに違いない。

「そういうわけじゃない。基本……、やらされてることは半端なくたまりまくった少額訴訟の判決言い渡しだから、今やってることと大差ない」

そう、本当に大差ない。大差ないことが、認識はしていなかったけれど、迫神の不満といえは不満だったのだ。部屋に帰れば、四畳半の畳みの間に、でんと鎮座している棺桶が、既に三分の一を異世界に供出していることを思い出させる。

苦学してやつとこさつと司法試験を取って、それでもこっちは官舎の四畳半を窓口に宇宙の辺境で二ワトリの所有権に関しての判決に頭をなやませているのに、何にも考えてないこいつが、あんなに可愛い女房がいても浮気相手に不自由せず、青山の億ションで優雅な生活をしているのは不条理だとつくづく思う。

「分かった、たまってるんだ。三十面さげて、独身貴族だなんて悠長なこと言ってるからさあ。だからさつさと女作れってアドバイスしてやってるのに」

啓介が暢気に言った。作ろうと思ってその日にできる自分を基準にするなど、心の底から迫神は言いたかった。

「独身貴族って、いったいいつの死語だそりゃ。今どきは嫁さんもらってる方が勝ち組だって」

「ピンフは脱げばいけるのに、何だか服着ると地味だからなあ」

「お前と一緒にするな。俺は普通だ^{イマール}」

「仕事やめちゃえば？　いつそのことヌードモデルとかすればいいのに」

「だれがするか、そんなもん」

大体、自分が脱いだところで金払うような奇特なやつは世の中にいない。こいつは自分を基準になんでも考えるから、本当に混じりッ気なしの馬鹿なのだ。

啓介としゃべっていると、世の中に数ある訴訟ごとのドロドロに人生を浪費している人間と、この憂^{サンスリー}いなし野郎と、同じ空気をすって生きているという、余りにも不公平に呆然とする。

どーせフェイスをつけているのだから、下手な同情などせず頭に蹴り入れてやればよかったと、迫神は心底思った。啓介ならば、少なくともこれ以上の馬鹿になる心配だけはない。

「まあ、一杯飲んで帰る？　殴られ賃に奢られてやるぜ」

迫神が笑った。

「なんで貧乏人にたかるよ」

「しがないアイドルに、判事様の安定した給料はうらやましいわけよ」

「……ふざけるよ。奢られてやる」

「だったら、落ちぶれたら女房子供ごと面倒みてくれよな」

「割に合わない……」

迫神が不満を表明すると、啓介は笑った。

「ピンフみたいなやつは、さっさと思い切らないと、独居老人、孤独死コースじゃん。いくらピンフとの付き合いが長くても、可愛い^{リリナ}うちの理利菜は、いくら当人からピンフのファン申告あっても、絶対嫁にはやれねえし」

「だれが五歳の女の子嫁さんにするかよ」

どういう理論の飛躍だか、付き合いきれないことだけ間違いない。

「飲みに行くなら、やっぱ、あつこかねえ……シンバシ高架下」
「おしゃれなスポットは啓介の鬼門だ。おちおちしてたら、あつと言う間に人だかり、将棋倒しても起きた日には寝覚めが悪いことこの上ない。」

何度か挑戦された再開発の甲斐もなく、若い子向けのスポットができたとしても、どうもあそこ垢抜けなさは変わらない。前時代的な高架下をいつその事古き日本の懐かしい風景として保存しようという、わけのわからない計画も、続いているのか頓挫しているのかよく分からないのがシンバシ高架下飲み屋街だ。一般人が宇宙に行く様になっているご時世に、何を間違っているのかという町並みだ。

それは迫神が生息する東京地裁が、しつこく千代田にあるのと同じくらい、あの町はしつこくどこか泥臭い。

* * *

保志美耶子は目ざとかった。その日の美耶子先生は、この間迫神に案内してもらった串焼きが余りにも美味だったので、桐谷の慰労とどら息子への家族サービスをしようといきなり思い立った。メールで確認すると大丈夫だという珍しく素直な返事が穰太から返ってきたので、気分よく早めに仕事を手仕舞にした。

新橋駅烏森口で息子をキャッチすべく網をはっていると、なんと可愛い、素直、いい身体カラダと三拍子そろって、すっかりファンになっ

てしまった迫神が、彼より数段やばつたい格好をした友達らしき人物と連れ立って、のそのそ改札を出て来るのが見えた。

視界が狭いのか、それとも美耶子がいるなんて思っていないのか、目の前を通りすぎていこうとする、その態度が気に入らない。美耶子は手を伸ばして、迫神の袖口をむんずとつかんだ。
「うわっ」

迫神が奇妙な声を上げた。

いきなり知らない人間から手を出されたら、だれだって驚く。けれど、迫神のその反応に、隣にいた野暮天がげらげらと笑いだした。どうやら迫神の友達に笑いの沸騰点が低いらしい。

「無視するなんて、いい度胸ね。半六ちゃん……」

言われて迫神は、その手の持ち主が保志美耶子だと気付いた。

「み……美耶子先生？」

「なに、ピンプの彼女？　キレイなおばさんだけど」

おばさんという啓介の発言に、美耶子の柳眉が逆立った。

「……だれ、この失礼な坊やは。^{せがれ} 倅と同年配のレベル以上から、おばさん扱いは許さないわよ」

美耶子はむんずと啓介の胸ぐらをつかんだ。スーツを着て、髪の毛を固めて、ハイヒールの弁護士美耶子でないときは、日ごろの反動からか、どうしても態度ががらっぱちになる。笑っていた啓介のダサイフォームの眼鏡がずれる。

「あ……、リップパー・ケースケ……？」

女ゴコロを^{リップパー}引き裂く人・ケースケといったら、イケメンに似合わない阿呆ぶりがなぜか受けて、バラエティ番組にもよく登場してくるいわゆるタレントだ。ダンスも踊りも息子のほうが余程いけると思っのだが、どこか突き抜けたオーラが確かにあるのだ。それに悔しいことに至近距離で見てもいい男だ。

「げっ……、女弁護士・保志美耶子だあ。えらく若作りに化けてるけど……おい、ピンフお前、職業柄こんなのとくつついたら、えらくまずいんじゃないの？」

ほぼ同時に、啓介の方もタレント弁護士の美耶子の正体に気付いたらしく、わけのわからない突っ込みを入れて来る。けれど迫神はタレント専用弁護士と地裁の判事が親しく（そのつもりは迫神にはないが）個人的に付き合うのは問題があるのではと指摘したこの方になぜか感動した。

啓介ほどの非常識人でも、芸能界などというところが、社会常識育成に適した土壌ではけっしてなくても、社会人生活十五年を超過すれば、最低限の常識ぐらいは身にくのだ。迫神は、少々驚いた。

「なんで半六ちゃんが、こんなのといるのよ」

「なんでピンフが、こんなのと知り合いだよ」

右方向から腐れ縁の親友と、左方向から掴みきれていない上司のお内儀さん。二人から同時に迫られて、迫神の思考回路は麻痺した。^{フリーズ}

「母さん、旨い飯食わせるっておびき出しておいて、若いツバメを紹介するつもりなら、俺、そういうの趣味じゃないから、帰るぜ……。リアルオヤジとだって、慣れあいメシなんかしたことないのに……」

声がした方に視線をやると、目の前に一人のチャラけた若造が立っていた。シャラシャラと何十にもつけた細い金属の腕輪の音を立てて、青年が鬱陶しい前髪をざっくりとかきあげ、顎をしゃくった。彼は不愉快そうな顔のまま、迫神を睨み付けて来る。

よくよくみると美耶子に似ているその若造が、言うに事欠いてツバメといったのは、自分のことだろうか、それとも、啓介に対してだろうか。

けれど、それより何より、その声に迫神は聞き覚えがありすぎた。

あの、オマルの管轄下にあるとはとも信じられない、あのナンパなT A Iの声だ。

「……セレの……声？　なんで」
「セレってだれ？」

啓介がぼつつりと言うのをきつちり無視して、美耶子と一緒に穰太を待っていて、今や、すっかり影が薄かった桐谷に、穰太は食ってかかった。

「イソ弁兼ツバメだったら、母さんが、わけわかんない男遍歴ふやすの、食いとめたらどーなんだよ。ヘラヘラ笑ってて気に入らないな」

さすがの桐谷の顔が引きつった。

「穰太さん、それはないんじゃないですか。確かにツバメ兼用イソ弁って陰口叩かれてますけどね、穰太さんぐらい、美耶子先生がそんなふしだらじゃないこと分かってるはずじゃないですか？」

「ふしだらだろうが、若いツバメを乗り換え、乗り換え、第二の人生エンジンイモードだろ」

穰太が叫ぶと、啓介ががははと笑って迫神に抱きついた。

「なんだあ、ピンフったら、やるこたあやってるんじゃないの。ちよつとババ趣味は、俺としちゃいただけないけど、人の情欲にはいろいろあるしなあ。お前がちゃんとやることやってて、俺の理利菜の貞操がおびやかされなきゃ、めでたいめでたい」

ケースケの五歳の娘が理利菜というのは、タレント御用達弁護士の美耶子には一般常識だ。

「えっ、半六判事って、ペドフィリアなの？」

迫神が裁判をやっていて、何が我慢できないって、（それでも我慢するしかないのだが）幼児相手の性犯罪と虐待だ。

「違いますっ」

思わず大きな声が出て、迫神は美耶子の手をうっかりがっしり握りしめた。

「あ、やっぱり、半六ちゃん、いい手」

思わず美耶子が迫神の手を撫でる。美耶子が他意もなくそんなことをするのに、迫神は前回でうっかり慣れてしまったので、またかという感じで振り払うこともせずに触られている。と、ケツと短く罵詈雑言にもならない思いを吐き捨てて、穰太が自分たちの塊から背中を向けたのが見えた。彼はすたすたと改札口を逆戻りしていく。この展開は、あの子が思い切り自分と美耶子の仲を誤解しているということ、それを保志などに伝えられたら、もう一段階えらいこっちゃになることは明白なわけで……。

迫神が言葉を搜している間に、美耶子が息子呼び止めた。

「……あら、穰太。今日ごはん一緒に食べようって言ったじゃない」
美耶子が言うが、穰太の足は止まらない。

「幼女から、おばさんまで……か。やるなあ……。俺は今までピンフの何を見てたんだろう」

腕組みをしてうむうむと納得している啓介を見ると、迫神の堪忍袋が暴発した。加減なしのハイキックを啓介の後頭部にお見舞いするべく、そこ目掛けて鋭く繰り出した。

防具も覚悟もなかった啓介は、そのヤバい気配を察知すると、とっさに両手を交差してがっしりとそれを受けとめた。が、手と足では手が負ける。かなりキレイに吹き飛ばされて床に沈んだ。

「あら、リッパー・ケースケって、カラテするんだ。見直しちゃうかなあ」

美耶子が嬉しそうにつぶやいた。仁王立ちしていた迫神は、どつと疲れて肩を落とした。

世の中不条理だらけだ。雑用に追われ、いきなり出勤を命じられ、ついでに覚悟が決まった直後に追い返され、T A Iのセレには童貞ならまだしても処女などと言われ、美耶子先生にはからかわれ、多分保志総司官と美耶子先生の息子さんからは誤解され、空気を読む気がないポン友啓介には幼女から熟女までの節操なしという濡れ衣を着せられ、ついでに殴り倒す予定の、渾身の一撃をあつさり受けられた。

……やめてやる。

生涯の仕事にしようと思っていた裁判官。その余りにも陰々滅々の気に、果てし無く続く人間の負の感情のぶつかり合いに辟易して、人がいなさそうなところに行きたいと思った自分が愚かだった。これは三分の一に浮気した祟り^{たた}に違いない。

ただ、平和に過ぎるニッポンで、普通の裁判官に銃火器をぶつ放す機会なんかそうそうない。だから、宇宙辺境観光もかねてのきつちり五年間、相澤さんから薫陶を受けて兵隊ごっこをして（もともと荒っぽいことはクライじゃない）、シンクロライドで二、三回記念に死んでみて（山ではもう死んだことはあるんだけど）、日常に帰って来る。

「ピンフ……、お前、やつぱりたまってるだろ……。自家発電でとりあえずいいんだから、ちゃんと出しなさい……」

懲りない啓介に向かって、迫神は握り拳を突き出した。

15・ 三分の一ずつの将来設計

人口密度稀少域国連参加国日本管轄下イットルビア地区。

人が少なく、犯罪も、訴訟ことも少ないはずのこの地域に、とりあえず、近代法治国家に相応しい司法の光を当てるべく存在する、国連総合司法庁イットルビア可動派出所。

たとえそこに、住んでいる人間が一名しかいなくても、人が暮らす以上、最低限の重力環境は必須である。そんなわけで、小さいとはいえ、直径1・6キロメートルという巨大なドーナツ・リングをスポークでハブにつないだ形をしている。もちろん、その全ての可住空間を、人にやさしく整えたら、管理も大変なわけで、基本、ここの主、人口密度稀少域特例総合司法官保志の居住している官舎部分と、執務室以外は、無理なく人工重力を発生させるためのダミーチューブで生身者の居住環境など考慮していない貧弱な造りになっている。

総司官保志が、個人的宿敵（多分向こうは屁とも思っていない）、自称宇宙義賊ジョリー・ロジャーを逮捕するまで、引退などできるかと、三分の一の薄給取りに成り下がってまで、後継者育成に尽力するプログラムの適用を希望したため、ここには、一月に十日ほどやってくるシンクロナイダーが二名いる。

その二名は、生身の保志とちがって有重力の方が宇宙酔いもなく過ごしやすいことに異論はなくても、酸素を基本として必要としない身体である。温度さえコントロールしてもらえば、保志が宇宙仕様防護服なしで足を踏み入れたら即死する環境であっても、シンクロナイダーには問題がない。

ケージで飼われているハムスターのための福利厚生施設である回し車よろしく、絶好のサーキットトレーニングの施設として、その贅沢すぎる空間を利用しようと鬼教官相澤が考えたのは、まあ、無理もないと言わばいえよう。

「うちの連中にも、ここ使わせたいぐらいよねえ」

亜衣里が目の前で立ち止まってスクワットを始めた迫神に言った。完全に地球にある走査棺桶スキヤナの中で死体のように眠っている迫神の肉体の能力と、ほぼ完全にシンクロしていて、運動によって加えられ、あるいは外からの刺激として可変筐体が受け取った嗅覚と味覚を除く三感の全ての値は、本体にフィードバックされる。

訓練を始めてこのかた、帰ったときの棺桶の中の悪臭に、我ながら辟易としている迫神は、それでもこっちの身体は汗をかかないのが有り難いと思っている。何しろ、着替えなくて済む。

「あいあい……」

積極的に亜衣里に打ち解けるつもりがないように見えた迫神だが、自分以外の一人と一台（？）が彼女をそう呼ぶ環境では、いつの間にか回りにへつらって、彼女をそう呼ぶ形になっていた。東京での仕事では、同僚を愛称で呼ぶなどというのは絶対に考えられない。

たとえ全労働時間のマックス三分の一の時間に限定した付き合いとはいえ、地球カレンダーで一年を過ぎたころには、むしろそう呼ぶ方がしっくりくるほどには彼女に打ち解けていた。

「私人間における人権保障に関する……記述について、……アメリカ合衆国連邦裁判所、最高裁判所の判決の要約として、……それぞれ正しい場合には1を……、誤っている場合には2を選ぶ。……憲法の自由権的基本権の保障規定は、……私人相互間の関係について当然に……適用ないし類推適用されるものでなく、……私立……大学には学生を規律する包括的権能が認められるが……、私立大学の当該権能は……、在学関係設定の目的と関連し、か……つ、その内

容が……社会通念に照らして合理的と……認められる範囲においてのみは認められる」

迫神の言葉が切れ切れなのは、十キロ超過している抗弾ベストを着て、抗弾ヘルメットを被り、レッグホルスターにハンドガンを携帯し、亜衣里のリクエストによるソウドオフ・ショットガンを小判鮫にしたライフルを担いでスクワットをしているからに他ならない。これで息が上がらない方が奇怪しい。

「アメリカ？ 日本じゃなくてだと……えーと」

「次にくるまでに……、ちゃんと考え……て……おくこと。一年目……玉碎してるから、あと四年しかないん……だから」

迫神が言うのに、亜衣里は舌を突き出した。

「過ぎたことじゃないですか。もう、いつまでも言わないでくださいよ」

迫神コーチングが付いたとしても、二足のワラジに三分の一規制付き、ついでに仕事もそこそこある生活の中で、亜衣里は肝試しに受けに行った第一種司法試験は、予測された通り、見事に滑っていた。迫神が軽く笑った。

「だめ。年取ってからの一年は、学生時代のと全然違うの。さつさとやつつけないと、取りそこねるよ」

耳に痛いことを言われて、亜衣里は逆襲することにした。

「迫神さん、腹這いからのスタート飽きたでしょ。仰向けからスタートで二百メートル、五本ね」

事も無げにいう亜衣里に迫神が苦情を言った。

「あいあい、それ……おたくのぴちぴち二十歳前後の若者向けセツトでしょ。年寄りにそんなことさせたら死ぬよ」

亜衣里はくすすと笑って取りあわなかった。迫神が口ほどにへたっていないのは知っている。むしろ精神的に軟弱なのが目立つ若者に比べて、訓練スタート時点で十分な持ち物があるといっている

らいだ。

「その程度で死ねるなら、死んでもらおうじゃないですか」

人間には明朗陽気な人間と、陰鬱陰気な人間というと思う。自分はどちらかというと、陰気にもなれず、陽気にもなれず、ごくごく平凡なところで適度なオプチミストとペシミストを行ったり来たりしている俗人だと、迫神は思う。

そして、あの啓介となんだかんだいって付き合いを切れないうちに、いつそ見事なぐらいなまでの陽性の人間に惹かれる傾向がある。イチゴの一件がなくても、豪華すぎる質量で負けても、あいあいのように何にだって積極的で、過ぎたことに鬱々せずにいられる存在には、多分魅せられたに違いないと最近はある。

人間が暮らしている二十四時間サイクルのうちの、約三分の一の労働時間の、さらに三分の一でしか関わっていない自分を、しかも若干陰気臭くて、間違いなく面白くないちよつと枯れかけた自分では、あの子にとって魅力などないだろうのが残念だ。

基本形というかホームポジションとして陽気な、啓介や美耶子先生は、プライベートモードで全開になる非常識が多少やつかいだけれど、亜衣里の私生活など余りにも遠すぎてよく分からない。

とにかく、迫神は五年間の自分の生活に侵蝕してきた非日常を楽しんで、五年間の寄り道が終わったら、潔くフロンティアを去り、つまらない、けれど使命のある人生に還ろうと決心した。だから、逆にちゃんと亜衣里に司法試験を採らせなければという情熱が湧いてきている。

あの子にしてみれば、休憩時間のすべてを一種司法試験の過去問題と対峙して過ごすのも、目の前にあるのが自分の顔なのも、きつとたまらないに違いない。不機嫌などという言葉を知らないかのよな笑顔で、いつもそこにいてくれるだけで、十分に有り難い。

さて、その亜衣里である。真面目に取り組めば取り組むほど、合格ラインが遠くに霞んで見える一種試験の高い高い壁に、ほぼ挫折モードになっていた。一応、保志と迫神の手前、それとやろうと決めた自分への義務感から、ちゃんと暇さえあれば問題集と向き合うようにしているものの、投げ出したくてたまらないというのが本音だった。

セレが言っていた通り、迫神そのものに足りないのは実戦経験と銃火器取り扱い経験だけだ。基本的な体力や反射神経などは十分にレベルに達している。正義感、倫理観、冷静さ。どれをとっても現役の、迫神と同年配のベテランの中に入れても全く遜色ないに違いない。

ただ、いかんせん、警察武装の基本のキの字も知らないというレベル以下なのが痛い。亜衣里が現在仕事で指導に当たっている若者たちは、一応警察学校で銃器の基礎は身につけている。

三分の一リスト登録者の中から、なぜか自分を選んでくれた保志の期待には応えたいけれど、なにはともあれ、一種司法試験持ちにならなければ、バッパーにはなれない。

おじいちゃまの域に入ってきている、イットルビアの宮崎保安官など、司法試験なんてやめちまって、保安官の後継になれと頻りに誘って来る。宮崎夫人の料理は美味しそうなので、一度で良いからホンモノをご馳走になりたくてたまらない。

最先端の技術でテラフォームされたニューイッテルビーは、緑豊かで殺伐としたところの少ない、いい町だ。正直、あと十年後に相変わらず突入班のポイントマンをしている自分というのは想像できないし、また、したくもない。

ついでに宮崎保安官の管区だと、この辺一番の大都市、ニューイッテルビーの治安維持任務と、金の卵のようなイットリウムや、ルテチウム鉱山の保護という二大業務がもれなく付いて来る。

家畜の面倒を見て、地場の野菜と物々交換をして、人工降雨と温

度管理のお陰で不作が殆どないという暢気な農業人をしながら、こ
とあれば治安維持警察として出勤するという生活も楽しそうだと、
本気で思っていた。

人だらけの東京にそろそろ二十九年も住んでいるのに、未だに恋
人の一人もいないのだから、どうせなら若い男が回りにいない環境
の方が、いつその事スッキリしそうなそんな気もする。

ここにつながる棺桶にも、死地につながる棺桶にも、ほぼ毎日の
ように入っているのに、自分の身体の中で目覚めたとき、目の前に
王子様の顔があったことなど一度もない。多分これから引退まで入
り続けても絶対にない。

小柄で歌が上手いだけで、棺桶の前に王子様がいた某白雪姫はズ
ルいと思う。彼女と自分とどこが違う？ ガタイと顔だけじゃない
か。能天気な楽観主義なら、アレにも勝つ自信があるのに、まったく
不公平だ。

現に迫神だつてそうだ。穏やかで、聡明そのもので、ちょっと要
領は悪いのだけれど、真面目な取り組みを根気よくできる人なので、
結果として何事もうまく裁いていく。魅力的な男性だと思う。でも、
あの人には、全く自分は三分の一の同僚にすぎず、銃火器の取り扱
いや殺伐とした犯罪の現場に汚れまくっている自分など、特殊部隊
の名物、鬼教官というやつが精々で、一応二十代の女の子などとい
う、ふわふわと甘い場所には分類にされていないに違いない。

亜衣里がここに来て初めてで、ついでに今のところの最後になっ
ている、武装出動したルテチウム鉱山の侵入立て籠もり事件。セレ
と組み、保志のバックアップで、ルテチウム鉱山への強盗を企んで
いたアバタロイドの武装軍団を見事制圧して、管区内に居住してい
る保安官に限定した有名人だった、総司官の三分の一見習い相澤亜
衣里の名は、イットルビア地区に住む一般人にまで一気に浸透した
ようだ。

さすが人口密度稀少域は常日ごろの話題に飢えていると見える。
ときたま、アバタドライブではなく、飛閃に乗って警邏パトロールに直接赴くと、相澤亜衣里などという本名でなく、三分の一あいあいという、いま一つ締まりのない愛称で呼ばれることも多くなってきた。

ここに住むのも悪くない。そのときのバツパーはもちろん迫神だ。彼が自分のところの保安管区に見回りに来るときに、宮崎夫人が保志総司官にお菓子や料理をふるまうように、もてなして……、うん、そんな四年後なら、十分に思い描ける。
そんな気がしている亜衣里だった。

彼がバツパーになって、生身レア勤務に変わった時、ちょっとしたゴチャゴチャを納めにいつて死ぬことがないようなレベルに鍛え上げる。それは突入に当然シンクロライドするS A Tのレコン候補を鍛える以上の配慮がいる。少なくとも、生身の迫神が死ぬところは見たくない。

「セレ……迫神さんの進行方向二百メートル付近に、ターゲット五回連続表示してあげて。もちろん、携帯物は全部違うもので」

「了解。あいあい、もちろん、動かすよね」
「当然」

フル装備で仰向けからスタートダッシュの二百メートルの先に、その都度違うものを 武器だったり、携帯電話だったり、棍棒だったり、鞆だったり 持った動くターゲットを撃つべきか、銃口を向けてすらいけないかを判断するのは、非常に難易度が高い。

大体、T A Iのセレが出して来るターゲットは、普段S A Tで使っているようなチャチなものではない。本当にリアル感あふれる立体ホロ映像だ。誤射したときは、当たったところから、血を噴き上げて、場所によっては中身までぶちまけるといふ念の入りのようだ。赤ん坊を抱いた若いママをショットガン至近距離で射殺したときは、さす

がの迫神の脳味噌が、バーチャルであることをとっさに把握できずに昏倒した。あれ以来、彼の撃ち急ぎは激減した。亜衣里は思う。

このシステム、マジにSATに欲しい。

「鬼……。高齢者には労りが必要……」

「文句言わない。いつてらっしやうい」

亜衣里は爽やかに迫神を送りだすのだった。

* * *

「あいあいの司法試験は、微妙なとこだけど、半六ちゃんの仕上がり、目覚ましいんじゃないの？」

少額訴訟よりちょっとやっかいな事案、オマルにランダム抽選してもらって、裁判官と弁護士をつけてもらってちゃんとした裁判にしなければならぬものの、日程調整をしていた保志に、セレが声をかけた。

もちろん、セレが使いたい身体は今ほさがっている。よほどセレとして保志と話したいのか、執務室の壁面モニターに、これ見よがしに例の穰太の顔が大写しになっている。

「……」

保志は、穰太ごっこをしているセレが映っているのと反対の壁面モニターに目をやった。

フル装備でスクワットしていたのが、仰向けに横たわってからのスタートでダッシュする。勝手に4444が計測しているのか、ス

トップウォッチが動き出している。あの装備で、あの年だと思うと、いいタイムだ。己に引き比べて大したものだと感動する。

タイマー換算でみて、多分二百ほど走った辺りから、ホログラム・ターゲットが出だした。軽機関銃を持っているサラリーマン風の男の腕を吹き飛ばし、ハンドバッグをふりまわしているおばさんのときには、トリガーに指も掛けず、至近距離にハンドガンを携帯した男が湧いて出たときは、火力に頼らずに迷わずアサルトライフルを、インパクトウェポン打撃武器としてぶちかました。

迫神の特徴は、やっぱりカレママンというところにつきるだろう。はつきりいつて、おちついて打撃武器を使ったときより、頭で判断する暇もなく、素手での打撃だの蹴りだのを炸裂させたときの方が、ターゲットの破損度が高い。

「そろそろ、正直に白状して、応援頼んじやったら？ ジョリー・ロジャーと一緒にトッ捕まえようってさあ」

迫神と亜衣里がここに来る日を、実は保志はイットリウム輸送日に必ず設定していた。一応、いつでもモークヤプ・ルームに入れる体勢で、飛閃をセレにコントロールさせ、びつちりと張りついて、護衛してきた。あれからほぼ一年。イットリウムの抜き荷被害は未然に阻止できている。

こそ泥にすぎないジョリー・ロジャーが、義賊を名告る理由を考なえて、保志は例えばテロリストのような、手前勝手な主義主張のためには民間人をも無意味に巻き込んで殺傷することに禁忌を覚えないう連中と繋がっているのだらうと、裏付けはないながら半ば確信している。

貴金属や現金そのものと、レアメタル類は違う。産業界に資源として売って初めて金になるのだ。鉱物はそのままでは石の塊にすぎない。使用ルートか販売ルートがあるのだ。ジョリー・ロジャーが

抜き荷などというセコイ手段を用いて、断続的に仕事をしてきていたのは、貴重なものを一度に根こそぎにしては、当局も厳しく取り締まらざるを得なくなることを警戒しているということももちろんあるだろうけれど、既存の流通ルートにこつそり乗るために、不自然な量のブツを扱えないということもあるのだろう。そう保志はにらんでいる。

レアはレアだからレアなのだ。ここで輸送船一台分のブツが盗まれ、別の場所からそれ相応分の物量が売りに出されれば、だれだって、出てきたブツは盗られたブツに違いないと勘繰るに決まっている。

ここ数十年、輸出量が相変わらず好調だった中国産のレアアース。こここのところ、荷動きが若干鈍って高騰してきているのは間違いない。

単純な勘繰りで、抜かれていたブツは、チャイニーズ・オリジン中国原産という名札をつけて、地球生まれの資源のふりをして流通してきていたに違いないのだ。

ここ半年ほど、中国原産の流通量は、低迷したままだ。高値基調は連中にブツがある限り歓迎すべきことだろうけれど、如何せん在庫はそろそろ底をつくはずだ。

組織か企業かしらないが、ずっとそれを資金源にして活動してきた連中は、いらいらがたまっているはずだ。何としても、ゲンブツを手に入れたいに決まっている。

ジョリー・ロジャーをトツ捕まえるのに、何か特効薬はないかと日々悶えていた保志に天啓が訪れたのは、あの、あいあいの見事なルテウム鉱山制圧のお手並みを目の当たりにしたときだった。

保志はあいあいとセレが討ち漏らして、実行犯が坑道を出てきたときに備えて、飛閃の胸部にあるモーキャプ・ルームでスタンバっていたのだが、初めてチームになる二人の連携による制圧力は予想

以上のものだった。

亜衣里が使っているLサイズか、迫神とセレとたまに美耶子を使うMサイズの可変筐体ボディのどちらか　最悪二つとも　を買い換えなければならぬことになることも覚悟して、現場に送り出したのだが、結果は全部で五体もあつたアバタロイドを完全制圧して、非破壊状態で確保し、二人の身体に被害はなかった。

アバタロイド本体を確保できたことで、レコーダーの逆探知を利用して、火星にあつた実行犯のアジトを押さえられたのも大きかった。

そう亜空間通信subが繋がっていないければ、アバタロイドの通信履歴をリセットできない。通信中ならアバタロイドをゲートに逆探知が利くし、消去する暇もなく通信を切られれば、通信履歴はアバタロイドに残る。いずれにせよアバタロイドを破壊することなく確保できたのが大きい。

レアアースで食っているイットルピア地区で、亜衣里が一躍英雄になったのは、自然のなりゆきといえる。みんな、こそ泥だろうと強盗だろうと、折角の採集物を目の前でさらっていかれるのは我慢ならないと思っていたのだ。

保志と給料と仕事をシェアしていく三分の二を、冷静に時間をかけて選んだならば、一種試験持ちでない相澤を保志が指名することにはなかつただろう。自分の悪運に感謝するしかない。あれを鮮やかに制御した相澤は、間違いなく拾い物だ。あいうえお順名簿一番に過ぎなかつたという選択基準を今更だれに告げるだろう。

それはともかく、そのときに保志は閃いたのだ。

坑道でなら、ヤツラを出し抜ける。

ステルスモードの哨戒艇で、のこのこやってきたジョリー・ロジャーが、あの海賊旗をペイントした高速艇で何度も取り逃してきた。飛閃単体で後ろから追いかけても、亜空間航法^{SSN}に入られてしまえば追いつかない。

いくらジョリー・ロジャーでも、これ見よがしに張りついて飛閃が警護している輸送船に、船体を横付けするほど間抜けじゃあない。

ルートを干されれば、そして、ブツを望めば、間違いなくやつは鉦山そのものに手を伸ばして来るだろう。

あいあいという、切り札がある今、アバタロイドだろうが、シンクロイドだろうが、ともかくCQB（Close Quarters Battle＝閉所戦闘）に持ち込めれば、勝算はこちらにある。

ジョリー・ロジャーを追っかけるのは、結局はトカゲの尻尾を掴みに行くのに等しい。ジョリー・ロジャーを確保して裁判にかけさせたとして、頭はのうのと生き延びて、次の尻尾を生やして来るに決まっている。

それじゃあ殺された恨みは晴らせない。

鉦山に飛閃のようなジョリー・ロジャーがイットリウム鉦山を襲いに来る、その日が保志の待ちに待ったXデーだ。

正面モニターには、飛閃のカメラが捉えている、イットリウム輸送船の姿が、宇宙の闇にも負けじとばかり、クッキリと白光りして輝いているのであった。

16・三十二歳ルーキーへ贈る言葉

海賊旗（ジョリー・ロジャーに関しての覚書）

かつて、帆船での海上輸送の全盛期。海賊というものがございましてな。

海賊旗というものは、海賊船が常に掲げていたものと思う向きもいらっしやるが、基本、攻撃する意志を表明するサインでありまして、「降伏せよ、さもなくば汝の運命は骨と化す^{なんじ}」という呼びかけの印でありました。

襲われた船にも抵抗するか徹底交戦するか表示する手段がございまして、これがかの有名な白旗。白旗を上げられたら、海賊は粛々と盗みだけ働き、決して危害を加えないというのが、この時代のおらかな共通理解でありました。

海賊さんも、白旗を掲げないようなやつには、海賊旗を下ろして赤旗を掲げ、丁々発止の鬨が始まるわけでして、海賊映画で戦闘中にかの海賊旗が翻っているのは、これまた大間違いでございます。帆船での接近戦なんて、横付けされるまでスピード感なんか無縁ですからねえ、旗ぐらい変える時間はあつたんでしょうなあ。

また、海賊を取り締まる軍艦も、海賊旗が掲げてある船を見掛けたら、容赦なく攻撃して略奪（？）の対象とすることが権利として認められておりました。

普通のセコイ海賊が、普段からあんなものを掲げていたわけは、そんなんでないわけでございますな。

この海賊旗のネーミング、^{ジョリー・ロジャー}JOOLY R o g e rであります、

これまた確かな語源は分かっておりません次第で、諸説いろいろございます。

曰く、フランス語の「キレイな赤（joli rouge）からきているという人もありますし、タミル人の海賊アリ・ラジャ（Ali Raja）からという説もありますし、はたまた悪魔の古き良き名前オールド・ロジャー（Old Roger）だよと、自信タツプリにおっしゃるむきもいらつしやる。

ただ、この下らない話の筆者としましては、髑髏の口元が笑っている様に見えますことをもって、笑う悪魔、ご機嫌な悪魔という説を支持したいところそり思います。なんたつて、笑顔は人の心をくすぐる麻薬ですからねえ。

とにかく、故事来歴をわきまえず、始終船体にジョリー・ロジャーを貼り付けている、かの我等がろくちゃん宿敵、海賊が、バツパ―保志の読み通り火力を頼んでイットリウム鉱山に押し寄せてきたのは、三分の一参加者の三名が、それぞれに将来設計を勝手に引いていたあの日から、更に三カ月ほど後のことでありました。

* * *

迫神平和が三分の一プログラムに参加して二年目に突入した。誕生日が来てしまつて三十三歳。新しい日常に足を踏み入れるには、些か臺が立ったお年頃。平和な日本にも人間同士がいる限り、必ず起こる争いごとを、なだめすかすのが役所。東京地方裁判所勤務としては中堅に差しかかった裁判官十一年目。単独審をしきれぬ判事

になって二年目である。

宇宙の開拓最前線^{フロンティア}は、彼の独身者用官舎にある、四畳半の中に鎮座している棺桶の向こうにある。

奇妙な二足のワラジ生活も、慣れてしまえば、日常に過ぎない。回りも迫神判事が宇宙まで出向いて何をやっているのか、気にするのをやめてしまったような、まったりした雰囲気のある今日このごろ。増加する訴訟件数に人手不足な東京地裁で、堅実な仕事をこなす迫神判事は、はつきりいつて忙しい。

同時に百件以上の訴訟・事件を扱うのが常態で、ついでに刑事事件はともかく、民事事件であれば公判期日を決めるのも、部屋の都合もあつて時間制約がある。

独立国家独自の司法制度の上に、国際連合規範ができたのは、人類が宇宙から飛び出して、最初はHRB^{ハーフ}（Human race・s birth place）の衛星軌道上に、それから近場の月、そして火星へとじわじわと生息範囲を拡大していった時期に、単独国家が独占的にその新しい都市を支配するのではなく、複数国が協働して運営していくという形を採った現状を受け入れた結果だ。

司法試験に日本国憲法を含むいわゆる六法に基づいて肅々と判断していく従来のもの、いわゆる二種と、国際連合規範諸法と、国際連合準拠判例データベースに基づく判断を行う一種とができたのも、普通の訴訟・事件に関わる当事者が、複数の国籍保持者であるケースが増え、それに対応する新しい枠が必要になったからで間違いない。

とにかく、東京地裁であろうと、国連総合司法局最高裁所であろうと、一つの訴訟・事件の当事者に、複数の国籍保持者がいた場合、一種試験持ちでない裁判官は担当できないことになっている。逆に

いえば、ケースとしてはレアであるけれど、月や宇宙植民地での所有権争いがあったとして、当事者の全てが日本人であった場合、日本の二種試験を持っていれば裁判官としてあるいは検事として、弁護士として活動できるということでもある。

実質、東京地裁の裁判官を任命している日本の最高裁判所の担当官も、多分、一カ月のうち十日も留守にするような人間は、使いつらいに決まっているが、人・モノともに国際化が激しい昨今において、至難といわれる第一種司法試験合格者には、一件でも多くの事件を扱ってもらわないと現状として裁判が回っていかないのだろう。はつきりいつて、三分の一に参加したとはいえ、それで一度に担当させられる件数が三分の二に減ったかというところでもない。月に十日分も日程が使えない迫神の都合に合わせて、日程が調整され、裁判期間が長くなるという、どうにもあつちにもこつちにも申し訳ない状況が続いている。

日本の法曹界において三十代ははつきりいつて漸く尻からタマゴの殻が取れたという扱いで、実質中堅までもいかない。裁判官三人体制で臨む合議審の裁判長を張れるほどのベテランではない。このところ右陪席が定位置だ。

「そろそろ行きましようかね、迫神君、屋島君」

そう後藤裁判長から促され、さて法廷に行こうときになって、迫神の携帯がけたたましく着信音を立てた。

どうせ下らない用件だろうからと、そのまま問答無用に切るうとしたのだが、その画面の表示が保志からのSSCだったので、迫神は後藤裁判長に言った。

「すみません。例の三分の一の、指導官からなんです」

「手短かに済ませてくださいね。遅刻はしたくないものです」

「はい、申し訳ありません……はい、迫神です」

後藤にエクスキューズして携帯にでると、保志の素っ頓狂に裏返った声がけたたましく響いた。

でたっ。出た、出た、出た。

「は？」

保志が壊れている。迫神に即刻通話をきりたくなった。出たの連呼で炭坑節を思い出し、月でも出たのかと突っ込みたくなったのは、もちろんたまたまのことだ。後藤と屋島の目がなければ、軽口の一つもだせるのだけれど、ここでは御法度だ。至極真面目な声を捻り出す。

「何が出たんですか、保志総司官」

ジョリー・ロジャーに決まってるだろう。俺たちの結成理由の。

（俺たちの結成理由？）

ますます、迫神は分からない。

「すみません、これから公判なんで、時差気にしなくても構わないなら、終わってからコールバックします」

いいから、さっさと全部うつちゃって来てくれ。

「無理です」

迫神はにべもなく言い捨てた。「出た」と「ジョリー・ロジャー」という組み合わせは、保志総司官にとっては、説明不要なのかもしれないけれど、迫神には意味を持たない。当然、たくさんの疑問符を貼り付けてはいたが、だからといって裁判長も、裁判そのものも待たせるわけにはいかない。そうでなくても、迫神のスケジュール

は周りをふりまわして、不便を強いているのだから。

お、おい。半六つ、ちょっとま。

迫神は電源を落として携帯を私物の鞆目掛けて投げた。ジョリー・ロジャーというのは、何かどっかで聞いたことがある気もするが、さて、何だったのかとなると、とっさに頭に浮かんでこない。思い出しそうで、出てこない。知っているはずが、ピンとこないというのは非常にスッキリしないけれど、今は……。

「いいのかね、迫神君」

「あ、大丈夫です。お待たせして申し訳ありませんでした」

「うむ、じゃあ、行こうかね」

後藤裁判長、屋島裁判官に続いて歩きながら、迫神は今日は、今日の原告と被告の代理人を務める弁護士の名前を脳内データベースの中で繙いて、長引く恐れがある事件だったかどうかを頭の隅で思い出そうとしていた。

* * *

「あーあ、半六ちゃんに振られちゃったねえ……」

遠く隔たったイットルビア地区派出所の人口密度稀少域特例、総合司法官執務室。

繋がったSSC電話を、迫神が一方的に終了させた直後、不肖の

倅^{せがれ}の面をしたセレは、そういつて保志をからかった。

「……半六の野郎」

ぎりぎり握り込んだ拳を、保志はわなわなとふるわせる。

「でも、ろくちゃんが悪いんだよ。ちゃんと常日頃から、目的とか問題意識とか、目指すところとか情報開示して、透明性を確保して、共通理解にしておかないんだもん。そんなんだから、半六ちゃんが、ジョリー・ロジャーって単語でエキサイトしないんじゃない」

セレの指摘は至極真つ当だ。こういつときの正論ほど腹が立つものはない。

「うるせー」

と、保志はいきり立った。セレはにやにや笑って、あいあいへのコールを始める。自分が呼びつけるなら一度にこなせるが、保志は一度に一つの文章しかしゃべれない。

「あいあい基本訓練だからねえ。東京でそんなに日常茶飯事でSAT制圧活動してないだろうから、きつと今日が三分の一稼働日じゃないくても、すつとんで来てくれるよ。だったら、まあ、前ンときのメンツだし、いいじゃん」

SSCのコール音が壁のスピーカーから聞こえる。迫神と違ってあいあいが出る気配もない。

「半六ちゃんもがんばってあいあい絞られて、やっとデビュー戦できそうだっていうのに、間が悪いよね」

「そういう問題じゃないかもしれねえ……」

保志は難しい顔をしていた。

「どういつ問題？」

「あいあいも出撃中だったら……やべえってことだ」

「……？」

あいあいはまだ出ない。

「ジョリー・ロジャーのやつ……。こっちはやつをおびき出したつもりだけど、やつは、用意周到に俺の仕掛けを逆手に取ってきたのかもしれないってことだ」

「意味分かんないよ……。どういうこと？」

セレが途方にくれたような反応を示す。

TAIにこういう反応を示されると、保志は正直、人工知能の限界を感じる。データは自分など足の爪先にも及ばないほどたくさん持っていて、それを同時並行処理で扱えるほどマシブな演算力を持ちながら、こんなに簡単な因果律に直感が働かないのだ。

「俺は輸送ルートを押さえれば、やつはいずれ鉦山に手を出すといってただろう？ で、そのいざというとき、あいあいと半六と、お前、飛閃とフル体制で挑め^{いど}るって、そういう皮算用をした。皮算用って意味分かるか？」

「タヌキぐらい知ってるよ。で？」

「今まで弱気の後手後手対応しかできなかった、弱腰のバッパーがなぜ人手も足りてないのに、仕掛けてくるのか。仕掛けられた気配が分かれば、そいつに乗る前に普通の人間はなんで向こうがそうしてくるのか、考えるんだよ」

ここまで説明してもセレにはピンとこないようだ。保志はもどかしかった。

「つまりな、裏で繋がってるのか、それとも別口かしらないが、あいあいがここで名前を売ったのは、ルテチウム鉦山の一件だ。鉦山に手を出してバッパーが珍しく事件を制圧して、ついでに火星にい

たコントローラーの逮捕に至った。ここいらじゃ新聞社がネット配信なんてしてねえが、その気になれば誰だってあれについてはくっちゃべってくれる」

あいあいへの呼出し音は続いている。

「人間は誰だって勝利の経験にはつけあがり、敗北の経験には萎^{しお}れる。俺はルテウム鉱山で天狗になって、同じ勝利の状況に持ち込もうとしたが、ジョリー・ロジャーも自分の勝利した状況に持ち込もうとする。あいあいと俺たちでチームを組んで、俺たちは勝った。半六判事がそういう意味で戦力になるかどうかは、さすがに向こうさんにもデータがないだろうが、ジョリー・ロジャーが人間ならこう考える。少なくとも前に、バツパー保志とガチ対決したときは勝った。勝ちたかったら、SATの現役隊員で難物の相澤が出られないとき、戦力かどうかよく分からないが、少なくとも頭数の一人迫神を排除できれば、前と同じ状況に持ち込める」

「あ……」

漸く、セレは保志が言おうとしていることに気付いたらしい。

「そうだ。俺たちだけなら、俺が四ツ裂きにされた、あのとき同じ状況だ」

「……ろ、ろくちゃん」

セレが棒立ちになった。

「セレ、あいあいコールはなしだ。SSS（SATサポート・スタッフ）の金城さんにコールだ。あいあいが出動してるかどうかと、出動していたら、どんな事件で出張してるかをちゃんと聞いてくれ。膠着状況が間違いないような事件であいあいが取られてるなら、あつちの事件も、ジョリー・ロジャーの親玉と繋がってる可能性がある」

る。その場合は、金城さんに、その可能性をちゃんとやってくれ。
その上でオマルの雑賀^{さいが}さんから、改めて桜田門（警視庁）に相澤を
こっちに回してもらえる様に頼んでもらって」

「アイサー。で、ろくちゃんは？」

「イットルビアの鉾山にヨリー・ロジャーのケツを持ち込んだの
は俺だ。逮捕にいくに決まってるだろう？ シンクロナイザー・ス
キャナ・スタンバイしてくれ。イットルビアに先に行く。宮崎さん
に、装備の準備してもらって。あと、飛閃を鉾山まで移動させと
け……時間が無い……」

「……ろくちゃん」

「なんだ？」

「オイラたち……勝てるよね」

「分かるか、そんなもん。行くぞ」

普段、セレや迫神が出て来る壁面に埋められた棺桶は、棺桶だけ
に、ちゃんと走査器の機能も当然もっている。保志は縦置き棺桶の
扉を開けると迷わず飛び込んでスタート操作をした。

かすかな動作音。聞き慣れたアドバイス・ボイス。目を閉じる。
スキャナーが今の彼を忠実に読み取っていく。ちらっとソロプレイ
なら飛閃にアバドライブするべきだったかもという考えが頭の隅
をよぎったが、今更戻るのも時間が勿体ない。飛閃はセレに任せる
しかない。

そうすると、あのとときと状況は同じだ。自分がシンクロライドし
て突入し、セレが飛閃を操ってバックアップにたった。そう、ジ
ヨリー・ロジャーに敗北を喫したあの日と。

あいあい、半六。どっちでもいい、間に合ってくれ……。

棺桶の中の保志の祈りは、果たして神様に届くのかどうか。

* * *

言葉を尽くしても、尽くしても、自分の声を大きくすることだけに配慮して、相手の言葉に耳を傾ける気がないと決して噛み合うことなどない。証人二人と被告本人、三人を連続で実質三時間半、休憩を挟んで四時間。言い分の矛盾も、時系列の混乱も、事件から五年もたつていれば、「記憶を基に証言」するしかないのなら、はっきりいつて狂つてきて当たり前だ。

最初から理解点がないのに、時間をかけてすれ違いの溝を決定的に広げていく。すればするほど、時間をかければかけるほど、どちらも鬱屈をためていく。

国連準拠の考え方でいけば、そもそも公判までこれだけの時間を経過していることが違法なのに、国内で仕事をするかぎり手続と手続が無為に時間だけを積み上げていく現状に、目を瞑らなければやっけない。

多分、迫神だけでなく、ペーパードライバーならぬ、国内限定一種持ちならばともかく、国際法廷で国連準拠裁判をしたことがある者なら、その乖離にとまどいは深くなるばかりだ。

被告にも原告にも、当たり前だが双方の言い分があり、双方の正義がある。だから、自分は法に照らして、法が正義とするならば、こうなるということを分かりやすく、しかも説明しなければならぬ。

一つの事件にじっくり付き合えば、まあ違う対応も可能なのだ

ろうけれど、余程の事件でなければ、その都度思い詰めていたら人間が壊れてしまう。

取りあえず、迫神は宇宙の彼方にある、もう一つの日常のことに意識をもつていくことにした。

「ねえ、後藤さん」

迫神は、この中で一番年長だからというからでなく、雑学大辞典と渾名される博識に信頼を寄せているという故をもって、後藤に話し掛けた。狭いわけではないのに、この通路は音が非常によく響く。「何だね？」

「ジョリー・ロジャーって……なんでしたっけ。後藤さんならご存じですよ」

「ジョリー・ロジャー？ ああ、あれだ」

「あれといえますと？」

質問が正答へ至るまでの回路より、それを脳から口の運動指令までの回路の方が長いのか、後藤はしばらく、あれだ、あれだと指を振っていた。それから、やっと、どうにか一つの言葉になった。

「海賊旗」

「え？」

「海賊旗だ。髑髏マークに、ほら、大腿骨でバツテン書いた毒薬マーク。ほら、宝島とかの絵本の挿絵で、海賊船が掲げてる、あの旗だ。もつとも……あれは、いざ鎌倉マークだから、普段からそんなものを揚げていたはずはないんだがね。まあ、娯楽というものは分かりやすさが一番だから、江戸町奉行所に看板がなかったのと一緒に分かりやすさに史実が蹴飛ばされて常識化」

「……海賊？」

出た、出た、出たっ

あのととき出たのは、三池炭鉱に月じゃなくて、イットルビアに海賊か。

いいから、さっさと全部うつちゃって来てくれ。

あれ、もしかして、保志総司官からの非常、応援要請だったのか？

「後藤さん、ありがとうございます。ちょっと急ぎますので、失礼」裁判官がこの通路を走るなど以ての外。迫神は軽く会釈すると可能な限りの早足で自分の携帯電話に目掛けて突進した。

電源を入れて、通話履歴のトップ。コール音半分で、会話が繋がった。この素早さは保志ではありえない。

「セレ？ 済まなかった。保志総司官は今電話に出られる状況か？」

半六ちゃん、ごめん、お願いだからすぐ来て。オイラじゃ動けない。

聞こえてきたのは半分ベソをかいているようなセレの声。

「TAIの癖に泣くな。どういうことだ？」

オイラ、人間に発砲したり、攻撃したりしようとする、すげー動作決定に時間かかるの。オマルのホストとSSCで完全同期して、適正かどうかを一々許可もらわないと次のステージいけないし。ろくちゃん一人で坑道の入り口、なんとか封鎖してるけど、もう四時間近くたつし、絶対限界。人間、そんなに集中力続かないもん。

「あいあいは？」

どうやら鉾山への立て籠もりが発生しているようだ。

ニユースつけてみたら絶対生中継やってると思うけど、小学校に武装したアバタロイドが乱入して、そっちにS A Tが出動してる。桜田門はオマルの要請なんか、屁としか思っ
てないんだ。

「落ち着いて、セレ。あいあいは手が放せないで、保志総司官が一人で坑道に湧いて出た海賊を逃がさない様に、坑道の入り口を封鎖してるんだな。で、お前は生存権優先順位のせいで、実質戦力外と、そういうことか？」

そう。

「分かった、すぐ行く。タクシー飛ばすから、あと三十分後、とりあえず派出所にシンクロライドする。それでいいか？」

だめ。今、半六ちゃんの棺桶、ろくちゃんが入って、ライド中。

「あいあいの身体は？ ボディ 大は小を兼ねるだろ。足りない分にはどうしようもないけど、材料余る分には何とかならないのか？」

迫神は次善を探して頭をフル回転させる。

だめ。全然桜田門はこっちのことなんかどーでもいいのか動かないんだけど、一応、オマル経由であいあいの出動要請だしてるんだ。許可が下り次第、転送先をこっちのボディに変えてもらえるように、あいあいの身体は受信スタンバイしてS A Tの転送器にチャトランスミッターンネル合せてる。

「じゃあ、どうしろって言うんだ？ いけないじゃないか」

飛閃に乗って。できる？ シンクロライドじゃない。アバタドライブ。

「飛閃……に、乗る？ どうやって。乗ったところで操作は出来ないよ」

飛閃はモーキャプで動く。身体の制御はオイラがするから、考えて動くのを半六ちゃんに頼みたいんだよ。

「モーシヨン・キャプチャ？ そんなのどこで出来るんだ？」

コスモ・シンクロライド・トラベラーズ・ジャパンって会社、知ってるでしょ？

もちろん知っている。世界の入山規制がある名山への、シンクロライド・クライミングをコーディネートしている旅行代理店の日本店で、迫神の心のオアシスだ。

「あ？ それは知ってるけど、あそこはシンクロライド専門の旅行会社だよ」

その通りからみて右隣に、バーチャファイトっていうゲーム屋さんあるの、知ってる？ データ上だとあることになってるんだけど。

隣はカラオケショップと、ボウリング場とゲーセンが入っている巨大アミューズメント・ビルだったはずだ。迫神自体は足を踏み入れたことなど当然ないけれど、バーチャファイトという名前から連想できるような、アバタドライブで擬似空間でのコッバット・ゲー

ムができる施設ぐらいあっても、別に違和感はない。

「知らないけど、多分あると思う」

オマルの強制執行権つかって、その一台借り上げて、回線をインターネットじゃなくてSSCにしたから、そこに行つて。山手線ですぐ行けるでしょ？ タクシーより近いよね。

迫神は途中で通話をハンズフリーに切り換えていて、法服を脱ぎ、ジャケット脱ぎ、そのついでに日常まで脱ぎすてた。財布とIDカードと携帯だけチョッキのポケットに突っ込み、走りにくい革靴を通勤用の運動靴に変える。

早くきて、お願い。もう、こっちは限界……。

セレのその言い方は、色っぽすぎてやばい。まるで自分が恋人の少年を泣かせている様に受け取られかねないじゃあないか。迫神は遅れて部屋に入ってきて、呆れた様な目つきになった後藤、屋島両裁判官に泡を食って言い訳した。

「三分の一のTAIは、こういう感じでしゃべるんです。別に私用じゃありませんから」

どこまで信じたのか定かではないが、後藤は分かった分かったというように頷いた。

「……迫神君。あっちもこっちも忙しそうだね」

「向こうじゃ、左陪席（初心者）なんで、それなりに大変です」

迫神は正直に言った。自室の四畳半から宇宙の彼方へ出勤するのも、旅行会社の棺桶から山に入るのも慣れた。何か奇怪しいとは思っけれど、取りあえずそれを日常とすることに迫神の思考回路は設

計完了している。

けれど、ゲーセンから飛閃にモーターキャブで乗って、鉾山へ侵入している犯罪者の制圧に出動するというのは、どういう冗談だ？

「何だか取り込み中みたいだけど、……まあ、取りあえず、明日はこつちに出勤で、日程調整しなくていいのかな？」

「分かりません……。取りあえず、行ってきます」

迫神は、裁判所の敷地を出るまで走り出すのを我慢するのに、自制心を総動員しなければならなかった。

「半六判事が……、左陪席^{ルーキー}ねえ……」

迫神が消えた扉を、あつけにとられた目つきでしばらく見ていた屋島裁判官が呟いた。屋島はもちろんここでの経験が浅いからこそ、左陪席の位置に座る。

後藤がうんうんと何度か唸ってから、思いついた様に親指を立てた。

「取りあえずは、行き先がどんな修羅場にしろ、ドラマのワンシーンみたいに、こういう感じでしょかね、屋島裁判官……。グッドラック」

後藤のキャラクターに合わない、その仕種^{しゅ}に屋島が小さくぷつと噴き出していた。

17・デビュー戦

信じられないことに、宇宙空間に浮いていた。

雪山の中、ふぶかれてしまうと、どこまでも続く白い世界の中にぼつねんと取り残される。自分まで、白く白くなって、景色に溶け込んでしまいそうなああの感覚。

前も後ろも天も地も、全てが消え失せて、大気がない宇宙独特の点灯しっぱなしの星たちが、圧倒的な量でさんざめいていた。

どちらが上でどちらが下なのか。自分が宇宙の中心なのか、それとも一つの星に過ぎないのか。人工大気に守られていない状態で、体感として間近かで輝く恒星を見やる。その眩しさに手で庇を造ろうとする。

白く光る金属の、いかにもゴツゴツとした手。

迫神は呆然とした。

あの普段は静かに横たわっていることが多い白い印象が強い巨体。物騒な武器を満載させているのに、威嚇としてすらそれを使わずに、保志総司官が移動に使っているそれ。

この一年と数力月の間に、武力行使が目的で出動したことはほとんどないはずだ。

今……飛閃なんだ。

それにしても、静けさはおそろしいほどだった。シンクロライド

でも、聴覚はオリジナルの感覚にごく近く反映されるものだから、ここが真真空にごく近い、宇宙空間の真っ只中であるゆえに、飛閃の動作音すらも伝わってきていないのだと分かる。

それでも、闘いに來た迫神にとって、その静けさは居心地が悪いものだった。

「手遅れ？」

一人呟く。

耳元でセレの声がした。

「大丈夫……まだ間に合う」

少しだけ、安堵の吐息。それから声に出せば、セレと会話ができることに気付いた迫神は現状把握しようと取りあえず口を開いた。

「現状は？　ここはどこ？　どうしたらいい？」

「ろくちゃんはやっと前に落ちちゃった。また、しばらく不機嫌だろうな」

と、高性能カメラがぐぐつと足元にあつた星を拡大していく。テラフォームド・シティと違って宇宙に向かつて剥き出しの鉾山施設は、高性能カメラを遮らない。どんどん拡大されたその先に、壊してバラバラに放り投げられたマネキンのような形状の、元は人型だったと思しき物体おほが映し出された。

あれは保志だ。そう思ったとたんに、迫神は胸を駆け上がって来る吐き氣と闘わなければならなかった。シンクロライド中の感覚は、味覚、嗅覚を除いて全て本体にダイレクトにフィードバックされる。どれほどの痛みを彼が味わわれたのか推し量ることもしたくないが、一気に裂かれて即死だったことを祈りたい。そうでなければ、

地獄だ。

武装して強化スーツを着込んだ、見るからに戦闘用のアバタロイドが、後藤が言っていた髑髏マークを船体に白々と浮き上がらせた、サブ・スペースシップSSSに積み込んでいる。

「それからここはイットルビア地区の名産、イットリウムの採掘施設で……」

迫神が立て続けに投げた三つの質問に、順序よくセレは答えるつもりらしい。

「オイラたちは、ジョリー・ロジャーがSSN（亜空間航法）に入る前にトツ捕まえる」

これで三つの疑問に対する答えは、全てそろった。迫神は少し微笑んでから、表情を引き締めた。あいあいからも、保志総司官からも指令もバックアップもなく、そんなものをトツ捕まえる手段が分からない。

「勝負になるのか？ セレ」

迫神が言っと、笑い声が聞こえた。

「マニィアさんえすコロマと、ただのSSSが勝負になるとでも？ オイラの飛閃は軍隊相手でもタメはれるのよ」

「マニアックなコロマ？」

「マニピュレイテッド・アームド・コロツサス。武装巨人型特殊車両って感じかな」

「つつこむ？」

「イットリウム鉱山の施設ぶっ壊したら、始末書じゃ済まないよ。三世代ローンの賠償金抱え込まないと」

「子供もいないのに、三世代ローンが組めるわけないだろう？ そうなったら自己破産してやる。じゃあ、タイミングは離陸してから、加速しきる前だな」

迫神が言う。

「それでいいと思う。でも、半六ちゃんは、子供の前に奥さん見繕わないと」

「面白みがない男だからなあ……もてない」

「もてる必要なんかないじゃん。結婚なんて、一人好きだって言うてくれる人がいればいいんだから」

「その一人がいないの」

「あいあいは？」

迫神がつまる。たかがAIにこの複雑な心境が分かってたまるか。相手にされないと分かっている。けれど、それでも学生ならば受け入れられようと、拒否されようと、素直に思いを伝えることにためらわないでいい。あとは野となれ山となれだ。

けれど、とにかくにもかくにも、あいあいは仕事仲間なのだ。気まずく、やりにくくなるぐらいなら、このままでいい。

「仕事中だろ。余計なこと言うな」

「ズルいよ。生き物のなんだから、気持ちいいこと……ちゃんとすればいいじゃん」

「……セレ。人間は、自分だけ気持ち良くていいって話じゃないんだ」

セレは黙らなかつた。

「だって機械と生き物の差って、そこじゃん。あんたたちは、気持ちいいって感じる能力がある。特別に何も磨かなくても、ごはん食べれば気持ちいいし、うとうと寝ても気持ちいいし、トイレで排泄行為したって、ずーっと気持ちいいって顔してるじゃん。生き物の特権だよ、それって。オイラたちはどうやったって、分らない。どれだけデータを積み上げても、想像もつかない……ズルいよ……」

「セレ……。人間はただの生き物よりも、もうちょっと複雑なんだ。気持ちいいって感じる力が生き物の能力だとしても、自分だけがよくても……。それはそれでいいって考えるやつもいるんだけど……。でも、それじゃ半分しか埋まらないんだ」

迫神は不思議な気分だった。なんで、機械の身体になったあげく、気持ちいいという感覚がどうやっても分らないのは不公平だと嘆くAI相手に恋愛談義を繰り広げなきゃならないんだ？

気持ちいいことをしていいというのが、生き物の権利だとしても、弱いものを蹂躪して刹那の快感にはしるものの見苦しさを、日常的に垣間見ている者に見れば、その権利には制限が付くのはいたしかたないと思うのだ。

本能に任せて自分を穿ち込んで、自分だけが快楽に酔いしれて、された人間が生涯癒えぬ傷をそれで負うとしたら、そんなものクソクラエだ。

まあ、あいあい相手では、自分如きが暴力で蹂躪することが果たして可能なかどうかは別としてだ。

「……そんなん、言い訳だよ」
サブ・スペースシップ
セレが呟いたとき、SSSのハッチが閉じられた。

「その話はあとだ。セレ。行くぞ……。とにかく、あいつらをぶちかませばいいのか？ 飛閃の装備一覧、表示できるか？」

目の前の仮想モニターに、使用可能な武器のものしい名前がずらずらと並ぶ。その方面の知識は相変わらずお粗末な迫神は決めあぐねて、ただの記号の羅列を見つめる。

「どれ……。使っていいんだか……」

「半六ちゃん。オイラ……。思っただけどさ」

「何？」

「お得意のカラテキックで、SSSの推進装置、壊せない？」

「飛閃^{これ}で、カラテキック？」

「モーキャブだから、できるでしょ？」

「できるとは思うけど……なんで」

「アバタロイドと盗まれつつあるイットリウム、両方とも無傷で確保できるじゃない」

たしかに、アバタロイドを無傷で確保できれば、可能性として犯人を探知できるかもしれない。それと、高価なイットリウムをロスしないで済むのも大きい。

「足場がないのに？」

「そっちにはあるじゃない足場。そこ、ゲーム屋さんの、モーキャブ・ブースなんだから。体感カメラモードやめて、データカメラモードにして」

「モード切り換えってどこでやるんだ？」

「音声指示でいけると思う」

セレの言葉が終わる前に迫神は叫んだ。

「カメラモード切り換え」

と、目の前にピコンと「体感」「アラウンド」「3D」という文字が三種類浮かんだ。「文字が出てきた。今のこれが体感なら、アラウンドと3Dって？」

「アラウンドは、ろくちゃんの執務室の三面モニターの後ろもモニターがあるってこと。モニターを見る感じになる。3Dは目の前に立体映像がでて、そこにオイラが映るはず。選択は視線で選んで瞬き2回でマウスのダブルクリックと一緒に。多分、ゲーム屋さんのだから、音声でも選択できると思う」

迫神は少し考えた。カラテ技をかますなら、宇宙空間で上下左右が分からないのはどうにも勝手が掴めない。

「3D」

迫神がその言葉にすると、次の瞬間には、コントロール・コンソール・パネルのようなものが目の前にできて、その先に大きな立体映像として宇宙空間が浮かんでいた。

「セレ、お前への指示もこういう、アバウトなので大丈夫か？」

「もちろん、なんともスリ合わせするよ」

「分かった、SSS目掛けて移動。ポイントはこの辺」

なんとなく視線を合せて瞬きしてみるとそこがぼつと赤く光る。

「半六ちゃん、すごい車幅感覚いいね。オイラも丁度そのへんでうまくキャッチできると思ってた」

「飛閃って車両なのか？」

「統計分類だとそう」

目の前でジョリー・ロジャーの軌跡と、飛閃の軌跡がだんだん近寄る。迫神が焦点を合せた箇所辺りで大体交差しそうだが、

でも、こいつでカラテ技をかけるのは難しい。

そのとき、迫神の頭に、あいあいと訓練でやっていたとき、セレが表示させるターゲット・ホログラムが甦った。

「セレ、ここの俺を飛閃と仮定させて、SSSの位置を射撃訓練のとき出してくれるホログラムみたいな形で表示できるか？」

「……そのくらい、お易い御用だけど」

「じゃあ、そうしてくれ。あ、それから、俺の位置はSSSからみた定点にしてみてくれ。立ってるこっちの目の前を、やつが通りすぎてく……そういうイメージで」

ふいに、目の前が暗くなった。周囲の星たちが光の線になって通りすぎていく。迫神は静かに、すべての世界の中央に立っていた。星々が自分を中心に回り、そして、その中を一つの機影がぐんぐんと迫ってくる。静かに立って集中する。あれを蹴り落とす。チャンスは一度。

迫って来る光。

ふいと息をとめて、迫神はその点の進行方向を遮る形になるように身体を使い、正確無比のひと蹴りを、その光の弾目掛けて繰り出した。

手応えあり。

そう思った瞬間に、セレの叫ぶような声が耳の間近かで爆発するかの様に響いた。

「やったあ。すごい！」

これで空振りしたら、めちゃくちゃ間抜けだったよなア。と、迫神はことが済んでから、背中に冷や汗が伝うのが分かった。セレは自分が空振りしたら、そのときはバズーカでもぶっ放して、撃墜するんだったのかななどと、もうするはずのない失敗に迫神がうじうじしそうになる前で、全ての音が甦ってきた。

モークヤブ・ブースは並んでいる。隣の賑やかなBGMが、うすい壁を通して洩れて聞こえて来るのだ。ドシャン、ガシャンという効果音も伴っている。いま自分がしたことは、現実なのか、それとも妄想なのか。

とにかく、目の前で運動エネルギーを完全に阻止されて、たよりなく浮かんでいる玉だったものが、ゆっくりとSSSの形を描いていく。どうやら、飛閃の胸ぐらいの大きさなのだ。この大きさのものを蹴り損なったら、それはそれで恥ずかしかったか、と、考えてそれから迫神はチープなゲームセンターのブースで、自分が何をし

たのかを捉えきれずにへたり込んだ。しばらく立ちたくない。

「近くの宮崎保安官事務所に強制連行してオマルにつないで、実行犯をたどれるかどうかやってみる。シンクロイド・ボディとの通信を切られてるかもしれないけど、一応頑張る。ろくちゃんはいみために、死になれてないから、多分棺桶で悶絶してると思う。オイラろくちゃんひっぱりだして、医療ベッドで寝かしてから、ふらふらししないで、ちゃんと棺桶入っておくから、三分の一より超過勤務で申し訳ないんだけど、あとで来てくれる？」

「うん、分かった……。情けないけど、……ちよつとエキサイトしたの揺り戻しで力入んない。少しだけ休んでから……行く。ホント……情けない。飛閃みたいな反則的に強いモノをアバターにして、仮想空間で光の玉ぶん殴っただけなのに、力尽きた……」

つい、自虐的な笑いが洩れる。こんな緊張感には向かないと、つくづく迫神は思った。あいあいは……こんな、一か八か、タイトロープを渡るような緊張感を強制される現場で、凶悪な武器を持っている犯人を生きて逮捕して、ちゃんと裁判という正義の場に引きずり出すために、行動不能にさせるまで五秒もかかるへボい武器を持たされて、そこがレコンのポジションだからと、平気で死に出掛けていく。

正義のために闘う。同じ大義名分を共有しながら、なんという違いだろう。自分の様な立場のものが不要だとは決して思わない。直接、報復に報復を塗り重ねていく愚を、近代化は拒絶した。それは賢い大人の選択だと信じる。

けれど、悪意を持って武力で来る人間に対して、なんと人は無力なのだろう。そして、無力が蹂躪されることに断固として異を唱えれば、暴力という同じ言語で圧倒するという汚れ役が、平和のためにある。

「ここ、ネットに繋がる？ あいあいのところがどうなってるか知りたい」

「うん……ニュース画面にしとく。そこ、半六ちゃんが出るまで、オマルで押さえとくから。デビュー戦……勝利お疲れ……」

セレは不思議な存在だと思う。人間になりたいのだろうか。

「人間に……なりたいのか？」

「違うよ……。知りたいんだ。どうして、あんなに優しい存在にも、強い存在にも……。愚かで、醜い存在になれるのかを……オイラ……知りたいんだ。ねえ、半六ちゃん、あなたには分かる？ どうして、同じ人が夜叉にも菩薩にもなれるのか……」

セレの言葉が、胸にささる。

立て籠もり事件の現場の、緊迫感が続く中継の画面が迫神を取り巻く。武装して、闘っている男たちの中に混じって、装備のせいで誰が誰だか区別が付かない。無力な子供たちを盾にして、残虐な行いを恥もせず、正義だの主義主張だのとゴタクを並べて、命を奪う連中がいる。己の命や安全を差し出して、盾になろうとする人たちがいる。そして、自分たちが醜い存在だと気付きもせずに、血まみれな担架で運ばれる子供たちに縋り付く親に、カメラやマイクを向ける人たちがいる。

それを見ている、もっと愚かな自分がいる。

同じ人間なのに。

「うん……セレ……。不思議だ……。不思議だよ……ね」

* * *

棺桶の中で、亜衣里には自分の中に帰ってきたのが分かる。慣れきった感覚。余りにも、死ぬまで時間が掛かったせいで、傷もないのに体中が痛む。

宇宙でのミッションは、思えば非常に楽だった。向こうもどうせ機械に乗っている死なない身体。そして、守るものは資源だの設備だのそんなもの。

「あいあい、大丈夫？ 今日酷かったね……」

小さな手。血まみれの小さな手。あれを抱いていた自分の手は、いくらでも使い捨てできる仮初めの手。そして、死んだのも偽モノの死。だけど、あの小さい身体にあった命は、あの子だけの命で……取り返しは付かない。

金城さんの声が普段より優しい。

なんで、犯人を射殺できない？　なんで、電子レンジでトッ捕まえなきゃいけない？　なんで、殺す方に殺される方と同じだけの命の重さを保障しなきゃならない？

疑問が次から次へと湧いてきて、涙が止まらない。

「どうなりました……？」

喉が言葉をだすのに苦労している。死んだとき、喉を撃ち抜かれ

たのを身体が覚えているのだろう。目の前で女の子が頭を撃ち抜かれた。即死していたらそのまま無視するところだった。けれど、あの子は生きていてそして言った。

ママ。

だから、必死で運んだ。必要だと思ったからそうした。突入しても解決せず、現場が膠着してしまえば、説得にあたるプロにがんばってもらうしかない。自分たちのような人間が次に必要になるのは、当局が犯人たちを生きて捉えるより、射殺していいと判断したときだ。今は、自分でなければできないことは何もない。

こんな服を着て動けば、格好の的になるのは分かっていた。S A Tの制圧班の人間がほぼシンクロイドしていることは、ドラマや映画ではばれている。撃ち殺してこちらの戦力をそぎ落とすことに、生身でさえ平気で殺せる人間が、ためらいを覚えるはずもない。シンクロイド・ボディは丈夫だ。血などないから、失血死などしない。骨は金属で、皮膚はただの筐^{ハコ}だ。

それでも、第三次救急医療チームに引き渡せば、助かるかもしれないと思えた。

「だめ……だった……？」

「あいあい……。残念だった……わ」

涙が出るのは生きているからだ。

悔しいのも……生きてるからだ。

ごめん……ね。ズルイよね。撃たれても死なないなんて、ズルイよね。……

「それでね……、今のあなたに言い難いんだけど……、あなたのシンクロライド先を、学校の現場からイットルビアに変えてくれ……ずっと……保志総司官から応援要請があったの……」

あんなところで……人は死なない。どうせいるのは、ロボットだのアンドロイドだの、シンクロイドだの……そんなのばっかりだ。子供たちが命を取られている地獄の現場と、そんなところと天秤にかけようがない。保志という人は何を考えているんだ。

怒りに身を任せて身体を起こそうとして、全身が覚えている、あるはずのない痛みには亜衣里は苦痛のうめき声を上げた。

「……あいあい。保志総司官からの言伝でだって、セレという人からのあなたに伝えてって、頼まれたの。そこを攻めているやつはそこって今日の現場になつてる学校だと思っただけだ。思想犯でも、愉快犯でも、狂人でもない。金に目が眩んだ守銭奴が……鉦山から三分の一のあいあいを剥がそうとしているだけだ。こっちらひっぱれば……同じ根っこに辿り着く。応援頼む……って言うた……って。それでね……。意味、分かる？」

「……分かりません」

セレをなぜ挟むのだ。保志が直接言うて来ればいいじゃないか。聞きにいけないといけない。

あいあいを……。

私を？

鉦山から剥がそうと……。

ここに張り付けるために……、そんなことのために……、どうして普通に今日を生きて、明日を信じている人の人生を、壊せるのだ？

私は聞かなきゃ……。

私がいなければ、今日の事件はなかったのかどうか……それを、ちゃんと確認しなければ。自分がその伝言を受け取って、そっちに行っていれば、私が抱いていたあの子は死ななかったのか、ちゃんと聞かないと……。

亜衣里はのろのろと、おっかなびっくり、身体を棺桶から引き剥がした。

18・天の標（しるべ）と疾駆する俗人

時間帯のせいかな、それとも忙しかった一日のせいかな、常日頃以上にくだびれて見える男たちが、向かい合っていた。

「医療ベッドに入っていると思ってましたよ」

「……まあ、正直、しばらく動きたくないけどな、ちょっとやらな
いと、やってられない気分だった……」

保志はプライベート・モードで官舎のいわゆるくつろぎ向けソファセットの大きいやつにだらしく寝そべっていた。ソファとソファの真ん中で、ちゃんと居すわっているテーブルには、珍しくアルコールが出ていた。つまみ物一つでていないのが、彼らしい。

セレがいれば、何かと世話をやくのだらうけれど、今は自分がこの身体を使っているのだから乾きもの一つ並べてやれないのにざわざわしてるに違いない。

迫神は彼の前に座るのをやめて、そのまま続き間になっているキッチンに移動して冷蔵庫の中を覗いてみた。なんやかやと、料理の材料になりそうなものが一杯入っている。

「意外とまとめみたいですな。保志さんは」

「俺が？……まさか」

保志自身に声をかけた気はなかったのだが、即答された。

「普段は、セレが？」

「まあ、美耶子がこないときはそうだな……」

美味しそうに飾られたカナッペが手をつけられずに入れられていた。

「セレ……これ、まだ食べられるもの？」

一応聞くと、壁のスピーカーから聞き慣れたあの声が返ってきた。「もちろん……。さつき、美耶子さん、それ作って帰ったとこだから……。どうせ、死んだら落ち込んで今日はごはんなんか食べないだろうから、アルコール食う前にちよつと胃潰瘍予防させといってくれて言って、作っていったんだよ。美耶子さんなんだかんだいって、ろくちゃんに甘いから……」

シンクロイド・ボディ
この可変筐体をみんなで使ってるのだと思うと、なんとなく不思議な気がする。セレ、美耶子先生、それから自分の三人……。

ほかに何かないか冷蔵庫を見回したものの、あまりイメージが湧かなかったので、迫神はそのまま、その皿を取り出しただけで冷蔵庫の扉を閉める。

「……美味しそうだけど、美耶子先生は、これ味見なしで作るんだよね」

「うん、だからたまに、とんでもないのでできるみたい。ろくちゃんが宮崎保安夫人の料理に飢えるの分かるでしょ？ 美耶子さんも家じゃしてないだろうけど、計量しながら作ってるよ」

保志の目の前のテーブルにカナツペの皿を置いて、それから思った。

「ご相伴に預かれないのは……残念かな……」

「一緒に食えって言えないのもな……」

昼間、忙しくしている保志しか、そういえば知らない。普通は、一年以上も一緒に仕事をしていて、一度も食事を一緒にしたことがない付き合いなんて有り得ないだろう。

そういえば、自分もそうだ。一度もちゃんと生身レアあいあいと待ち合わせて食事に行ったことなんかない。やろうと思えばできるはずなのに、どこかで、ここの仕事をちゃんとした自分の人生から切り離して考えてたのかもしれない。

生身のふれあいをしていないから、あいあいとも保志とも、いつまでもどこか遠いままだったのだろうか。

「一つ聞きたかったんだけど、セレ」

「何？」

「私がどういう状態か、君は分かるだろう？」

「そうじゃなきゃ、シンクロナイザーのシステムを監視しているホスト・コンピュータとして情けないでしょ。ちゃんと見てなきゃ、マウント・オンもオフもできないし」

迫神は自分の胸に手を当てた。

「何を考えてるか……は？」

「分かるわけないじゃん。オイラが分かるのは、この身体に乗ってる人間の身体が、何を求めているか……、それだけだよ。水分の補給が必要なのか、栄養分の補給が必要なのか、休息が必要なのか、排泄が必要なのか。ライダーさんの感覚を転送するときに、そういった数値も向こうの棺桶監視装置に送ってやらないと、八時間も飲まず食わずでいる生身の本体をちゃんと維持できないじゃん。ちゃんと疲れてる情報も送ってやらないと、休むの忘れちゃう人いるんだよね……。棺桶の中の人は眠ってるわけじゃないんだから実際問題として身体が活動してなかったとしても、してたことにしないと。睡眠って大事だから、脳にインプットされた体験情報を整理したり、疲れた身体を元にもどしたり」

なるほどね。と、迫神は納得した。道理で身体は動いてないはずなのに、疲れも残るし眠くなるはずだ。一日の仕事を終えて自分の身体に帰宅したとき、寝ていたはずの身体が疲れているのが不思議だった。

「快感の閾値の判定もそう。一意に決めることができないでしょ？ ライダーさんの身体をずっと監視して、動作状況を確認しながら微調整してかないと。飛閃の運動制御と一緒に。ライダーさんは人間

だから、曖昧の処理がうまくいけど、オイラたちは無器用だから」

迫神はざわつとした。

「……それで、お前あんなこと言ったのか？」

生き物なんだから、気持ちいいことをちゃんとすればいいという、あのとき保留にしたセレへの答えを自分は見つけていない。

「だって、オイラ思うんだ。ちゃんと脳味噌に身体が感じる快感のインプットが、定期的にある状態じゃないと、人間ってろくでもないことしちゃうのかなって」

「でも、身体の快感だけで、人間は幸せじゃないだろ？」

「何いつてるのよ半六ちゃん。オイラ知ってるよ。ごはん食べても眠っても、トイレいっても、いつだって快感を感じてるでしょ？」

大人の男の人ならちゃんと女の人と性交するのもそうだね。そういう生き物の快感をずっと阻害すると、快感が欲しくて、欲しくて、おかしくなる……ってというのが、オイラの人間ってものに対する、あの疑問の答えなのかなって……」

セレの疑問というのは、同じ人間が夜叉にも菩薩にもなれるのか、という、そうそう抹香臭いあれだろう。けれど意味は分かる。分かるだけじゃない、聞いたとたんに、それこそがまさに、ずっと自分の胸に突き刺さっていた疑問だったのだと分かった。

「お前がずーっとぼざいてる夜叉と修羅の問題が、快感の閾値だけで説明がつかんなんて思うところが、浅はかなんだよ」

保志が言葉を挟んだ。言葉の勢いは辛辣なのだが、その言い方は、小さな子供が自分はどう何でも分かるんだと胸をはっている愚かさごと抱きしめている父親のようだと迫神は思った。

「違っつていうの？」

「いや……それも大切だよ。成長過程で生物が感じる権利がある真つ当な快感を阻害されて……虐待とか、貧困とか……あるいは単純な不運とかでね……、そういう者が犯罪を犯す確率の高さを言えば、それが真実だつて思えば簡単だ。だけど、忘れちゃいけない。同じ貧困とか、同じ最低な境遇とか、同じ運命の容赦ない打撃に打ちのめされるとかしたところで、悪いことをしないやつは、悪いことをしない。するやつが多いつてただだ」

その言葉の持つ意味を、直接受け取っているだろうセレと一緒に考えながら、迫神は保志が何を考えているのか、そういうば知ろうともしてこなかったのだと、思った。

「犯罪を犯すやつの率をさげるために、成長過程で身体に快感を感じる機会をちゃんと確保してやるのが福祉つてもんだとしたらな……」

ちびりと、保志はグラスの中の液体を舐めた。

「自分が不幸だったから、他人を傷つけていいつて思ってる甘つたれをぶん殴る理由がなくなつちまうだろうが……ボケ。悪いものは悪い。誰が何といつても悪い。お前の不幸はお前のせいじゃないかもしれないけど、お前の悪さは間違いないお前のせいだつて、ちゃんと言つてやらねえと、司法なんて絵に描いた餅だろうが」

酔っぱらっているからかもしれないけれど、その迷いのなさは、羨ましいくらいだ。迫神は半ばあきれつつ思った。

「自分がルールブックですか？」

「迫神、お前も阿呆の一人か。司法のルールブックは六法つて決まってるだろうが。ボケ。自分の感情でお前が悪いとぶん殴つたら、そりゃ、ただの犯罪だろう？」

迫神は目を閉じた。なぜか保志の言葉が染みわたった。

「俺たちが毅然としていられるのは、一人一人がもがいていたちっぽけな人間たちが、こういう考え方でいけば、回りとうまくやって行けるんじゃないかって、文明ってやつが発生したのっけのそもそもから、忘れない様に書き留めて、積み上げて、整理して、見直して、失くさない様に、失くさない様に……って、大切に育ててきた法が、居てくれるからだ。法ってのは、面倒で、小回りがきなくて、不格好だと思うけどよ……。俺は、人類の財産だと思うわけ。

フランスの1791年憲法は古くさいか？ 『全ての市民は、法の下での平等にあるので、彼らの能力に従って彼らの徳や才能以上の差別なしに、全ての公的な位階、地位、職に対して平等に資格を持つ』。え、どこが古くさいよ？ 障害者は能力が低いから差別を助長するような文言だって？ ふざけるなよ、バスター・ユ襲撃の六週間前だぜ？ ぶん殴るには、特定の個人の思惑じゃなくて、法によって立つことでだけ許されるってちゃんと分かってる人間がいたってことじゃないか。

『われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する』1947年日本国憲法がGHQの押しつけたから捨てちまえ？ ふざけるなよ。テメエだけ幸せじゃいけない、『全世界の国民』が、『ひとしく恐怖と欠乏から免れ』るのが理想だって、全然古くさくない。おれはね、学生時代にロースクールの世界憲法変遷史の先生から教えてもらった。憲法は努力目標だって。ぴかぴかに磨いて、壁にかざって、たまにじっくり読んで「ああそうだな、がんばろう」、それでいい。ただ、埃がたまるからいつも磨いて読める様にちゃんとしていくのが、法曹の使命だってな。君たちがこれから法曹界の現実に絶望することがあったとしたら、思い出せばいいってな。理想があると思うからしんどい。理想は追いかけるもんだって……。あると思って、足元を探してもそんなものはない、って。星を目標に地上を走ったって、

地べたにいる限り無理だよ。だけど、それが分かっててもきつと辿り着けると信じて走る阿呆ができるのが、人間の甲斐性だって……。いい先生だったなあ……」

足元を探しても理想なんかない……。その言葉は迫神を打った。無理だと知っても、辿り着けると信じて走る阿呆ができるのが……人間の甲斐性。

饒舌な保志など見たことがないけど……。迫神は思った。

「こんなにしゃべってくれるなら、毎日アルコール漬けにしときたいな……」

「……死んだ記念の躁病で間違いないな。本当に、あいあいは、よくもまあ、あれだけ死ねるな……まったく、すごい……」

嫌そうに顔を歪ませているのは、死んだときの痛みが実際問題として彼を苛んでいるからだろう。

「実は私も、彼女はすごいんだなあ、改めて思いましたよ、今日何もなくても、お互いにとんでもない破壊力のある武器を持って対峙するっただけのことが、すごく疲弊するんだって……思い知りました。飛閃みたいなマニアックに乗っていてさえ、自分が怖がつてるってことすら、嵐が通り過ぎるまで気付かなかったぐらいですね。あんなの、身がもぢません……」

保志がぼつとりと言った。

「……ふふ。さては……亜衣里に、惚れちまったか？」

「まさか……とんでもない……」

迫神は思う。今更惚れたんじゃない。一目惚れなんて、信じてなかったはずなのに……。あんなのは物語の中のご都合主義だと思っていたのに。

時間をかけてその人に馴染んでいくものだと思っていた。でも、多分、あのイチゴのときからずっと好きだった。運命みたいなものが、まず好きという気持ちを運んできてくれなければ、恋も愛も育てようがない。一番最初の言葉にすらならない「好きかもしれない」という気持ちは、種なのだ。大好きな種を受け取った瞬間は普通は多分曖昧なだけけれど、たまにどうしてか掌にその小さな粒が置かれた瞬間に気付くことがある。それに一目惚れという名前がついているなら、きっとそうなのだ。

そういえば、あの啓介は理利菜リリナが生まれたときに、一目惚れしたとか言っていた。初めて見たとき、ああ、よくぞ自分のところにきてくれたと感謝したと、あの馬鹿らしくもなく神妙な顔つきでいった。

すっかり一目惚れしそびれたら、親でいるのって……多分しんどいよな。

臆病でもなんでもなく……怠惰で、気付かないふりをしてきただけだ。そして育てようとしなかったのも、ただの怠慢だ。気持ちというものに関しても、生まれつきの反射神経というか運動能力のよくなものがあって、それは人によってバラバラなのだと思う。手に握っていたのが好きの種ということに気が付かなかったのだから、蒔けなかったのは愚かではない。それが種だと気付いたとき、ちゃんと蒔かないのが愚かなのだ。

遅いかもしれないけれど、ちゃんと蒔いてみよう。もしかしたら……ちゃんと花が咲くのかもしれない。風媒花のようにひっそりとした花かもしれないし、艶やかな園芸種の牡丹かもしれない。もしかしたら、種というのが思い込みの勘違いに過ぎないかもしれない。だけど……阿呆になろう、心が届くと信じることができる阿呆に、

がんばってちゃんとなろう……。

迫神は、目の前に置いてあるグラスの中の液体を、飲んでも仕方がない今の自分が残念だった。一緒に酔いたかった。

* * *

今日は最低の日だ。

亜衣里は思った。真実を知りたいと、教えてほしいと、痛む身体、疲れ切った身体を引きずってやっと辿り着いた先で、真っ先に耳にした言葉があんなのなんて、最低だ。

亜衣里に惚れたか？

まさか、とんでもない。

これ以上の明白な否定があるだろうか。分かった、ずっと分かってた。迫神にとって自分が可愛い女の子になる日は来ないと分かっていた。

自分だってもうすぐ三十になってしまう。今更可愛いという年でもないのも、分かっている。それでも……やっぱり不公平だ。

大人になる前に死んでしまった子供を抱いていた手が、そんなことで自分が不幸だなどと感じることは愚かだと教えてくれていたけれど、それでも、闇の中に蹴りだされた気分だった。あの人の笑顔が好きだったのだと気付いたのは、自分を否定する言葉を聞いた瞬間だというのは、どういう皮肉だろう。

全部の勇気をかき集めて、亜衣里はあいていた扉をノックした。

あの人が自分を見て……微笑む。なんて人なの？ 聞こえてない
と思つて、そんなふうに偽りの笑顔をくれるなんて、反則だよ。お
母さんが言つていた。好きって気持ち^{こころ}は、感染^{うつ}るから、どっちかだ
けが死ぬほど好きなんて、本当は奇怪しいんだって。好きだと思つ
ている人間は、大体向こうも好きでいてくれる。ママのこと亜衣
里が好きなら、ママが亜衣里を好きだって、疑わなくていいって。

あれはいつのことだったろう。お姫様の絵本を読んでもらつてい
たときだったろうか。白雪姫のどこに、いったいいつ王子様が恋を
したのか、教えてほしいとねだったときのことだろうか。

ママは言つた。

信じるって魔法なのよ。白雪姫は王子様と恋をするって信じた
から魔法がかつたの。だから、亜衣里も大人になつたら分かるよ。
信じることは簡単でも、信じき^しることは難しいの。だから……分か
る。信じる^しることが魔法だって。

「あいあい、今日は疲れただろう？ こつちで座るといい」

迫神が手招きをする。漏れ聞いた言葉は自分を否定していた。な
のに……どうい^いつもりでそんなふうに笑うのだろう。

「私は、保志総司官に話を聞きに来たんです。意味を……教えても
らいたくて」

「保志さんはちょっと死んだばかりだから……ゆっくり話そう」
たしかに保志の顔色は悪い。自分だって悪い自信はある。久しぶ
りに死ぬまでたっぷり意識があつたお陰で、傷一つない身体がぎし

ぎし痛む。

「私も……今日も懲りずに死んできたわ……。でも、話ぐらいできます。どうせ……冗談みたいな、ズルい死にざま……。ですもの」
とげとげた口調を、どう取ったのか、迫神が寂しそうな顔になった。そんな言い方をするなど、瞳が言っていた。ずるい。

絶対にずるい。私だって十分疲れてる。十分泣きたい。なのに……、保志総司官を思いやってくれるほど、迫神は殺しても死なないような自分には心配をくれないのだろうか。

「迫神君、相澤君、私は……君たち二人に……。私は、謝らなければならぬ。私の浅はかが……。事態を最悪にしまった。申し訳ない……」

保志が背中を伸ばして自分たちの方を見てから、頭を深々とさげたのが見えて、亜衣里は……。多分泣いた。シンクロイド・ボディは涙を流さないけれど、向こうの棺桶の中の自分が泣いているという確信が亜衣里にはあった。

* * *

複雑な……。けれど、職業柄が端的に知りたい情報が遺漏なく盛り込まれた保志の説明が終わったとき、亜衣里は怒るべきか、泣くべきか迷った。保志が三分の一を決めたのは、そのジョリー・ロジャーとかいう自称・宇宙義賊とやらを捕まえたかっただけで、そのためには引退するわけにはいかなかったと。

あのルテチウム鉱山の一件で、保志が密かに二匹目の泥鰌^{トシヨウ}を狙って、布石を打っていたこと。

教えてもらっていたとして、昼間の……日付が変わっているから昨日のあれが、そんな動機　S A Tの相澤を足留めする　で、行われたのだとは思いたくない。

居間の壁面モニターには、あの公認野次馬であるカメラマンがいままさに切り取っているあの学校の風景がながれている。音声を出していないので、マイクを持っている女の人は何をしゃべっているのかなど分らない。

けれど、多分今も仲間たちが必死の思いで、一人でも多くの人質を助けて、一人でも多くの犯人を殺さずに逮捕しようと頑張っている。あそこでの日常とは遙かかけ離れた宇宙開拓最前線の辺境で採掘されている資源をめぐる争いのとばかりで、幼い子が殺されるなんて、そこまで馬鹿にした話があるだろうか。

「ソロプレイの習性が抜けなかった、保志総司官の判断の不適當について糾弾するのは、とりあえず後に回すとして……」

亜衣里がそういうと、保志がいたたまれないという顔になった。

「後でちゃんと糾弾されるのか……私は」

「当たり前です。責任はきっちり取っていただきます。私がこんなところで変に名前を売ってしまったから、小学生が頭撃ち抜かれて私の腕の中で死んだなんて、どうやって、自分を納得させたらいいっておっしゃるんですか？」

「……すまない」

亜衣里はその言葉を無視して続けた。

「セレ……、結局、迫神さんが飛閃で蹴り落としたS S Sに乗ったアバタロイドのトレースは成功したの？」

絶対に逃がさない。万単位なのか億単位なのか、はたまた兆単位なのか。そんなことはどうでもいい。ただ、金なんてもののために、

子供を殺せる様なやつをのさばらせておいては、警察官サツカンの名がす
たる。

「オマルのメインにメモリデータ全部転送して分析してもらったけ
ど、消去された後だった」

「行動不能になつてから確保までの時間が長かったか……。くそ、
やつぱり迫神さん、蹴り倒すよりバズーカぶちこんでやればよかつ
たんですよ」

「打ち所が悪かったら、かけらの情報もゲットできなかったんだし、
蹴り倒せていったのはオイラだし、そんなに半六ちゃんのこと苛
めないでやってよ」

亜衣里は、セレが迫神をかばうのが、これまた心外だった。

「セレ……、かけらの情報って何よ」

「アバタロイドは日本製」

「何馬鹿なこと言ってるのよ。アバタロイドの七割強がメイドイン
ジャパンなんだから、そんなの分かったって、使ってるやつの国籍
まで限定できないわよ」

「少なくともタイでもコーリアでもチャイナでもないって分かつた
だけ、マシじゃん」

「そんなん役にも立たないわよ」

言いがかりだ。ほとんどヒステリーに近い。自分で自分が嫌にな
るけれど、感情がささくれだっているのを宥なだめようがない。死んで
しまった小学生の重みが腕に残っているのが悪い。冷静になれない。

二人掛けのソファの隣に座っていた迫神が……。自分のことなんか
どうでもいいと言った男が、そつと亜衣里の手を握りしめた。温度
センサーは再現されている皮膚温度を正確に伝えてきた。

あつたかい……。

「あいあい、今日はもう寝た方がいい」

「馬鹿な女は口を挟むなってこと？」

最低な気分のところに、とどめの一撃を落とした男の言葉とは思えない。

「……違う。疲れてるときは、休む方がいい、それだけだ」

女として興味はないのだろうけれど、同僚として十分労ってくれている。彼の真摯な優しさは、少なくとも偽者じゃない。

亜衣里は少しだけ迷ってから、ゆっくりと頷いた。立て続けにライドばかりしていると、疲労困憊になるのはいつものことだ。代謝率を落として過負荷にならないようコントロールされているとはいえ、飲まず食わずで動き回っているのと同じなのだ。身体にちゃんと帰って、消化にいいものを食べて、ゆっくりお風呂にでも浸かろう。そして、寝よう。何もかも忘れて……。

疲れがとれなければ、思考がらしくもなく悲観ルートを突っ走ってしまう。ちゃんと建設的な対策を取るには、そうする方がいいに決まっている。

「あいあい……今度」

「え？」

「一緒に飯食いにいかない？ 新橋高架下に旨い串揚げ屋があるんだ。この力ナツペ作った保志総司官の奥さんにも絶賛だったから、美味しいことは保障するよ」

保志が聞き捨てならぬというように、文句を言った。

「なんで、半六ごときが、美耶子と高架下串揚げデートしてるんだよ……」

「……いや、別に。保志さんのこと聞きたかったって……そんなことは……」

「お前、本当に……」

この迫神の言い方では、言い訳にもならない。正直保志は呆れてしまう。

「石橋がぶっこわれるまで叩き続ける主義か？　ここに来る前にそんなことしてやがったのか。ケツの穴の小さいやつめ。あいはいは、即答だっただって聞いたぞ」

「……だつて」

話を振られても困る。宇宙つてところに来てみたかったという、野次馬根性でやってきましたなどと、正直に言うのもちよつと抵抗がある。

しかたなく、迫神が握ったままの手に亜衣里は視線を落とした。それに気付いて迫神が保志を無視した。

「もしかして、彼氏に怒られるかな？」

顔を上げると、目の前に迫神の顔があつた。そんなもんいたら、三分の一なんかする前に嫁に行つてます、そう言いたいのを亜衣里は我慢した。

「私はリッパ・ケースケ命なんです。その辺の男なんて、メじゃありません」

アイドルなんか好きはずもないけれど、亜衣里程度の芸能界情報音痴にも、顔と名前が一致するほどのぶつちぎりの今をときめく旬の人だ。

亜衣里の手を握っていた迫神の手がふるふると数瞬間ふるえて、それからぼそと言った。

「……あの野郎、今度こそぶちかましてやる……」
「……え？」

亜衣里はどうしようもなく可笑しくなった。東京地裁の判事が、突然テレビ局か何かに押しかけて、リッパ・ケースケをカラテでのしたら、ものすごい週刊誌ネタだ。原因が、私がケースケ命と言

ったから……。冗談にしても、有り得ない。迫神さんは懲戒免職まではないかなだろうけど、退職勧告が出るに決まってる。

笑うというのは確かなエネルギーなのだと思う。可笑しいと思ったら、帰ってちゃんと眠って、頭をさっぱりさせたところで、もう一度ちゃんと考えようという気力が湧いてきた。

「セレ……帰るわ。マウント・オフして」

セレからの返答がない。

「……？ 4444でもいいわ。今日はもう帰って寝るから、シンクロライド終了させてくれない？」

迫神は、亜衣里に握った手を振りほどかれなかったのが、嬉しかった。次はちゃんと自分の身体で、生身^{レア}あいあいの手に触れたい。心からそう思っていた。

「あいあい、帰った？」

「……うつん、まだいる」

保志が口を挟んだ。

「おい、4444、あいあいを返してやってくれ。おふざけるよ
うなタイミングじゃないだろう、いくら何でも空気読ますぎだぞ」

セレの悲痛な声がスピーカーから洩れてきた。

「操作……できない。……大変だ、どうしよう、何度トライしても
アクセスが弾かれる」

「え？」

亜衣里の声が怪訝そうに裏返った。

「SSC（亜空間通信）システム・エラー？ セレ、迫神さん……の……は？」

「半六ちゃんのは大丈夫。あいあいだけ見つからない。どうしてもあいあいの操作画面までいけない。あいあいの疲労度考えると、ライド限界に近いのに……どうしよう」

保志が立ち上がった。

「迫神、一度東京に帰れ。あいあいの棺桶がどうなってるか、見に行ってくれ。通信システムのエラーじゃないと、向こうの棺桶の方で何かトラブルかもしれない」

「そんなケースあるんですか？」

迫神は焦る。黎明期ならともかく、現在ではシンクロライド・システムは技術として安定しているはずだ。滅多なことでトラブルはないはずだ。大体、そうでなければ、もっと事故の噂を耳にするに決まっている。

「聞いたことはないが、人間の作ったもんだ。ぶっ壊れることぐらい、普通にあるだろう。あいあい、迫神に見られて困る様なゴミ屋敷だったとしてもだ、今は見に行ってもらえ。さっさと身体の方ケアしてやらねえと、マズイだろう」

「保志さん、失礼な。私の部屋はいつだってキレイにしています」

「そいつはよかったな。恥かかずに済んで。人間曰ころの行いが、いざつてときに役に立つ。迫神の携帯端末に、住所とか、部屋の鍵^{キー}コードとか送れるか？」

迫神がああの部屋に入る？

亜衣里はくらくらしそうだった。ゴミ屋敷では断じてない。けれど、別の意味でイってしまっている部屋なのだ。思いつきり少女趣味全開で飾りたてられた、見事に悪趣味な部屋……。窓にはレース

たつぷりのカーテンが掛かり、狭い六畳なのに照明はシャンデリア。家具は全て白の猫足で、弾けもしないオルガンに、天蓋付きの丸型ベッド。手入れをする時間がないから、造花ばかりをゴテゴテした花瓶にこれでもかと盛り上げてある……。クローゼットにはパニエ入りサテンのドレス。……最悪だ。

19・スマイリー・ロジャー金城を怒らす

アバタドライブと、シンクロライド。二つを続けてやってみて、疲労度の歴然とした違いに驚く。自宅の四畳半、棺桶の蓋がスライドして開く。ウツカリ足を踏み出しても起き上がれないので、一呼吸して自分の身体の軸が重力方向に対して九十度変化していることを確認する。

それから迫神はゆっくりと身体を起こした。帰ったら仮眠を少しとって、それから仕事に向かおうと思っていたので、帰ってきたときのままの部屋の状態だ。

頑張つて汚したつもりもないのに、雑然とした部屋をなんとなくがめて、ちよつとだけ落ち込みそうになる。シンクロライド・システムが不調になって、メンテナンス技師がくる可能性があるなら、もうちよつといつ何時、誰に見られてもかまわない程度に片付けておくべきだと、次のオフの日は片付けだと心に決める。

食べようと思つて買つてきていたのに、なんとなくそのまま、DKに置いてある小さなテーブルに放り出していた弁当を見る。

空腹を思い出したけれど、とにかく、ずっと連続でライドしている亜衣里の疲れ切った表情を思い出すと、それに手をつける気になれなかった。多分、彼女は水分を補給したぐらいで保志に話を聞くためにやってきたに違いない。

シンクロライドしている間、最低の代謝で済む様にコントロールされてるとはいえ、長時間ライドの場合、基礎代謝分を補ってやらないと、最悪の場合、命に関わる。長期間の連続ライドをする場合は、普段迫神たちがやっているように、昏睡に近い状態に身体の機能をおとすのではなく、ニア・コールドスリープと呼ばれる状態にまで、つまり仮死に近い状態にまで体機能を制限してやらなければ

いけない。

完全に凍らせてしまうと、細胞組織が破壊されてしまう。その壁を人類の技術はまだ越えていない。その技術の壁を越えれば、人はもうちょっと遠くまで行けるようになるのかもしれない。それが人類の規模からいって、もはや必要なこととは、迫神には思えないのだけれど……。

そんなわけで、この短期ライドと長期ライド中に生身の身体が経験している睡眠の種類の違いは、多分熊の冬ごもりと、爬虫類や両生類の冬眠ほどの違いぐらいだといえば、分かりやすいだろうか。少なくとも、亜衣里がちょっと保志と話すためにライドしたなら、迫神とどっこいで、食事をするのを忘れている、または、そういう気になれなかった可能性がある。

亜衣里は何も言わなかったけれど、多分、あの日本では未だに珍しい、武装集団による学校占拠事件に出勤して、何かを見て、最悪というものを味わうことになったのだらう。いつも明るい彼女が、とことん疲れていたように見えた。

すぐに携帯を見て、亜衣里からのメールを確認して、それから移動手段を考える。この時間、さすがに公共交通機関は死んでるだらう。タクシーしかないか……。

そのまま飛び出そうとして、ふと思いなおした。生身^{レア}あいあいと初めて会うかもしれないのだ。彼女が啓介の野郎のファンだというなら、むさ苦しいのは問題外に違いない。持ち物が違うのだから勝負にはならんが、『不潔』は可能だけ排除しておくにこしたことはない。けれど、洗面台に直行し、鏡の中の自分のむさ苦しさを睨むように見るにつけ、短時間での修正は不可能だと認識するしかなかった。

仕方ない。

ざぶざぶと顔だけ洗って、取りあえず顔の上をこってりとコーティングしていた、脂だけ排除する。見掛け的には変わっていないだろうけれど、少なくとも自分はさっぱりした。

それに、柄にもなく鏡を覗いた時間は無駄ではなかった。電話で二十四時間街を走り回っているタクシーを呼ぶ方が、流しているのを捕まえるより確実だと思いついたからだ。ネットで調べて、タクシー会社に電話をかけ、至急で配車してもらおうよう依頼すると、隙間時間を身なりを整える方に費やすより、人間としてのダイレクトな気持ちよさを維持する方を選ぶことにした。

冷えきった弁当を開けると、ごはんを二口、三口飲み込んだ。実感として、胃腸が喜んでるのが分かる。セレの生育期における快感添加による犯罪率低下についての考察は、まあ検証するようなものでもないけれど、真実の一面だとは思う。

一気に最後まで食べてしまいたくなつたのをぐつと我慢して、冷蔵庫を開け、胃と食道の境目辺りでもそもそしていた塊を、ボトル入り緑茶で無理やり胃袋に送り込んでやる。と、ペットボトルは冷蔵庫に戻さないで手にしたまま、迫神は玄関に向かった。

亜衣里が目を覚ましたら、取りあえず水分補給が一番必要だろう。乾いた身体に、ただの緑茶は甘露という言葉そのままにとして染みわたるぐらいに旨かった。

住所が示す、ちょっと洒落た外装の集合住宅の前で止まったタクシーから下りると、ちょっと年配の、多分保志美耶子と同じぐらいの年頃の女性が、こんな時間なものに関わらず、エントランスの前

で出入りするものを通せんぼする位置で仁王立ちになっていた。闇夜でも絶対に車に轢かれることはなさそうなシルバーのツナギに、夜なのに大きいサングラスで顔の半分が隠れている。若作りにしているが、口元と喉の皺が隠せない年齢を語っている。

こんな時間に腐っても女性が、なぜに立っているのだろうと思うと、アンタツチャブルという単語が迫神の頭にフラッシュと共に思い浮かんだ。

このおばさん……怪しすぎる……。

立っていたのはSSS（SATサポートスタッフ）の金城だった。彼女にしてみれば、迫神の年頃の男から、おばさん扱いされるのは心外だったに違いない。

なるべく目を合わさない様に言い聞かせて、女の横をすり抜けようとしたとき、その女性が呟いた。

「東京地裁の半六判事こと……迫神平和君、33歳独身……。これは、君のことで当たってる？」

ぶつと、迫神は噴き出しかけた。なんで、33歳独身まで知ってるんだ。

「何者ですか、あなたは」

「桜田門のSAT、制圧一班の名物レコン、相澤亜衣里のSSSをしている金城よ」

「ああ……、あなたが金城さんですか」

金城の名前なら、あいあいから何度も聞いたことがあった。往年の名SAT隊員。今は後継育成とそのカウンセリングに当たっているとかで、信頼しているだけでなく、女性が少ない職場だから、お姉さんのように慕っていると、そんなことを言っていたと思う。

お姉さんのようにという形容詞が、金城に相応しいところかどうかは以後の検討を要するとして、一人であいあいの部屋にいきなり押しかける気まずさに比べたらと、そう思うと正直助かったと思っ
た。

「あら、あいあい、私の噂してたの。どうせろくなこと言っ
てなか
ったでしょう」

「そんなことはありませんよ。ところで、相澤さんからの依頼ですか
？」

「そうなのよ、SSCで夜中に起こされたのよ。美容に悪いけど、
しかたないじゃない。システムエラーで身体に帰れないから、勢い
でうっかりあなたに鍵を渡してしまったけど、助けてくださいって
泣きつかれたんだもの。……そりゃそうよ。どう考えても一度も会
ったことのない男性に、部屋に侵入されるのって、女にしてみりゃ
たまらないわ。しかも連続ライドしたならヘトヘトに決まってるじ
ゃない。どう考えたって無防備な状態でしょうが。はいどうぞ、レ
イプしてくださいって言ってるようなもんじゃない」

あいあいにとって、自分に触られるのは、レイプと一緒にのかと
思うと、さすがに落ち込む。迫神は世の中の哀愁のすべてを背負い
たくなった。

「なに、一丁前の青少年みたいに落ち込んでるのよ。行きましょう、
急ぐんでしょ」

「どうせ信じないでしょうけど、それでも男はピュアなんですよ」

「あら……意外というのね。もっと、面白みのない子だと思ってた
んだけど」

あいあいの噂話を聞いて、面白みがない男だと、金城が判断した
というなら、あいあいにとっても全然面白くないということだろう。

「ほら、さつさとくる。レイプしにいくわよ。私が許可する」

「どういう文脈ですか、どういう」

「ほら、迫神君はさあ、朴念仁で、不感症。ついでに空気が徹底的に読めない最上級の鈍感で、及び奥手で照れ屋で、乃至、自己評価低い魅力零野郎。あと、何か言い忘れてたかな」

初対面の怪しいおばさんに、どうしてここまで虚仮コケにされるいわれがあるのかと思うと、怒るべきだと思うのだけれど、あまりにもその言葉が出てくるスピードがF1級なので、どこにつっこむべきか考えてる間に通りすぎてしまった。

「ああ、そうだ。レイプ許可する前に聞いとかなきゃ。迫神君、あなたさ、あいあいのこと……どう思ってるの？ そうそう、あいあい情報だとあなたとことんズレてるみたいだから、ちゃんと前提もはつきりさせとかないと。同僚としてとかSAT隊員としてとかじゃなくて、あのあいあいを女として、どう思ってるか。私が聞いたいのほそれだけ」

今日はどういう日なのだろう。セレにも突っ込まれ、そして見知らぬ女性からも、煮え切らないできた態度を責められる。あいあいをどうにもこうにも好きだというのに、ようやく気付いたばかりなのに、どうして世の中はこんなに人を急がせるんだろう。

「……イチゴ……」

「え？」

迫神の答えが、金城の回答文例集になかったのか、彼女はサングラスをカチューシャの位置にまでずり上げて、綺麗な強い瞳を向けてきた。

「イチゴって……果物のあの赤い、粒々の？」

「好きなんですよ。あれ。……たまに無性に食べたくなる……」

一瞬、金城は目を白黒させ、それから大仰な身振りで嘔き出した。
「何よ、あいあいのうそつき。全然朴念仁じゃないじゃない。迫神君、あんた最高。あの子が惚れるだけのことはあるわ。あはは、その回答気に入った。レイプ許す」
「え……」

今度は迫神が凍りついた。

あいあい……だれに惚れてるって？

瞬間迷子モードの迫神をうつかり置いていきそうになって、金城は自分が鍵を持っていないことに気付いていらいらと立ち止まる。

「はやく行くわよ。迫神君、さっさと鍵開けて。解錠するのに、こんなところで警官がマスターキー使うわけにいかないでしょう？」

金城の半歩後ろに少し並ぶ様にして廊下を歩くと、彼女が足音をほとんどたてないことに気付いた。金城は迫神を従えて長い通路を歩き、何度も来たものだけが持つ勝手知ったる迷いのなさで一つの扉の前に立つ。

「キーデータ入ってる携帯貸して」

金城が迫神の携帯を受け取って、呼び鈴の横にあるスキヤナに押し当てると、がちやりと古風な音と共に鍵があいた。

あ、生身あいあいと、……初顔合せ。
とたんに、迫神は緊張した。

「あの子は、迫神さんは絶対に部屋に入れるなって、泣いてたけど、私は見るべきだと思う。あの子のこと、よく分かるから……」
「相澤さんが嫌がっていたなら、私は遠慮しておいた方が」

「だれだって、自分がイタイと思ってる部分は触られたくない。だけど、手当てっていうでしょ。痛いところに触れることで癒せることもある。あの子のお母さんも、多分、そんなに悪気はなかったんだと思うんだけど、外見的な意味で、女の子は可愛くなきゃだめだって思い込ませてしまったんだよねえ。あの子に。……あのあいあいでしょ。自分が可愛くないってことに、非常に確信があるから、可愛い小さな女の子になれなかった自分がいつまでも許せないみたいな。あの子の可愛さが分かる男が少ないってのも問題なんだけどねえ……」

オープンセサミ。迫神の目の前にカオスというより、シユールの域に届いている乙女の部屋が出現した。こんなところで、あのあいはいは、落ち着けるんだろうか。中途半端に乙女チックならば失笑の一つも出て来ると思うのだけれど、ここまで徹底してると逆に感心してしまう。

「こっちは、あの子が女の子ごっこするときの部屋。で、あの子の棺桶は仕事場……」

靴を脱ぎすてて部屋に上がると、金城は最短距離でデコラティブルームを通りすぎてスライドドアを開けた。

そこにはこれでもかというように無駄を排除して、殺風景の趣みである部屋だ。学生のような勉強机にある本棚には、法解釈や、判例集分析や、司法試験対策の参考書がきちんと並んでいる。

きつちりと手順を馴染ませておけば、いざというときに迷わないで済むという彼女の持論がそのまま生きてる様な部屋だ。けれど……。

「……棺桶が……ない？」

「ここに置いてあったんですか？ 間違いない」

ざっくりと切り取ったに、何もない空間がそこにある。

「あのさ、隣の部屋見たでしょうが。ここにしかあんなデカいもん

がおけるスペースないでしょう？」

「でも、ないってことないでしょう……」

「トイレとか、風呂場に入れると思う？ 一応精密機器よ」

絶対にないと断言しつつ、それでも部屋数がないのか、金城はバスルームへの扉を開けた。女の子のにおいがたちこめているような気がして、なんとなく気恥ずかしい。

「迫神君、来て、早く」

バスルームへ消えた金城が、大きな声で迫神を呼んだ。何かあったのかと、バスルームに飛び込む。と、そこには、石鹸なのか、化粧品なのか、それとも香水とかの類なのか、甘いようなほの酸っぱいようなにおいが仄かに漂っていた。シンクロライドモード限定の今までのあいあいとの付き合いで、彼女に関して嗅覚情報と味覚情報はまったくゼロだ。酷く新鮮な感じがした。

金城が指さしていた先には、女の子のタシナミというやつなのか、大きな姿見が壁の一面を占めていた。けれど問題は姿見ではなくて、その上に口紅で書かれていたものだった。口紅の太い線のためなのか、単に絵心がないやつが書いたせいなのか、頭蓋骨というよりピースマークのように見える顔の下にバツテンの……。

「ジョリー・ロジャー……」

迫神は文字を読もうと近付いた。

愛すべきバツパー殿 並びに、その三分の二のタマゴどもに警告する。

君たちは大いなる間違いを犯している。

荷主をつぶすほど、また、正統なる価格を破壊する様な

強盗では我々はない。

我々の活動の妨害を続けるのは、人類にとっての敵対行為だ。
即刻、愚かな振る舞いをやめるのだ。

君たちが誠意を見せることによってのみ、大事な棺桶は取り返せると思いたまえ。

残念だったな、君たちの万能が発揮できるのは、ここではない。

迫神が握り拳をどこに叩きつければ、何も壊さずに済むだろうか
と、ごく真面目に考えてとき、隣でガキンと何かがぶち壊れる音が
した。

「ジョリー・ロジャーっていうの？ このド外道、現役のSAT隊
員にちよっかいかけて只で済むと思ってるなんて、いい根性だ……」
洗面台の方にくっついていいる鏡が粉々だ。見事な突き手だが、褒
めている場合ではない。

「金城さん、落ち着いて」

「落ち着く？ お前、状況分かってんのかぁ。今怒らんで、人間い
つ怒るんだ、馬鹿野郎。落ちつくなんざあ、そんなん、相手を追い
詰めてからで結構よ。バツパーが役立たずだらうが、桜田門は東京
の法律だぁ」

保志の法律論とはまったくガチ対立しそうな発言をかまして、金
城が銀ピカのツナギの胸ポケットから携帯を取り出して、ちゃかち
やか操作した。

「へーちゃん？ あいあい棺桶ごと攫さらわれた。緊急搜索隊員募集。
非番の連中かき集めて……何、無理イ？ 学校がまだ立て込んでて
非番なんかいいえ？ だったら、アンタはあいあい見捨てるのか？
うん、うん、悪かった。言い過ぎた」

金城は電話を切ると、すわった目つきで迫神をにらんだ。

「学校やつつけるまで、動けないって抜かしやがる……」

「あ……当たり前だと思いますけど……。でも、保志総司官の予測だと、学校の件の黒幕も……多分、ジョリー・ロジャーと根っこは一つだって」

金城は腕組みをした。

「でも、学校は完全に硬直だ。日本人の大嫌いな強行突入でもしなきゃ、向こうが消耗するのを悠長に待つパターンだ。最悪だね……。だけど、あいあいには、そんなに待てない。ほとんど一日、水分と栄養分補給してないからね。二回目にライドする前に何か補給してたとしても、基本的な疲労値は高い。災害出動の考え方と一緒にいいと思う。あいあいには長時間ライドを想定してないで乗ってるはずだろ？ ケアなしで棺桶に閉じ込められたままだと予測すると、生死分岐点は七十二時間」

生死分岐点という金城の言葉がとっさに何を意味するのか、迫神には分からなかった。

金城は続けた。

「だけど、一日の半分、十二時間ぐらいはそもそも切迫してからスタートだと考えていい。二日と半分、六十時間以内にちゃんと取り返さないと、あいあい……死ぬよ」

死ぬ？ あ……あいあいが？

「さてと、金城さん……、どこから攻めたらいい？」

金城は自分にさういうと、携帯をもう一度取り出した。カメラを起こして鏡の文面を写真におさめると、さくさくと転送してそれからコールした。

「ああ、あいあい？ 私、金城よ。最悪の事態発生。アンタの棺桶

行方不明だ。詳しくは、メール添付の写真を見ること。いい、私とあんたの迫神さんで、絶対にみつけてやるから、アンタは本体が消耗するようなこと一切しちゃだめだよ。ソファでも借りてのんびり寝てなさい。いい？ 一步でも動いたらぶん殴るからね……うん？ 分かった」

あいあいと話していた金城が、自分の携帯を迫神に突き出した。

「話したいって……」

迫神は受け取って耳に当てる。息づかいが聞こえる。

見ちゃったでしょ……部屋。

「うん」

あのジョリー・ロジャーのメッセージを読めば、それを金城が迫神に見せないはずがない。

笑っていいよ。バカみたいだらね。自分でも分かってる。

「うん、バカみたいだ」

萎れた声しおが、お陽さまみたいなあいあいらしくもない。

……最低なやつ。少しは言いよんどんでくれてもいいのに……。

迫神はあいあいに何というべきなのか、少なくともその時点ではまるで迷わなかった。

「あいあいはそのままで十分可愛い……」

うそつき……。言ってたでしょ。私聞いたんだから……。まさ

か今更つて。

あれをあいあいはい聞いたのか。タイミング悪すぎだ。迫神は微笑んだ。

「うん、今更……だ。ずっと……ったから」

いつもの照れで、消え入りそうな声になった迫神の後頭部を金城が殴りつけた。

「悠長に睦言^{むつげん}交わしてる場合か。愚か者ども。現場検証。聞き込み通信記録トレース。差し当たってできることは全部やるんだから。今日どこまで手がかりを追えるかが勝負よ。ああ、……あはは、私もバカだねえ。」

いきなり金城が五秒ほどがははと笑った。

「よく考えたら誘拐はSAT仕事じゃないね。捜査一課のSIITに電話しよ……。宇宙人は宇宙でだけ悪さしてればいいものを、スマイリー野郎、桜田門のお膝元でいい根性だ。舐めたことやらかした、愚かさ加減を、徹底的に後悔させてやるわよっ」

20・七十二時間

迫神のポケットの中で、携帯が着信音をたてた。控えめな音にしていたけれど、深夜過ぎのせいかな、いつもより大きく聞こえた。見ると、啓介になっている。まったく、忙しいときに、昼も夜もない芸能人都合で電話を掛けてくるとは非常識な。

と、そう思ってから、三分の一に参加して生活がハードになつてから、啓介のともない時間のコールが絶えていたことに気がついた。あんなでも、あんななりに、こっちの体調を気づかっているのかと思うと、なんとなく感謝の気持ちが湧いてくるから不思議だ。

ピンフッ！ 生きてるか？

通話にするなり、ハンズフリーモードでもないのに、啓介のかなり声が聞こえて苦笑する。この時間に電話で生きてるも何もないだろう。「起きてたか？」の間違いなら、いつその事奴らしいというべきだろうか。

「おい、啓介、この時間に電話してきて、その言いぐさはないだろう。死んでないよ」

知らないのか？

「何を？」

で、出掛けてたんか？ この夜中に……。ひょっとして女のこと？

夜の外出で、それしか発想力がないのはタラシの啓介ならではの、まあ、あいあいの件で出てることは間違いない。迫神は若

干見栄を張った。

「悪いか」

迫神がそういうと、啓介の声は聞こえなくなった。何を言ってるのか聞き取れない。携帯電話を耳に当てると、啓介の声ではなくて、息づかいだけが聞こえた。

「おい、啓介、どうした？ …… お前、大丈夫か？」

馬鹿野郎。心臓が止まると思ったぜ。よかったよ……。二度と会えないかと思った。

大げさな言い方だけれど、ふざけているふうではない。長い付き合いだ。本気の発言か、ふざけているかぐらいは区別がつく。

俺、お前の彼女に生涯感謝するぜ……。女の代わりなんていくらでも見つかるけど、ピンプの代わりはいねえからな……。

女の財布で食ってるようなもののくせに、相変わらずのバカ発言だ。

「ちょっとこっちは立て込んでるんだ。生存確認で用件が済んだなら、またことが片づいてからにしてくれないか？」

彼女のどこだってテレビぐらいあるだろ？ ニュースつける。俺たまたま、夜中のニュースショーのゲストで来てただけだよ、あんまり現実感ないんで、気絶しそうになった。

「……学校占拠事件で新展開でもあったのか？」

仕事部屋の方にはテレビがなかったので、あの、乙女部屋のフリ

フリクッションが山積みになったソファの前にある小さなティーテーブルの上にあった、マルチリモコンらしきものをひっぱりだして電源を入れてみる。

電源を入れると同時に選択画面になる。ニュース番組や、時事解説の番組ばかりがリストにあって、ちらつと覚悟したようなケースケ追っかけを自称する者のメニューではない。ニュースを選ぶと、ニュースヘッドラインがただだつと表示される。

最新のものと、今現在の視聴件数が一番高いものと、二列で表示されている。最新のものは、そこそ動いて、徐々に下に押し流されていくが、視聴件数順の方は、それほどがしがし動かない。一番上が当然、今現在進行している都立小学校の正体不明武装グループによる占拠事件関係だ。

最新順の上の方に、『東京 未確認巨像作業ロボット、公務員官舎を破壊。テロの可能性?!』というタイトルに気付く。

未確認巨像作業ロボット……。その言い方が一般に分かりやすくするために敢えてチョイスされたものだろうけれど、飛閃のようないわゆる巨像型のロボットで、武装はしていずに、土木などの現場で働く、道交法上、特殊作業車扱いになっているマニ＝コロのことだろう。

それを選ぶとよく知った風景なのに、どことなくよそ行きの印象になった自分が住んでいる官舎が映っている。そして、迫神の部屋辺りのところが完全につぶれてなくなっていて、もう動いていないマニ＝コロが彫像のように佇んでいた。^{たえず}ただ、あれが手にした巨大ツルハシの先が、見事に建物にめり込んでいる。

「これ……。このマニ＝コロの道具がつつまつてるところ、聞くまでもないと思うけどと思うけど、迫神君の部屋？」

画面を見た金城に聞かれ、迫神はやつとのことで頷く。あれじゃ

あ、もしあそこにいたらひとたまりもなかった。ぞつと背中に冷や汗が伝う。

「あいあいがどれだけ強くても、棺桶にはいつてる状態なら無力。抵抗力のない女の身体を人質にとつて、武装巨像型特殊車両をドライブして、輸送船を蹴りおとした男の方は、ためらいもなく殺そうとした。卑怯者の典型つてやつ？　こんなが、正義を謳うなんてちゃんちゃらおかしいわよね」

金城が吐き捨てる様に言った。

「でも、スマイリー野郎……あなどれないわね。迫神君のこのT AI、シンクロライドを監視していたのに、実際操作しようとするまで制御権を乗っ取られてたこと、感知できなかったんでしよう、話を聞くと」

「そうなりますね」

「この、マニ＝コロ、どう見ても、誰か直接乗ってるんじゃないかってリモートコントロールされてたつて見え見えよね。あなたが、こつちからアバタドライブして、マニ＝ア＝コロを操作したことも知ってるつてことよね。そうじゃなきゃ、武装してないとはいえ、マニ＝コロ一台、あんなふうに捨てるような思い切ったことはしなかったはず。迫神君、よつぼど、警戒されたんだねえ。あんたの命、マニ＝コロ一台分だつて」

迫神は怖かった。自分が殺されるところを、偶然生き延びたということも、その一つだけけど、なにより、あいあいの身体が、人の命を奪うことに何もためらいがない者の手の内にあるという事実が何よりも怖かった。

初めて生身のあいあいに触れるのが、趣味の悪い隠語でいうところのそれではなく、ホンモノの棺桶になつちまった走査器スキャナの中に横たわっているあいあいだなんていうのは、自分が死ぬより我慢なら

ない。

「私が死んでも、そんなに保険は下りませんけどね。女房子供もないんで、葬式代が出ればいいかってぐらいしか掛けてないですから……」

「まあ、あいあい女房にする気なら、1億ぐらいは入っておいてやんなさいよ。高給取りの官舎住まいなんだから……そのくらい余裕あるでしょ」

「まだ付き合ってもらってもないのに、結婚後の保険金額まで心配しなくても」

迫神がつい言つと、金城がもう一度迫神の後頭部をど突いた。

「悲しい現実だけど、女には匂つつーもんがあるの。子供欲しかったらある程度急がないと、産むのも育てるのも大変よ。私なんか子供47で生んだからね。下手したら、ばあちゃんだよ、これじゃあ兄弟なんてとんでもないし、成人まで死なないで嫁いでられるかも微妙じゃん。子供もまだチビだからママ、ママって可愛いもんだけど、十年後に怒られない自信はないね」

迫神は自分の年を考える。確かに、学生のことくらべて、年月を重ねただけ人間がマシになっていく実感はない。けれど、少なくともあの頃より息が上がるのも早くなったし、随分体力がへたってきているのも間違いようがない。

時間はいつも、待つてくれない。今、レアあいあいを抱きしめるまで、時間が止まっていてくれたらとどんなに願っても、容赦なく時計の針は進んでいく。意識していても、していなくても、時間は立ち止まりはしない。

外が騒がしくなる気配がした。

「S I Tの連中が着いたみたいだね。どうする？ こっちで棺桶探す？ それとも、向こうでのこのこ出て来るスマイリー・ロジャーをどうにかする？」

「出て来る？」

疲労困憊で思考力が落ちてるのか、迫神は金城と同じ速度で考えが回らない。

「あいあい人質にとって、ブツよこせって言うてるんだよ。結局はじゃあ、人質が生きてる時間が交渉期限じゃないか。多分、大甘の甘ちゃんで見積もって、脳の後遺障害が残らないレベルのあいあいを保護できる時間切れが約七十二時間。まあできれば六十時間以内を目標にしたいけど。今までの経過をみれば、向こうがオマルの通信を監視できちゃってるって最悪な状態なのは間違いないでしょ。

まあ、宇宙人は宇宙で万能なんだから、向こうに利があって当然。警察通信まで奴らはまだ把握してないだろうし、S A Tを釘付けしておけば、安全だと思ってる。私も忘れてたぐらいだから、こっちにはS I Tもあるんだってこと、誘拐事件なら堂々と連中を使えるってこと、多分考えにないでしょう。こっちからも当然、誘拐犯を追いかける。でも、保志総司官のところには、輸送船の監視を停止するようにそのうち要求が行くでしょうね、間違いなく。……迫神君、頭働いてる？」

「……ええ……何とか」

迫神は緊張してしてるせいでしゃっきり見えているに過ぎなかったのだらう。どうやら自分が命を拾ったことを目の当たりにして、身体が疲労を思い出したらしい。金城は冷静に迫神を観察しつつ、話を続けた。

「迫神君ができることは、こっちであいあいの棺桶追いかける人たちを手伝うか、向こうで保志総司官に接触してくるはずのジョリー・

ロジャーとやらを直接トツ捕まえるか、何もしないか、これだけよ」
「ちゃんとした組織に素人が混ざっても邪魔だと……前にあいあい
に言われましたから……。もう一度、どっかで棺桶探して、向こう
に行きます」

「……そうね、その方がいいかもしれない。……あいあいがドタバ
タして消耗しないように言う必要があったから言っちゃったけど、
自分が人質に取られてて、しかも何もできないってのは、あの子の
性分だと辛いだろうからね。向こうが手詰まりでも、迫神君が傍に
いてやってくれるだけで……。いいかもしれない」

「……あいあいを……。絶対に見つけて……。ください。頼みます」

やっとそれだけを口にした迫神の手から、金城は携帯を問答無用
で取り上げた。通話がまだ切られていないことを画面で確認すると
顔に当てた。

「電話の向こうの誰かさん、迫神君の友達？」

あ、あなたが俺の恩人の、ピンフの彼女？ 随分渋い声だなあ
……。まあピンフは幼女から老婆までだから驚かないけど……。
不必要に明るい声。どっかで聞いたことがあるような気がするけ
れど、気のせいだろう。

「だれだか知らないけど、あなたの恩人になんかかった覚えはないわ
よ」

あなたといたからピンフが死ななかったんでしょ。ありがとう、
ほんつとにありがとう。俺、一生、感謝します。

緊張感もかけらもない。電話の向こうのこいつは、完全に迫神が無事だったことで何も事件が解決されたかどうかということや、今迫神がどういう状況なのかまで、全然考えが及んでいない。多分、間違いなく馬鹿なのだろう。でも、こういう単純な人間は、神経質にいろいろ疑わなくて済むから有り難い。

どう見ても活動前に迫神は休憩が必要だ。

この一連の事件をしかけているジョリー・ロジャーとやらは、なりふり構っていない。保志総司官の憶測が正鵠を射ていたとしたら、そいつは一年以上も状況を観察して、ここが正念場だと一気に仕掛けてきたことになる。

一年待てる狡猾さ。たった一人の戦力を削ぐために、学校占拠などというとんでもないことをやらかせるやつ。捨て駒として、マニッコ口で官舎を破壊するなどという行動に出ることができるやつ。テロップをみれば官舎での死者、重軽傷者は十二人。小学校の占拠事件さえなければ、一週間はぶち抜きでトップ見出しをはれるインパクトがある事件だ。

一つ一つのピースは、臆病にも見えるし、狂人にも思えるが、全体を見るとただの利己主義、目的のためにはどんな手段を取ることにもまるでためらわない、方向性を間違った強い意志だけが見えて来る。

けれど……背水の陣を引いたってことは、向こうは余裕がないということかもしれない。一年、資金源を干されるのはつらいだろう。ガタイが大きい組織ほど、ボディーブローよろしく、じわじわと利いてくるだろう。

そうすると、宇宙の辺境に生息しているコソ泥、ジョリー・ロジャーとやらが、昨日から始まる三日間で白黒がつくように勝負を仕掛けてきたのは、逆にいえば、ジョリー・ロジャーがどこの組織の

パシリなのかは不明なままだけれど、少なくともそいつを潰せるならば、それを使っているどこその資金源を、しばらく絶つことができるということだ。

「車運転できる人だったら、迫神君を迎えに来てくれない。ちよつとエキサイトしすぎたみたいだから、休憩させないと使い物にならないんだけど、まだやる気十分で、ほつとくと休みそうにないのよ。あなた、五時間ほど彼に食事と水分と睡眠とらせるように監督できる？」

分かりました、何だか知りませんが、五時間強制休憩させればいいんですね。今からすぐ営業車で迎えに行きます。場所のデータください。

「了解、よろしく。つてわけで、いい？ 迫神君、今の勢いでライドしても、向こうでも邪魔なだけだから、少し休みなさい。災害救助と同じと考えて。救助者がついでに遭難されるほど、回りにとつて迷惑なことはない。あなたは、今は休むのが最優先事項。いいね。寝すぎて活動できないなんてことないように、あなたの友達に五時間きつちりで起こすようにちゃんと言つといたから、分かった？ お友達……なんて言う人か聞かなかったけど、電話の彼氏、営業車で迎えに行くとかいってたから、エントランスに出て待つてればいいと思う。彼、サラリーマン？」

啓介の営業車といえば、おしゃれで格好がいいのがアイドルの義務だとか何とかいって転がしている、クラシック・スーパーカーのことだ。シリーズ最高台数を出荷したとはいえ、全世界で六百五十七台しか販売されなかった25thアニバーサリーモデルの1989年型ランボルギーニ・カウンタックだ。

そんな目立つもんで迎えにくるな、馬鹿野郎。

言いたかったけれど、SITの捜査官や、お巡りさんみたいな警察官たちがどやどやとやってきて、車種の注文をつけるために電話をするようなのんきな状態ではなくなってしまった。

事情聴取には、金城が一人いれば十分だろう。捜査の邪魔にならないように一足先に帰ると伝えたと、金城も頷いた。

「迫神君……」

歩きだそうとして呼び止められ、迫神は振り返った。金城がすぐにしゃべりださなかったので、ちょっとだけ見つめあう形になった。「何ですか？」

「ジョリー・ロジャーはそっちに任せるしかないから……、あいはいはこっちに任せて。最善を尽くすわ……」

「……はい。お願いします」

本当は、金城は、こう言おうかと思ったのだ。六十時間経過しても、事態が何も動かなかつたら、意識があるうちにあいあいを抱いてやれと。偽物の身体同士でも、まったく知ることがなく終わるより、あいあいにとつても、迫神にとつても悔いが残らないだろうからと。でも、そんなことを言うのは、今から敗北を予言するようなものだ。代わりに金城は再び歩きだそうとして向きを変えた迫神の背中をどやしつけた。

「あいあいが、何かバタバタしようとしくさつたら、しゃらくさい……レイプしておいしいまい。この際だ、私が許す」

迫神はこけそうになりながら、踏みとどまっていやそうに言った。「勘弁してください。そういうタイプじゃないんですから……」

「ふん、チキンな野郎だ。間違えるなよ。あいあいが暴走しない様

にするのも、あんたに任せたってことだからな。どんどん動けなくなつてぶつ倒れることが確実なやつは戦力にはならん。捨て駒にすらなれないなら、邪魔をするなと伝えといてくれ。人間混乱すると基本を忘れがちになるからね」

口は悪いが、金城は金城の最大限のやりかたであいあいを心配しているのだろう。

* * *

車が動き出すとすぐに寝てしまったのだろう。迫神は豪華なベッドの中で目が覚めた。深い眠りだった気がする。けれど、何度もひどい夢を見た。

棺桶の中にあいあいが横たわっている。彼女はもう息をしていない。かき抱いても、呼んでも、その瞼は開かれることがない。唇を無理に重ねて舌を絡めようとしても、冷たく強張った身体は、まるで自由にならない。

おとぎ話だと、真実の恋人のキスで、棺桶に入ってる女は起きるんじゃないかったか？ それとも、ただ思ってるだけじゃだめなのか？ どんな馬鹿野郎だろうと、真面目な男だろうと、そんなことは関係なしに、ただ王子様じゃないと魔法は使えないのか？

「よう、目が覚めたか。ピンフ。丁度起こそうと思ってたところだ。四時間ぐらいだ。お前が寝てたのは。風呂ためといたから、入ってこい。里佳子に飯作らせるから」

寝ていたのは、啓介の億ションのゲストルームのベッドらしい。

自分で歩いた記憶がないので、啓介が駐車場からここまで運んでくれたのだろう。里佳子というのは、啓介の奥さんで、あいつにしては上出来すぎることに、ちゃんと常識をわきまえている、優しい美人だ。ガードががちりした億ションを買ったのも、わけの分からないことを考えるやつが家族をターゲットにしないように、つまり里佳子を守るためだろう。

「……すまない。手間掛けた……ありがとう」

「よせやい。ピンフに礼なんか言われると、縁起が悪い。世界が終わっちゃうよ」

「お前になんかにだれが言うか。里佳子さんに伝えといてくれって意味だ」

憎まれ口をたたいて、何とか身体を起こす。身体が強張っている。喉が渴いていて、腹が減っていると思った。飲まず食わずでいるしかないあいあいのことを考えると、風呂につかったのんびり食事をとることが後ろめたかったが、救助者がついでに遭難するが最悪だという金城は間違っていない。

「あつ……今何時だ？ 後藤さんたちに連絡取らないと」

「……ああ、それは大丈夫だ。お前が寝てる間に、金城さんって人と何回か話しててね、ジョリー・ロジャーとやらを安心させるために、お前、行動不能ってことになってるから……」

「……へ？」

「死亡者で発表しちまうと、さすがにお前の知り合いが葬式の準備に大騒ぎしちまうだろうから、官舎への何てったっけマニマニ何とかってやつ、あれの突っ込み事件、すごいニュースになってるんだけど、そのこの重傷者のリストに名前乗せて記者発表とかしてる。一応お前があのととき部屋にいれば、死んでも奇怪しくないから別に違和感はないだろう。死に損なっただのはスマイル何とかにしちゃ計算ミスだろうけど、少なくとも行動できないってことは、油断さ

せる材料になりそうだからだとさ。お前が行動可能な駒でいることを隠せたら、役に立つかもしれないって。それから、心配させちゃう親・親戚・友人・ご近所さま等、思い当たる一同には、後でちゃんとオトシマエつけとけて伝言。……あの金城さんって、おばさんだけですげー頭いいのな。お前の女の趣味はぜつたいに分かりそうもないけど」

「ばか……金城さんは人妻だ」

「げ、お前まさか、やるにことかいてふーりん？」

「それを言うなら不倫だろうがっ」

啓介の顔目掛けて拳を繰り出すと、啓介の手が、いつもの様にピシリッと気持ちいい音をたててその拳を受け止めた。……反射神経だけは、とことんいい奴。

「それだけ元気がありや、風呂はいつて飯食えば……こけないで乗れるな」

目が合う。啓介は笑っていない。その瞳は問いかけている。大丈夫かと。まったく、これだから啓介には勝てないのだ。仕方なく笑うと、すつと啓介の瞳が微笑みを帯びた。

それから、酷く下品に……にやつとばかりに表情を崩した。

「なんてったつけ、あいあいちゃん？ 職場の女の子に手を出すなんて、三十過ぎた独身男はなりふりかまってるないのね」

金城と啓介がどういう会話をしたのか、想像もしたくない。勝手知ったる啓介の家だ。風呂場など迷うこともない。

「風呂もらっ……」

「おう、そうしろ。いつも言ってるけど、うちにあるもんは、^ナ理利^リ菜以外なら、何だっけ好きにしていいいんだから……」

「里佳子さんは？」

啓介の殺気とともにぶん回された蹴りをガツキリとブロックしてやった。

受けられて非常に悔しそうな啓介を見ると少しは溜飲が下がる。
ざまあみろ。

廊下へ至るドアがあいていて、女の子のかわいらしい顔が見えていた。理利菜だ。まだ寝間着を着ている。迫神と目が合うと、理利菜はバタバタと駆けだした。

「ママ〜っ、またパパとピンちゃんが喧嘩してます〜」

キッチン
台所の方で里佳子の優しい声がした。

「ごあいさつと一緒にだから、ほっときなさい。ああ、あぶないから近寄っちゃダメよ〜」

「はあ〜い。分かってまあす」

俺たちは危険物扱いかと思うと心外だけれど、まあ、言いたい気持ちも分かる。消化にいいものということで気遣いをくれているのだろう。キッチンから漂って来る匂いは、多分野菜スープだ。あいあいにも食べさせてあげたいと、迫神は思っのだった。

* * *

湯船につかり足りなかったけれど、思い切って短く切り上げて、迫神は用意されていた啓介の服を着るとキッチンに向かった。啓介のパンツなど穿きたくもないけれど、下着なしよりはマシだ。野菜

スーブという予測は大外れで、迫神を待っていたのは野菜たつぷりリゾットだった。おいしく食べながら、迫神は頭が再び回り始めるのが分かった。

時間の余裕は目減りしたが、自分の余裕は取り戻した。

「お前んとこの棺桶壊れたんだろ？　どこのチャーターして飛ぶんだ？　よかったらここにどっかから棺桶運んでもらうか？　俺もその方が心配ないし。他人に殺されるぐらいなら、お前だって俺に止めをさせたいだろうが」

「やめてくれ、心残りが多すぎて幽霊になれたとしても、化けて出る先がお前だと思うとやる気も失せる……」

「ひでえ奴。あれ、すぐ注文して届けてもらえる様なものなのか？」
「……分からん。でも、総合^{オマル}司法庁の通信がどうやら盗まれてるみたいなんで、面倒だけど民間のシンクロライド・トラベル扱ってる旅行会社に駆け込んで、イットルビアに行こうかと思う。それなら監視ははずれるだろう。どっちみち、今俺が動けると、ジョリー・ロジャーが思っていないなら、あいあいの棺桶確保したところで、監視が揺るんでる可能性もあるけどな」

食べだすと、逆に止まらなかった。リゾット何かじゃ物足りないと思っただら、里佳子は、何も言わずにおにぎりの皿を置いてくれた。啓介と里佳子が付き合っていたころから勘定すると十年超過する付き合いだ。細身の割に迫神がよく食べることは里佳子にとって常識だろう。

「でも、それだと、お前のあいあいちゃんのところ行けないんじゃないのか？」

「だから、金城さんから何をどう聞いたのか知らないけど、あいあいは、三分の一の同僚……」

言いかけたが、また啓介の瞳がキリリと絞られていくのが分かって思い止まった。啓介の瞳が嘘をつくと言っている。こういうと

きにこまかすと、後が怖い。

「……彼女にはまだ好きだって伝えてもいない」

「馬鹿か？ 好きなんだろ。お前本当にトロいんだよな。告白して振られたらどうしようなんて青いのが可愛いのは十代まで。三十面さげて何考えてんだか。そんなんだから里佳子だって俺に取られたんだろうが。まあそれについて、俺としても、お前が速攻得意じゃなくてありがとうだけだな」

「自分でいうな……」

啓介がにやにや笑っている。本当に、遠慮なしにぶん殴れる数少ないサンドバッグじゃなかったら、こんなやつ、とつくに縁を切ってる。

「まあ、こんなことちゃっちゃと終わらせて、あいあいちゃんに告白でもなんでもして、万が一お前なんかでいいという悪趣味な女性だったら連れてこいや。お前の彼女なら、俺の家族と一緒にだから。」

「そうだな、お前が生放送に出てて、絶対に家にいないときにそうしよう」

そういいかけて、迫神は止まった。迫神の脳内でその言葉が踊りだした。

「……家族……？」

迫神が呟いた。

「うん、家族……」

啓介が繰り返した。

「家族って言ったよな」

「言いました。家族。絶対家族、死んでも家族、血縁なくても家族」
「うるさい、黙れ」

迫神はポケットに手を伸ばそうとして、携帯が入っているはずが

ないのを思い出し、啓介を見た。

「携帯？　ならここ」

迫神は啓介の手からもぎ取る様に携帯を奪うと電話帳から目指すものを見つけ出し、コールした。

* * *

「はい、保志」

ちょうど美耶子が朝シャワーをしていたので、渋々と電話に出た穰太は、名乗りかけたのが終わらないうちに、電話の向こうから切羽詰まった様な若い男の声が洩れて来るのに顔をしかめた。

保志先生のお宅ですか？　美耶子先生と話をしたいのですが、ご在宅でしょうか。

きつと風呂場は『宅』には入らないだろう。穰太はにべもなく言い捨てる。

「居ません」

この切羽つまり方は、きつと美耶子に捨てられたのだ。捨てられたら素直に泣き寝入りをしておけばいいのだ。鬱陶しい奴。

じゃあ、あの、穰太さんでしょうか？　穰太さんはご在宅ですか？

「あのね、しゃべってるんだからいるでしょうが。オイラに用なんてないでしょ？」

ぷつと向こうで小さく噴き出すのが分かった。どういっつもりな
んだか失礼なやつ。

「これから出掛けるんで、三分後から留守です」

すみません、今から大至急でお邪魔しますので、棺桶貸してく
ださい。

「棺桶貸してって？ どういう……」

すみません、用があるのは棺桶の方なんで、美耶子先生ご不在
でも結構ですから。私が棺桶入ったら、お出かけになって全然構い
ませんし、何かお出かけのご予定があるのでしたらタクシー代も持
ちますから、お願いします。もう少し出掛けないでいてください。

それだけ言い捨てられて、電話は一方的に切られた。どういっ
つちやと思う前に、多分パンツも穿いてないだろうバスローブ姿の
美耶子が、髪から滴り落ちる滴をタオルで受け止めながら出てきた。

「穰太、朝っぱらから、電話だれ？」

「あんたのツバメから。居留守使つといたけど、なんか、押しかけ
て来るってさ。あんたらね、夫不在の息子同居してる家で不倫なん
て、ちよつとタガ外れまくってんじゃないの？」

「はあ？」

美耶子には穰太の言うことが、まるでピンとこない。

「棺桶貸せつてすごい勢いだつたよ。母さんのことだから、どうせ
遊んでポイっちゃったんだろ？ あの人、オヤジぶつ殺しにいくつ
もりじゃないの？ あんなやつでも仕事場で殺されたら、遺族年金
だけじゃなくて、労災もつくよね。らっきー」

何のこつちやという顔で、美耶子はしばらく考えていたが、取りあえず服を着て化粧でもしておこうと、バスルームに戻っていった。

21・黄色に注意

「ろくちゃんの家からとは、考えたね、半六ちゃん。もし、向こうが見てても、保志さんの家から誰かがライドしたとしても、いつもの家族訪問で、まさか半六ちゃんだとは思わないだろうしね」

耳元でセレの声がする。

迫神は棺桶に横たわり、自分の今の状態全てが分析されていくのを待っていた。シンクロイドから下りるときは簡単だけれど、乗るのには時間がある程度かかる。データを読み取るのにまず時間がかかり、それから膨大なデータを転送するのに掛かり、その後、可変筐体の変形する時間にもかかるから、飛閃にアバドライブするような手軽さはない。

「会話、盗聴されてたりしないの？」

「多分データを監視してるだけだと思う。盗聴されてたら、ジョリー・ロジャーだって、東京の官舎に半六ちゃんの身体があるって思わないでしょ？ あいあいの方を見に行くなって大急ぎで帰ったんだから」

「……。まあ、いい方に信じるしかないか……。あいあいは？」

「頑張ってるけど、ちよつと弱ってきてる。お茶一杯飲んでこなかったのは、失敗だったってぶつぶついつて、たまにお腹すいたーつとか叫ぶぐらいの元気はあるよ」

「意識ははっきりしてるんだな」

「……お腹すいたって言わなくなったら……脱水が進んでるってことだから……。まだ大丈夫かな……」

迫神は少しだけほっとする。同時にお腹がすいても、喉が渴いても、何もできないあいあいが不憫でならなかった。代われるものなら代わりたいたいぐらいだ。

「そのオイラっていうの……穰太さんの口癖だったんだ……」

ふと思い立って迫神が言う。

「うん、なんかしょーもないアニメに出て来るキャラクターが使ってた一人称らしいんだ。そんな言葉づかいするなって、ろくちゃんがかギのころの穰太さん叱つたらしくてね、それ以来、穰太さん、ろくちゃんの前でだけ、絶対に一人称オイラだよ」

親子の対立というにはくだらない。それも保志らしいと迫神はほほえましい。

「まったく、穰太さんろくちゃんは徹底的に合わないみたいだけど、だからって家族だよ。美耶子先生が忙しくて、料理作りに来れないとき、ここにきて料理していくのは穰太さんだからね……」

「あ、……そうなんだ」

「美耶子さんから頼まれたときに無視すると、お小遣い不払いの刑が待ってるからってだけで、オヤジさんに料理作りに来ないでしょ、普通の子は。あんなけど一種試験持ちだしね、まあ、よくできてる方なんじゃない？ トンビとトンビだからトンビの子。タカとタカの子はタカ。そんな感じかな。でも、穰太さんは死んでもろくちゃんに、こっちにライドしてきてるの知られたくないっていうから、それでオイラが穰太さんの帰った後、アバタドライブするようになったわけ。穰太さんがふらふらしていると見つかつて、『セレか』で済むじゃん。ああそう、ろくちゃんにバラしたら、オイラ基盤に砂糖液突っ込まれるらしいから、絶対にこのことだまっててよね、半六ちゃん」

くくくつと迫神は笑いたくなった。同じ身体を使っている関係で、迫神はセレと直接会ったことがない。だから実際のセレというのが、どんなふうなT A Iなのか聞いたことがあった。保志はセレのことを、「たまに料理をしながら、歌って踊ってやがる。狂ったんじゃ

ないかって思うだろ？ 第一、不気味だ」、と言っていた記憶がある。多分そのときの歌って踊れる召使は、セレではなく穰太さんだったのだろう。

一風変わってるけど、保志さんところはいい家族だ。自分も啓介や保志さんのところのように自分を大切に思ってくれる人を、大切にしていく当たり前の関係を、あいあいと作ることができるのだろうか。

棺桶から出ると、身体が浮かぶような感触があった。

「あれ……」

全体的にいろいろなものが雑然として浮きまくっている。

「ああ、ろくちゃんが、あいあいの身体に負担が少なくなる様になって重力弱くしたから。あんまりいろんなもの固定しなかったから、後で片付け大変だけど、そんなあいあいにやらせりゃいいだって半六ちゃんも手伝ってやんなね」

「そうするよ……。あいあいはどこ？ 保志さんどこ？」

「うつん、なんか、普通に食べたり飲んだりしてるのを見ると腹立つからって、あいあいの部屋。ろくちゃんは、ジョリー・ロジャーが犯行予告をしてくるはずだから、それまで休むって寝てる」

「……冷静な判断だな」

「まあ、食べてたっていつても、ろくちゃんが、あんなもん人間の食いもんじゃないって普段毛嫌いしてる、高カロリーエネルギー補充ゼリーだけどね」

「……食べて飲んで眠ってって、ちゃんとやらないと壊れちゃう。人間は不便だな」

「……でもいやいやしなくて済むように、全部気持ちいいんだから、いいじゃん」

「違うない……」

素直に笑った迫神に、セレの声が聞こえた。

「ね……半六ちゃん。やっぱりあなたってどっか鈍いんだよね。何か、変だと思わないの？」

「何が……」

「オイラの声……どこから聞こえてる？」

「……耳元……？」

「どうしてだと思う？」

スキャナに入ってから、シンクロライドに移行するまでの間、珍しくずっとしゃべっていたから、耳元でセレの声が聞こえ続けていることに、何の違和感もなかったのだが、よく考えるとおかしい。棺桶から出た直後から、壁に埋めてあるスピーカーから聞こえる遠い声としゃべることになるはずだ。

立ち止まって考えようとするのだが、足は勝手に進む。低重力とはいえ、奇怪しい。考えようとするのだが、セレがうるさくて考えられない。

「ねえ……半六ちゃん。あいあいのこと……好き？」

ぶつと迫神は噴き出しそうになった。どうしていつもこいつも、あいあい死ぬかもしれない、ジョリー・ロジャーが動いてくれないと何もできないだろうって、この状態で、そんなことばかり気にするんだ。

そんなのは、あいあいをちゃんと取り戻してからゆっくりやればいいじゃないか。

「それがどうした？」

「まあさ、その、最初っから勃ってるぐらいだから、キライじゃないとは思っただけど、ろくちゃんは、そんなの男の生理で好き嫌いとは関係ないって言うし」

最初から勃つてたというその表現に、文句はあるが否定はできない。セレは自分の身体の状態は全部把握している。どうなっているかを全部。

「だから何だ？」

腹が立つ。指摘されて嬉しいことではこれっぽっちもない。あのときのあれは、男の生理で、好き嫌いとは全然関係ない。

「一応不合意の上に行為を強制するのは、犯罪だろうからさ」

「……セレ、どういう意味だ？」

「半六ちゃんの転送、実は完了してないんだよねえ……」

「はあ？」

転送が完了していないということは、普通に考えたら、動けないということじゃないのか？ 迫神は思い切り混乱した。大体、だったらなんで蓋が開くんだ？ 普通に有り得ないと思う。

「で、何の機能を排除したかつつと、運動機能なんだけどね……」

「今、歩いてるが」

「半六ちゃんの思い通りに？」

「若干違和感がある……気がするけど、それってこの低重力のせいじゃないのか？」

「まあ、それもあると思うけど……。今半六ちゃんの身体をコントロールしてるの、実はオイラなんだ。ゴメンネ。飛閃ドライブのときの逆バージョン？」

立ち止まろうとしたが、なぜか歩くのが止まらない。

「どういう意味だ、こら、セレちゃんと説明しろ」

* * *

遙か彼方の地球、東京にある保志邸では、シンクロライド・システムの実行監視装置のいわゆる黄色ゲージ……すなわち、受信監視装置のシンクロイド率を示すゲージが、いつまでも振り切れないまま止まっていた。それに気付いた穰太が仕切りに首を傾げていた。向こうの棺桶はオープンになっていることはモニターで分かる。ということは、転送は完全になされたことになる。棺桶の中からぶつくさしゃべるのが聞こえて来るのは、多分、寝言に違いない。普通向こうに完全シンクロすれば、こっちの身体が動くことはない。なぜなら、行動しようという意志が送り出す信号は、ぜんぶあつちに転送されてしまうからだ。

何か中でこそそやっていような気もするが、うん、……単にモニター表示がずれているだけなんだろう。まあ、最悪、本体の不調だったとしても、乗ってるのが自分と美耶子でなければ、問題はない。でも、本格的な不具合ならいやだと思う。こんなのでは危なっかしくて使うのは気が進まない。

「あとで、オマルに電話して、メンテの人に来てもらわなきゃ……」

ぶつぶつとひとり言をいって、そのままサンダルを突っかけて出掛けていこうとした。と、玄関を出るなり、家の前にごっついカツコいいことだけは確かな　古くさいのだから未来くさいのかよく分からない　真っ赤な車が止まっているのが見えた。少し驚いた。しかも、乗っているサングラスの男は……。

リッパー・ケースケ？　うちの前に？　……ははは、まさかね。

* * *

「ちょっと待て、ということだ……これ」

あいあいの棺桶部屋にまっすぐ至ると、自分はドアを開ける。開けたいのは自分じゃない。まあ、あいあいに会いたかったし、ここに直行するつもりでもいた。何も不思議も問題もない。……けど、俺は今立ち止まって、セレとちゃんと話したい。

「……迫神……さん。お帰りなさい……」

あいあいの顔色はますます悪い。迫神ははっと胸をつかれるようだった。あいあいに向かつて歩くのはこれは自分の意志だろうか。それともセレの意志？

「セレ……やってくれた？」

「あいあいのご注文じゃ、オイラ断れない」

自分の口からセレの声が出る。なんじゃこりゃ。

「ちょっと待て、あいあい、セレ、何を企んでる」

今度は自分の声で言葉が出てほっとした。

「ごめん、怒るならわたしに怒って。……あのね、迫神さん。……さつき、私のことずっと好きだったって言ってくれたでしょ？」

あいあいがちょっと微笑んだ。ああ、可愛いなと心から思う。迫神は頷く。これは、多分セレじゃない。

「何もしなくても可愛いって……いったよね。これ言質とったってつもりじゃないんだけど、声小さかったから、単に確認」

「言ったよ。それがどうした？ いつからか知らないけど、惹かれてたみたいだ。ずっと気になってた。俺みたいない男じゃ、

君みたいな若い子の眼中にはないだろうと思ってたから、好きだということをちゃんと気が付く前に、諦めてたみたいだ。こういう間抜けだけど……ちゃんと気が付いた。だからもう迷わないし、わりとこれでいて、しつこい方だと思う。あいあいが振り向いてくれるまで結構つきまとうかもしれないよ……。鬱陶しいと思うけど諦めて……うわっ」

あいあいが飛んだ。低重力だから、軽く蹴るだけで済むんだろうけど、かっとなってきた亜衣里にいきなり抱きつかれて、彼女の重量が重量ゆえにがつつりと受け止めるほどの甲斐性はない。迫神は彼女を抱きかかえる姿勢になって、そのまま二人で飛んだ。

「……抱いて」

「はあ？」

耳元でささやかれて、迫神は間拔けた声をだした。

「体力消耗するようなことは、一切禁止だろうが。金城さんにも言われたはずだ」

「……それなのよ。頑張って、頑張って、頑張って何もしないで七十二時間かかって死ぬのって、私の趣味じゃないのよねえ。普段から、死ぬときは一気って決めてるの。昨日のは下手を打っちゃって、じわじわ死んで、マジにしんどかった……」

「あいあい、金城さんを信じて。絶対に君を見つけてくれる」

「……死んでから見つかる確率だって、今のところどう考えても五割越えると思うのよ。私は……。くやしいけど、こういうことに関しては楽観主義になれないの」

「……というത്？」

「脱水症状が進んで、意識混濁したらオシマイでしょ」

当たり前だが、人の生死を間近でみるような仕事をしているだけあって、あいあいには楽観など紛れ込むことはなさそうだ。

それでも迫神は言い募った。

「……信じる。俺を信じるなんて言えないけど、金城さんのことは信用できるんだろう？ それに、信じることで強く信じることで、願いというのはきつと力になる」

いかにもケツという勢いで、亜衣里は鼻先で嗤い飛ばした。

「わたしはずつと信じようとしたけど……小さくも可愛くもなれなかったわ」

「……大きくて豪華なのもいいじゃないか。可愛いのは主観であつて、絶対尺度があるもんじゃないし……。少なくとも、俺はあい」
あいあいの口づけで、迫神のゴタクは塞がれた。

自分の手が勝手に亜衣里をまさぐる。そのなんともいえない手触りについ陶醉しそうになる。が、そんな場合ではない。

「やめろ……セレ、勝手なことをするな」

「……セレ、止めたら穰太さんみたいに砂糖液なんて生ぬるいこと言っていないで、意識なくなる前に本体にグレネードランチャーぶち込むわよ」

「アイサー、あいあい。優しくするから、不満があつたらちゃんと言つてね」

「大丈夫、初心者だから、上手いも下手も区別付かないから」

セレが……というか自分が、女の喉に舌を這わせ、手が服の隙間から滑り込んでやわらかい塊を揉みしだく。

亜衣里が小さく声をあげるのが耳を直撃してくる。真面目に脳味噌が沸騰しそうだ。

「やめろ……俺は……ちゃんと、俺の意志で……生身レアのあいあいを……」

「あのね、迫神さん……。私、意識があるうちにちゃんとあなたを知っておきたい。金城さんたちとか、SIITの人たちが私を助けて

くれて、生き延びたら、ちゃんとやり直せばいいだろうけど……駄目だったら、こんなところでプラトニックなんて洒落込んだの後悔すると思うわけよ、私。パパ・ママキスしか知らないで死ぬなんて、十代の女の子ならそれも僥けでいいかもしれないけど、私の柄じゃないわ。まあ、どうでもいいのとするのは、ここまで折角持つてるもんだもん、御免被るけど、たまたま好きだっていつてくれる、人がいるんだもん。女の経験ぐらいしてみたい……って、人情だと思いうわけ。だいたい、三十間近かの女のバージンなんて、有り難くもないだろうけど、うまくこの場をしのげたら、結果として二度も楽しめるんだからいいじゃない」

「……え？」

何を聞いたのか迫神は一瞬把握できなかった。バージンって……まさか。こんなに可愛いのに？

自分の手がその間も大胆に、けれど乱暴のかけらもない優しさで動く。高ぶっているのに、身体が熱いのに、急ぐこともなく、身勝手でもなく、皮膚と皮膚で会話するように、彼女の反応を確かめながらすべての肌をなぞるようにたどっていく。

「……いや……」

亜衣里への入り口に指先がふれる。亜衣里の口からもれた言葉にセレの声がする。

「本当に？」

表情筋が微笑んでいるのが分かる。目を閉じて、首を振って、亜衣里は自分の裸の胸に顔を押しつけて来た。

「……やめないで。お願い」

やばいぐらいに……可愛い。

「……アイサー……あいあい……」

指が深く女に刺さると、肉の襞が締めつけて来るのがわかった。「力……ぬいて。怖くないから」

腕の中できつく目を閉じた亜衣里がこくと頷いた。くそ。

セレ……お前、そのセリフ……せめて俺の声で出してくれ……。

「おい……セレ……お前、やけに……うまくないか？」

時間をかけて女の身体をほぐし、開かせる。迫神の身体の下で、女の肌が上気し薄桃色に色づく。凄絶なまでに色っぽく声をもらし、ときに、狂いそうになる声を押しとどめるようにもだえる。どんなに触れていても、もっと触れたいという気持ちをとどめることはできない。

自分だったらどんなふうにしただろう。ふと、どこかにいる冷静な自分が他人事のように考える。自分勝手に、暴走して、何も考えずに身勝手に突き進み、ひたすら押し込むことしかできないかもしれない。セレのやり方は……悔しいが練れている。亜衣里の息が上がる。迫神は胸を噛まれた。痛い。でも痛いのがなんとも癖になりそうだ。

止めさせるために押さえつけて唇を口づけでふさいだ。熱い。考える力が全部とろけてしまう。ただどこまでもいくことしか思い浮かばない。きつと一人でやっていたらとくに一回戦終了してるに違いない。こいつはなんで、こう粘っこいというか、何というか。そう、初々しさが足りない。自分もセレに翻弄されているようだ。

苦しそうに眉をしかめ、目をきつく閉じて唇をかみしめて耐えている亜衣里を開き、中に男を沈める。自分かセレかどちらか分からない男が、締めつけられることで高まる快感に責められていた。もつと奥を求めて動くと、亜衣里が小さく喘いだ。

耳元もとで……、もしかしたら鼓膜付近に直接なのか冷めた声が

する。

「……まあ、情報元が……あれだし」

げ……まさか、保志ご夫妻？

亜衣里の中で激しく動いている自分がいた。全身の熱が背筋に集まって、一点に絞られていくのがわかる。

「あいあい、そろそろ……いきたい？」

首に縋り付く様につかまって、何かに耐えていた亜衣里が、こつくりと頷くのが分かった。

「セレ、てめえ、砂糖液ぶっかけてやる。なんで一々亜衣里に聞くんだ？」

「だって、オイラの方は……気持ちいいっての、分かんないんで……加減がちよっと分っかんないんだよね。でも、一々聞いたら興ざめなのかな、半六ちゃん」

今……聞くな、今……。

苦しそうな息だけがもれる。あっけらかんと、セレが言った。

「いいなあ、気持ちいいって、楽しそう。……まったく、人間ってズルいんだよなあ」

そういう問題じゃない……たのむ、セレ、いかせてくれ。

迫神は言いたかったが、亜衣里に聞かれるのは何だか気が引ける。

激しく女を穿っていながら、手はずつと柔らかな動きを止めない。それからセレが亜衣里の耳たぶをしゃぶりながら、ささやきをねじ込んだ。

「あいあい。可愛いよ……」

迫神はようやくひと言紛れ込ませることができた。

「……そのくらい、俺に言わせろ……」

とたん、ぷつと亜衣里が小さく噴き出した。

「やっぱり嫌だ、この音声多重……。ね……。このタイミングで……聞くのも変だけと思うけど……。私どっちに抱かれてる……。の？」

「オイラ……。快感の感受性ってないから……。やっぱり、半六ちゃんじゃないの？ もう、すごいよ彼氏。行きたくてたまらない……。みたい。ホントなら、もうもってないと思うなあ」

「セレ……。てめえ……。ぶちころす」

「残念でした。命がないものは死にません……。そろそろ半六ちゃんいかせてあげていい？ あいあい。もうちょっとイジワルしてもいいけど。決めるのはそっち……」

「いい……。もうだめ」

男の快感は非常にシンプルにできている。その頂点は紛れもなく一つの行為で極まる。頂上はここら辺なのではなく、飽くまで一点だ。いったのか、いかされたのかそんなのはこの際どうでもいい。間違いなく快感の絶頂を感じて 直後、力なく亜衣里の上に崩れ落ちた。激しく息をしながら この重力なら重くはないだろう 亜衣里の体温を感じる。信じられないほど気持ち良かった。

一方で、残念なことに一気に冷める。あっちの棺桶の中で自分の生身がどうなっているのか、考えるのも嫌だった。ことが片づいてあるいはタイムリミットで 身体に帰ったとき……。考えたくない。

「お前ら……。絶対レイプだからな……。これ」
「やっ」と声を絞り出す。

しばらく目を閉じて迫神の体温を感じながら余韻に浸っていた亜

衣里が、ぱちつと目を開けてしばらく見つめ、それからたまらないというようにくすくすと笑った。

「……ね、これって噂に聞く3Pって……やつ？」

「……あいあい。頼む、怖いこと言わないでくれ」

亜衣里は迫神の頭を抱きしめた。

「ね……迫神……さん。……絶対に助けてね。あーあ、失敗だったかな、こんなん、却ってあと引いちゃう。私、生身^{レア}の迫神さん食べないで死んだら、ますます思いつき迷っちゃって成仏できなさそう……。絶対未練残りすぎて化けて出ると思う……」

迫神は自分の意志で深く亜衣里の唇をすった……。のだと思う。どうにも、どこまでが自分で、どこからがセレなのか分からない。

「俺は幽霊はキライなんだ……。刺身でもフルーツでも、生が好きなんだ」

もう一度くすつと笑ってから、亜衣里は目を閉じた。彼女の腕が確かめるように迫神の背中をたどる。

「ごめん……乱暴して。でも後悔してない」

亜衣里が愛おしかった。知る前とは好きの色が変化するのを感じていた。

「……死にたく……ない」

小さくふるえて、亜衣里は迫神の背中に爪を立てた。

22・トロイの木馬と白雪姫とノロマな勇者

完全にシンクロするには、もう一度棺桶入りしろというので、少しの時間を棺桶に入った。出て来ると、迫神のここへの出入り口は、保志の執務室にある。

「保志さん……」

「……お帰り」

保志のスカした顔は、絶対に、セレとあいあいのやったことを知っている。その通りかもしれないが、そこまでお膳立てしないと、女一人抱かずに終わってしまうと思われるらしいところが情けない。まあ、照れ臭いが、知らぬふりをしてくれているのなら別に自分から言う必要はない。自分だって少しは学習するのだ。

「ジョリー・ロジャーからコンタクトありますか？」

「……ねえ。まずいな。あいつらが交渉してくると思い込んでたが……もしかして、交渉らしきものはするつもりがなくて、条件提示はあれっこつきりにするつもりかもしれないな」

「……というと？」

正面モニターには、例のどうみても髑髏ではなくて、スマイルマークに見える、口紅で書かれていたメッセージが映っている。

「手を出すな……ただだ。で、俺たちがちょっとかいたたら、別に態々向こうは手をかけるまでもない。どっか見つからないところにあれを放置しとくだけでいい。亜衣里の棺桶は、そのままホンモノの棺桶にドロン」

「……金城さんからは、何か連絡入ってますか？」

「ああ、誘拐つつうのはな……、金城女史によると……だ」

保志は椅子を座面ごと回転させて、迫神を睨み付ける様な瞳でひたと射抜いた。

「犯人に何か交渉してくる意志があるときだけ……、どうにかできる場合があるって程度の犯行らしい。日本の場合、容疑者の検挙率が高いけど……被害者の死亡率もついでに高いらしい。もしかして、交渉下手な国民性だから……ヤケになりやすいのかな……」

「まあ、拉致監禁とか自体が目的だと……辛いでしょうね」

「一応、アレでかいからな、運び出されるところは目撃者がいたみたいだ」

「……どうやって？」

「普通に梱包して、台車に立てかけてごろごろやってたらしい。エントランスですれ違ってる人がいたらしくて、大きな荷物だなんて思ったそうだ。知らない顔だったので挨拶とか別にしなかったらしいけど、普通の軽トラにつんでったんで、「大変そうだな」って思ったただけだそうだ」

「それだけなんですか、あんなデカイもんなのに」

「まあ、梱包されてたら、家具と棺桶は区別付かないのかもな。よく考えりゃ、丁度食器棚とかソファぐらいのデカさだろう……？」

迫神が腕を組む。

「鍵は？」

「あいあいのところは電子キーだ。その手のプロなら破れるんじゃないのか？」

迫神が苦い顔になった。

「とにかく、向こうから接触がないと、多分追えないと言ってた。下手したら局面が動かないまま、なし崩し的に終わってしまうかも……だとさ。現場の人の勘は当たるから怖いんだよね……」

「まだ……待ちですか？」

迫神が聞く。

「それ以外にどうできる？」

保志も聞く。

二人の男たちは難しい顔でお互いの顔を見つめ合った。

「半六、お前シンクロライドで遭難死以外に殺されたことあったっけ？」

「……え？ いや、まだですけど」

「おそろいにしないか？」

保志がニヤッと笑った。迫神は背中の毛がゾクッと泡立つ気がした。

「おそろいつて……どっかで死んでこいつて、そういうことですか？」

「ああ、お前トロイの木馬って知ってるか？」

「トロイの木馬……。コンピュータウィルスなの？」

「馬鹿、そっちじゃなくて、その名前のもともとの由来になったギリシャ神話の方」

迫神はちよつとだけ考える。確か、でっかい木馬を作って兵士だかなんだかを潜ませて、敵自身に城内に運んでもらって、あとはキタナイ不意打ちという……話だったか？

* * *

トロイの木馬についての覚書

知らない人間も多いかもしれないので、一応説明すると、トロイア戦争というのは、当時の大国であるギリシャと、アッテカ方言でトロイア、イオリア方言でイーリアスとよばれた一都市の戦争である。

このストーリーのキモは、神託によって最初からギリシャの勝利が予言されていたということ。そして神託には「こういう条件が整ったとき」という条件が三つ付加されていたこと。

どっちかという手腕つぶし命のギリシャ神話の英雄たちの中でも、知力に長けていると言われるオデュッセウスという有名な御仁が、このトロイの木馬作戦を提案したことになっている。

端的に説明すれば、木馬を作って中に兵士を潜ませておいて、守りが堅い敵（イーリオス市）の城壁の中へ入れてもらって、戦勝祝いで酔っぱらうのを待って虐殺しまうぜ、という古代にしる異様にギリシャとオデュッセウスには、ご都合主義満載の仕掛けがなぜか上手くいったという不思議な展開の物語ですな。

まあその中に敵に勝利を確信させるために、自ら志願して、命懸けのミスリード作戦に携わったシノンという男の存在があったとしてもですよ。普通どう考えたって、今まで闘ってた敵が消えて、でっかい木馬が湧いて出てたら、警戒すると思います。……よね？ どう考えたって、それ怪しいだろう。

あいあいなら、その場で火をつけて燃やすと思うんだけど。

* * *

「それがどうかしたんですか？」

「つまり、お前がさ……、イットリウム輸送船のコンテナに潜むかなんかして、やってきたジョリー・ロジャー自身に盗んでいただいて、あいあいのところまで運んでもらうの……」

「……それ、本気で言ってます？」

迫神が呆れた。

「まず、やつらのやりようは抜き荷です。全部のコンテナに潜むなんてできません」

「そうだけど、奴らは今回はちょっと業突張りにたくさん欲しがると思うんだ。奴らが輸送船を開けたとき、コンテナがちつとしかなかったら……根こそぎにしていけない？」

「普通は、輸送船の中がガラガラだったら、コンテナの中身を怪しむと思いますけど？」

保志がぼりぼりと頭を掻いた。

「それに……あいあいがいるところに輸送される可能性はゼロより低いと思いますけどね」

「……でも、ジョリー・ロジャー本人だか、その仲間のどこまでいけたら、迫神君なら直接そいつら締め上げて、あいあいのところまで案内させるぐらい、できない？」

「……ご都合主義が全部主人公に味方するのは、昔話かおとぎ話しかないんですよ」

保志が首を捻る。

「そうかな？ 物語なんて、そんなのばっかじゃないかな。大体、幸せを堪能できる種類の人間って、人生そのものがご都合主義だし……」

「何ですかそれ」

保志はちよつとだけ照れるようなそぶりを見せてから言った。

「お前、三分の一なんかに参加したとき、もう一人の物好きとできちゃうと思ってた？」

どついう直截表現なんだと、迫神は呆れる。

「こんなときだから白状するけど、俺はジョリー・ロジャーをトッ捕まえるのに時間が欲しかった。五年か十年の延長を勝ち取ればそれでいい。だから、お前ら二人じゃなくてもよかった。もうちよつと無能で、役立たずで、床磨きしかできないやつだとしても、俺は感謝したと思う。俺にとっては、よりによってお前とあいあいが来てくれたこと自体が十分に、ご都合主義展開なんだ」

迫神は自分たちも自分たちの都合だけでこの三分の一に関わることを受け入れたのだけれど、保志は四十五の若すぎる定年を拒否するためだけに三分の一を受け入れたのか。とすると、自己中心野郎は自分だけじゃなくて、保志も結局自分の都合だけでこの道を選択したのだということになる。

三分の一なんて、結局、三人が自分だけの都合で、勝手に自分が主人公の人生を続けてただけなんじゃないか。

「私も白状すると……宇宙にタダで来てみたかった……だけなんですけど」

あいあいの声が聞こえて、迫神は振り返った。

「白雪姫よろしく、棺桶の中に入ってる見知らぬ女を、若くて綺麗で腐る前だからって、マウスツーマウスのキスができるようなヘンタイ野郎なのに、王子様だってだけで好きになる人生に憧れてたはずなのに……」

「あいあい、それ……おとぎ話の解釈として変じゃない？」

「だって……迫神さん、保志総司官。普通の男の人って、美人で抵抗しないからって、初対面の人の棺桶暴いてキスしますか？」

迫神が首をふる。

「俺は無理かな……」

保志が頷く。

「しない……」

につこりとあいあいが笑った。

「でしょ。だけど、白雪姫は幸せになるみたいだし……。でもね、グリム童話のオリジナル王子様、キスはしないんです」

なんかこんな悠長な会話をしている場合じゃないと思いつつ、迫神はあいあいの話の先がしりたかった。

「もつとすごいんですよ。『死体でもいいからください』って小人さんに棺桶ごもらっちゃうんです」

「……そいつ、絶対悪いことするつもりだったな」

保志が腕組みをして何度も頷いた。

「屍姦って2004年にアーノルド・シュワルツネエッガー知事が禁止したのが、法に載ってきたそもその事始めだったかな」

「そうそう。日本じゃ罪じゃないですけどね。大体火葬にするとこるじゃ、あんまりないんです。でも、どう考えても肉体がそこにあるからって、やっちゃう感性って分かんないけどな」

二人の法曹のマニアックな会話に、亜衣里は笑いだした。

「それです。死体相手にやるのって、相手絶対抵抗しないじゃないですか。その王子様、死体でいいから欲しがるころなんか、絶対に確信犯なんですよ。『死体でも』じゃなくて、『死体が』いいんです。あの人。絶対にママが怖いタイプですよ」

「……あいあい、お前そこまで冷静に馬鹿にしてて、それであの部屋作り上げるわけ？」

迫神に「お前」扱いされて、あいあいはちょっとだけ引つ掛かった。男ってこれだ。一回やっただけ、しかもレイプされた側の癖して、もう、女が自分のものだって勘違いしている。

「だけど、運んでるときに、家来がけつつまづいて、棺桶落つことして、喉に詰まったりんごがぼろり。彼女生き返っちゃうんですよ。王子様誤算ですよ。だけど、欲しい言ってしまった手前、仕方ないから結婚したと。昔の貴族って、別に奥さん一人じゃないですからね。死んでる方がよかったけど、生きててもまあ、仕方ないかって」

「何だよそれ。全然潤いない話だな。どういう教訓だ？」

保志が言つと、亜衣里はいたずらっぽく続けた。

「昔話には教訓なんかないんです。あるのは、しっちゃんかめっちゃかでもいいかげんな話。だけど出て来る人間みんな自分に素直なんです。だから、魅力的なんですよねえ」

「どこが？」

「自分より綺麗なのが気に入らなきゃ、実の娘だって殺そうとする。お金もらって殺人を引き受けながら、殺したくないからって動物の肝を出して知らん顔を決めこむ。白雪姫ってすごく懲りない馬鹿で、どんなに小人に諷められてもすぐ簡単に罠にはまっちゃうし、白雪姫は、自分の結婚式で自分を殺そうとした実のママに、焼けた鉄の靴を履かせて死ぬまで踊らせる……最低なんだけど、やりたい放題してるの」

「お前そんな殺伐とした楽しみ方してたわけ？ お姫様が好きな女の子だったんでしょ？ 金城さんによると……」

「お姫様ごっこは今も好きよ」

亜衣里の顔色が悪い。迫神がふれると熱っぽい。

「……あいあい、頭痛いとか、そういうのは？」

「ちよつとだけ……。まだ大丈夫……だと思う」

保志は少しだけ安心して、先を急いだ。

「で、この話の流れで、あいあいは何が言いたいんだ？」

「私も自分のご都合主義の人生生きてるんです。それで、私としては、金城さんに起こされるのはそろそろ飽きてるので、迫神さんに……起こしにきてもらいたいなあって。ほら、白雪姫のデイズニー・バージョンです。王子様と白雪姫はかつて出会ってたっていう、ストーリーを挟んで、知らない女の死体にいきなり欲情するっていう無茶なストーリーに修正かけようとした、あれのやつ。私は王子様を知ってるし、丁度棺桶に入ってるし、キッスで目覚めない理由はないでしょ」

迫神はその無茶な理論に立ちくらみがしそうだった。もしかして、啓介とタメをはる馬鹿なんじゃないか……あいあいつてのは。だったら、まずい、自分は絶対に勝てない。

「王子様じゃないし、王子ごっこもできないんだけどなあ……。残念ながら趣味の問題で」

「そこは、妄想でカバーしますから、ご心配なく。で、保志総司官は、トロイの木馬のオデュッセイアになって、歴戦の勇者をコンテナに閉じ込めてジョリー・ロジャーを逮捕するって、そういう絵空事の主人公に、迫神さんをキャスティングしたいんでしょ？」

「別に、迫神にこだわらなくてもいいんだけど、結局この三人の中では半六の役所だと思っただけ。もうここまできたら、それしかないかって思ったりね……。まあ、何もしないより、ましかなって……その程度なんだけど」

「だから、保志さん、あいあい、こっちは勇者じゃないし……」

あいあいも、結局、破れかぶれの一か八か、リスクばかりの保志作戦を支持してるということかと思うと、迫神は頭が痛くなった。

「迫神さんは……なんで三分の一に応募したんですか？」

亜衣里がいきなり話題を変えた。ここにもう一つのおとき話を仕込めたら、完璧なのだろう。

「日常の隙間に非日常が挟まるのが……凄く好きだから。普通の生活をしながら、変なこともしてみたかった。息抜きっていうか……何というか……。面白みがない答えでごめん……」

とたん、保志と亜衣里が爆笑した。

「おもしれーっ。非日常が挟まるのが好きって、まさにトロイの木馬に入るに相応しい」

「迫神さん、そのとんでもない理由、宇宙に行ってみたかったってだけの私より随分いっちゃってますっ」

二人に笑われて……迫神は逆に途方にくれる。

「木馬……木馬……、世界はご都合主義で回っている」

「王子様……王子様、最高のキャラはもちろんお姫様」

ということとは……勢いと、勢いと、勢いだけに押されて、イトリウム輸送船のコンテナの中で、計画どおり盗まれて、ジョリー・

ロジャーをどついて、あいあい姫の棺桶までたどりついて……、そんなうまいいくのか？

「まあ、ほら、迫神さん、シンクロライドで行くんだから、死んでも痛いだけだし。迫神さんだけ殺された経験ないっていうの……ズルいし」

「……あいあい。あのね……」

保志も言う。

「一応金城さんの方も、宇宙人は桜田門を舐めるな宣言してたから、逮捕するまで追及やめないだろうし……」

亜衣里が付け足した。

「時間切れになったとしても……多分、絶対に諦めないで探してくれると思う。それだけは分かる。だから、私も……迫神さんに探してもらいたい……かな。だめ？」

「トロイの王子様……拝命しました」

仕方なく、相変わらず慣れない敬礼を迫神はした。

「自己中心野郎の三分の一ずつだけど……ハッピーエンド……いけると思う？」

迫神の了承を勝ち取った後で、今更ながら、亜衣里が保志に向かって聞いた。

「まあ、取りあえず、できることをやってみようか。セレ……聞いているだろ？ 歌と踊りの後は、演技だとさ……」

「マンライクを演じているオイラには、そんな目新しいことじゃないけど、それよりオイラが入ると全部足して一と三分の一になっちゃわない？ オイラ入れて要素を複雑にするより、シンプルな方

がマシなんじゃない？」

保志が重々しく言った。

「何を今更……。どうせ人生なんてもんは、常に複雑怪奇だ……」

* * *

迫神は亜衣里のリクエストにより、彼女の身体をしっかりと抱き上げて静かに廊下を歩いていった。

「……これ、癖になる。こういうの、憧れてたのよね……」

楽しそうにクスクスと笑っている。認めたくはないが、亜衣里の消耗は目に見えてきている。心配をかけまいとして、明るくふるまっているのがいじらしい。迫神はかける言葉がうまく見繕えない。

「これ……東京でも……できる？」

亜衣里の方が話題を見つけた。

「……自信はないけど……鍛えればなんとか……」

「……じゃ、約束して」

亜衣里はそのまま迫神の胸に顔を押しつけた。

「この物語の最終シーンは、絶対に結婚式で……SATの連中が見てる前で、三歩は歩くこと。プラスドレスの重量だけど……絶対だからね」

「ま……何とかなったら……な」

「なんとか……して」

「がんばります」

亜衣里の棺桶部屋まで辿り着く。

「ね……迫神さん。シミュレーションしよう」

「何の……」

「金城チームより先に、私の棺桶見つけて、もちろんキスで起こすってアレの」

「……分かった」

もう、ここまでできたら、能天気信じきって、できることをできるかぎりやることで、幸運を驚掴みにして無理に逮捕する以外、ハッピーエンドに至る道はありそうもない。

迫神は両手が塞がっていたので、足で蹴飛ばして、シンクロナイザ・レシーバーのスイッチを押して蓋を開けると、そこに亜衣里を静かに下ろした。

「……信じてる……からね」

亜衣里は、迫神の頭をがっしりと押さえると、その唇に、何かを奪うような勢いで食いついた。

「無味無臭……。でも……悪くない」

長い口づけのあと、亜衣里はぼっそりと言った。迫神は仕方なしに呟いた。

「生身レアな俺も楽しみにしててくれ」

亜衣里は横たわって目を閉じた。

「物語のエンドは、めでたし、めでたし……よね」

「まあ、がんばります……」

今度は迫神の方が、亜衣里の唇に深く自分のそれを重ねるのだっ

た。

22・トロイの木馬と白雪姫とノロマな勇者（後書き）

おい、お二人さん、時間ないっちゅうのに、なにいつまでもいやいやしてるんですかつ！

大体、ジョリー・ロジャーは何者だったんですか？　おい、おい……。

……だめだこりゃ。

ここは一つ、皆さんの信じる力でハッピーエンドを祈りましょうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0843o/>

さんぶんのいち

2011年10月3日06時14分発行